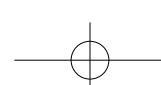
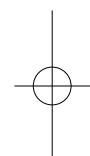
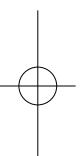
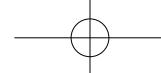


# クク井遺跡発掘調査報告書

防災集団移転促進事業関連遺跡発掘調査



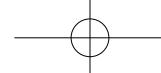




遺跡全景（北西から）



平安時代の鍛冶炉（1号鍛冶工房跡内）



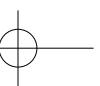
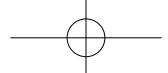
巻頭カラー写真図版 2



縄文時代の大型住居（1号住居跡）



縄文時代前期の玦状耳飾り



## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されております。それらは地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であります。同時にそれらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らねばなりません。

一方、県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要とされます。それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財の保護との調和も求められるところであります。

(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行ない、記録保存する措置をとってまいりました。

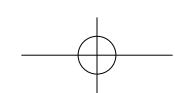
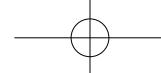
本報告書は山田町における防災集団移転促進事業に関連して平成27年度に発掘調査された、クク井遺跡の調査成果をまとめたものであります。クク井遺跡は山田町船越半島の西端に位置しており、発掘調査の結果、縄文時代と平安時代の2つの時代に営まれた集落遺跡であることが判明しました。縄文時代では前期後葉の大型住居が見つかっており、それに伴う縄文土器や石器、また玦状耳飾りといった石製品も出土しました。平安時代では竪穴住居跡のほかに、鍛冶工房跡が点在しておりました。そしてそれに伴い鉄生産関連の遺物が多数出土していることから、鉄生産を行う特殊な集落であることが窺えました。これまで船越半島での発掘調査事例は少なく、したがって本報告は船越半島の歴史を知る上でも貴重な資料となり得ます。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました山田町建設課、山田町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成29年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団  
理 事 長 菅 野 洋 樹



## 例　　言

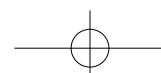
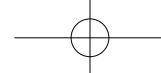
- 1 本報告書は、平成 27 年度に行ったクク井遺跡（下閉伊郡山田町船越第 6 地割ほか）の発掘調査の成果を収録したものである。
- 2 今回の調査は、防災集団移転促進事業に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と山田町との協議を経て、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 遺跡台帳に登録されている遺跡番号は「MG04 - 2365」である。
- 4 遺跡略号、発掘調査期間、担当者、調査面積、委託者名は以下の通りである。

遺跡略号：KKI - 15  
調査期間：平成 27 年 4 月 6 日～7 月 15 日  
調査担当者：須原 拓・光井文行・澤目雄大  
調査面積：4,800m<sup>2</sup>  
委託者：山田町建設課
- 5 室内整理期間と担当者は、以下の通りである。

整理期間：平成 27 年 8 月 3 日～平成 28 年 3 月 31 日  
担当者：光井文行・澤目雄大
- 6 調査および整理における委託業務については次の機関に依頼した。

基準点測量：有限会社 スカイ測量設計  
航空撮影：株式会社 リッケイ  
遺構図面の写真解析図化および図版編集：株式会社 リッケイ  
石材鑑定：花崗岩研究会  
炭化物年代測定（AMS）：株式会社 加速器分析研究所  
鉄滓等の分析：株式会社 古環境研究所
- 7 本遺跡の調査成果は、すでに『平成 27 年度発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 661 集）において発表しているが、内容については本書が優先する。
- 8 土色の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1993）を使用している。
- 9 本報告書の執筆は須原 拓・光井文行・澤目雄大が行い、文末に氏名を記している。編集は須原が行った。
- 10 本報告書で使用した地形図は、国土地理院発行 1:25,000 「陸中山田」、「霞露ヶ岳」、「大槌」を使用している。
- 11 野外調査ならびに整理作業、報告書作成に際し、次の方々からご協力、ご指導いただいた。記して深く感謝いたします。（敬称略）

竹下将男、山田町教育委員会
- 12 本遺跡の調査で得られた一切の資料、出土遺物・撮影写真・遺構実測図・遺物実測図は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。



## 凡 例

### 1 遺構について

#### (1) 本文中の図版縮尺

以下を原則とし、各図版にはスケールを付している。

堅穴住居跡・鍛冶工房跡の平面・断面：1/50・1/60・1/80

土坑の平面・断面：1/40 カマドの平面・断面：1/25

鍛冶炉および堅穴住居跡に伴う炉の平面・断面：1/20

#### (2) 遺構断面の土層注記

野外調査の際、土層の観察記録については以下の項目を基本とし、記録した。

色調（『標準土色帖』（農林水産省農林技術会議局監修）を基準とする）

粘性（4段階表示：強、やや強、やや弱、弱）

しまり（4段階表示：密、やや密、やや疎、疎）

混入物の有無（混入量は5段階表示：微量 1～10%・少量 11～20%・

中量 21～30%・やや多い 31～40%・多量 41～50%）

### 2 遺物について

#### (1) 本文中の図版縮尺は以下を原則とし、各図版にはスケールを付している。

縄文土器・土師器・須恵器：1/3 土製品・石製品：1/2 羽口：1/4

剝片石器：2/3 磔石器：1/3・1/4・1/5

#### (2) 遺物図面のアミかけについては凡例図に示した通りである。

#### (3) 観察表の表記項目について

出土位置・層位・器種・残存部位・外面文様（描線、縄文原体の種類、手法）、内面調整（文様）・色調（外・内面）・胎土混入物・焼成・時期（土器型式）について観察し、記載している。

文様については、口唇部（「唇」と表記）、口縁部（「口」と表記）、胴部（「胴」と表記）、底部（「底」と表記）に分けて観察し、表に記している。

焼成：土器の断面を観察し、断面内の黒色層を基準として土器の焼成具合を4分類した。

良 好→断面に黒色層が認められず、断面の色調が橙色を帯びるもの。

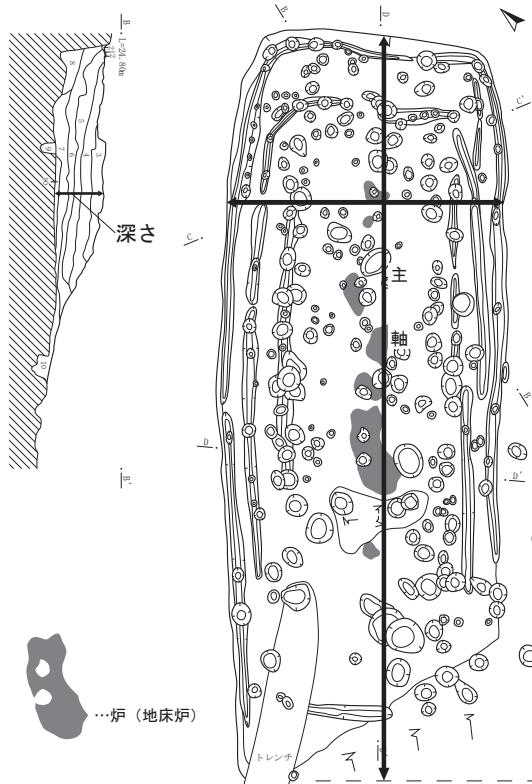
やや良好→断面に明瞭な黒色層は認められないが、土器の内外面色調と比べ、やや暗い（黒色味がかったり）もの。

やや不良→断面の中央部にのみ黒色層が認められるもの。

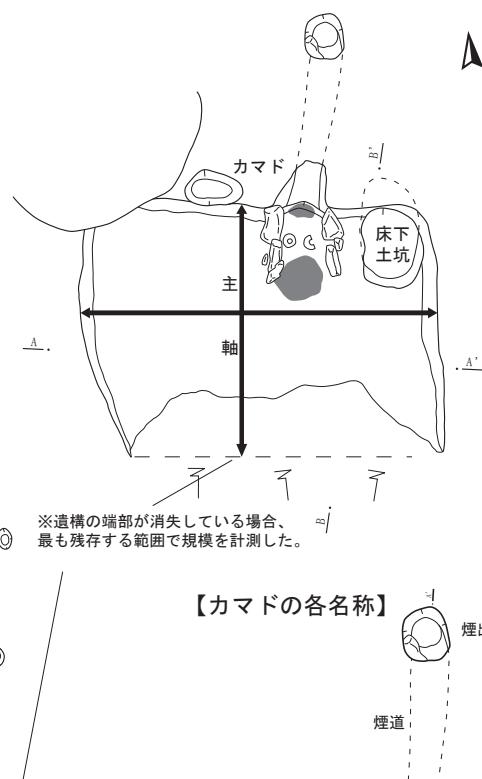
不 良→断面の半分以上に黒色層が認められ、焼成の際の火回りが悪いもの。

色調：内外面の色調について、『標準土色帖』（農林水産省農林技術会議局監修 1993）を基準とし、観察した。なお観察表には色調名のみ記している。

豊穴住居跡  
縄文時代

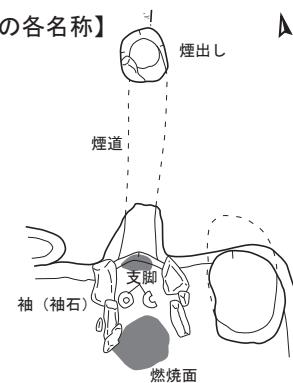


平安時代

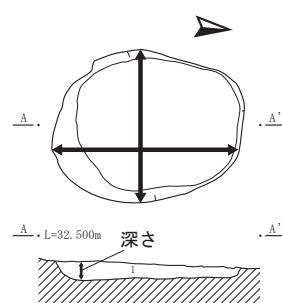


深さ  
B · L=24.0m

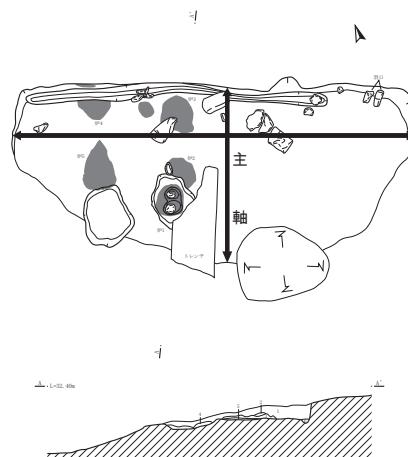
【カマドの各名称】



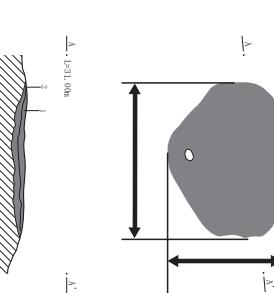
土坑



鍛冶工房跡



鍛冶炉



【鍛冶炉の色表示について】

- …被熱により橙色に還元
- …被熱により赤褐色に還元

【遺構規模の計測について】

豊穴住居・鍛冶工房はカマド・炉の主軸方向とそれに直交する方向を基に遺構規模を計測した。

その他の遺構は最も長い範囲とそれに直交する範囲を計測し、遺構規模とした。

また深さは最も残りの良い範囲を計測した。

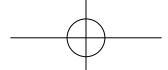
※壁・床面が消失している場合は残存する範囲を計測し、(○cm)と記した。

← → …計測位置

凡 例 図

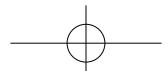
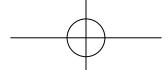
【図中の礫表記について】





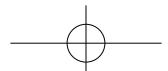
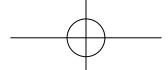
## 目 次

I	発掘調査に至る経緯	1
II	遺跡周辺の地理的環境	
1	遺跡の位置	1
2	遺跡の立地	1
III	クク井遺跡周辺の歴史的環境	
1	山田町の遺跡	3
2	クク井遺跡周辺の遺跡	3
IV	調査の経過・方法	
1	野外調査について	6
2	室内整理について	7
3	出土した縄文時代・古代・近世以降の遺物について	8
4	出土した古代の鉄生産関連遺物について	9
V	調査の概要・基本土層	
1	調査の概要	10
2	基本土層	10
VI	検出遺構・出土遺物	
1	縄文時代	14
2	平安時代	69
3	近世以降	115
VII	総括	
1	縄文時代	120
2	平安時代	125
附編	クク井遺跡の自然科学分析	
1	クク井遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)	131
2	クク井遺跡出土の鉄滓等分析	136
	報告書抄録	231



## 図版目次

第 1 図 クク井遺跡位置図	2	第 47 図 遺構外出土遺物（縄文時代）10	59
第 2 図 周辺の遺跡	5	第 48 図 遺構外出土遺物（縄文時代）11	60
第 3 図 グリッド図	6	第 49 図 9号住居跡1	70
第 4 図 石器について	8	第 50 図 9号住居跡2	71
第 5 図 鉄滓の分類について	9	第 51 図 9号住居跡3	72
第 6 図 基本土層	10	第 52 図 9号住居跡出土遺物	73
第 7 図 遺構配置図	11	第 53 図 10号住居跡1	74
第 8 図 1号住居跡1	15	第 54 図 10号住居跡2	75
第 9 図 1号住居跡2	16	第 55 図 10号住居跡出土遺物	76
第 10 図 1号住居跡出土遺物1	17	第 56 図 11号住居跡1	77
第 11 図 1号住居跡出土遺物2	18	第 57 図 11号住居跡2	78
第 12 図 1号住居跡出土遺物3	19	第 58 図 11号住居跡出土遺物1	79
第 13 図 1号住居跡出土遺物4	20	第 59 図 11号住居跡出土遺物2	80
第 14 図 1号住居跡出土遺物5	21	第 60 図 11号住居跡出土遺物3	81
第 15 図 1号住居跡出土遺物6	22	第 61 図 1号鍛治工房跡1	83
第 16 図 1号住居跡出土遺物7	23	第 62 図 1号鍛治工房跡2	84
第 17 図 1号住居跡出土遺物8	24	第 63 図 1号鍛治工房跡3	85
第 18 図 2号住居跡	26	第 64 図 1号鍛治工房跡出土遺物	86
第 19 図 2号住居跡出土遺物	27	第 65 国 2号鍛治工房跡	88
第 20 国 3号住居跡	28	第 66 国 3号鍛治工房跡1	90
第 21 国 3号住居跡出土遺物1	29	第 67 国 3号鍛治工房跡2	91
第 22 国 3号住居跡出土遺物2	30	第 68 国 3号鍛治工房跡3	92
第 23 国 4号a・b住居跡	32	第 69 国 3号鍛治工房跡出土遺物	93
第 24 国 4号a・b住居跡出土遺物1	33	第 70 国 4号鍛治工房跡1	95
第 25 国 4号a・b住居跡出土遺物2	34	第 71 国 4号鍛治工房跡2	96
第 26 国 5号住居跡	35	第 72 国 4号鍛治工房跡出土遺物1	97
第 27 国 5号住居跡出土遺物	36	第 73 国 4号鍛治工房跡出土遺物2	98
第 28 国 6号住居跡1	38	第 74 国 5号鍛治工房跡出土遺物	99
第 29 国 6号住居跡2・出土遺物	39	第 75 国 5号鍛治工房跡1	100
第 30 国 7号住居跡・出土遺物	40	第 76 国 5号鍛治工房跡2	101
第 31 国 8号住居跡	41	第 77 国 土坑（平安時代）1	104
第 32 国 土坑（縄文時代）1	43	第 78 国 土坑（平安時代）2	105
第 33 国 土坑（縄文時代）2	44	第 79 国 土坑（平安時代）3	106
第 34 国 土坑（縄文時代）3	45	第 80 国 土坑出土遺物（平安時代）	107
第 35 国 土坑出土遺物（縄文時代）1	46	第 81 国 1号性格不明遺構	108
第 36 国 土坑出土遺物（縄文時代）2	48	第 82 国 遺構外出土遺物（平安時代）	110
第 37 国 包含層	49	第 83 国 2号性格不明遺構	115
第 38 国 遺構外出土遺物（縄文時代）1	50	第 84 国 土坑（近世以降）	117
第 39 国 遺構外出土遺物（縄文時代）2	51	第 85 国 遺構外出土遺物（近世以降）	118
第 40 国 遺構外出土遺物（縄文時代）3	52	第 86 国 縄文時代の遺構	120
第 41 国 遺構外出土遺物（縄文時代）4	53	第 87 国 包含層から出土した前期前葉の縄文土器	121
第 42 国 遺構外出土遺物（縄文時代）5	54	第 88 国 出土した大木4～5式土器	122
第 43 国 遺構外出土遺物（縄文時代）6	55	第 89 国 石器の分析	124
第 44 国 遺構外出土遺物（縄文時代）7	56	第 90 国 平安時代の遺構	125
第 45 国 遺構外出土遺物（縄文時代）8	57	第 91 国 出土した支脚の分類	126
第 46 国 遺構外出土遺物（縄文時代）9	58		



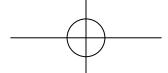
## 表 目 次

第 1 表 周辺の遺跡 .....	4	第 6 表 土坑（平安時代）一覧 .....	103
第 2 表 遺構名変更表 .....	7	第 7 表 遺物観察表（平安時代） .....	111
第 3 表 出土遺物一覧 .....	12	第 8 表 遺物観察表（近世以降） .....	119
第 4 表 土坑（縄文時代）一覧 .....	42	第 9 表 出土鉄滓一覧表 .....	128
第 5 表 遺物観察表（縄文時代） .....	61		

## 写真図版目次

写真図版 1 調査区全景 .....	177	写真図版 28 土坑（平安時代）2 .....	204
写真図版 2 調査区全景・基本土層 .....	178	写真図版 29 土坑（平安時代）3 .....	205
写真図版 3 1号住居跡 .....	179	写真図版 30 土坑（平安時代）4・(近世以降) .....	206
写真図版 4 2号住居跡 .....	180	写真図版 31 縄文土器・土製品 1 .....	207
写真図版 5 3号住居跡 .....	181	写真図版 32 縄文土器・土製品 2 .....	208
写真図版 6 4号a・b住居跡 1 .....	182	写真図版 33 縄文土器・土製品 3 .....	209
写真図版 7 4号a・b住居跡 2・5号住居跡 .....	183	写真図版 34 縄文土器・土製品 4 .....	210
写真図版 8 6号住居跡 .....	184	写真図版 35 縄文土器・土製品 5 .....	211
写真図版 9 7号住居跡 .....	185	写真図版 36 縄文土器・土製品 6 .....	212
写真図版 10 8号住居跡 .....	186	写真図版 37 縄文土器・土製品 7 .....	213
写真図版 11 土坑（縄文時代）1 .....	187	写真図版 38 縄文土器・土製品 8 .....	214
写真図版 12 土坑（縄文時代）2 .....	188	写真図版 39 縄文土器・土製品 9 .....	215
写真図版 13 土坑（縄文時代）3 .....	189	写真図版 40 石器・石製品 1 .....	216
写真図版 14 土坑（縄文時代）4 .....	190	写真図版 41 石器・石製品 2 .....	217
写真図版 15 9号住居跡 .....	191	写真図版 42 石器・石製品 3 .....	218
写真図版 16 10号住居跡 .....	192	写真図版 43 石器・石製品 4 .....	219
写真図版 17 11号住居跡 .....	193	写真図版 44 石器・石製品 5 .....	220
写真図版 18 1号鍛治工房跡 1 .....	194	写真図版 45 石器・石製品 6 .....	221
写真図版 19 1号鍛治工房跡 2 .....	195	写真図版 46 石器・石製品 7 .....	222
写真図版 20 2号鍛治工房跡 .....	196	写真図版 47 古代の遺物 1 .....	223
写真図版 21 3号鍛治工房跡 1 .....	197	写真図版 48 古代の遺物 2 .....	224
写真図版 22 3号鍛治工房跡 2 .....	198	写真図版 49 古代の遺物 3・近世の遺物 .....	225
写真図版 23 4号鍛治工房跡 1 .....	199	写真図版 50 古代の遺物 4 .....	226
写真図版 24 4号鍛治工房跡 2 .....	200	写真図版 51 古代の鉄製品 1 .....	227
写真図版 25 5号鍛治工房跡 .....	201	写真図版 52 古代の鉄製品 2 .....	228
写真図版 26 1号性格不明遺構 .....	202	写真図版 53 鉄滓 1 .....	229
写真図版 27 土坑（平安時代）1 .....	203	写真図版 54 鉄滓 2 .....	230





## I 発掘調査に至る経緯

クク井遺跡は、「船越・田の浜地区防災集団移転促進事業」に伴い、その事業地内に所在することから発掘調査を実施することとなったものである。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災による津波と地震によって、山田・船越両湾に面した大沢・山田・織笠・船越の4地区は、甚大な被害を蒙った。この未曾有の災害から立ち上がるべく、山田町では平成23年12月に「山田町復興基本計画」を策定し、

- ①津波から命を守るまちづくり
- ②産業の早期復旧と再生・発展
- ③住民が主体となった地域づくり

を基本理念に、新しい町づくりを進めているところである。

船越・田の浜防災集団移転促進事業は、被災した船越浦の浜～田の浜地区の復興に資するため、土地造成や道路建設を実施するものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成26年11月11日付建第375-3号で山田町建設課から山田町教育委員会に対し試掘調査実施依頼があったことに端を発する。

試掘調査は、平成26年11月25日から12月10日まで実施し、縄文時代と古代の竪穴住居をはじめとする遺構を検出した。

この結果を受けて、岩手県教育委員会、山田町建設課及び教育委員会が協議を行い、平成27年4月1日付で公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターと委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。(山田町)

## II 遺跡周辺の地理的環境

### 1 遺跡の位置

クク井遺跡は下閉伊郡山田町船越6地割ほかに所在し、船越半島の西端、船越湾から約200mに位置する。座標では北緯39度25分47秒、東經141度59分07秒付近に相当し、国土地理院発行の5万分の1地形図「大槌」の図幅に含まれる。今回、本遺跡は東日本大震災後の復興事業、「船越・田の浜地区防災集団移転促進事業」に伴い、発掘調査が実施されることになった。

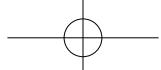
### 2 遺跡の立地

クク井遺跡は、船越湾の東端に位置する丘陵末端頂部の平坦面、またそれに続く南向き斜面下方に立地し、標高は21～32mである。船越湾から本遺跡までは約200mしか離れておらず、ほぼ海岸沿いと言って良い場所である。

調査前の現況は、昭和期に植林された杉林である。調査が進むにつれ分かったことだが、植林の際、地形を一部改変するほどの造成を行った形跡があり、特に調査区北側頂部平坦面は、造成により地形が著しく削られ、人工的に形成されたものであった。また調査区の大半を占める斜面地にも植林が及んでいる。こうした点から遺構の残存状況は悪い。(須原)



第1図 クク井遺跡位置図



### III クク井遺跡周辺の歴史的環境

#### 1 山田町の遺跡

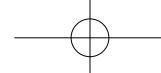
山田町内からは多数の遺跡が確認されており、山田町教育委員会の行った4年間の詳細分布調査から517箇所にも及ぶ遺跡が確認されている。主に3つに大別でき、縄文時代の散布地ないし集落跡・製鉄関連遺跡・中世城館跡に分けられ、中でも製鉄関連遺跡に関しては総数が387遺跡と多く、岩手県内で確認される半数近くがこの地域に集中している。しかしそのほとんどが未調査のままであるため詳細は不明であるが、調査事例の一部には山ノ内Ⅱ・Ⅲ遺跡（30・31）、湾台Ⅱ・Ⅲ遺跡（33・34）、上村遺跡（40）、後山Ⅰ遺跡（47）、房の沢Ⅳ遺跡（66）、田の浜館跡（23）が挙げられ、主に古代の竪穴住居跡・工房跡や製鉄鍛冶関連の炉跡と共に多くの鉄滓・羽口が出土している。中には房の沢Ⅳ遺跡に挙げられる様な、7・8世紀に属する35基の古墳群と共に鉄滓や蕨手刀・馬具などの鉄製品が出土している例もあり、この土地が旧くから鉄との関連の要所であったことが窺える。要因には、山田湾を囲む周辺の丘陵部に宮古花崗岩層と称される岩脈が存在し、これらから形成される真砂土により良質な砂鉄が供給されていたことによるものである。遺跡の分布状況をみると、古代の集落遺跡は海岸線に向かって張り出した小起伏山地の末端となる尾根の斜面部と、その間の谷を流れる河川や沢によって形成された小規模な平野に立地しているものが多く、鉄生産に関係する遺跡に関しても同じく尾根の鞍部や斜面に立地する遺跡が広く分布するようである（山田町教委2002）。

また、縄文時代の集落遺跡も同様に尾根の斜面ないし緩斜面に立地するものが多く、大きな集落では沢田Ⅰ～Ⅳ遺跡（68～71）、浜川目沢田Ⅰ～Ⅳ遺跡（105～108）、間木戸Ⅰ～Ⅳ遺跡（72～74・80）などが挙げられる。平地や緩傾斜地の少ない山田町内においては居住に際しての選定地は限定されるため、縄文時代～古代にかけての複合遺跡が多くなる傾向がみられるようである。

#### 2 クク井遺跡周辺の遺跡

本遺跡は船越半島の西側、地形分類上で言う山麓地の緩斜面上に位置する。今では陸続きとなっている山田・船越両湾により形成された沖積地を挟み、旧船越村域である船越半島と半島西側の海岸線付近の地形環境は同様の様相を呈しており、上述の通り、山田町内において遺跡分布と地形条件は密接に関係することが分かっている。このことから、本遺跡の性格と地形条件を照らし合わせると、半島西側の海岸線付近からも縄文時代の集落や古代の集落ないし製鉄関連遺構を有する遺跡の調査事例が報告されていることが分かった。以下に、半島西側の海岸線から山ノ内Ⅲ遺跡（30）、湾台Ⅱ・Ⅲ遺跡（33・34）、まだ本報告には無いが焼山遺跡（37）、船越半島側からも田の浜館跡（23）を例に挙げ、本遺跡との関連を勘案して調査事例に触れておきたい。

山ノ内Ⅲ遺跡は山田町船越第2地割に所在する。立地は、山麓地の緩斜面に位置し、標高は55～72mである。確認された遺構は縄文時代の竪穴住居跡21棟と古代の竪穴住居跡3棟、その他に土坑・炉跡・製鉄炉・炭窯などが検出されており、遺構内からは中期の縄文土器、9世紀末～10世紀中葉の土師器、鉄滓、羽口、鉄製品、砂鉄が出土している。山ノ内Ⅲ遺跡では、二次堆積ではあるが縄文土器の出土量が多く早期末～晩期まで確認されており、周辺立地が長らく居住に適した環境であったことが推察される。また、出土遺物の中に鉄製品は少なく、製錬滓・大鍛冶滓が出土しており、鍛造



## 2 クク井遺跡周辺の遺跡

剥片は検出されていない。そのことから、鍛錬鍛冶は行われていない奈良時代末～平安時代の製鉄遺跡が存在したと考えられている。

湾台Ⅱ・Ⅲ遺跡は山田町船越第5地割に所在する。立地は、山麓地の緩斜面に位置し、標高は40～60mである。湾台Ⅱ遺跡での検出遺構は、縄文時代中期の竪穴住居跡1棟、土坑8基、焼土遺構3基、集石遺構1カ所である。出土遺物は縄文土器、弥生土器、石器、羽口、鉄滓である。湾台Ⅲ遺跡での検出遺構は、平安時代の竪穴住居跡1棟、住居跡状遺構2基（鉄生産関連炉1基含む）、土坑1基、集石遺構1箇所である。出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、石器、羽口、鉄滓等である。全体的に遺構数は少ないが、山田町での複合遺跡の立地の傾向や、10世紀代に位置付けられる製鉄関連炉の検出から、古代の製鉄関連遺跡が明らかとなるなど、今後の沿岸部での遺跡の傾向を知る上で、貴重な資料となる。

焼山遺跡は山田町船越6地割他に所在し、南側には湾台Ⅲ遺跡と隣接する。立地は、山麓地谷間の斜面地に位置し、標高は約40mである。検出遺構は、製鉄炉9基、鍛冶工房跡2棟とそれに伴う鍛冶炉2基、工房の可能性がある竪穴住居跡1棟、炭窯5棟である。遺構埋土中及び、周辺遺構外からは鉄滓、羽口、鉄製品、砂鉄、鍛造剥片等が出土している。平安時代の鉄生産遺構群で、この地で燃料を生産し、砂鉄を原料とする製鉄・鍛冶を営んでいたことが窺える貴重な遺跡である。（岩埋文2014）

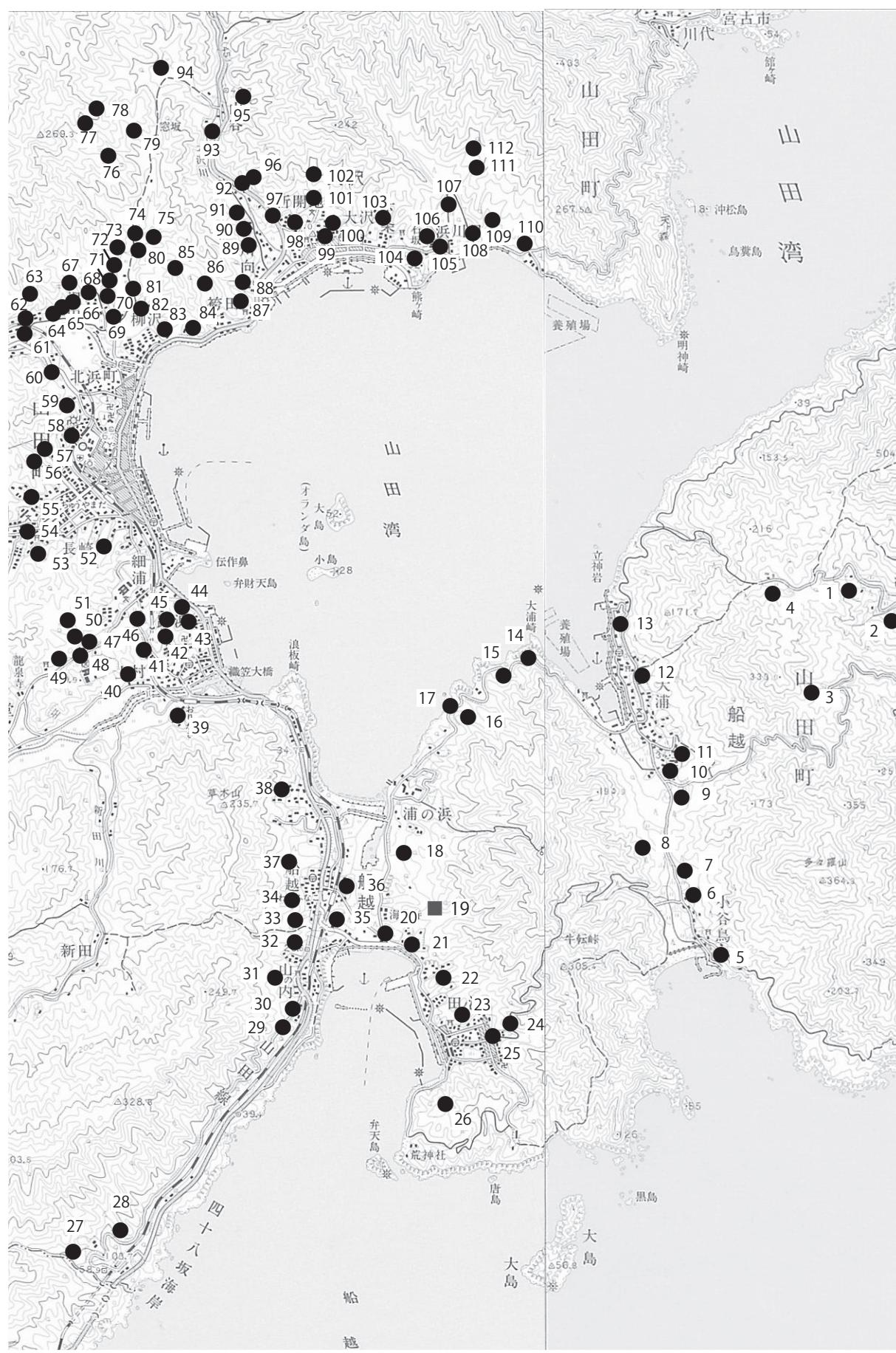
田の浜館跡は山田町船越第12地割他に所在する。遺跡の登録上は中世城館とされているが、これに関連する遺構は確認されていない。調査成果としては、標高20～58m前後に立地する2本の丘陵尾根の、谷間の斜面地から製鉄炉3基とこれに伴う炭窯6基の古代の製鉄関連遺構が確認されている。

（澤目）

第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	瀧磯 I	散布地	縄文	57	長崎 I	複合	縄文・中世
2	瀧磯 II	散布地	縄文	58	閑谷 V	複合	縄文
3	瀧裏沢	散布地	縄文	59	閑谷 IV	複合	縄文
4	バヨ坂	散布地	縄文	60	閑谷 III	複合	縄文
5	小谷島	散布地・製鉄跡	縄文・不明	61	房の沢 I	複合	縄文
6	杭の子	散布地	縄文	62	房の沢 V	複合	縄文
7	刺畠沢 I	集落跡・製鉄跡	縄文・不明	63	房の沢 VI	複合	縄文
8	刺畠沢 II	散布地・製鉄跡	縄文・不明	64	房の沢 II	複合	縄文
9	マダノキ沢 I	散布地	縄文	65	房の沢 III	散布地	縄文
10	マダノキ沢	散布地・製鉄跡	縄文・不明	66	房の沢 IV	複合	縄文・末期古墳
11	畠中	散布地・製鉄跡	縄文・不明	67	沢田 VI	散布地	縄文
12	川半貝塚	貝塚・製鉄跡	縄文・不明	68	沢田 I	集落跡	縄文～古代
13	極楽	散布地	縄文	69	沢田 IV	複合	縄文・中世
14	大浦崎	貝塚・生産跡(製塩?)	縄文・不明	70	沢田 II	複合	縄文・古代・中世
15	余巻沢	散布地・生産跡(製塩?)	縄文・不明	71	沢田 III	散布地	縄文
16	白石沢	散布地	縄文	72	間木戸 III	複合	縄文
17	白石浜	散布地・生産跡(製塩?)	縄文・不明	73	間木戸 I	散布地	縄文
18	新道貝塚	貝塚・製鉄跡	縄文・不明	74	間木戸 IV	複合	縄文
19	クク井	散布地	縄文	75	天井間木戸 IX	複合	縄文
20	船越御所	散布地・城館跡	縄文・中世	76	天井間木戸 V	複合	縄文
21	岩ヶ沢	集落跡	縄文	77	天井間木戸 III	複合	縄文
22	早川	集落跡・製鉄跡	縄文・不明	78	天井間木戸 I	複合	縄文
23	田の浜館	城館跡	中世	79	間木戸 V	複合	縄文
24	大洞 I	散布地	縄文	80	間木戸 II	散布地	縄文
25	大洞貝塚	貝塚・集落跡	縄文	81	柳沢 IV	散布地	縄文
26	小田の御所	散布地・城館跡	縄文・中世	82	柳沢 III	複合	縄文・古代
27	大沢川	散布地	縄文	83	柳沢 II	複合	縄文・中世
28	扇平	散布地	縄文	84	柳沢 I	複合	縄文
29	瀧の沢	散布地	縄文	85	山の神 I	散布地	縄文
30	山ノ内	集落跡・製鉄跡	縄文・古代	86	荷田 III	散布地・製鉄跡	縄文
31	山ノ内 II	集落跡・製鉄跡	縄文・古代	87	荷田 I	散布地	縄文
32	船越西第8	散布地・城館跡・製鉄跡	縄文・中世・不明	88	荷田 II	散布地・製鉄跡	縄文
33	湾台 II	散布地・製鉄跡	縄文・弥生・古代	89	川向 I	散布地・製鉄跡	縄文
34	湾台 III	散布地・製鉄跡	縄文・古代・不明	90	川向 II	散布地・製鉄跡	縄文
35	湾台 I	集落跡	縄文	91	川向 III	散布地・製鉄跡	縄文
36	船越館	散布地・城館跡	縄文・中世	92	新開地 II	散布地・製鉄跡	縄文
37	焼山	製鉄跡	不明	93	山谷 I	散布地・製鉄跡	縄文
38	長林	散布地・製鉄跡	縄文・不明	94	山谷 IV	散布地	縄文
39	草木	複合	縄文	95	山谷 V	散布地・製鉄跡	縄文
40	上村	複合	縄文	96	雲南沢	散布地・製鉄跡	縄文
41	上	集落跡	縄文	97	新開地 I	散布地・製鉄跡	縄文
42	細浦 V	複合	縄文・中世	98	新開地	散布地	縄文
43	跡浜 II	散布地	縄文	99	紅山 A	散布地	縄文
44	跡浜 I	散布地	縄文	100	紅山 B	集落跡	縄文・弥生
45	細浦 VI	複合	古代	101	大開	散布地・製鉄跡	縄文
46	細浦 IV	散布地	縄文	102	寺ヶ沢	散布地・製鉄跡	縄文
47	後山 I	複合	縄文	103	下条	散布地	縄文
48	後山 II	散布地	縄文	104	鷹石坂	散布地・城館跡?	縄文・中世?
49	後山 III	複合	縄文	105	浜川自沢田 I	散布地	縄文
50	細浦 III	散布地	縄文	106	浜川自沢田 II	集落跡	縄文
51	細浦 I	複合	縄文	107	浜川自沢田 III	集落跡	縄文
52	長野 III	複合	縄文	108	浜川自沢田 IV	散布地	縄文
53	飯岡 III	散布地	縄文	109	多門	集落跡	縄文
54	飯岡 IV	散布地	縄文	110	サンナイイ沢	散布地	縄文
55	小沢 II	散布地	縄文	111	赤石沢 III	散布地	縄文
56	長崎 II	複合	縄文・中世	112	赤石沢 II	散布地・製鉄跡	縄文

III クク井遺跡周辺の歴史的環境



第2図 周辺の遺跡

1 : 25,000

## IV 調査の経過・方法

### 1 野外調査について

第Ⅰ章に記した通り、本調査に先立ち、平成26年、山田町教育委員会が試掘調査を実施し、その結果を踏まえ、委託者との協議を経て調査区が設定されている。

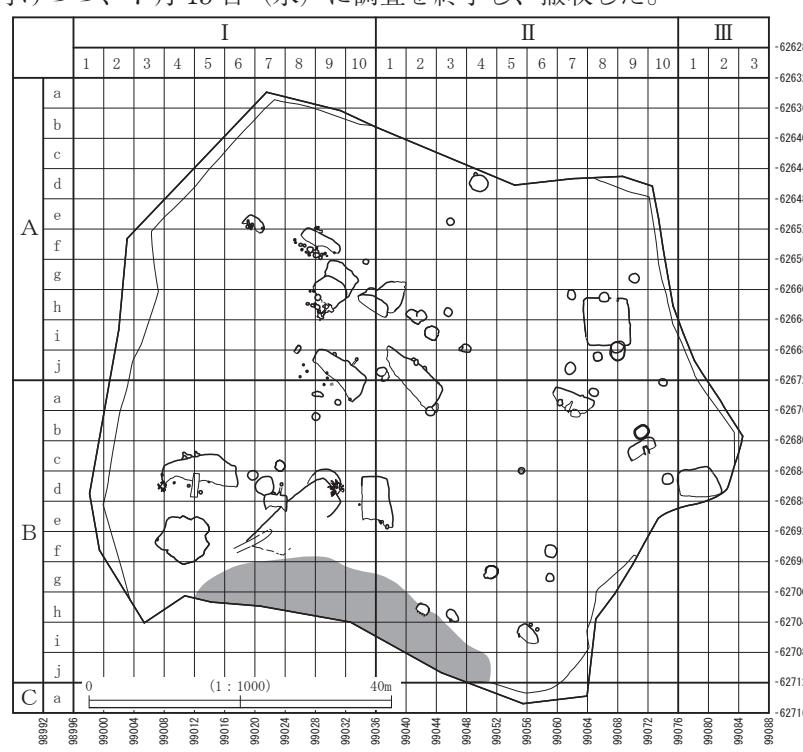
平成27年4月6日（月）より調査を開始した。調査員5名、野外作業員35名体制でスタートし、4月16日以降、調査員は3名に変更、野外作業員は随時増減しつつも、概ね35人体制で作業を進めた。また7月の調査終盤には、調査員2名、野外作業員15名へと変更している。

調査はまず、重機（バックホー0.45m<sup>3</sup>、キャリアダンプ6t）を用いた表土除去を行い、その後、人力による遺構検出作業から行った。

検出した遺構は、規模や性格により、適宜に4分法と2分法を選択し、精査を行った。各遺構については平面と断面、また必要に応じ遺物出土状況の実測および写真撮影を行った。遺構図の実測には、調査期間の短縮を考慮に入れ、デジタルカメラ（OLYMPUS ToughTG - 3）を用いた写真解析測量を活用した（撮影は調査員が行い、解析作業および図化作業を（株）リッケイに委託した）。また調査区の地形測量などにはCUBIC社製遺構実測ソフト「遺構くん」と光波トランシットを用いている。調査区については40×40m四方の大グリッド、4×4m四方の小グリッドを設定し（第3図）、遺構の位置や遺物の取り上げに際し、用いている。

写真撮影は主に、デジタルカメラ1台（キヤノン EOS60D）と35mmカメラ1台（モノクローム）を使用し、同アングルのデジタル写真・銀塩写真両方撮影している。また6月26日にラジコンヘリ機を用いて、上空から遺跡全景の写真撮影を行った（株式会社 リッケイに委託）。

平成27年6月20日（土）町民、地元住民を対象とした現地説明会を開催。約80名が来訪した。平成27年7月2日（木）に委託者、県教育委員会、山田町教育委員会立ち会いの下、終了確認を受けた。以降、残務を片付けつつ、7月15日（水）に調査を終了し、撤収した。



第3図 グリッド図

## 2 室内整理について

平成27年7月21日から平成28年3月31日の期間に室内整理作業を行った。7月から10月までは、室内作業員を中心に遺物水洗・注記・土器接合、復元の基礎整理を行い、11月以降はその続きを調査員2名、室内作業員4名体制で継続した。

室内作業では遺物の仕分け、遺物実測・拓本、図面トレース、図版作成、収納を作業員が分担した。調査員は、原稿執筆、遺物観察表作成、実測図や図版のチェックを行った。遺物の写真撮影は当センターの写場において写真技師が行った。撮影にはデジタルカメラ（キャノン EOS60D）を用いている。

遺構図版作成は、（株）リッケイに業務委託し、野外調査時に作成した図面を基に、調査員の指示で遺構図版作成を行った。なお遺構図版の作成にはAdobe社「IllustratorCS6」を使用し、デジタルにて図版を作成した。

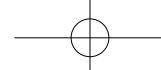
なお本報告書作成にあたって、各遺構名を野外調査時から変更しており、本報告書に記された遺構名を優先する。遺構名の変更については第2表の通りである。  
(須原)

第2表 遺構名変更表

新遺構名	旧遺構名	時代
1号住居	SI06	縄文時代前期
2号住居	SX05	縄文時代前期
3号住居	SX09	縄文時代前期
4a号住居	SX03	縄文時代
4b号住居	SX03(旧期)	縄文時代
5号住居	SX04(旧期)	縄文時代
6号住居	SI08	縄文時代中期
7号住居	SI10	縄文時代
8号住居	SI09	縄文時代
1号土坑	SK34	縄文時代
2号土坑	SK05	縄文時代
3号土坑	SK33	縄文時代
4号土坑	SK06	縄文時代
5号土坑	SK07	縄文時代
6号土坑	SK09	縄文時代
7号土坑	SK10	縄文時代
8号土坑	SK36	縄文時代
9号土坑	SK38	縄文時代
10号土坑	SK31	縄文時代
11号土坑	SK20	縄文時代
12号土坑	SK32	縄文時代
13号土坑	SK23	縄文時代
14号土坑	SK21	縄文時代
15号土坑	SK29	縄文時代
16号土坑	SK30	縄文時代

新遺構名	旧遺構名	時代
9号住居	SI02	平安時代
10号住居	SI03	平安時代
11号住居	SI05	平安時代
1号工房	SI01	平安時代
2号工房	SX01	平安時代
3号工房	SX04	平安時代
4号工房	SX06	平安時代
5号工房	SI04	平安時代
1号性格不明	SX08	平安時代
17号土坑	SK28	平安時代
18号土坑	SK25	平安時代
19・20号土坑	SK04	平安時代
21号土坑	SK24	平安時代
22号土坑	SK02	平安時代
23号土坑	SK01	平安時代
24号土坑	SK15	平安時代
25号土坑	SK35	平安時代
26号土坑	SK14	平安時代
27号土坑	SK26	平安時代
28号土坑	SK27	平安時代
29号土坑	SK16	平安時代
30号土坑	SK17	平安時代
31号土坑	SK18	平安時代

新遺構名	旧遺構名	時代
2号性格不明	SI07	近世以降
32号土坑	SK37	近世以降
33号土坑	SK13	近世以降



### 3 出土した縄文時代・古代・近世以降の遺物について

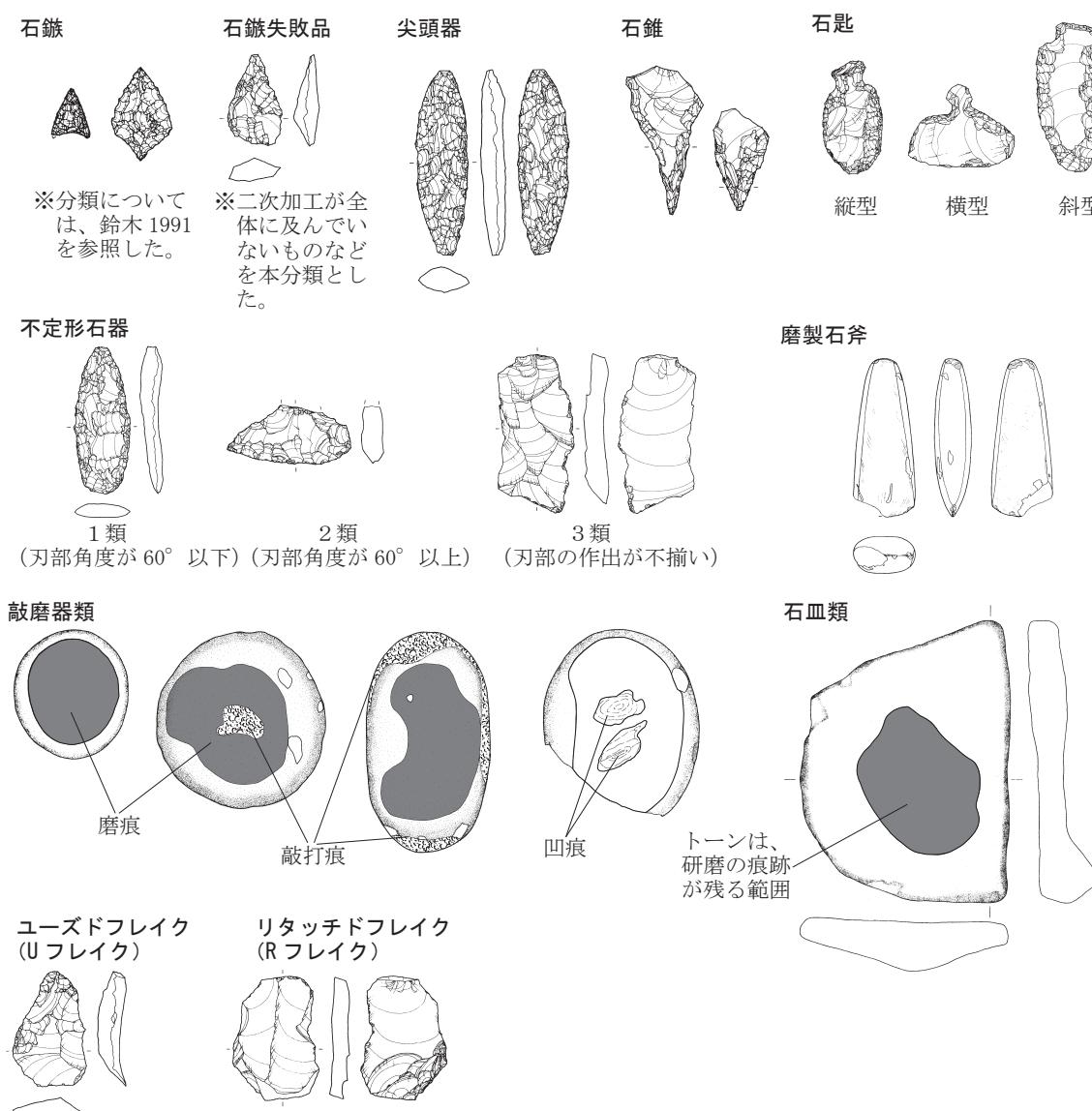
遺構内外から縄文時代の遺物（縄文土器、土製品、石器、石製品）と古代の遺物（土師器、須恵器、土製品、石製品、支脚、羽口、鉄製品、鉄滓）が、また遺構外からは近世以降の遺物（陶磁器、錢貨）が出土している。全て時代別、種類別に分類し、属性観察を行った。以下はその概略である。

#### 縄文土器・土製品

前期（前葉～後葉）と中期（前葉～中葉）の縄文土器が出土している。各出土土器については、『縄文土器大観』や『総覧 縄文土器』を元に、土器型式の分からぬ「前期初頭～前葉」を除き、大木1～5式、また大木8a・大木8b式に分類し、本文中に記した。また土製品は円盤形土製品が出土している。

#### 石器・石製品

石鎌、尖頭器、石錐、石匙、不定形石器（削器・搔器を一括）、磨製石斧、敲磨器類（磨石・敲石・凹石を一括）、石皿類に分類し、また製品でないものは、フレイク（剥片）、使用痕のあるフレイク（ユーズドフレイク、以降Uフレイク）、二次加工のあるフレイク（リタッチドフレイク、以降Rフレイク）



第4図 石器について

に分類した。また石製品は玦状耳飾り・円盤形石製品である。

#### 土師器・須恵器・土製品・支脚

器形の特徴から平安時代の範疇に収まると推定する土師器・須恵器が出土している。またカマド燃焼面から棒状・筒状の土製品が出土し、支脚とした。特徴や時期については第VII章参照。他の土製品は粘土塊である。

#### 鉄製品

刀子・鉄釘・鉄斧に分類した。鉄製品については実測・写真撮影後、保存処理を施している。

#### 陶磁器・錢貨

いずれも小片であるが、器種や時期判断が概ね可能な陶磁器片を掲載した。また錢貨は寛永通宝1枚である。  
(須原)

### 4 出土した古代の鉄生産関連遺物について

平安時代の堅穴住居跡や鍛冶工房跡から鉄生産関連遺物として羽口と鉄滓が出土している。

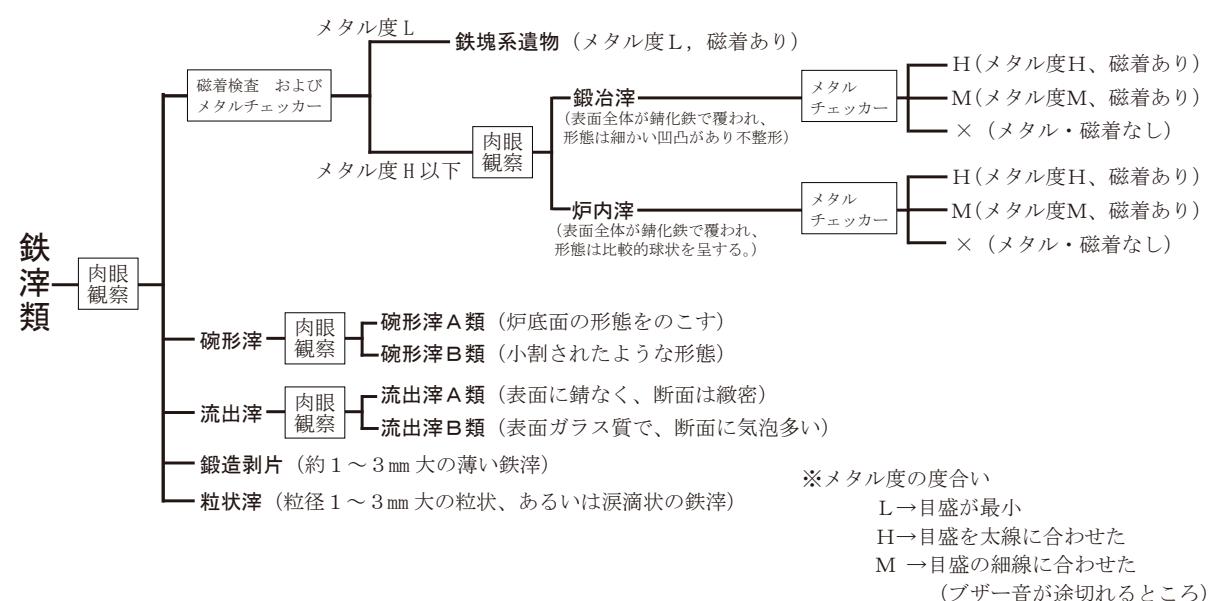
#### 羽口

土管状の状態で鍛冶炉と鞴を繋ぐ土製の送風管である。本遺跡から出土した羽口は全て使用済みで、先端部には鉄滓が付着し、体部は被熱により赤～灰色に還元している。

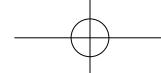
#### 鉄滓

鍛冶を行う際、鉄原料から排出される不純物をさす。鉄の含有や形状から鉄塊系遺物・鍛冶滓・炉内滓・碗形滓・流出滓に分類し、また鍛冶滓・炉内滓・碗形滓・流出滓については特殊金属探知器（メタルチェッカー）を用い、鉄含有量からさらに細分した。

その分類については第5図に示した。分類に際しては肉眼観察を基準とした上で、強力磁石（ピックアップ）で磁着性を、メタルチェッカーで鉄含有量（メタル度）を測量することで細分をしている。なお、各鉄滓については基準となるものを選び、写真図版53・54に示している。  
(須原)



第5図 鉄滓の分類について



## V 調査の概要・基本土層

### 1 調査の概要（第7図）

調査区は不整な多角形を呈した範囲で南北約80m、東西約85mを測る。標高は最も高い所で32m、最も低い所は21mである。

調査区内の地形は、北東から南西に向けての比較的急な斜面地である。ただし調査区北端から北東側の標高32m前後、調査区中央の標高27m前後、調査区南西端の標高24m前後の3箇所は、緩やかな平坦地が形成されている。この平坦地周辺で縄文時代・平安時代の遺構・遺物が見つかっている。

地形についてもう少し言及すると、最も高い調査区北側は、東から西へと下がる狭小な丘陵頂部の一部であり、調査区中央はその丘陵中腹斜面地である。ただし植杉等を目的とした後世の造成により、調査区北側はほぼ水平に削平されており、検出できた遺構はいずれも残存状況が悪い。また調査区中央、調査区南西側は、急な斜面であり、堆積した土砂が下方（南側）へと動いている可能性が高く、それを起因として、上記2箇所の平坦面から検出した遺構はいずれも上部や南側が消失している。

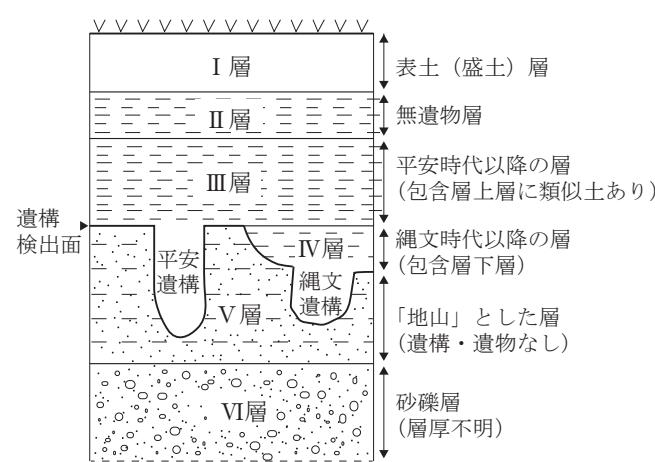
縄文時代の遺構は、調査区北西側の斜面上方（IA 9h グリッド周辺）と調査区南西端（IB 7f グリッド周辺）の2箇所を中心に分布する。縄文時代前期後葉（大木4～5式期）の竪穴住居跡（大型住居）6棟、縄文時代中期後葉（大木8b式期）の竪穴住居跡2棟、前期・中期の土坑15基であり、また調査区南端の斜面地では前期前葉（大木2a～2b式期の範疇）の遺物を中心とした包含層1箇所を確認した。出土遺物は縄文土器が大コンテナ9.5箱（縄文時代前期・中期）、石器大コンテナ3箱で、特筆すべき点として玦状耳飾り8点が出土している。各遺構内外から出土した遺物量については第3表に示した。

平安時代の遺構は調査区北東側の平坦面（IA 8i グリッド周辺）、斜面中央（IB 1a グリッド周辺）、調査区南西端（IB 4d グリッド周辺）の3箇所に分布する。10世紀代の竪穴住居跡3棟、鍛冶工房跡5棟、土坑11基を検出した。竪穴住居跡の床面にはカマドとは別に、焼けの良い焼土が残っていることが多い。鍛冶工房跡には複数基の鍛冶炉が付属し、その周辺からは羽口や鉄滓等が出土している。また鍛冶炉には底面に椀形滓が残っていたものも見受けられ、鍛冶の操業を窺わせる事例を確認した。出土遺物は土師器、須恵器、羽口が大コンテナ1.5箱分であり、ほかに鉄製品（鉄斧など）、鉄滓大コンテナ1箱がある。遺構から出土した土器等の遺物については第3表、鉄滓の出土量については第9表に示した。

他に近世以降の土坑2基、性格不明遺構1基が検出し、また遺構外から陶磁器や銭貨が出土している。

### 2 基本土層（第6図）

調査区は北から南に向く高低差のある比較的急な斜面地が大きく占めており、堆積様相が良好ではない箇所が多い。したがって各所で基本土層を確認したわけではない。ただし、掘り下げ時には土層を確認し、概ね第6図の



第6図 基本土層

通りの土層であることを観察した。

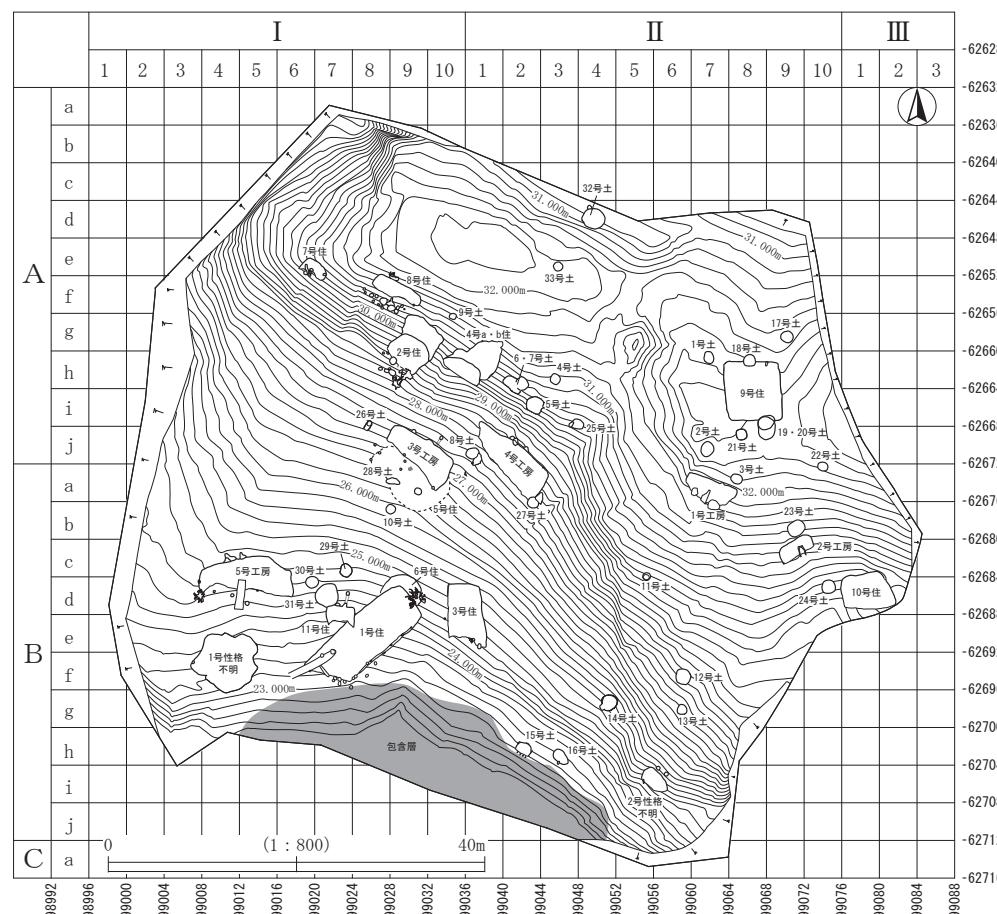
I層は現表土で、概ね調査区全体に堆積する。黄褐色のシルト～砂層で、約50cm堆積する。

II層は灰褐色を呈するシルト層で、30～80cm堆積する。調査区南側の低い場所に堆積している。遺物は混入しないので、堆積した時代は不明。III層との境界が明瞭であり、おそらく近世以降と推測する。概ね緩やかに堆積しているが、部分的に細砂がラミナを形成しており、ラミナの形成の有無で2細分（IIa層、IIb層）した。

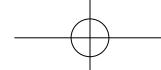
III層は黒褐色を呈するシルト層で、10cm前後堆積する。調査区北～中央で検出した平安時代の遺構埋土に類似しており、古代以降に堆積したものと捉えられるが、調査区南端の包含層ではこの層より縄文土器片が多く出土した。

IV層は暗褐色を呈するシルト層で、調査区南端、包含層や縄文時代の遺構埋土で確認した。10cm前後堆積する。層上位にのみ縄文土器片が混じる。本来この層上面が平安時代の遺構検出面となるものと推測する。ただし平安時代の遺構が分布する調査区北側から中央にかけて、IV層の堆積は見受けられず、類似土が縄文の遺構埋土で確認できたのみである。

V層は黄褐色を呈するシルト層で、やや砂質である。無遺物層であり、主にこの層上面にて遺構を検出した。V層より下は基盤層（風化花崗岩により形成された層）で、遺構・遺物共になく、したがつてこれ以上の掘り下げは行っていない。  
(須原)



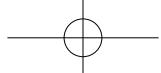
第7図 遺構配置図



第3表 出土遺物一覧

新遺構名	縄文土器・土師器・須恵器(g)					羽口・支脚・土製品(g)			
	埋土上位	埋土下位	床面	炉内/カマド	柱穴・溝内	埋土上位	埋土下位	床面	炉内/カマド
1号住居	7168.8	17345.5	527.9		1356.9	22.4			
2号住居	3285.8	1678.7	1500.7		26.6				
3号住居	1511.9	4171.5	873.6	433.0	142.2			110.1	
4a・b号住居	10665.7		420.3	284.7					
5号住居		1616.1		17.6					
6号住居	75.1	217.8	246.2						
7号住居		867.7							
8号住居		30.9							
9号住居	552.4	910.6	271.9	217.5	27.5	113.2	98.3	887.0	
10号住居		170.8	118.0				217.3		
11号住居		1149.6	79.1	2038.5	242.9		52.5		1718.3
1号工房		46.9	49.8		4.7		102.9	3195.8	1630.5
2号工房		65.9	16.5						
3号工房	1938.0		4.5	499.7		92.8			134.5
4号工房		333.8	46.5	5.0		297.4	1027.4	1467.3	856.7
5号工房	20.4	159.4			111.4		38.9		
1号性格不明	113.3					5.2			
2号性格不明									
1号土坑		47.6							
2号土坑		12.5				116.1			
3号土坑		19.6							
4号土坑		3638.9							
5号土坑		1100.1							
6号土坑		491.1							
7号土坑		859.5							
8号土坑									
9号土坑		4.7							
10号土坑									
11号土坑		37.8							
12号土坑									
13号土坑		1637.0							
14号土坑		639.3							
15号土坑		548.6							
16号土坑		399.8							
17号土坑									
18号土坑		70.5							
19号土坑		170.2							
20・21号土坑		247.1				26.3			
22号土坑		210.7				30.7			
23号土坑		253.5							
24号土坑		17.1							
25号土坑		224.9							
26号土坑		23.8							
27号土坑		4.9							
28号土坑									
29号土坑									
30号土坑		295.8							
31号土坑		98.7							
32号土坑		728.1							
33号土坑		507.6				149.6			
34号土坑									
柱穴		8.4							
遺構外(I～II層)		876.3							
遺構外(II～III層)		54361.9				64.3			
遺構外(II層)		1323.5							
遺構外(III～IV層)		211.3				57.9			
遺構外(III層)		5632.3							
遺構外(IV層)		5072.2							
遺構外(V層上面)		3043.4							
出土地点不明		318.7				120.6			





## VI 検出遺構・出土遺物

### 1 繩文時代

#### (1) 壴穴住居跡

##### 1号住居跡（第8～17図、写真図版3・31～33・40～42）

[位置・検出状況] 調査区南端、IB9d～IB7fグリッドに位置する。V層上面で検出した。平成26年度の試掘調査で、北壁の一部と1列に並ぶ地床炉が確認されていた。遺構は北側の残りは良好であるが、南側半分は床面が残存するが、壁は確認できなかった。おそらく後世の土砂崩落によつて消失したものと推測する。

[その他の遺構との重複] 6号住居跡と重複し、本遺構の方が古い。また平安時代に比定される11号住居跡と重複し、11号住居跡により本遺構の西壁の一部が削平されているのを確認した。

[平面形] 隅丸長方形を呈する、大型住居である。

[規模] 長軸1320cm・短軸510cm・深さ100cm

[埋土] 遺構の南側は消失しているが、残存する範囲では11層(3～13層)からなる。黄褐色シルト層(4層)と黒褐色シルト層(5・7層)、暗褐色シルト層とが互層を呈しているのが特徴である。概ねレンズ堆積をしており、自然堆積と推測する。また床面直上層の10層には8×2mの範囲で炭化物が水平に堆積していた。

[床面・壁] 炉を検出したV層面を床面と判断した。概ね平坦である。壁は北壁と東西両壁の一部を確認した。ほぼ直立気味である。

[炉] 住居床面の中央に、住居の長軸と並行して7箇所の地床炉を確認した。平面形はいずれも歪な不整形で、長軸方向にやや長い形態のものが多い。焼成は強く、床面下3～8cmが被熱により明赤褐色に還元している。

[附属施設] 柱穴200個を確認した(第9図)。比較的大きな柱穴群が地床炉を挟んで、長軸方向に大きく2列に並行し、その周辺に小さな柱穴が付属する。また小柱穴が床面中央に地床炉を切る状態で長軸方向に並んでいる。

壁溝は3重に巡る。最も内側の壁溝は長軸方向2列のみ確認した。柱穴に切られており、最も古い時期に比定されると推測する。それよりも外側の壁溝は、南側を除きほぼ全周するが柱穴と重複している。東側の壁溝がやや途切れ気味である。最も外側の壁溝は南側の一部を除き、全周しており、柱穴との重複が少ない。これらの点から、本遺構は2回以上の建て替え(拡張)が行われたことが推測される。

[出土遺物] 繩文土器が重量26,399g分出土している。埋土下位から床面上にかけて出土するものが多く、概ね大木4～5式に比定される土器群である。33点図示した。1は深鉢の大型破片で胴部は寸胴、口縁部は大きく開く形態である。頸部と胴部に刺突文を加えた隆帯が付される。口唇部直下の内面にも波状を呈した隆帯が付されている。3も同様な隆帯である。6は緩やかに外反する形態の深鉢で、口縁部から胴部にかけ貼付隆帯による格子状、また「X」字状文が描かれている。8は深鉢の胴部片で、側面を打ち欠き、整形している。円盤形土製品と推測するが、かなり大型である。9～23が地文のみの深鉢である。形態が復元できた9・10では口唇部に押圧文が巡らせ波状口縁とし、鋸歯状や



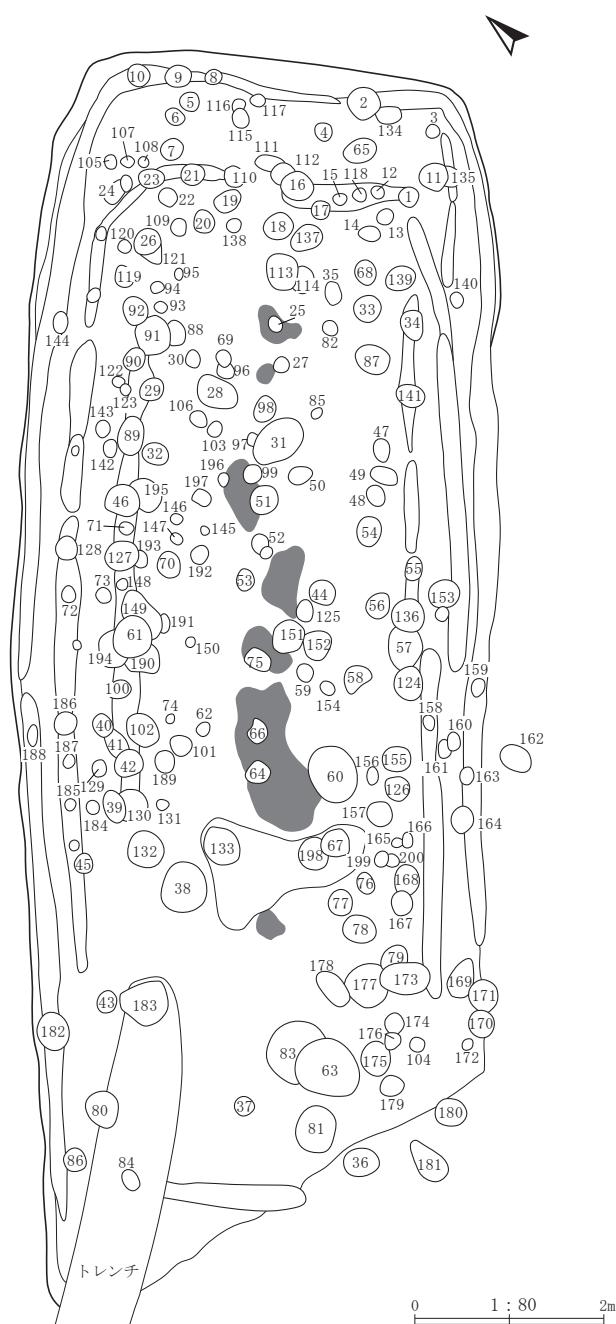
第8図 1号住居跡 1

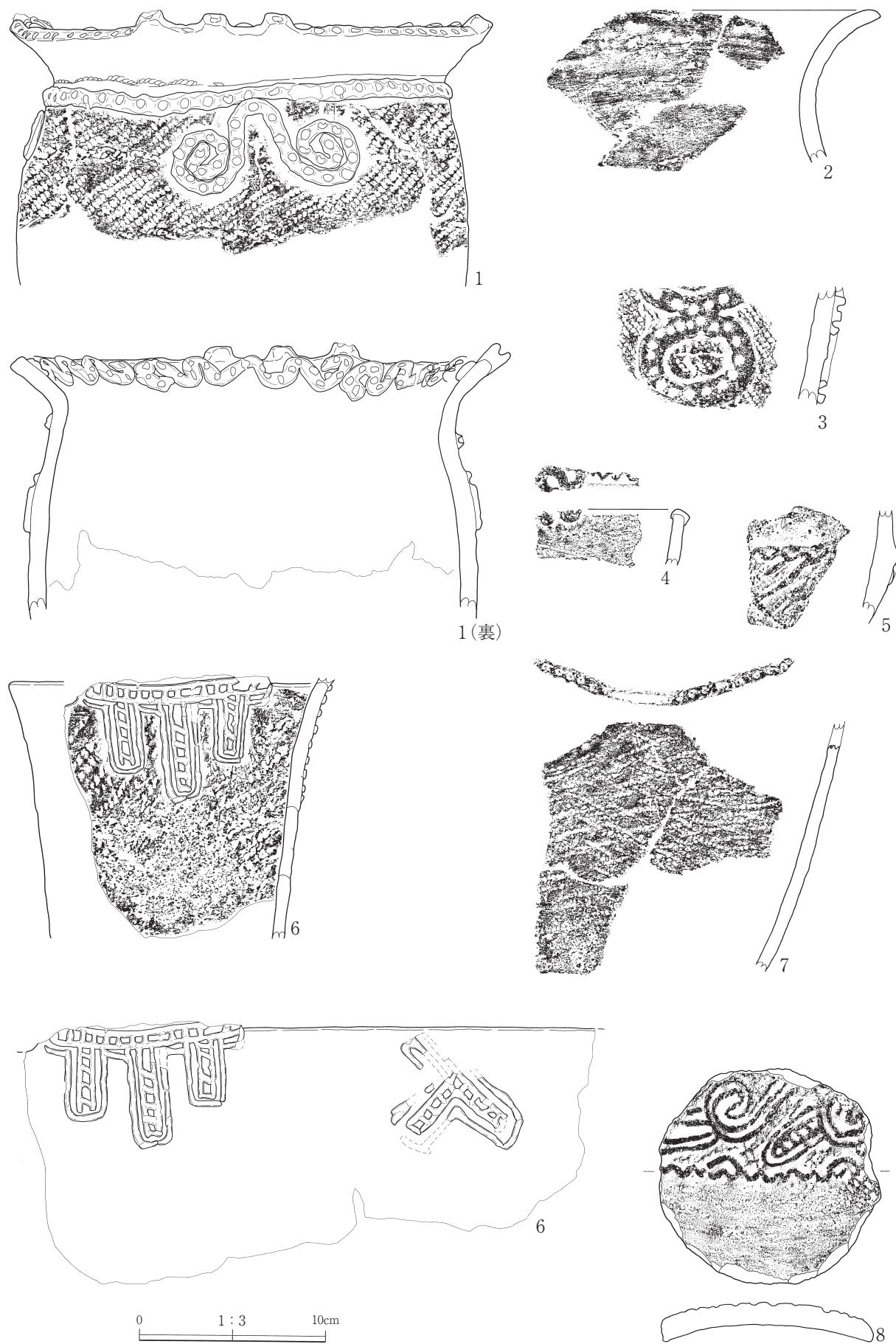
1 繩文時代

1号住居跡柱穴一覧

柱穴名	底面標高(m)	深さ(cm)
1	23.293	30.7
2	23.291	30.9
3	23.469	13.1
4	23.477	12.3
5	23.598	20.0
6	23.268	33.2
7	23.394	20.6
8	23.463	13.7
9	23.451	14.9
10	23.295	30.5
11	23.584	1.6
12	23.324	27.6
13	23.384	21.6
14	23.400	20.0
15	23.337	26.3
16	23.300	30.0
17	23.307	29.3
18	23.434	16.6
19	23.361	23.9
20	23.182	41.8
21	23.266	33.4
22	23.254	34.6
23	23.257	34.3
24	23.329	27.1
25	23.340	26.0
26	23.178	42.2
27	23.439	16.1
28	23.500	10.0
29	23.215	28.5
30	23.535	6.5
31	23.381	11.9
32	23.099	40.1
33	23.244	35.6
34	22.978	62.2
35	23.446	15.4
36	22.717	68.3
37	23.184	21.6
38	22.626	77.4
39	22.808	59.2
40	22.832	66.8
41	22.885	51.5
42	23.171	22.9
43	22.883	51.7
44	23.254	24.6
45	22.924	47.6
46	22.953	54.7
47	23.317	18.3
48	23.137	36.3
49	23.285	21.5
50	23.137	36.3
51	23.361	13.9
52	23.294	20.6
53	23.346	15.4
54	23.205	29.5
55	23.337	16.3
56	22.750	75.0
57	22.810	69.0
58	22.941	55.9
59	22.924	57.6
60	22.468	93.2
61	23.010	49.0
62	23.200	30.0
63	22.834	56.6
64	23.148	25.2
65	23.337	26.3
66	23.218	18.2
67	23.019	38.1
68	23.175	42.5
69	23.506	9.4
70	23.061	43.9
71	23.229	27.1
72	23.059	44.1
73	23.175	32.5
74	23.294	20.6
75	23.022	47.8
76	22.894	50.6
77	22.975	42.5
78	22.991	40.9
79	22.784	61.6
80	23.159	24.1
81	23.048	35.2
82	23.456	14.4
83	23.003	39.7
84	22.999	49.1
85	23.401	9.9
86	23.011	38.9
87	23.217	38.3
88	22.971	62.9
89	23.018	48.2
90	23.028	57.2
91	23.050	55.0
92	23.179	42.1
93	23.409	19.1
94	23.423	17.7
95	23.461	13.9
96	23.492	8.0
97	23.388	11.2
98	23.421	7.9
99	23.332	16.8
100	22.816	68.4

第9図 1号住居跡2



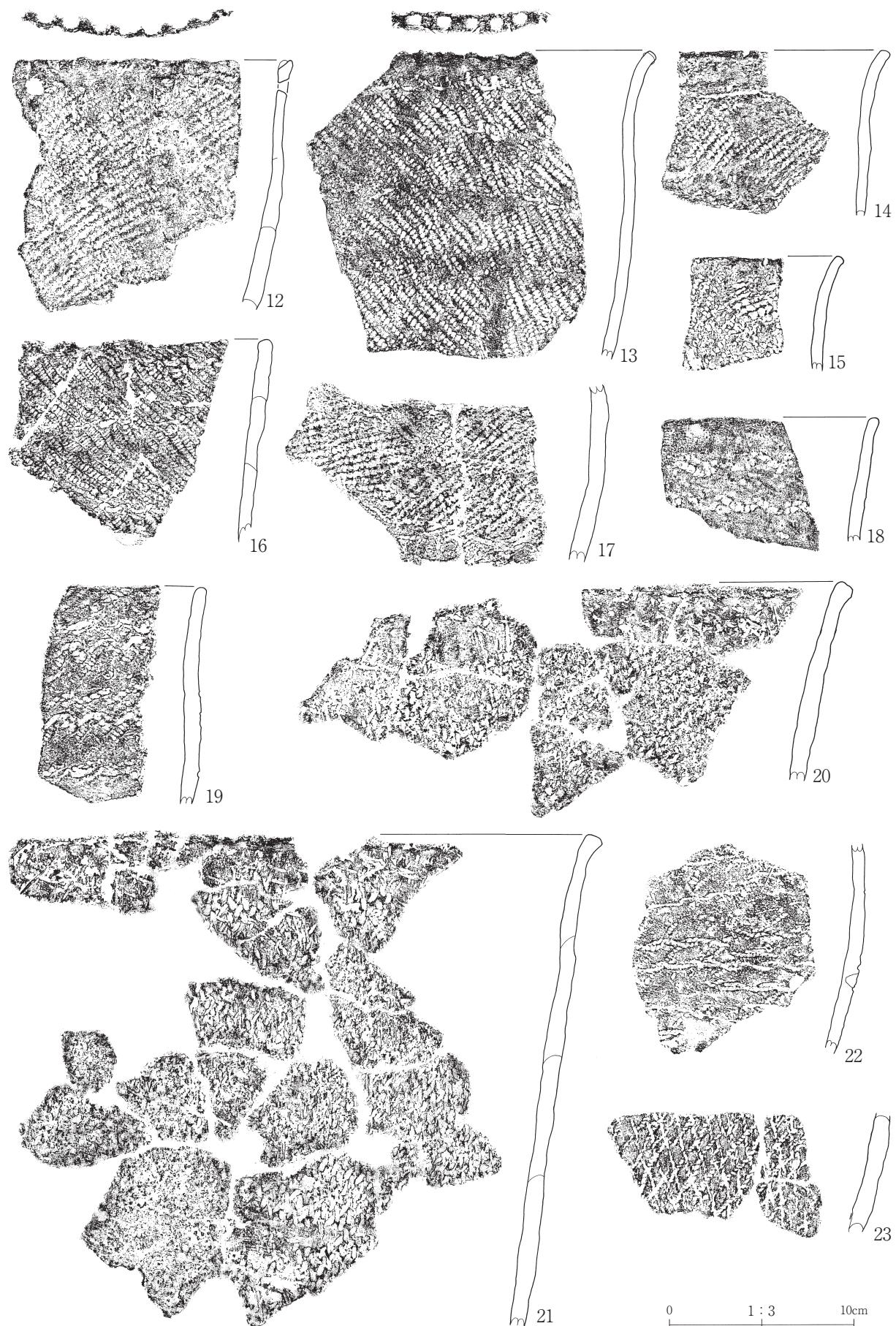


第10図 1号住居跡出土遺物 1

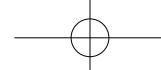
1 繩文時代



第11図 1号住居跡出土遺物2



第12図 1号住居跡出土遺物3

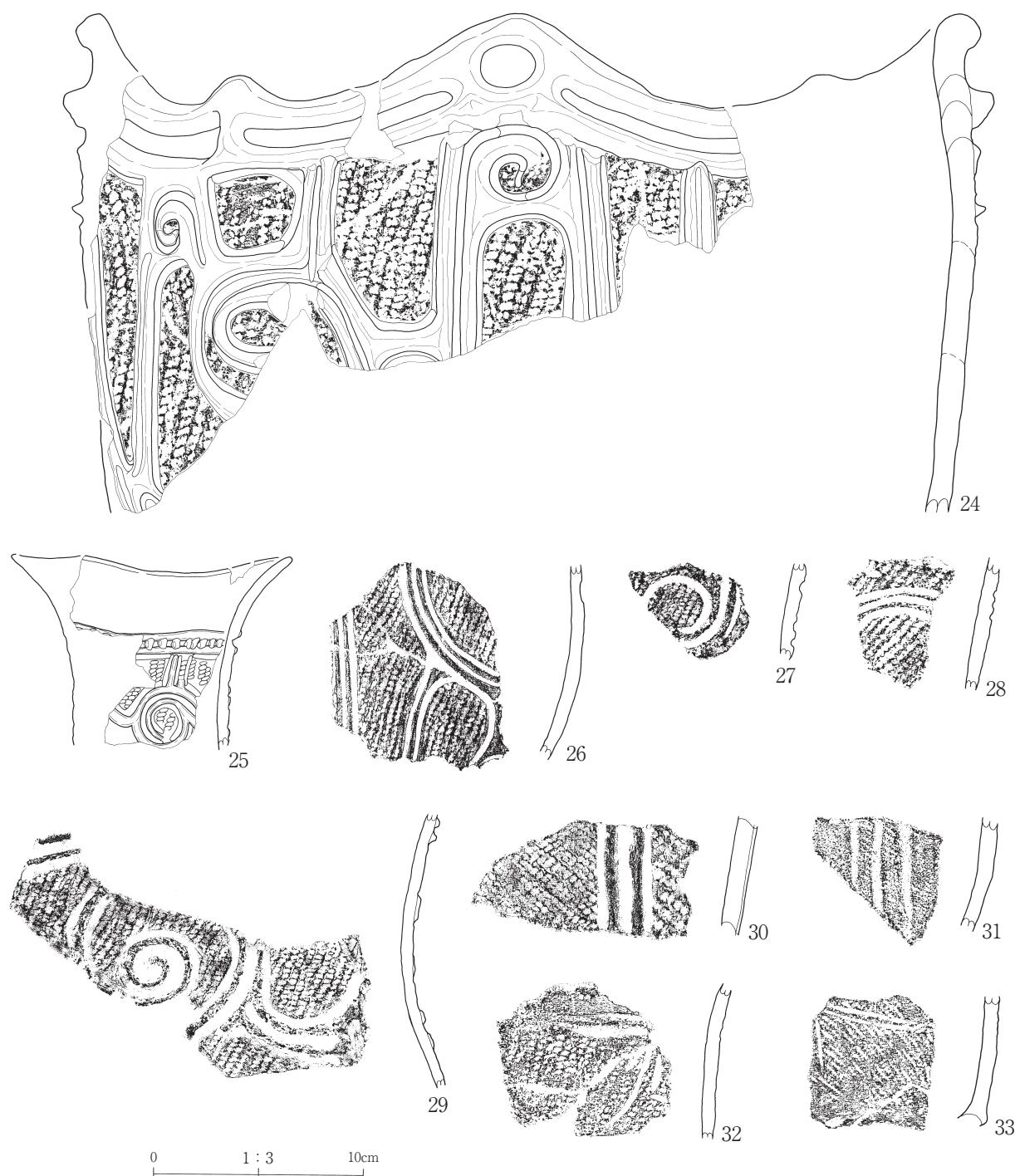


1 縄文時代

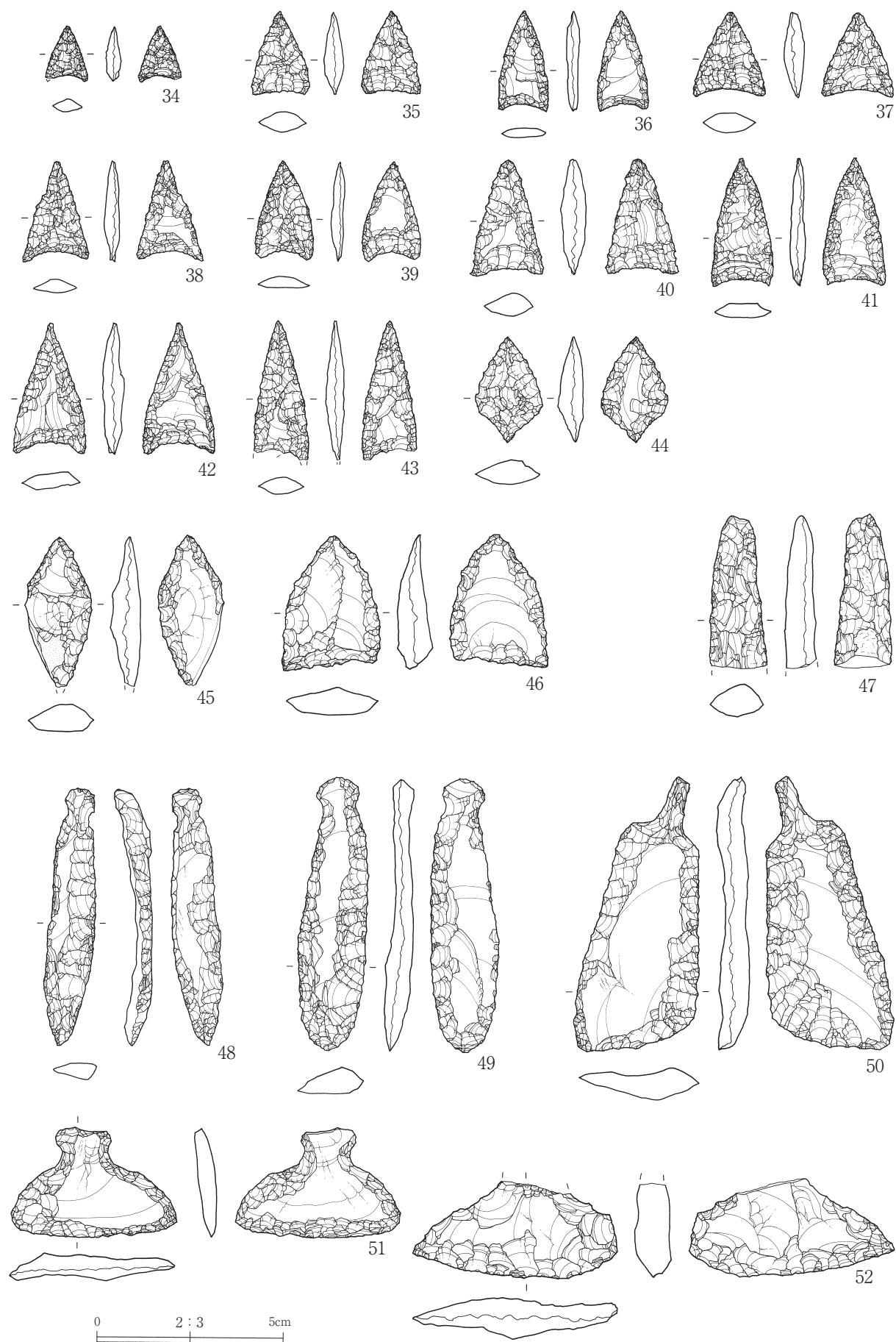
波状を呈する隆帶が付される。該期の土器群と考える。また中期に比定される土器も出土している。24は大木8b～9式、25～33は大木8b式である。隣接する6号住居跡は中期後葉に比定されるので、そこからの流れ込みの可能性が高い。

石器は石鏃（34～46）、尖頭器（47）、石匙（48～51）、不定形石器（52～57）、Uフレイク（59・61）、Rフレイク（58・60・62）、フレイク（63・64）、敲磨器類（65～67）、磨製石斧（68～70）、石皿（71）である。また石製品は6点（72～77）で、全て块状耳飾りである。

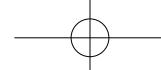
[時期] 遺構の形態と埋土下位から出土した土器の年代から縄文時代前期後葉（大木5a式期）と判断した。なお本遺構の床面直上から採取した炭化物を試料とし、放射性炭素年代測定（AMS測定）を行っており、 $4990 \pm 30$ yrBPという結果を得ている。  
(須原)



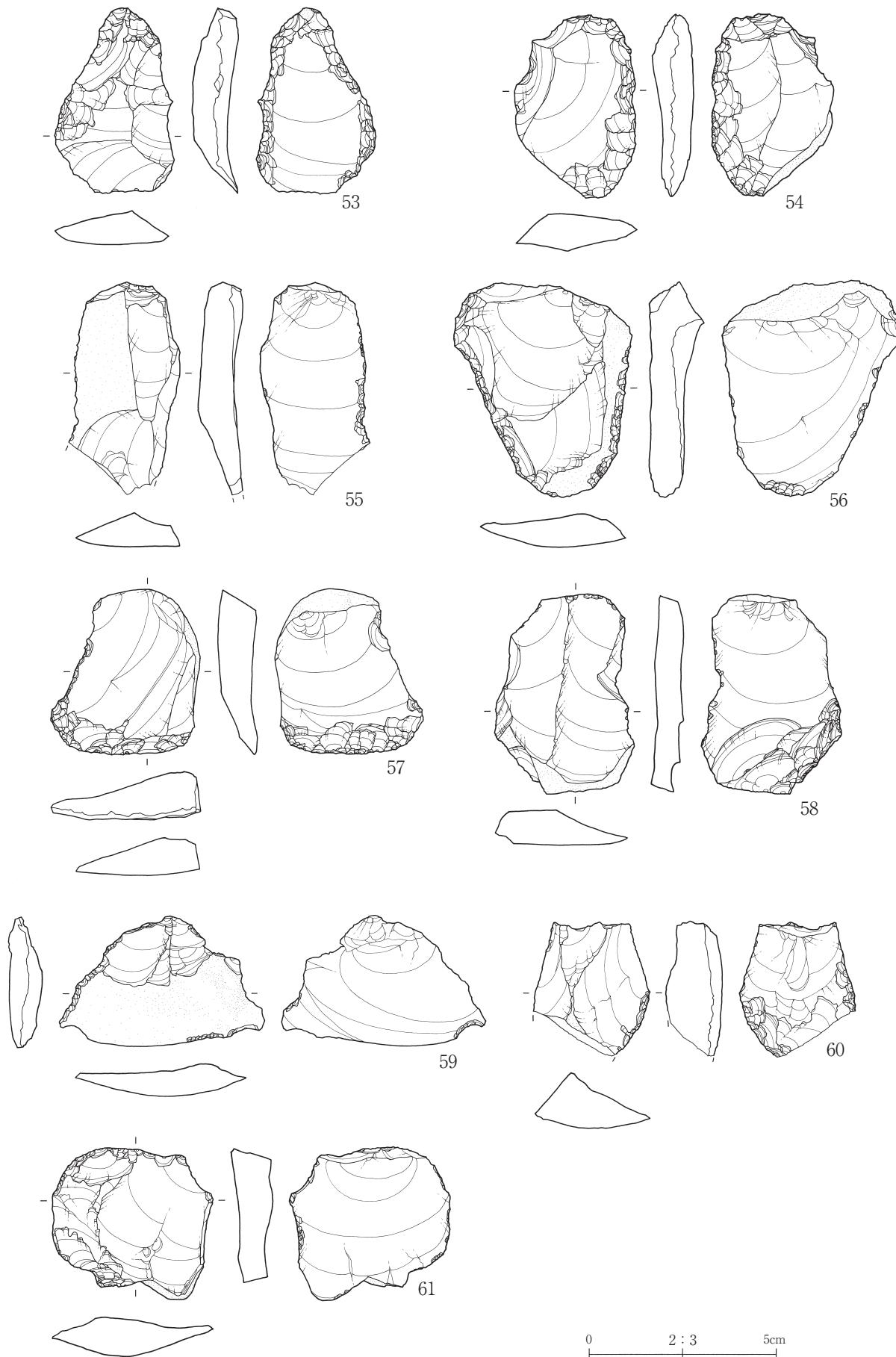
第13図 1号住居跡出土遺物4



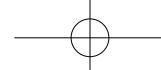
第14図 1号住居跡出土遺物5



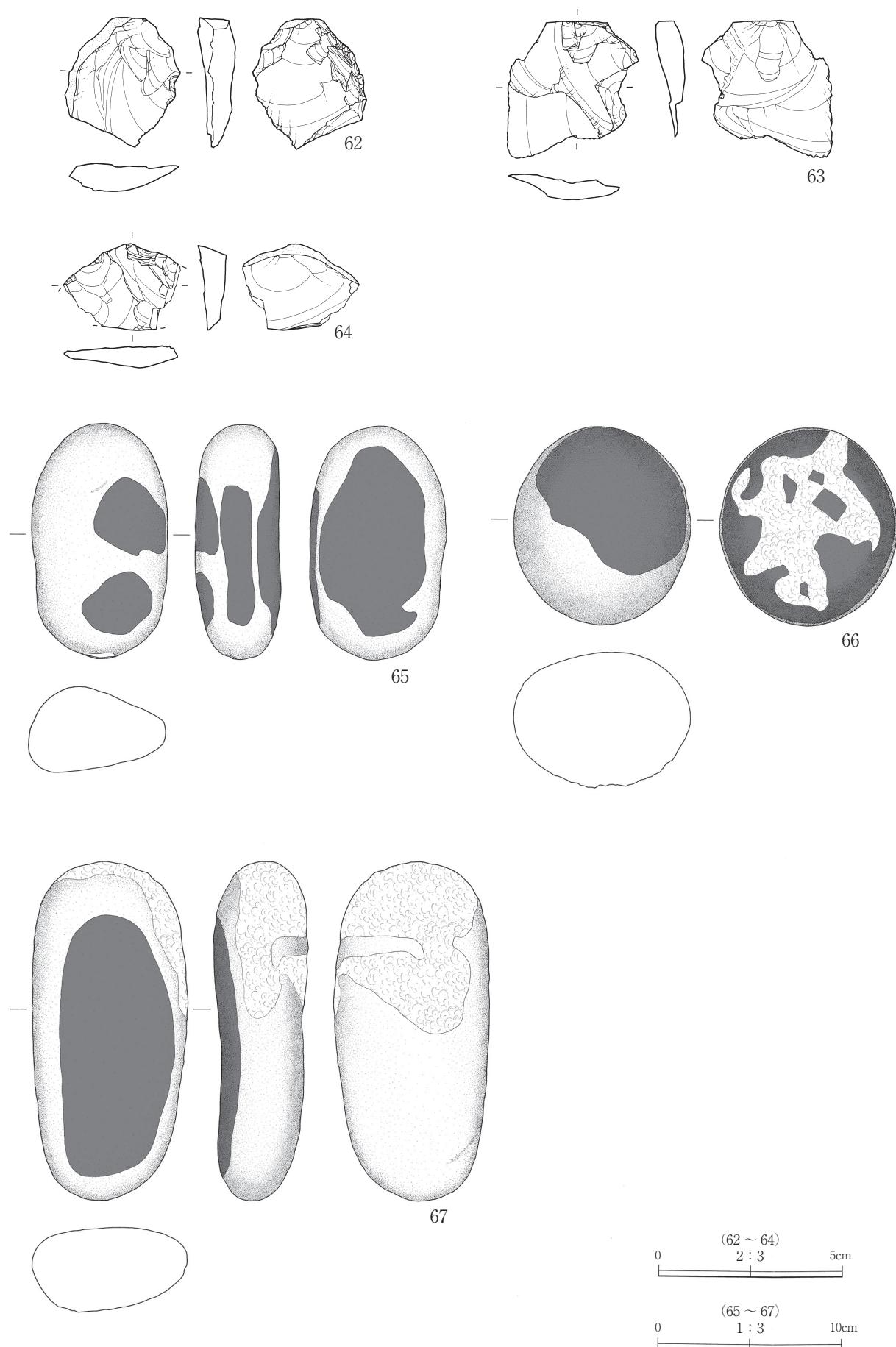
1 繩文時代



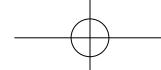
第15図 1号住居跡出土遺物6



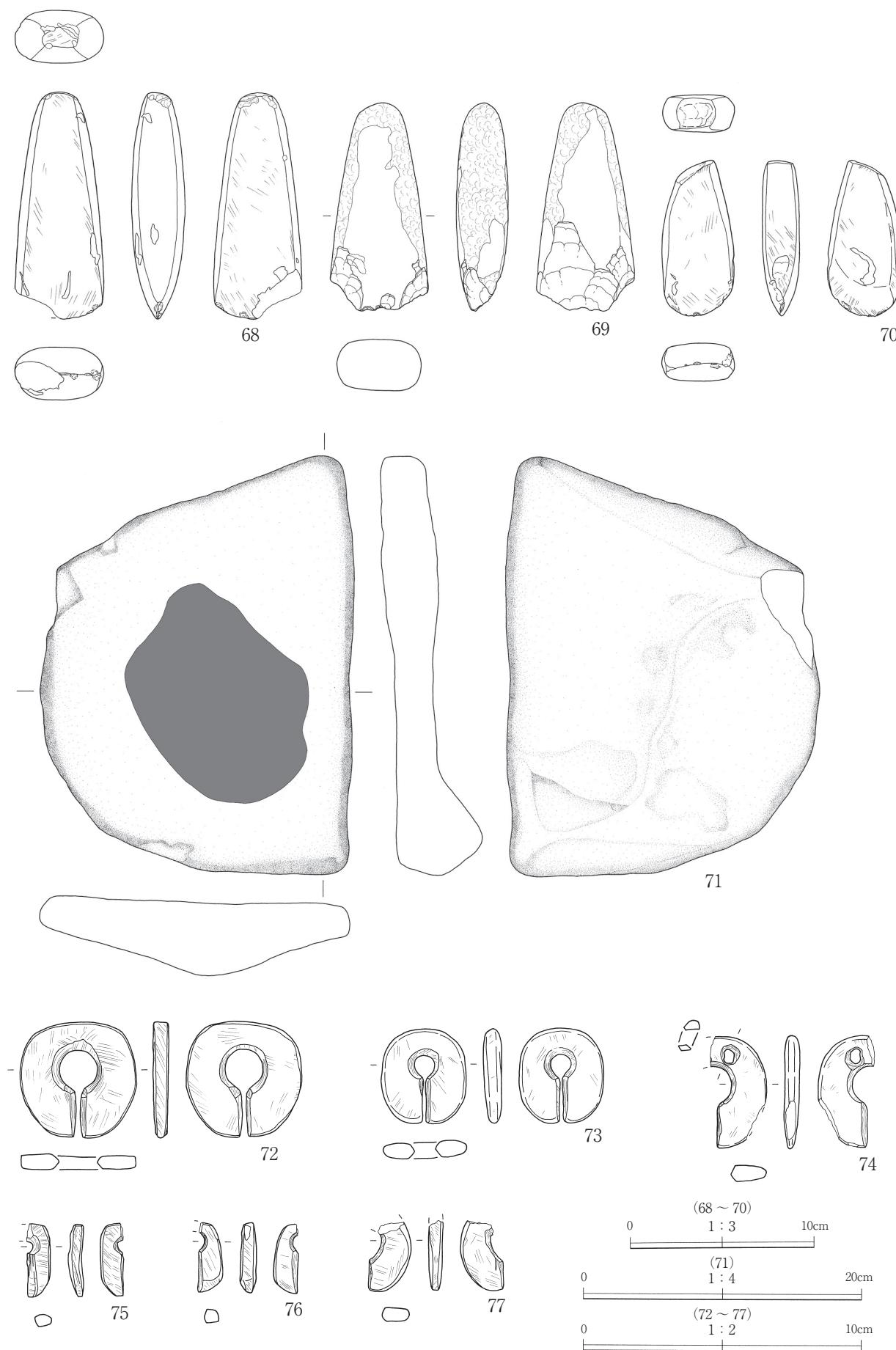
VI 検出遺構・出土遺物



第16図 1号住居跡出土遺物7



1 繩文時代



第17図 1号住居跡出土遺物8

## 2号住居跡（第18・19図、写真図版4・33・42）

[位置・検出状況] 調査区南側、IA9g～IA9hグリッドに位置する。V層上面で暗褐色シルトのプランで検出した。本遺構は調査区北西部の小高い丘陵平坦面端部から斜面にかけて位置しており、斜面は後世の崩落でV層土が消失し、それに伴い本遺構の南側も消失している。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 隅丸長方形を呈する、大型住居である。

[規模] 長軸(350)cm・短軸410cm・深さ40cm

[埋土] 遺構の南側は消失しているが、残存する範囲で9層確認した（1～4・6～10層）。ただし1～4層は北側の遺構外から流入した土（II層類似土）であり、厳密には本遺構に伴わない埋土である。地山に類似する黄褐色～にぶい黄褐色シルト（7～10層）を主体とし、わずかだが暗褐色シルトが混じる堆積様相は、周辺の地形が崩落し、地山土ごと埋没していったことが推測できる。

[床面・壁] 炉を検出したV層面を床面と判断した。概ね平坦である。南側は消失している。壁は北壁と東西両壁の一部を確認した。北壁はやや広がりながら立ち上がり、東西壁はほぼ直立気味である。

[炉] 住居床面の中央に、住居の長軸と並行して3箇所の地床炉を確認した。平面形はいずれも歪な不整形で、長軸方向にやや長い形態のものが多い。規模では炉1が最も大きく、140×60cmを測る。いずれの炉も焼成は弱く、床面下約5cmが被熱により還元しているが、褐色を呈するにとどまる。

[附属施設] 柱穴が床面23個、南側の床面が消失した範囲で6個、合わせて29個確認した。配列はやや不規則だが、地床炉を挟んで、長軸方向に並行しているようにも見受けられる。

壁溝は北壁際で確認した。1条のみで北西の一部は2重になる。拡張があったかは定かではない。また床面の東側には短軸方向に短い溝が付属する。用途は不明である。

[出土遺物] 繩文土器が重量6491.8g分出土している。出土量は比較的多いが、その多くは遺構外からの流れ込みの可能性がある。ただ埋土下位から床面上の土器は概ね大木5式の範疇に収まり、まとまりがあると言える。10点図示した。78～80は口縁部から胴部にかけての破片で、やや太い沈線で連続する波状文が描かれている。大木5a式の範疇に含まれるものと推測する。81・82は小片であるが、沈線文を加えた隆帯が付され、大木5a式と判断する。83・84は単軸絡条体1類を施文された胴部片で、大木5a式か。85・86は埋土上位からは出土しており、大木8a式に比定される土器片である。前述の通り、埋土上位は遺構外からの流入土であり、これらの土器も流れ込みで混入した可能性が高い。

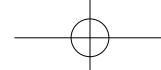
石器は48点出土している（石鏸、楔形石器、不定形石器、敲磨器類、Rフレイク、Uフレイク、フレイク。第3表）。比較的少ない。2点図示した。88は不定形石器で、素材となるフレイクの片面のみ二次加工を施し、刃部を作出している。89はRフレイクで、最終剥離面に不連続な微細剥離とやや大きい押圧剥離が施されている。

[時期] 遺構の形態と埋土下位から出土した土器の年代から縄文時代前期後葉（大木5a式期）と判断した。  
(須原)

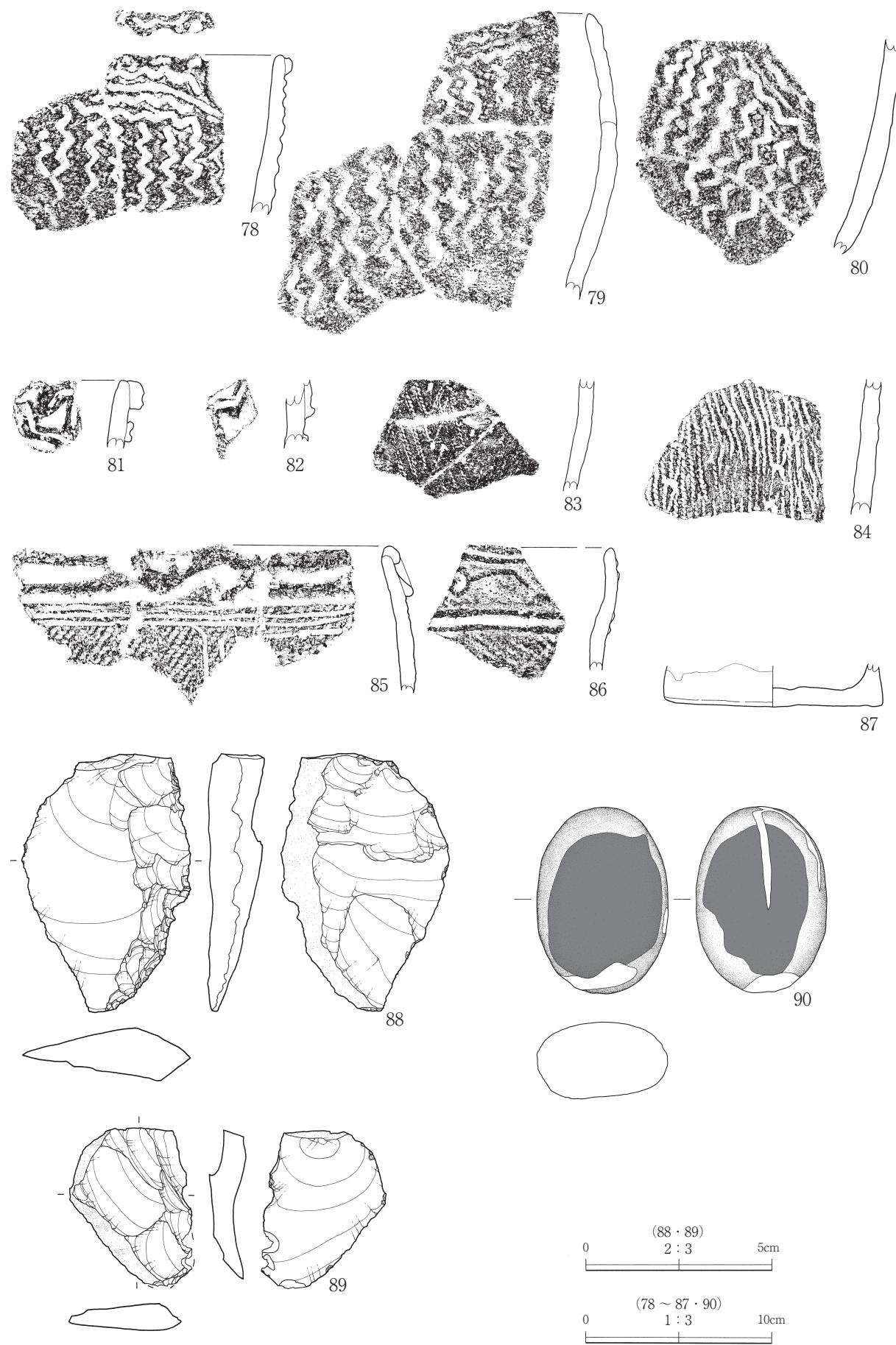
1 繩文時代



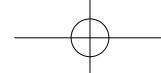
第18図 2号住居跡



VI 検出遺構・出土遺物



第19図 2号住居跡出土遺物



## 1 縄文時代

### 3号住居跡（第20～22図、写真図版3・34・42）

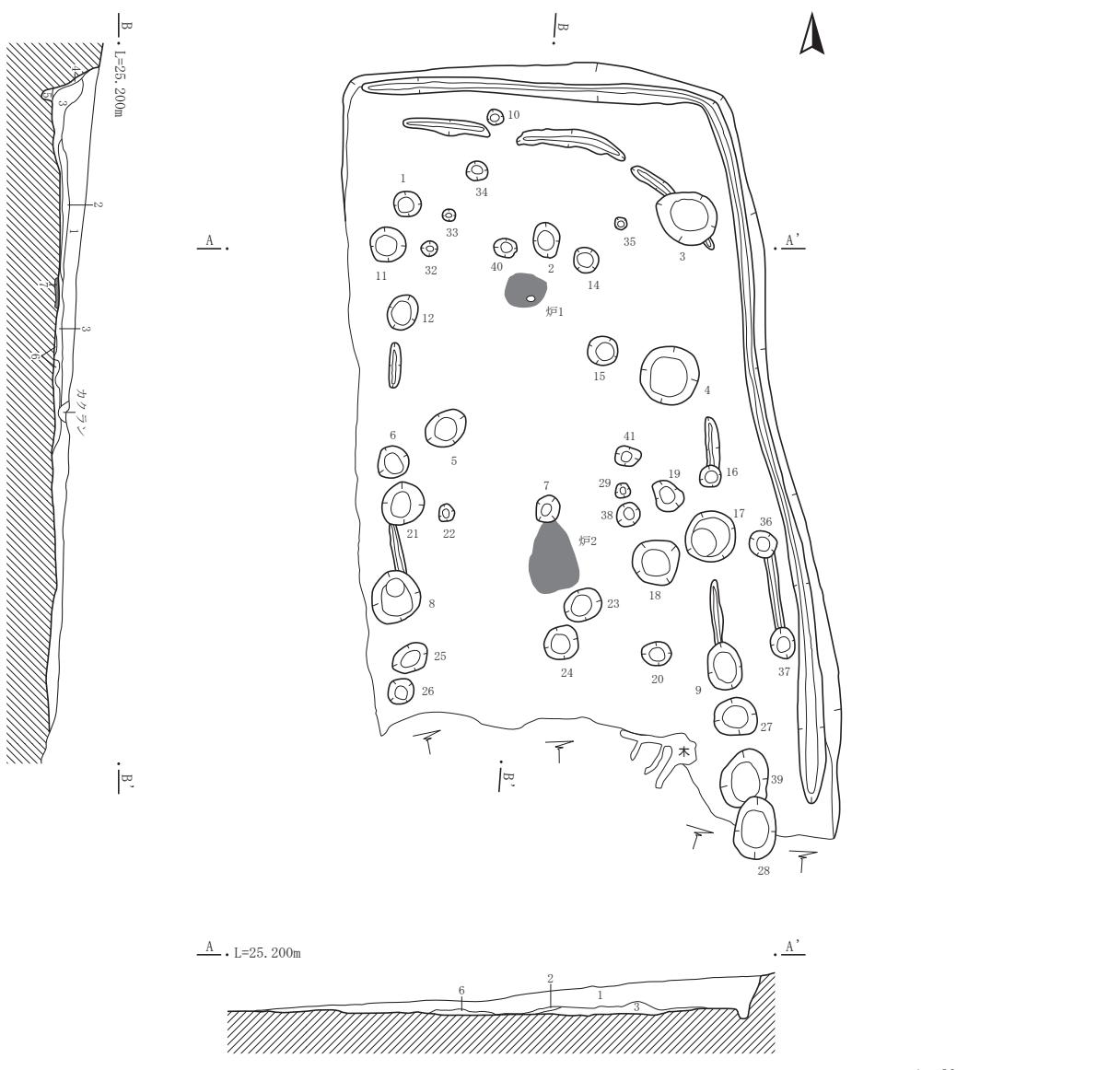
[位置・検出状況] 調査区南側、I B 10 d～II B 1 e グリッドに位置する。V層上面で褐色シルトのプランで検出した。本遺構は北側の残りは良好である。南側半分は床面が残存するが、壁は確認できなかった。おそらく後世の土砂崩落によって消失したものと推測する。

[その他の遺構との重複] なし。

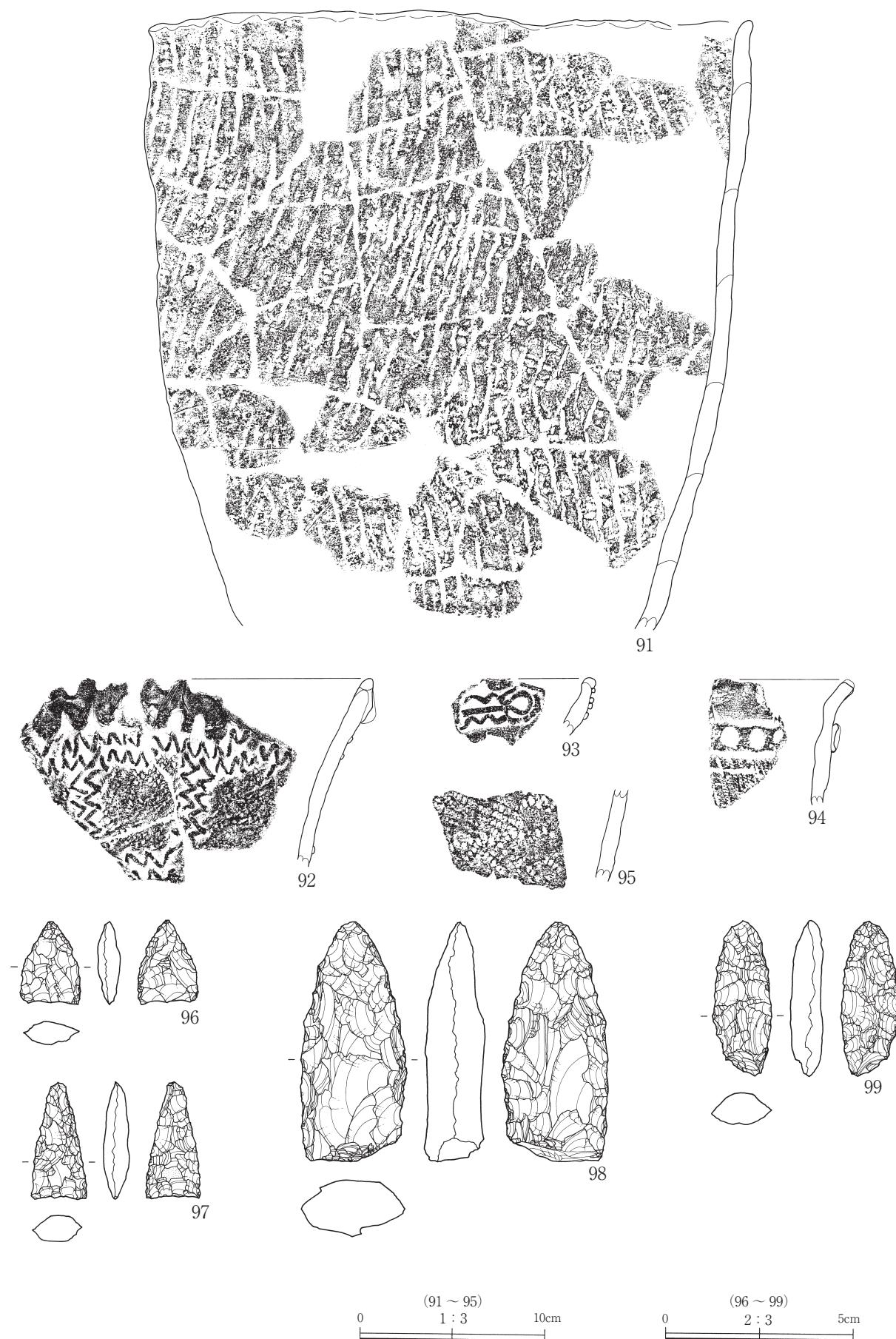
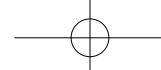
[平面形] 隅丸長方形を呈する、大型住居である。

[規模] 長軸 (680) cm・短軸 (405) cm・深さ 25cm

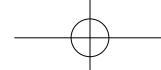
[埋土] 遺構の南側は消失しているが、残存する範囲から6層確認した。褐色シルトを主体とし、黄褐色や灰褐色を基調とし、地山ブロックが混じる堆積様相で、周辺地形の崩落により、地山土ごと埋没していったことが推測できる。



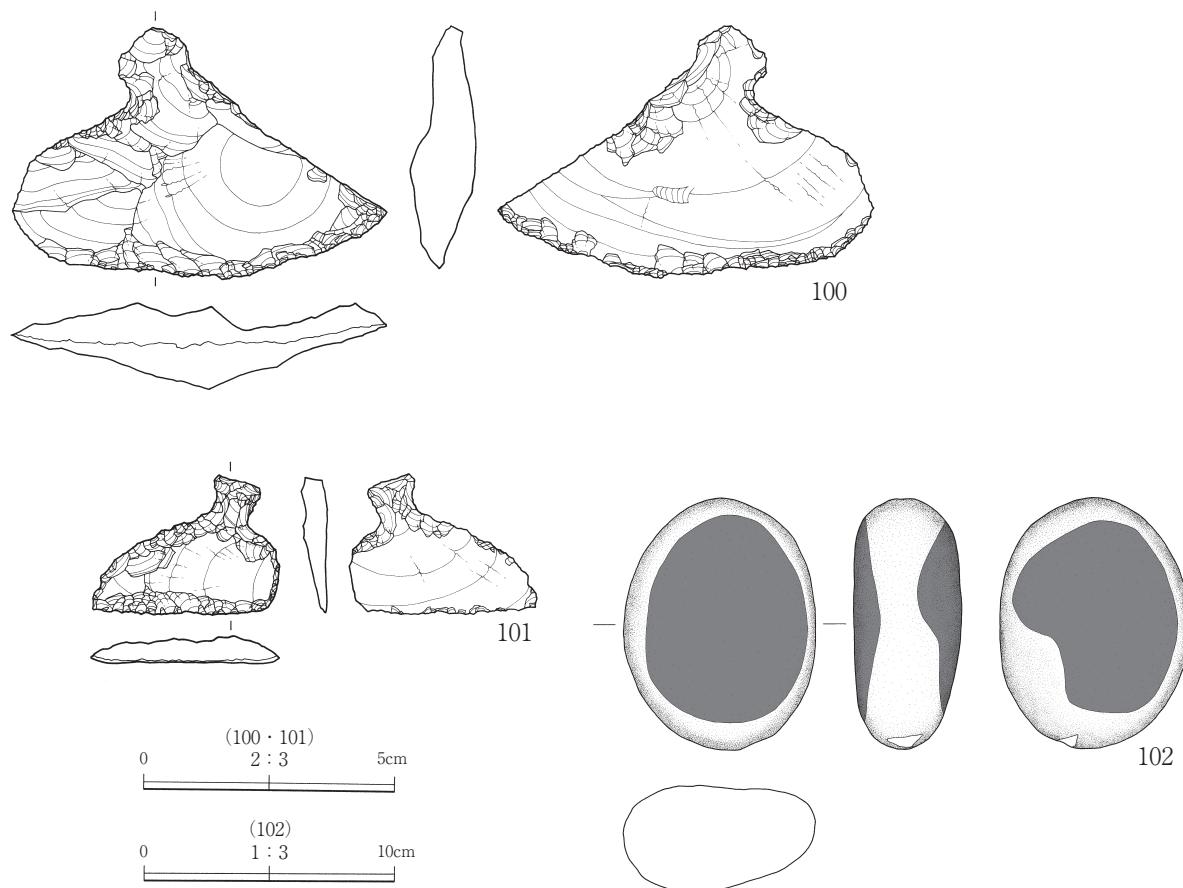
第20図 3号住居跡



第21図 3号住居跡出土遺物 1



1 繩文時代



第22図 3号住居跡出土遺物2

[床面・壁]炉を検出したV層面を床面と判断した。概ね平坦である。南側・東側の一部が消失している。壁は北壁と両壁の一部を確認した。いずれもやや広がりながら立ち上がる。

[炉] 住居床面の中央に、住居の長軸と並行して2箇所の地床炉を確認した。平面形はいずれも歪な不整形で、長軸方向にやや長い形態のものが多い。規模では炉2の方が大きく、 $55 \times 40\text{cm}$ を測る。どちらの炉も焼成は弱く、床面下約3cmが被熱により還元しているが、赤褐色を呈するにとどまる。

[附属施設] 柱穴41個確認した。配列はやや不規則だが、地床炉を挟み、比較的大きな柱穴が長軸方向に2列並行している。

壁溝は北壁から西壁際に2重に巡っている。外側の壁溝は壁に沿って切れ間なく巡るが、内側の壁溝は断続的で、また壁にやや沿わず、橢円形状に巡る。したがって本遺構は建て替え（拡張）を1回行い、またその際、遺構の平面形が橢円形から長方形へと変更した可能性がある。

[出土遺物] 繩文土器が重量7132.2g分出土している。概ね大木5a式に比定されるものであるが、形態復元までできた土器は91のみで他は小片である。5点図示した。91は胴部から口縁部にかけて直立する深鉢である。口唇部はやや波状を呈し、口縁部から胴部に縦位の単軸絡条帶1類のみ施文される。粗製であるが、大木5a式の範疇であろうと判断した。92は口唇部直下に太い鋸歯状の突起が付され、胴部には細い貼付隆帯で2段の波状文を描いている。93も貼付隆帯によって曲線的な文様が描かれている。94は口縁部下に横位の幅広な隆帯が巡る。この隆帯には棒状工具を押し付けた押圧が加えられる。いずれも大木5a式の範疇と捉えている。

石器は100点（石鏃、尖頭器、石錐、石匙、不定形石器、Rフレイク、Uフレイク、フレイク。第3表）

出土しており、2号住居跡と比べると、豊富である。7点図示した。96・97は石鏸であるどちらも平基鏸である。98は尖頭器で、片側端部が欠損する。やや幅広で先端もわずかに丸みを帯びる。99も尖頭器であるが、小型である。100・101は横型の石匙である。両者は大きさが異なるが、刃部の作出方法は類似する。102は敲磨器類で扁平な2面に磨痕が見受けられる。

[時期] 遺構の形態と埋土下位から出土した土器から縄文時代前期後葉（大木5a式期）と判断した。

(須原)

#### 4号a・b住居跡（第23～25図、写真図版6・7・34・42・43）

[位置・検出状況] 調査区中央の急斜面上、I A10h・II A 1g・II A 1hグリッドに位置する。V層上面で検出した。当初は1棟の竪穴住居跡と捉え、本遺構内をブロックごとに区切り、斜面の上方側・中間・斜面の下方側の3箇所から同時に掘り下げた。その結果、斜面の上方～中間と斜面の下方では、平坦面が階段状にずれており、異なる2面があることが分かった。これにより、斜面の上方～下方にかけて設けたベルトの土層断面の観察から、上段と下段で2棟の竪穴住居跡が存在することを確認した。本遺構の南側壁の立ち上がりは、斜面の土砂崩落により失われている。

[他の遺構との重複関係] 本遺構は2時期に分けており、上段に位置する4号a住居跡と下段に位置する4号b住居跡とする。2棟は重複しており、4号a住居跡が新しく、4号b住居跡が旧い。

[平面形] 4号a住居跡は不整な隅丸長方形を呈し、4号b住居跡は隅丸方形を呈する。

[規模] 4号a住居跡：長軸(372)cm、短軸462cm、深さ50cm / 4号b住居跡：長軸(180)cm、短軸(447)cm、深さ47cm

[埋土] 10層からなる。1～3層は斜面崩落土の流れ込みにより堆積した層である。1・2層は暗褐色シルト、3層は地山起源とみられる褐色シルトが主体となる。4～9層が4号a住居跡堆積層であり、そのうち8層が壁溝堆積層、9層が炉1被熱層に分けられる。10層が4号b住居跡堆積層である。4号a・b住居跡ともに褐色シルトが主体となる。4号a住居跡は堆積状況から自然堆積とみられる。4号b住居跡は単層で、黒色・暗褐色シルトをブロック状ないし層状に含み、地山シルトブロックを全体的に含む堆積状況から人為堆積と判断した。

[床面] 4号a住居跡は、被熱痕を検出した面を床面とし、全体的に概ね平坦であるが、床面中央付近はやや窪む。4号b住居跡は、概ね平坦である。

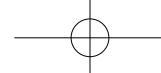
[壁] 4号a・b住居跡とともに、やや外へと広がるが、概ね直立気味に立ち上がる。南壁は斜面の土砂崩落により消失しており、北・東・西壁の3方が残存する。また4号a住居跡の北壁の一部は、斜面崩落の際の土砂流入により壊されている。

[付属施設] 4号a住居跡床面から、炉を3箇所確認した。炉1は109×54cmの楕円形を呈し、被熱は強く、床面下6cmほど赤色に還元しており表面の硬化は著しい。炉2は70×39cmの楕円形を呈し、被熱は弱いが、床面下6cmほど赤色に還元している。炉3は66×50cmの楕円形で、被熱は弱いが、床下9cmほど赤色に還元している。

柱穴は4号a住居跡で5個、4号b住居跡で4個確認しており、4号a住居跡では配置は比較的壁際に沿うように位置するが、4号a・b住居跡とも主柱配列の推定は難しい。

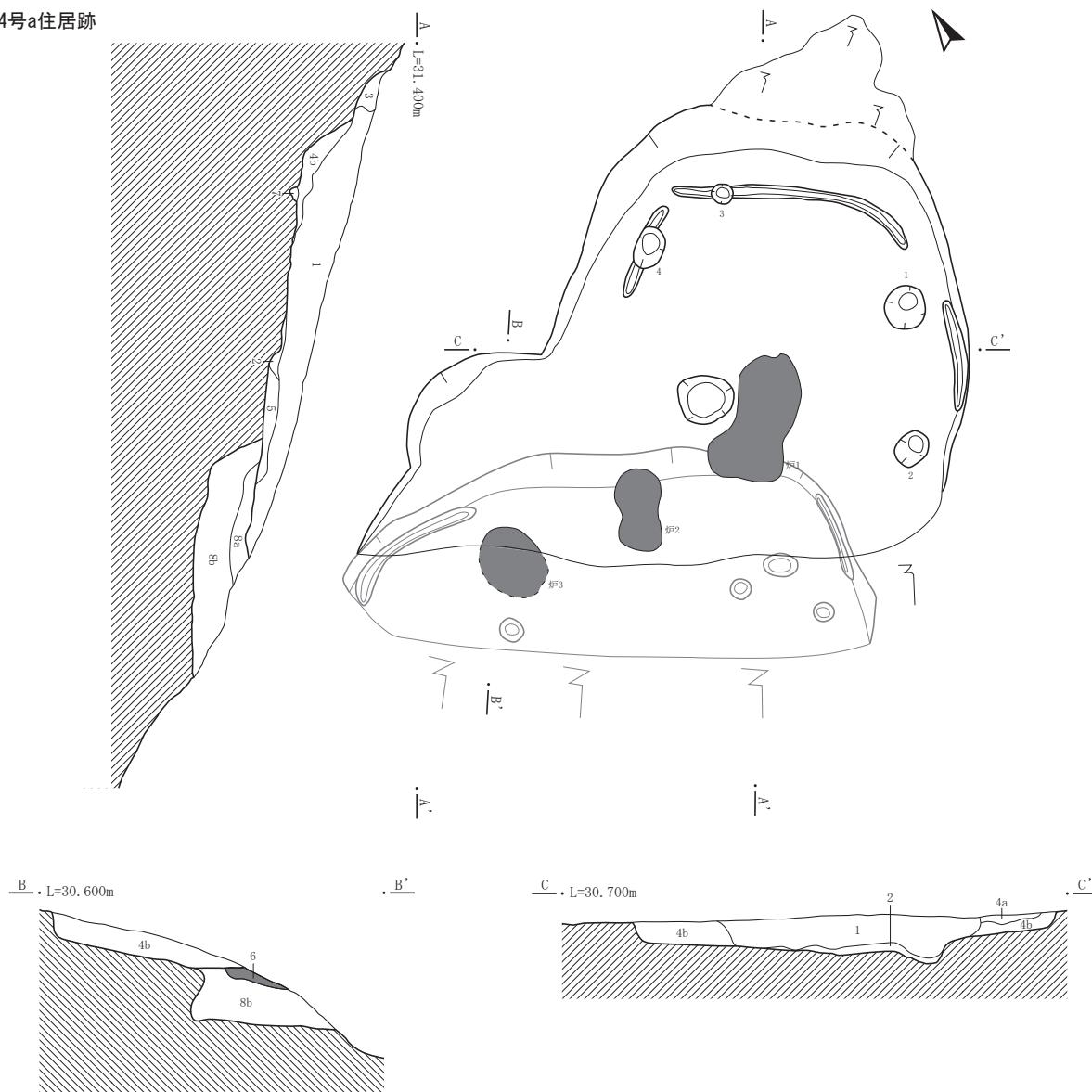
(澤目)

[出土遺物] 縄文土器が重量11370.7g分出土している。比較的出土量は多い方であるが、小片がほとんどである。9点図示した。103・104は文様が認められる数少ない資料である。103は口縁部に波状を呈した幅広の隆帶が付される。隆帶には沈線が加えられている。大木5a式と判断した。104は渦巻を描く隆帶である。大木5式の範疇か。106～111は深鉢の胴部片で、地文のみ。106～109は縦位の单軸絡条体が施文され、大木5式の範疇であろうと推測する。110・111は組紐が施文される。大

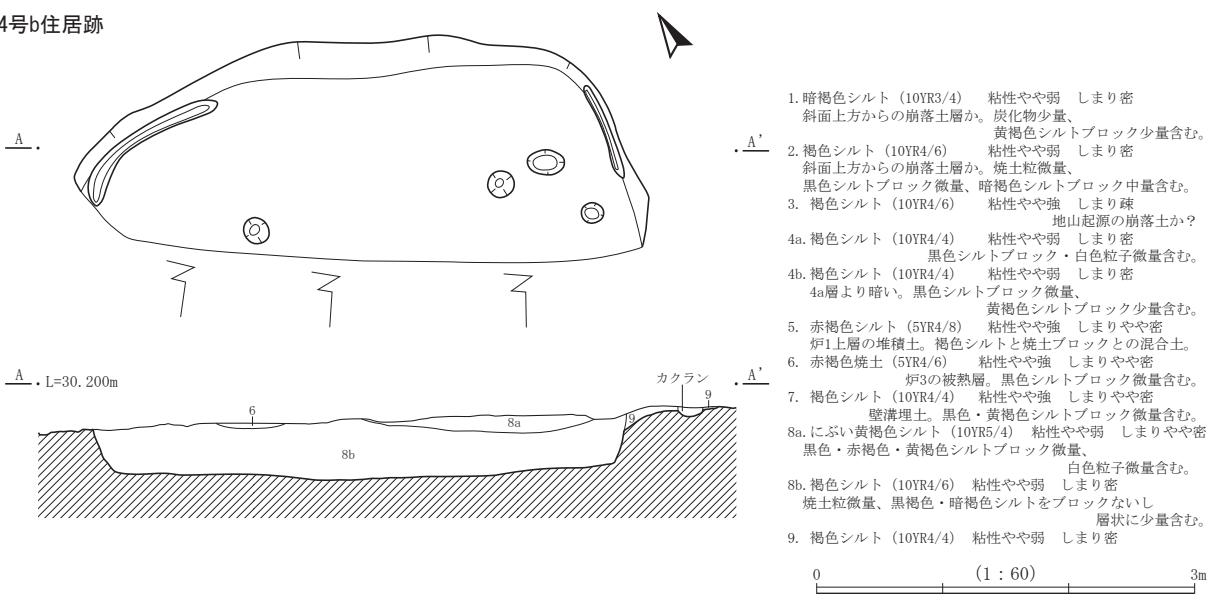


1 繩文時代

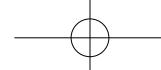
4号a住居跡



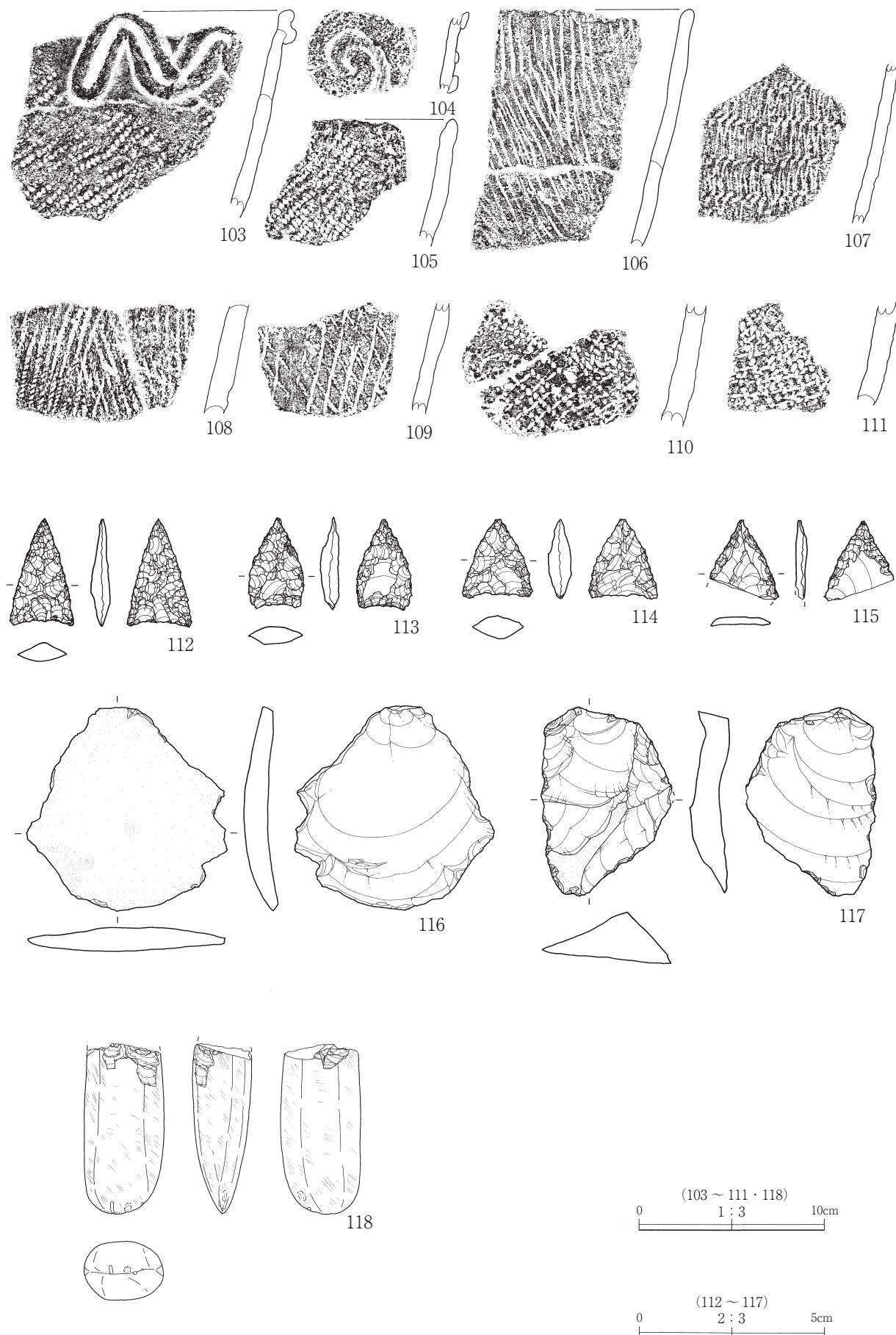
4号b住居跡



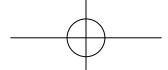
第23図 4号a・b住居跡



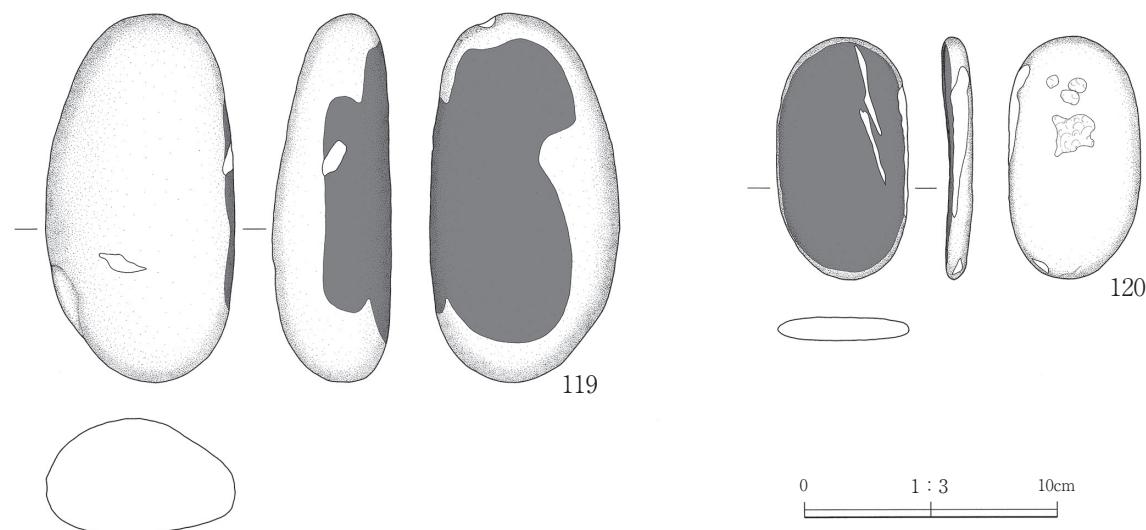
VI 検出遺構・出土遺物



第24図 4号a・b住居跡出土遺物1



1 繩文時代



第25図 4号a・b住居跡出土遺物2

木5式の範疇か。

石器は100点（石鏸、不定形石器、磨製石斧、石皿、Rフレイク、Uフレイク、フレイク。第3表）出土している。そのほとんどは埋土中から出土しており、厳密には本遺構に伴うものと言えるか定かではない。9点図示した。112～114は石鏸で、いずれも平基鏸である。115は石鏸失敗品である。基部が欠損、二次加工が全体に及んでいない。116・117はフレイクである。116は背面に自然面が残る。118は磨製石斧で、基部が欠損する。体部に厚みがあり、丸い棒状を呈する形態である。119・120は敲磨器類である。どちらも楕円形で、119は厚みのある礫を素材とし、磨痕のみ、120は偏平な礫を素材とし、磨痕と敲打痕とが確認できる。

[時期] 出土した土器の年代から縄文時代前期後葉(大木5a式期)と判断した。

(須原)

### 5号住居跡（第26・27図、写真図版7・34・43）

[位置・検出状況] 調査区中央の緩斜面上、IA 8j・IA 9j・IB 8～10aグリッドに位置する。当初は基本土層が残存した面と捉えていたことから、明確なプラン検出は行っておらず、後に設置した土層ベルト断面から残存範囲を示すに至っている。本遺構は、3号鍛冶工房跡床面精査中に本遺構の堆積土にあたる土中から土器片が出土していたことと、掘削後に床面から不明瞭ながら被熱の痕跡が確認できることから竪穴住居跡と判断した。本遺構埋没後に3号鍛冶工房跡が構築されたことと、斜面の土砂崩れないし近世以降に植林のための削平を受けて壁の立ち上がりはほぼ失われている。

[他の遺構との重複] 3号鍛冶工房跡と重複し、本遺構の方が古い。

[平面形] 不明である。

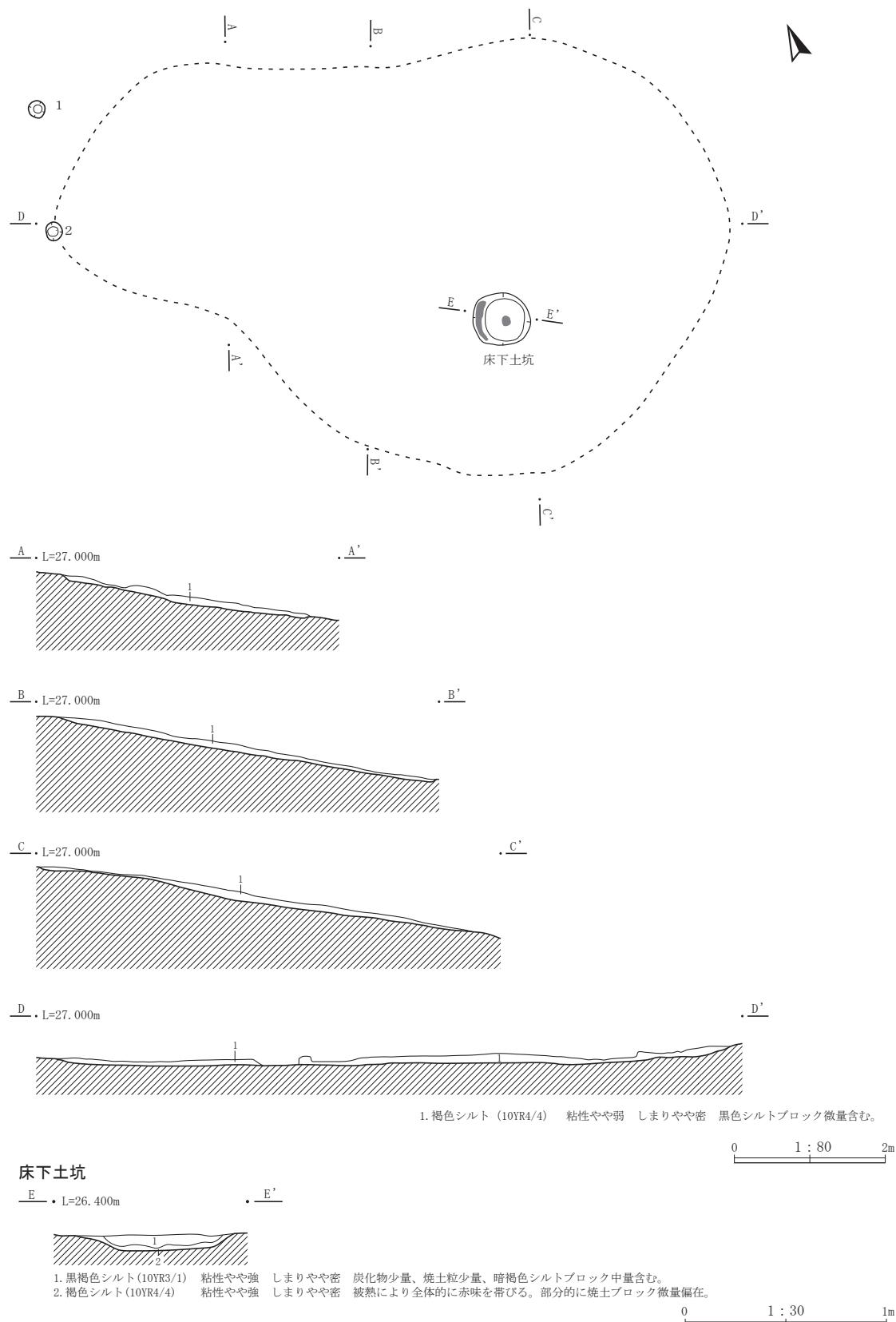
[規模] 長軸(895)cm、短軸(577)cm、深さ15cm

[埋土] 単層で褐色シルトが主体となる。堆積状況から自然堆積とみられる。

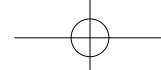
[床面] 地山を床面とし、概ね平坦である。

[壁] 壁としての立ち上がりは不明瞭で、ベルト断面で確認した限りでは、緩やかに大きく広がりながら立ち上がる。

[付属施設] 被熱痕を3箇所で確認した。全箇所とも被熱は極めて弱く、1～2cmの厚さの中にまば



第26図 5号住居跡



## 1 縄文時代

らに薄く赤味を帯びる。範囲が不明瞭であるため、図示していない。

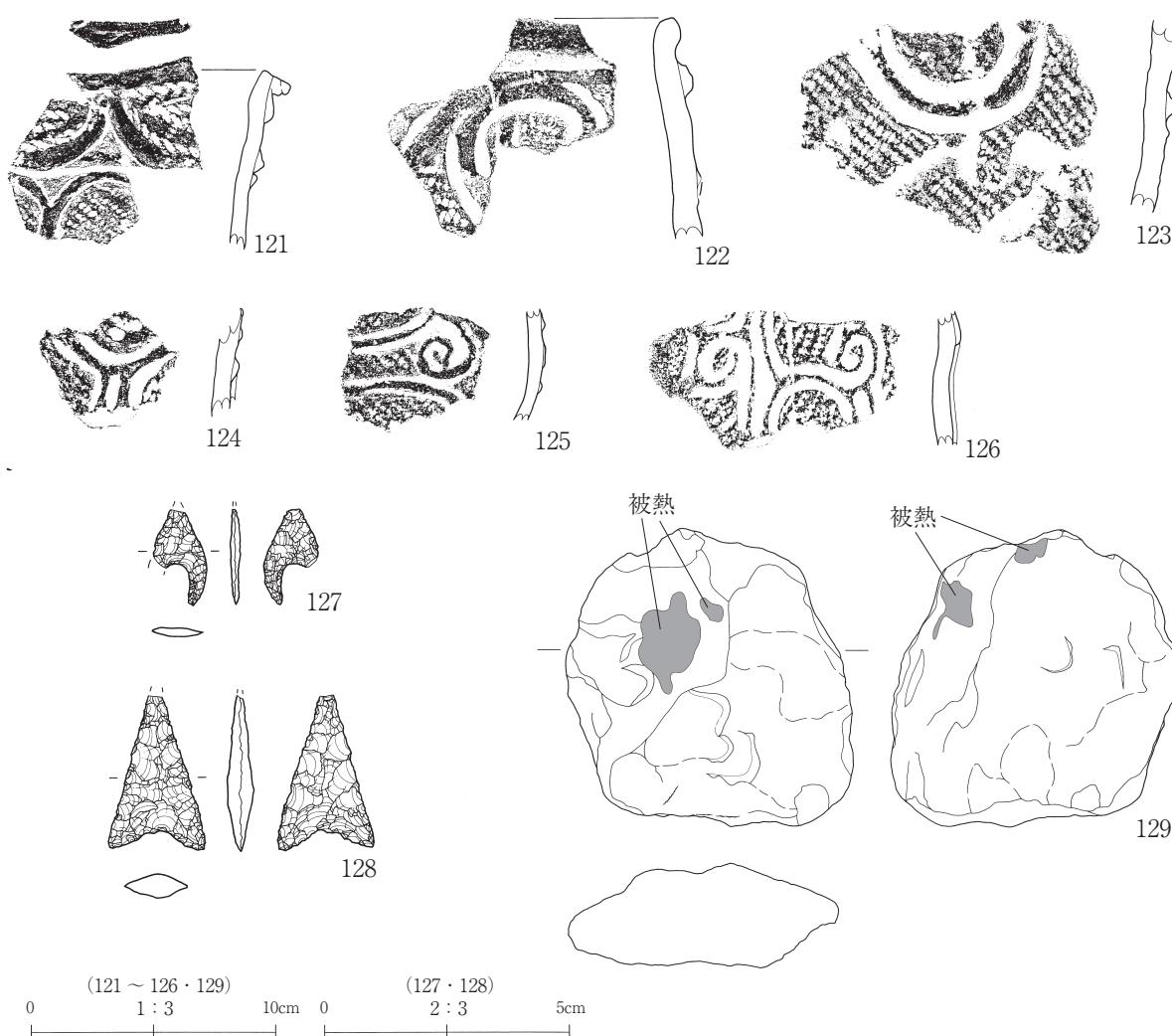
床下土坑を1基確認した。規模は77×70cmの円形を呈し、深さは床面から8cmである。底面には部分的に、わずかに被熱を受けた痕跡があり赤味を帯びている。埋土中から遺物は出土していない。

(澤目)

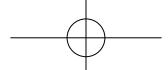
[出土遺物] 前述の通り本遺構は、4号鍛冶工房跡に大きく壊されているため遺物が少ない。

縄文土器は重量1633.7g分が出土しているが、いずれも小片である。6点図示した。121は深鉢の口縁部片で隆帯脇に縄文原体押圧文が施文される。大木8a式の古段階と判断した。122～126は大木8b式の深鉢口縁部片ないし胴部片である。122・123は口縁部から胴部にかけて隆帯による大きな渦巻文が付され、124～126は胴部に隆帯による小渦巻文やそれを連結する隆帯が見受けられる。大木8b式でも新しい時期に含まれると判断した。

石器は28点(石鏃、礫器、敲磨器類、石皿、Rフレイク、Uフレイク、フレイク。第3表)出土している。縄文土器同様、比較的少なく、また遺構に伴うと言えるか判断が難しいものもある。3点図示した。127・128は石鏃である。127は基部の片方が欠損するが、円基鏃である。円基鏃は本遺跡での出土は数が少ない。128は凹基鏃である。129は床下土坑脇に差し込まれていた礫で、不整な橢円形を呈し、偏平である。幅広の両面には被熱し、赤色に還元している箇所が多数見受けられた。用途は不明であるが、床下土坑が炉であれば、炉石であるかもしれない。



第27図 5号住居跡出土遺物



[時期] 遺構自体の形態も不明であり、炉も見つかっていないので、詳細は不明であるが、出土した土器から縄文時代中期後葉（大木8b式期）と判断した。  
(須原)

#### 6号住居跡（第28・29図、写真図版8・34）

[位置・検出状況] 調査区南側、IB9dグリッドに位置する。すでに平成27年度の試掘調査において石囲炉が確認されており、本調査前から、本遺構の存在は分かっていた。ただし、試掘調査時に本遺構と本遺構に重複する1号住居跡とについて、その状態や重複関係を調べるために考えられる試掘トレンチが設定され、両遺構ともほぼ中央部分が掘り抜かれている。そのため本遺構は床面と炉の一部とが消失している。また本遺構の北東端には巨木の木根が生えており、著しく本遺構を破壊している。これらの理由から、本遺構の残存状態は非常に悪く、炉とその周辺の床面、壁を検出したにすぎない。

[その他の遺構との重複] 1号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。

[平面形] 不正な橢円形である。

[規模] 長軸（175）cm・短軸（548）cm・深さ22cm

[埋土] 残存する範囲で2層確認した。ただし1層はII層類似土で遺構外から流入し、さらに遺構の南側遺構外へと流出している。従って本遺構に伴われる埋土は床面上にわずかに残存する2層のみである。

[床面・壁] 炉を検出したV層面を床面と判断した。概ね平坦で、南側へとわずかに傾斜する。

壁は全体の北側半分が残存するが、上部は消失し、床面近くの立ち上がりのみが残存する。やや大きく広がりながら立ち上がる。

[炉] 石囲炉である。床面のほぼ中央に位置する。平面形は橢円形で、62×44cmを測る。炉の焼成は弱く、床面下約5cmが被熱により還元しているが、淡い赤褐色を呈するにとどまる。また燃焼面は水平ではなく、やや歪である。炉石は15cm大の凝灰岩を利用するが、平面形は不揃いである。炉の掘り方は炉石よりもわずかに大きく掘り込み、炉石を設置、褐色シルトで埋めている。炉の南角は炉石がなく、また掘り方も確認できなかった。

[附属施設] 柱穴4個確認した。配列は不規則で、配列は不明である。

炉の南東側に84×62cm橢円形を呈する床下土坑1基が付される。深さは約10cmで、用途は不明である。

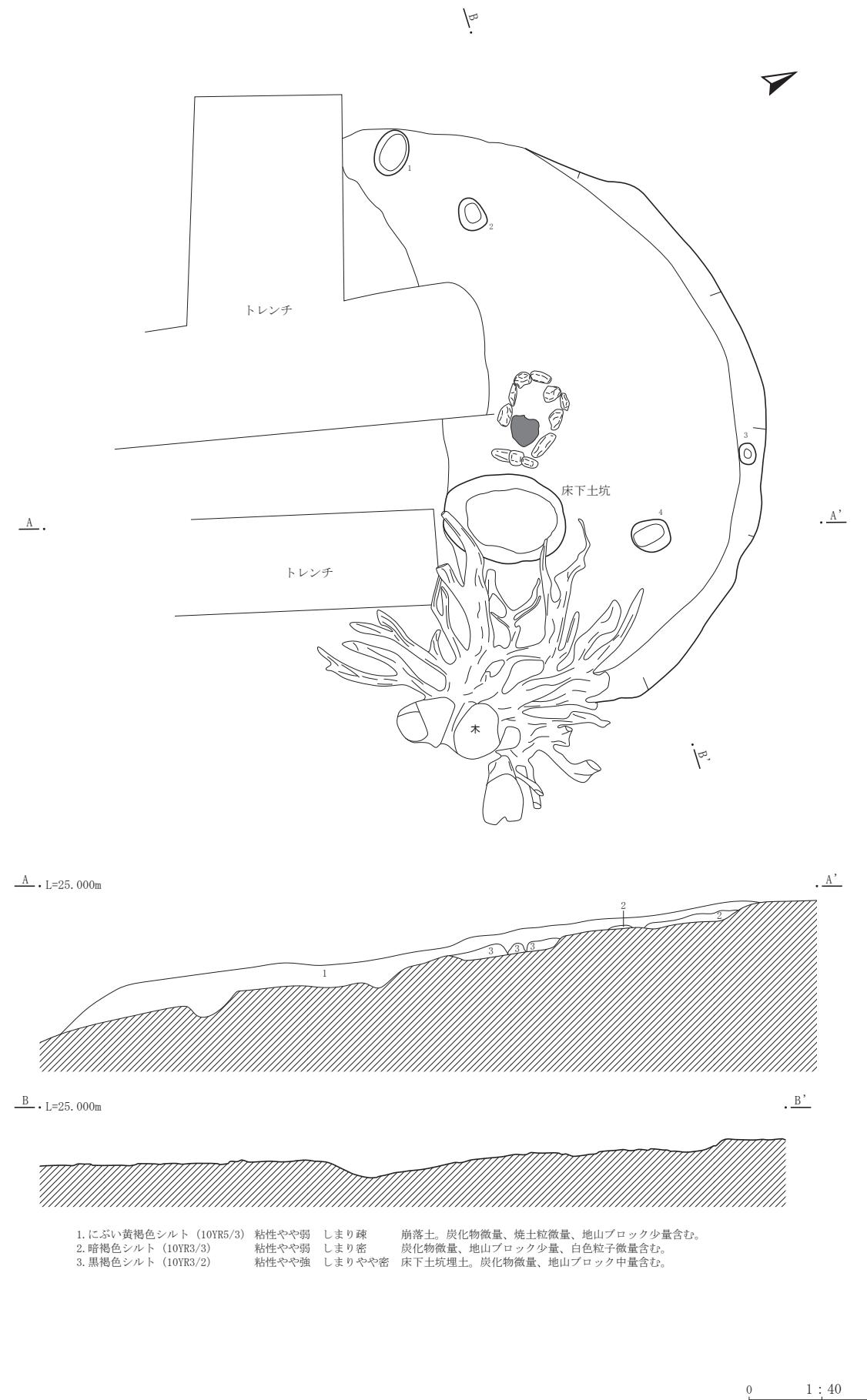
[出土遺物] 遺構の残りが悪いため、遺物も極端に少ない。縄文土器は重量539.1g分が出土している。文様の分かる3点を図示した。130～132は床面上から出土した深鉢の胴部片、底部片で、文様も確認できる。130・131は隆帯による小渦巻文が見受けられる。132はわずかだが胴部から縦に垂下する隆帯が残っている。いずれも大木8b式の新しい段階の範疇に含まれる。

図示していないが、石器は8点（石鏃、不定形石器、Uフレイク、フレイク。第3表）出土している。ただし、上述の通り、埋土はほとんどが流入土であり、これらの石器が遺構に伴うと言えるか定かではない。

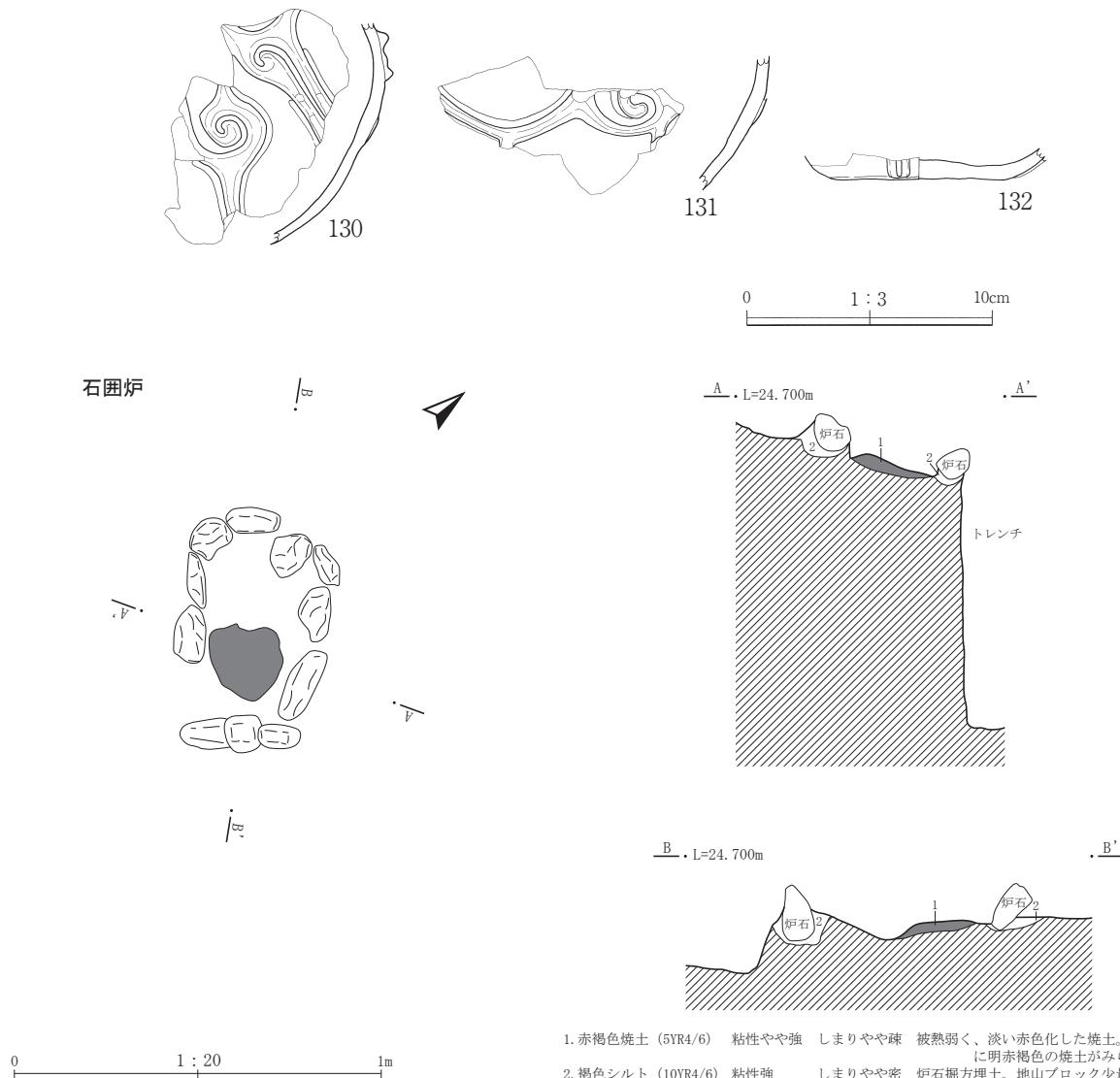
[時期] 検出した炉の状態と出土遺物の時期から、縄文時代中期後葉（大木8b式期）と判断する。

(須原)

1 繩文時代



第28図 6号住居跡1



第29図 6号住居跡2・出土遺物

## 7号住居跡 (第30図、写真図版9・34・43)

[位置・検出] 調査区西端南斜面上部、IA 6e・IA 7e グリッドに位置する。検出面はV層である。斜面下方の南側は削平を受け消滅している。

[その他遺構との重複] なし。

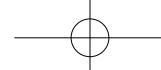
[平面形] 方形である。 [規模] 長軸 282cm・短軸 (140cm)・深さ 36cm

[床面] 木痕による攪乱を受けているが全体的にはほぼ平坦でしまっている。

[壁] 緩く内湾しながら立ち上がり上部でやや外反する。

[埋土] 埋土は4層からなる。主に炭化物、黄褐色シルトのブロックを含む褐色シルトで占められている。堆積状況から、自然堆積の様相を呈している。

[付属施設] 炉は検出されていない。時期から判断して、削平された斜面下方側にあった可能性もある。床面から柱穴が12個検出されている。平面形が円形のものは6個である。規模が最も大きい南西側のものは径 36cm・深さ 5cm で、それ以外は径 12 ~ 24cm、深さが 8 ~ 21cm である。平面形が楕円



### 1 縄文時代

形のものは5個である。規模は長径25~36cm・短径14~26cm・深さ14~24cmである。柱穴の埋土は、炭化物を含む褐色シルトが主体である。形態、位置から柱穴配置を考えたが解らなかった。北壁際に壁溝が検出されている。規模は長さ87cm・幅20cm・深さ16cmである。また西壁からやや中央部寄りにある溝は規模が長さ78cm・幅19cm・深さ9cmである。壁溝・溝の埋土は炭化物を含む褐色シルトが主体をなしている。

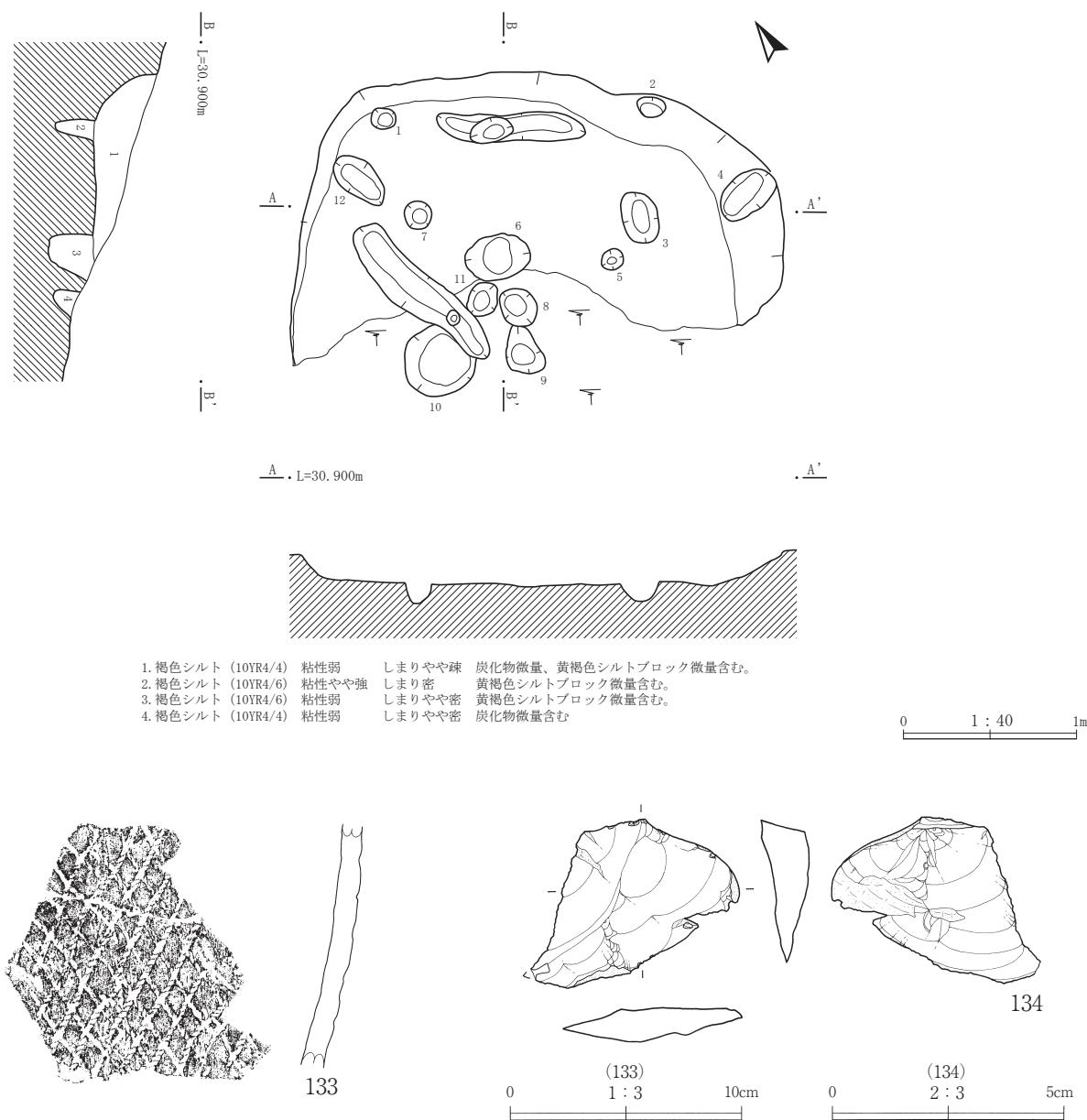
(光井)

[出土遺物] 遺構の残りが悪く、出土遺物は少ない。縄文土器が重量867.7g分出土している。133は深鉢の胴部片で単軸絡条体5類が施文される。大木5a式の範疇と判断した。

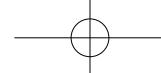
石器はフレイク10点(第3表)のみ出土している。1点図示した。134はフレイクで、单一剥離面を打面とする。打面の脇に自然面が残っている。

[時期] 出土した土器の年代から縄文時代前期後葉(大木5a式期)と判断した。

(須原)



第30図 7号住居跡・出土遺物



## VI 検出遺構・出土遺物

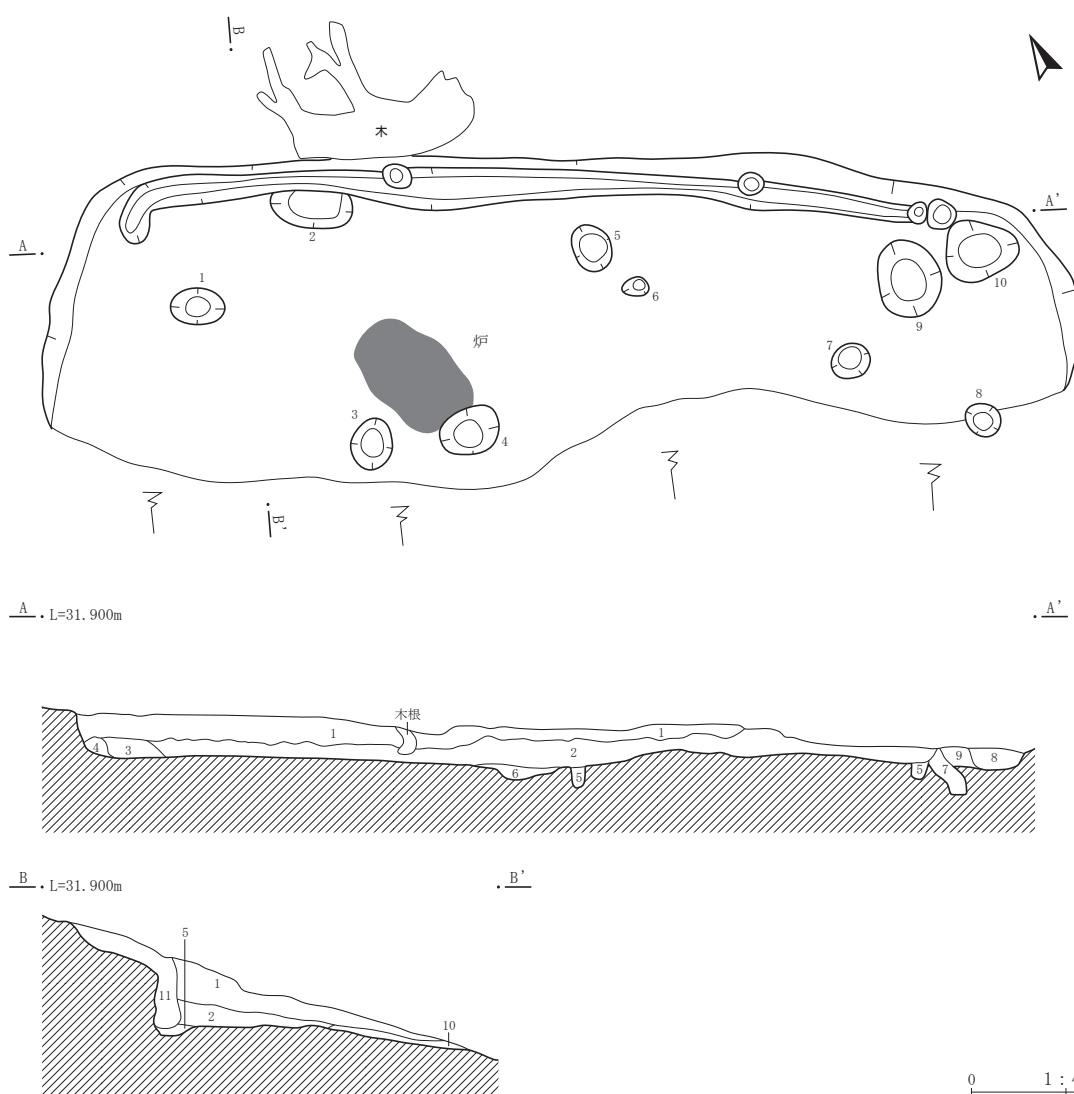
### 8号住居跡（第31図、写真図版10）

[位置・検出状況] 調査区北側、IB8f・IA9fグリッドに位置する。本遺構は調査区北西部の平坦面端部から斜面にかけて立地するが、本来は南西方向にもっとのびていたものと推測する。それが、後世に立地する斜面地が崩れ、それに伴い本遺構も大半が消失し、北端の一部のみが残存したものと考える。精査時は遺物もわずかなので、どのような遺構か判断に悩んだが、床面上に地床炉と推測する焼土の広がりを確認し、また隣接する2号住居跡の時期を考慮し、本遺構を縄文時代の竪穴住居跡と推測した。

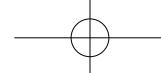
[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 遺構の北壁周辺のみ検出したに過ぎないが、隅丸の長方形を呈する所謂大型住居と推測する。

[規模] 長軸（175）cm・短軸（548）cm・深さ22cm



第31図 8号住居跡



## 1 繩文時代

[埋土] 残存する範囲で 11 層確認した。埋土上位は灰黄喝色シルト（1 層）、埋土下位はにぶい黄褐色シルト（2 層）を主体とし、どちらも地山（V 層）に類似しており、周辺地形の崩落により、地山土ごと埋没していったことが推測できる。

[床面・壁] 炉を検出した V 層面を床面と判断した。概ね平坦であるが、東側はやや歪である。

[炉] 住居床面の中央からやや西寄りで地床炉を 1 箇所確認した。炉の軸方向は住居の長軸よりややずれている。平面形は歪な不整形で 62 × 44cm を測る。炉の焼成は弱く、床面下約 5 cm が被熱により還元しているが、赤褐色を呈するにとどまる。

[附属施設] 柱穴 10 個確認した。配列は不規則で、配列は不明である。

壁溝は北壁際で確認した。

[出土遺物] 繩文土器が重量 30.9g 分出土しているが、小片のみで図示していない。また石器 3 点（石鏃、不定形石器、フレイク。第 3 表）が出土しているが図示していない。

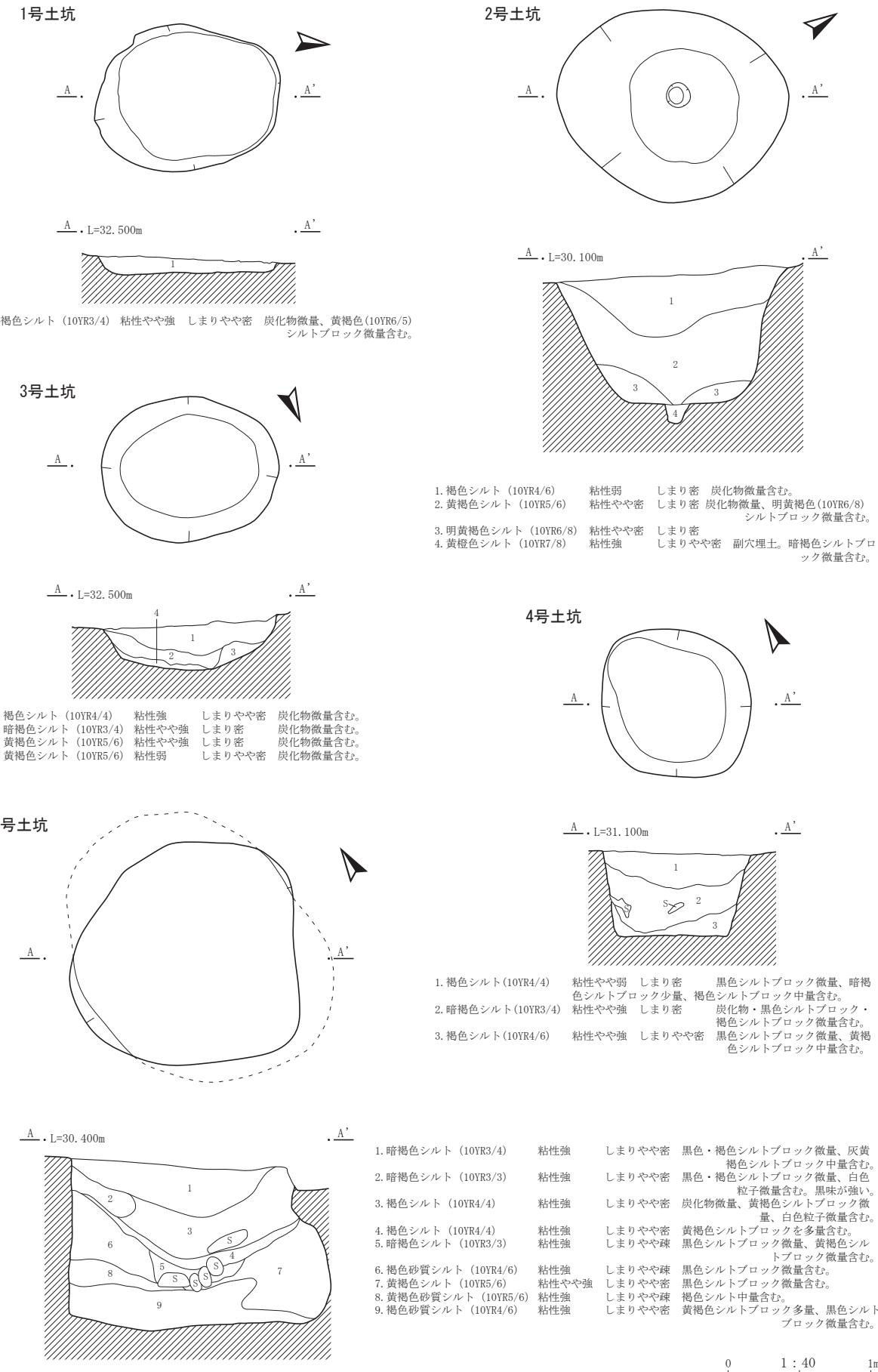
[時期] 出土遺物が極端に少なく、時期判断の根拠がないが、遺構の形態と隣接する 2 号住居跡の時期から判断して繩文時代前期後葉（大木 5a 式期）頃と判断した。(須原)

## (2) 土坑

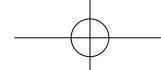
本遺構から検出した 34 基の土坑のうち、出土遺物や埋土の堆積様相から、1 ~ 16 号土坑を繩文時代に帰属するものと判断した。（第 32 ~ 34 図、第 4 表、写真図版 11 ~ 14）。ただしどの遺構も出土遺物は少なく、またその遺物自体も流れ込みによる混入の可能性があるものもあるので、詳細な時期は不明である。各土坑の属性については第 4 表に記した通りである。ここでは検出した土坑を集中する範囲ごとにそれらの特徴について記す。

第 4 表 土坑（繩文時代）一覧

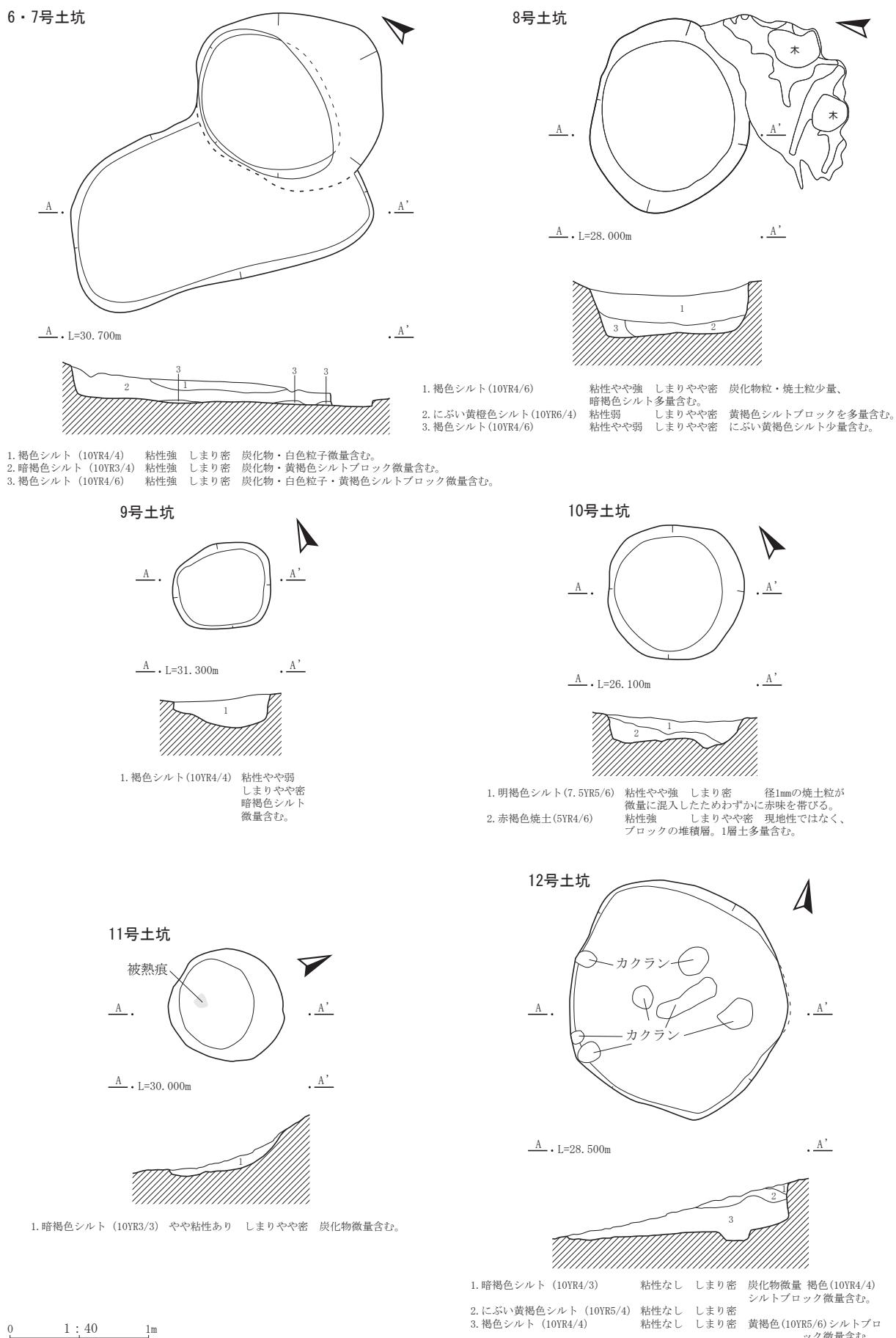
遺構名	位置 (グリッド)	平面形	長さ×幅(cm)	深さ(cm)	重複関係	底面・断面	埋土様相	性格
1号土坑	II A7h	楕円形	132×103	13	無	底面ほぼ平坦。 壁は内湾しながら立ち上がる。	1層である。 暗褐色シルト主体。	不明
2号土坑	II A7j	円形	161×134	95	無	底面は平坦。 壁は大きく広がりながら立ち上がる。	3層である。 褐～黄褐色シルト主体。	貯蔵穴
3号土坑	II B8a	楕円形	124×103	32	無	底面は皿状に浅く窪む。 壁は内湾しながら立ち上がる。	4層である。 褐～黄褐色シルト主体。	不明
4号土坑	II A3h	円形	105×103	57	無	底面ほぼ平坦。 壁は直立気味に立ち上がる。	3層である。 褐色シルト主体。	貯蔵穴
5号土坑	II A2i～ II A3i	不整な円形	160×157	117	無	底面ほぼ平坦。 壁はオーバーハング～直立気味。	9層である。 褐～暗褐色シルト主体。	貯蔵穴
6号土坑	II A2h～ II A2i	不整な円形	136×126	80～90	7号土坑 (古)	底面ほぼ平坦で、中央わずかにくぼむ。 壁はオーバーハング～直立気味。	不明。 褐色シルト主体か。	貯蔵穴
7号土坑	II A2h～ II A2i	楕円形	218×122	20～35	6号土坑 (新)	底面はほぼ平坦。 壁は外へと広がりながら直立する。	3層である。 褐色シルト主体。	不明
8号土坑	II A1j	楕円形	141×114	30	無	底面はほぼ平坦。 壁は外へと広がりながら直立する。	3層である。 褐色シルト主体。	不明
9号土坑	I A10g	隅丸方形	71×62	22	無	底面は皿状に浅くくぼむ。 壁は直立気味である。	1層である。 褐色シルト主体。	不明
10号土坑	I B8b～ I B9b	ほぼ円形	95×97	18	無	底面は凹凸あり。 壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。	2層である。 明褐色シルト主体で、埋土下位に焼土塊が堆積。	不明
11号土坑	II B5c～ II B5d	ほぼ円形	90×81	15	無	底面は凹凸あり（木痕？）。 壁は緩く内湾気味に立ち上がる。	1層である。 暗褐色シルト主体で焼土粒・炭化物が混じる。	不明
12号土坑	II A6f	ほぼ円形	168×163	36	無	底面はほぼ平坦。 壁は直立気味でわずかに外反する。	2層である。 褐色シルトを主体。	不明
13号土坑	II B6g	不整な円形	59×54	8	無	底面はほぼ平坦。 壁はオーバーハングする。	2層である。 暗褐色シルトを主体。	不明
14号土坑	II B4g	ほぼ円形	168×156	22	無	底面はほぼ平坦。 壁はわずかに外傾する。	4層である。 黒褐色シルト主体で、埋土上位に炭化物や貝類が混じる（1号の1層近）。	貯蔵穴
15号土坑	II B2h	ほぼ円形	開口165×(120) 底面175×(120)	21	無	底面は平坦。 壁は大きくオーバーハング。	2層である。暗褐～黒色シルト主体。	貯蔵穴
16号土坑	II B3h	楕円形	192×120	38	無	底面はほぼ平坦。 壁は大きく広がりながら立ち上がる。	不明。暗褐色シルト主体か。	貯蔵穴？



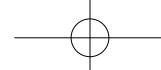
第32図 土坑（縄文時代）1



## 1 繩文時代



第33図 土坑（縄文時代）2

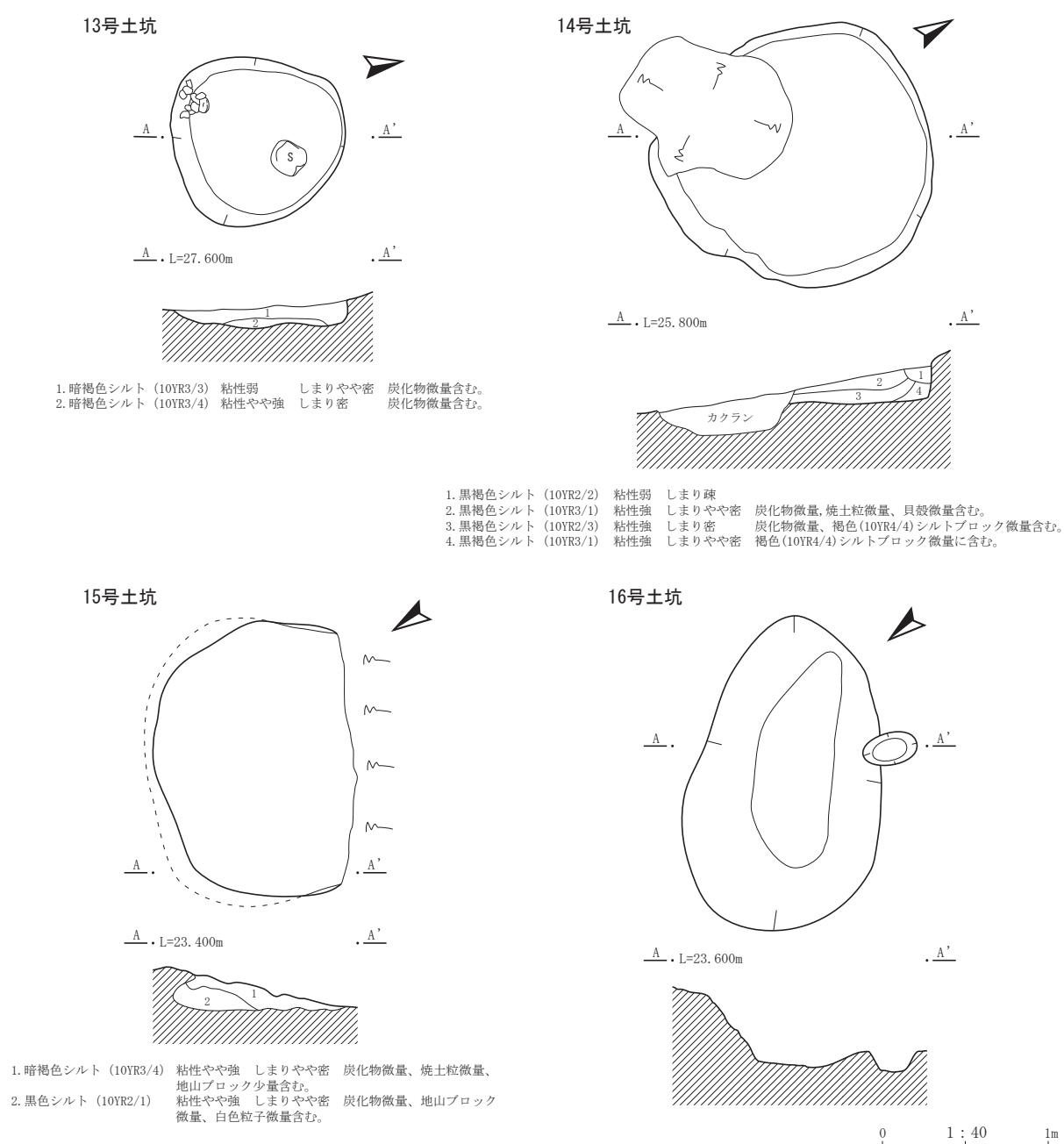


## VI 検出遺構・出土遺物

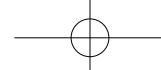
土坑群は、調査区北東側（II A 7i グリッド周辺、1～3号土坑）、調査区北側から中央の斜面（II A 2g～I B 8b グリッド周辺、4～11号）、また調査区南東側（II B4g グリッド周辺、12～16号）の3箇所に集中する。特に調査区北側から中央の斜面は4～8号住居跡が分布する場所もあり、4～11号土坑はこれらの遺構群との関連が高い。平面形は円形、橢円形である。9号土坑のみは隅丸方形を呈するが、特に他の土坑と差異があるわけでは無いと推測する。

規模は概ね 100～150cm 前後の範囲に収まり、最も大きい7号土坑が 218×122cm、最も小さい13号土坑は 59×54cm である。深さは 8～90cm の範囲であるが、遺構上面が消失し、実際の深さが分からぬ土坑も多い。

土坑の性格は形態から類推するしかなく、判然としない土坑が多い。ただし 2・4～6・14・15号土坑が遺構の断面形から貯蔵穴と判断した。いずれも壁が直立気味かオーバーハンプして立ち上がる、

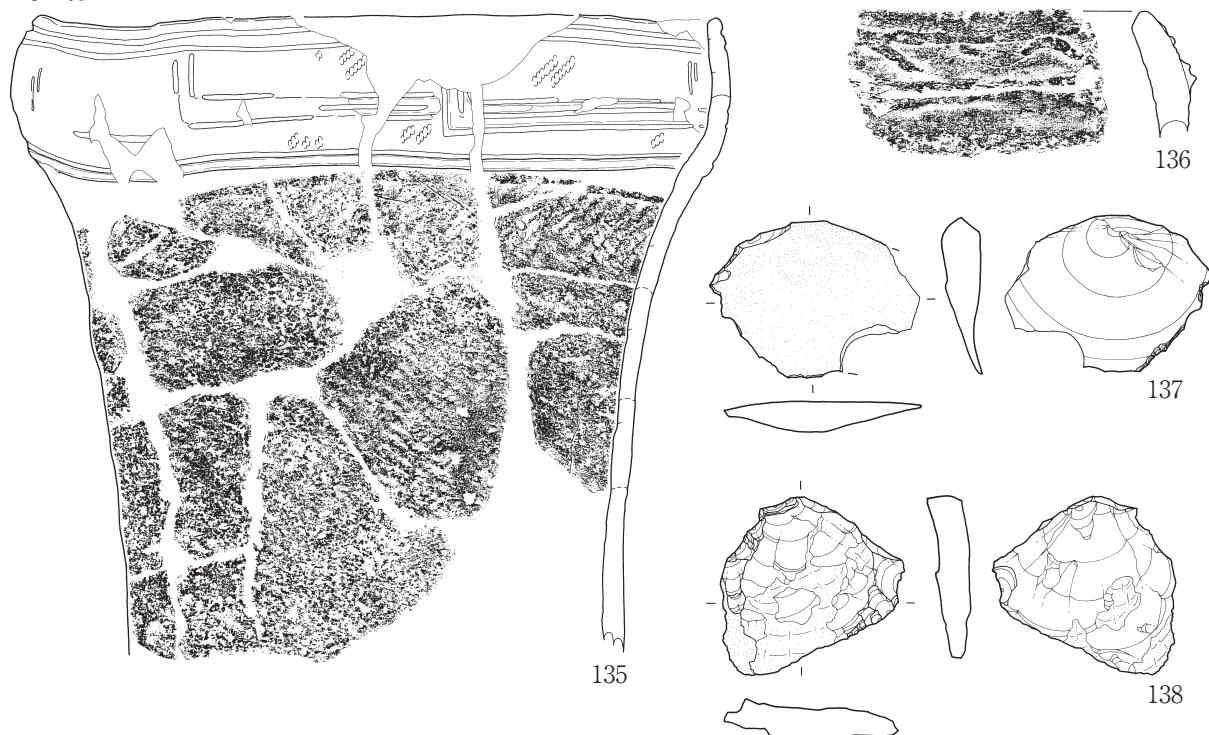


第34図 土坑（縄文時代）3

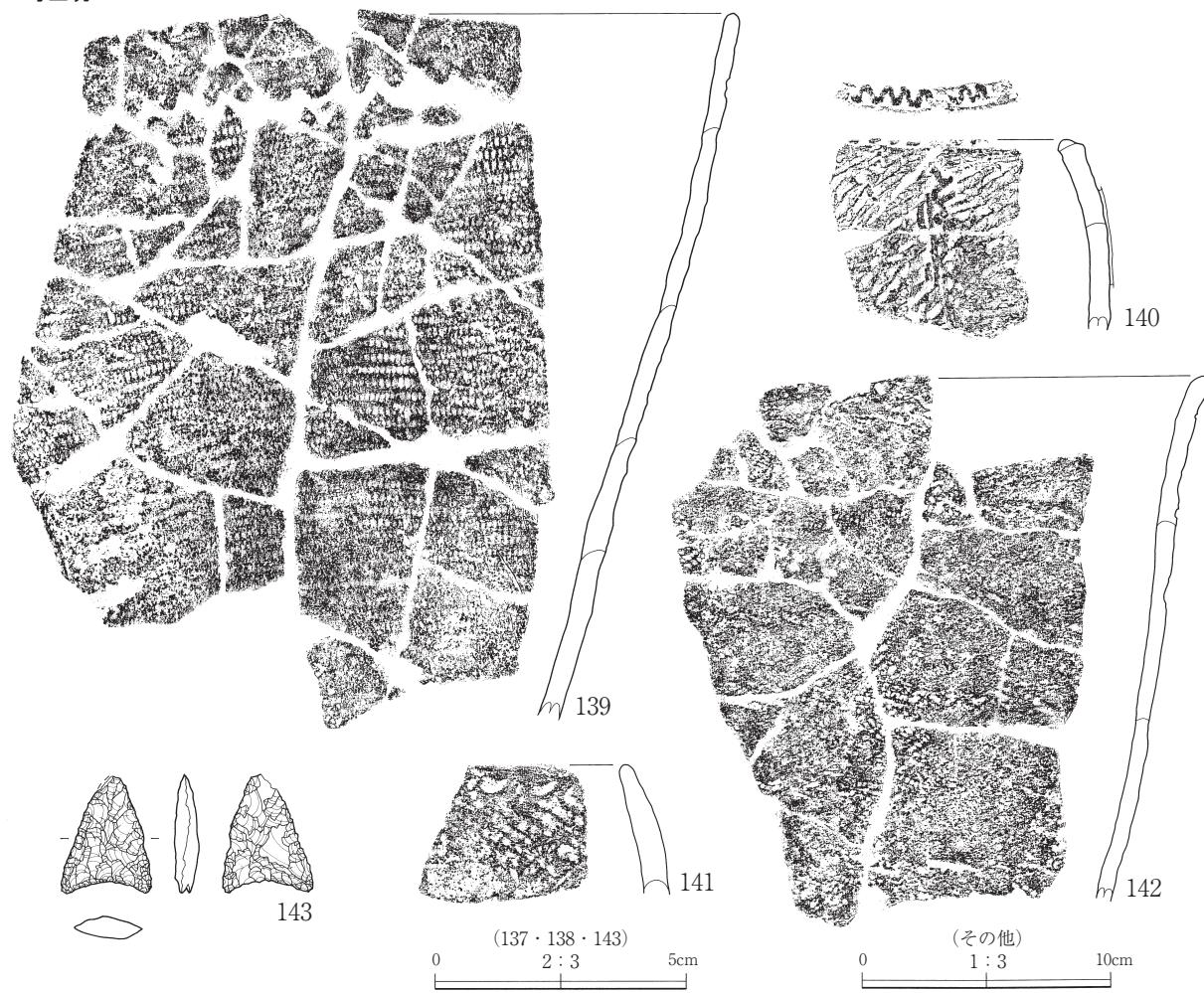


1 繩文時代

4号土坑



13号土坑



第35図 土坑出土遺物（縄文時代）1

所謂フ拉斯コ状土坑である。4～6号土坑は周辺に縄文時代の竪穴住居跡が位置しており、これらに伴われる貯蔵穴の可能性が高い。その他の貯蔵穴は周辺に竪穴住居跡が位置せず、単独の貯蔵施設と言える。他に16号土坑は斜面の崩落により、遺構のほとんどが消失しているが、残存する範囲の断面形から貯蔵穴の可能性が高いと考えている。

出土遺物は8・10・12号土坑を除き、全ての土坑で縄文土器が出土している（第35・36図・第3表・写真図版34・35・43）。なかには大型破片も出土しているが、概ね小片で、また出土状況に特徴がなく、遺構に伴われるのか、流れ込みかは定かではない。石器は2～4、6、7、13、15、16号土坑で出土している（第3表）。

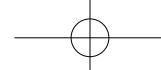
第35・36図に15点図示した。135～138は4号土坑から出土した。135は大木8a式の深鉢で、キャリパー形である。口縁部は摩滅が激しくわずかにしか文様が確認できないが、薄い隆帯により、クランク状文が施文されたと考えられる。隆帯はほとんど剥離しており、その痕跡をとどめている。胴部は地文のみ。136も大木8a式の深鉢口縁部片で、隆帯による波状文が横位に巡る。137・138はフレイクである。これらの遺物から4号土坑は大木8a式期と推定する。139～143は13号土坑から出土した。139～142は大木5a式の深鉢で139・142は外へと開く形態、140・141は口縁部が内湾する形態である。口唇部や口縁部に沈線や隆帯による鋸歯状文が横位に巡る。143は石鎌で形態がやや左右非対称である。144・145は7号土坑から出土している。144は石鎌で、平基鎌である。145は不定形石器で、やや厚みがあり、縁辺の両側から刃部を作出している。146は14号土坑から出土した。深鉢の胴部片で、大型の土器であることが想定される。地文（斜行縄文）のみであり、大きさと文様の特徴から大木8a式の胴部片と推測する。147・148は15号土坑から出土している。147は波状口縁の波頂部周辺の破片で口唇部に刻みが連続する。口縁部には隆帯が巡る。大木5a式と推測する。148は胴部片で、胎土中に纖維が混入しており、前期前葉頃と判断した。したがって両者は時期が異なっており、15号土坑に流れ込んだものの可能性がある。149は深鉢の口縁部片で口唇部直下に2条の隆帯が横位に巡っている。隆帯断面の特徴から大木8a式の可能性が高い。

### （3）遺構外出土遺物（第38～48図、写真図版35～39・43～46）

縄文時代の遺構外からも遺物が出土しており、特に調査区南端ⅠB5gからⅡB4jグリッドまでの約320m<sup>2</sup>の範囲（以下、「包含層」第37図。）のⅢ、Ⅳ層で遺物が出土している。

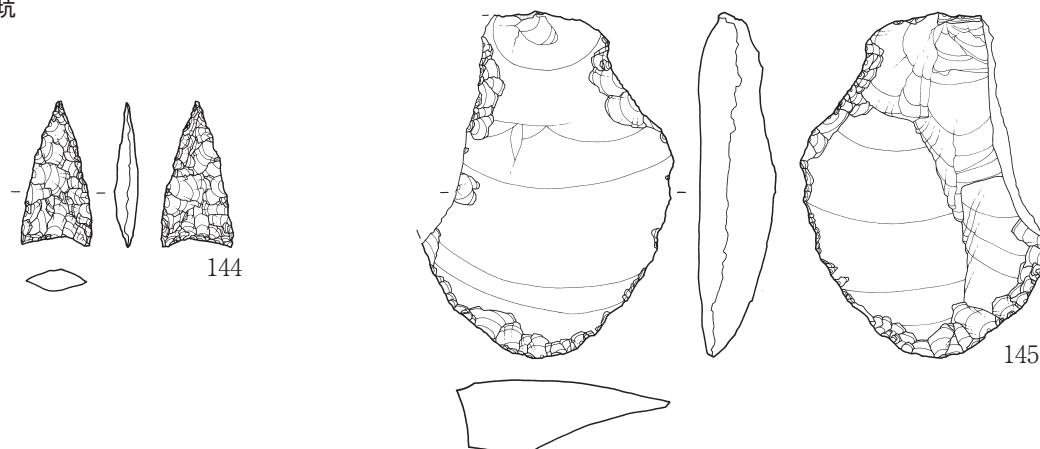
包含層は1号住居跡や15、16号土坑より南側に位置し、調査区内で最も低い、標高21m以下の緩斜面地である。この範囲に約10～20cmⅢ、Ⅳ層が堆積する。Ⅲ層は黒褐色を呈し、縄文時代よりも少し古代の遺構埋土に類似する。周辺の斜面地は傾斜に沿って、堆積土が動いており、またそのため周辺の縄文時代の遺構は南側を消失している。したがってⅢ層は縄文時代以降に動いて堆積した可能性が高い。したがってⅢ層中の遺物は現地性を留めておらず、土砂の堆積によって流入した可能性が高いと推測する。そのことを裏付けるかのように、包含層中からは周辺の遺構とは異なる時期の縄文土器が多く、またそのほとんどが破片であり、形態が復元できたものは少なかった。

包含層出土を中心に114点の縄文土器を図示した（第38～46図）。150～175は前期前葉に比定される土器である。150～159は胎土に纖維が多量に混入する。口唇部への刻み（150）結節回転縄文（151）、非結束羽状縄文（152）など文様にいくつか特徴が見いだせるが、土器型式判断のメルクマールになる文様は見いだせない。前期初頭から前葉の範疇か。161～175は胎土に纖維が混入するが、微量である。横位の結節回転縄文が多段で施文される土器が多い（166など）。大木2a～2b式の範疇か。

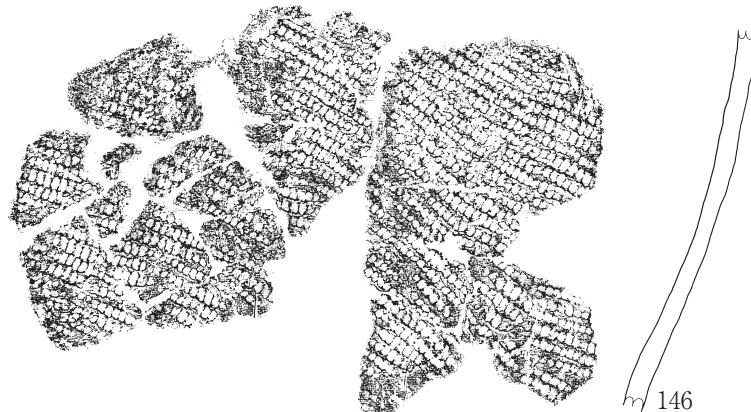


1 繩文時代

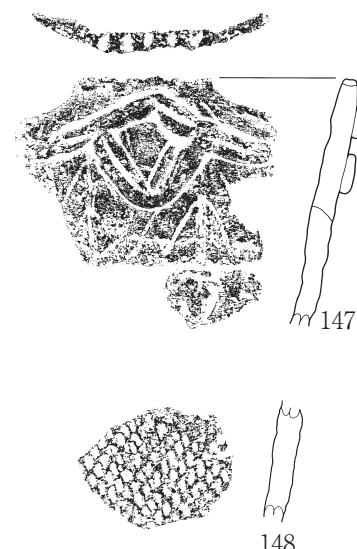
7号土坑



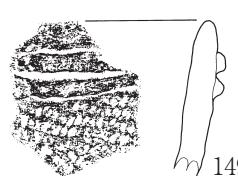
14号土坑



15号土坑



16号土坑



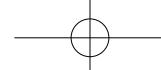
0 (144・145)  
2 : 3 5cm

0 (146～149)  
1 : 3 10cm

第36図 土坑出土遺物（縄文時代）2

176～195は胎土の纖維混入が微量であるが、詳細な時期は不明。平縁（176～178）のほかに、突起が付くもの（179）や口唇部に押圧を巡り、波状口縁を形成するもの（180～182）などが認められるので、前期後葉頃の可能性が高い。196～238は大木5a式に比定される土器である。196は形態が分かる数少ない土器で、胴部は球状、口縁部は大きく外反する。胴部には格子状の貼付隆帯が施文される。197～203も貼付隆帯によって文様が描かれている。204～212は貼付隆帯の幅が広く、その隆帯上に刺突や沈線が施される。また口唇部には鋸歯状（205）や円文（207・209・210）の隆帯が付されるものが見受けられる。217～238も大木5式の範疇と考えているが、地文となる縄文のみが施文される一群である。口唇部には台状に張り出すもの（217～219など）や、波状（223など）、鋸歯状（229など）の隆帯が付されるものが見受けられる。232～236は前期後葉に比定される胴部片で、該期の特徴である単軸絡条体第5類が施文される。239～246は前期の底部片である。

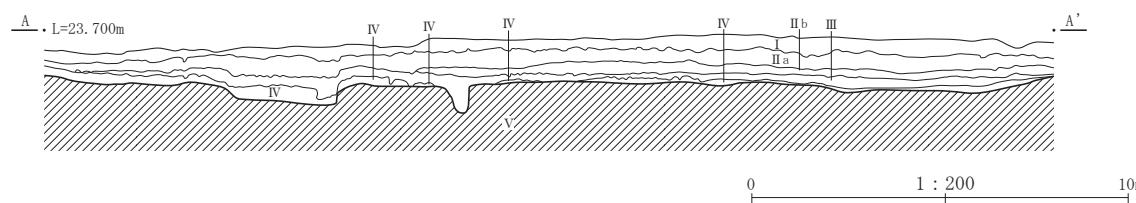
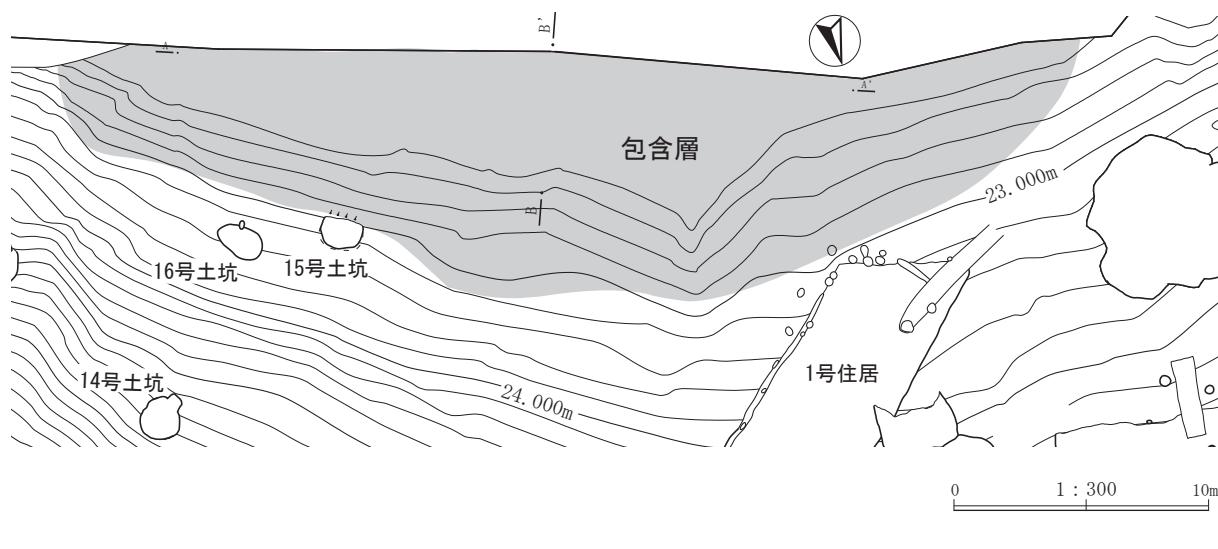
わずかではあるが、中期の土器も出土しており、17点図示した。247～249は大木8a式に比定され、



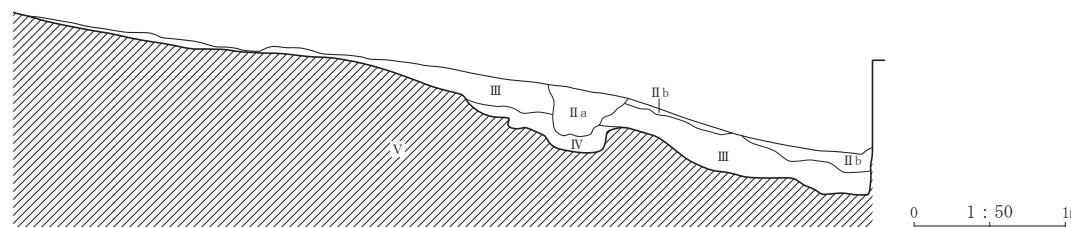
## VI 検出遺構・出土遺物

なかでも新しい段階の範疇と考える。247は粗製か。248はキャリパー形の深鉢で、口縁部には沈線による波状文が横位に巡る。250～256は大木8b式に比定される。小片が多く、詳細は不明であるが、文様から大木8b式の新しい段階の範疇に含まれるものと推定する。259も大木8b式か。その他は地文のみの粗製で詳細な時期は不明である。

包含層及び、遺構外からも石器や石製品が出土している。内訳については第3表に記した。58点図示した。264～276は石鏸である。平基鏸が多く、特に基部がわずかに窪む264のような形態の石鏸が多い。一方、268のような凹基鏸は少ない。274は有茎鏸だが茎部が欠損している。275は石鏸失敗品と判断した。277～280は尖頭器である。277幅広いで先端が丸く作出しているが、厚みや断面形から尖頭器の範疇に含まれると判断した。281～284は石錐である。いずれも素材となるフレイクの

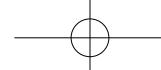


B . L=23.700m . B'

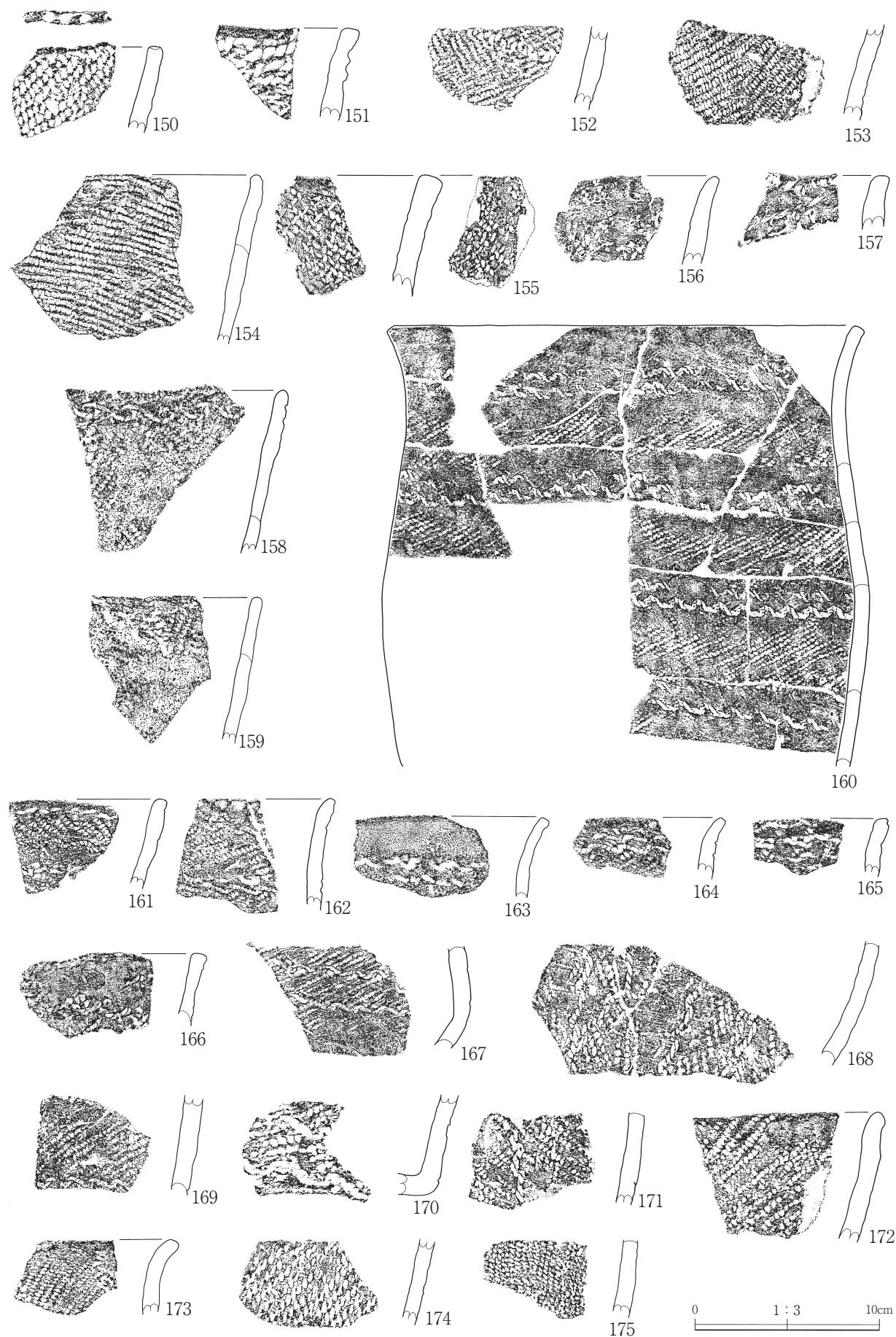


I. 灰黄褐色シルト (10YR4/2)	粘性弱	しまりやや疎	粒子やや粗	表土。層下位に黄褐色シルトが約5cm層状に堆積（水田の床土？）
IIa. 黒褐色シルト (10YR3/1)	粘性強	しまりやや疎	粒子やや粗	耕作土（I層より古い）。炭化物・焼土粒微量含む。
IIb. 暗褐色シルト (10YR3/4)	粘性やや強	しまりやや疎	粒子やや粗	耕作土。土質はIIa層土に類似するが、IIa層より明るめ。
III. 黒色シルト (10YR2/1)	粘性やや強	しまりやや疎	粒子やや粗	炭化物微量、礫少量含む。古代の遺構埋土に類似。ただしこの層から出土する遺物はほとんど縄文時代。
IV. 暗褐色シルト (10YR3/3)	粘性やや強	しまりやや疎	粒子細	炭化物微量含む。縄文時代の遺構埋土に類似するが、IV層中にはほとんど遺物の混入が見受けられない。
V. 明黄褐色砂質シルト (10YR6/8)	粘性弱	しまりやや疎	粒子粗	地山。層上面で遺構を検出した。径10~50cmの角礫が少量混入。

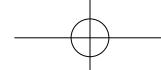
第37図 包含層



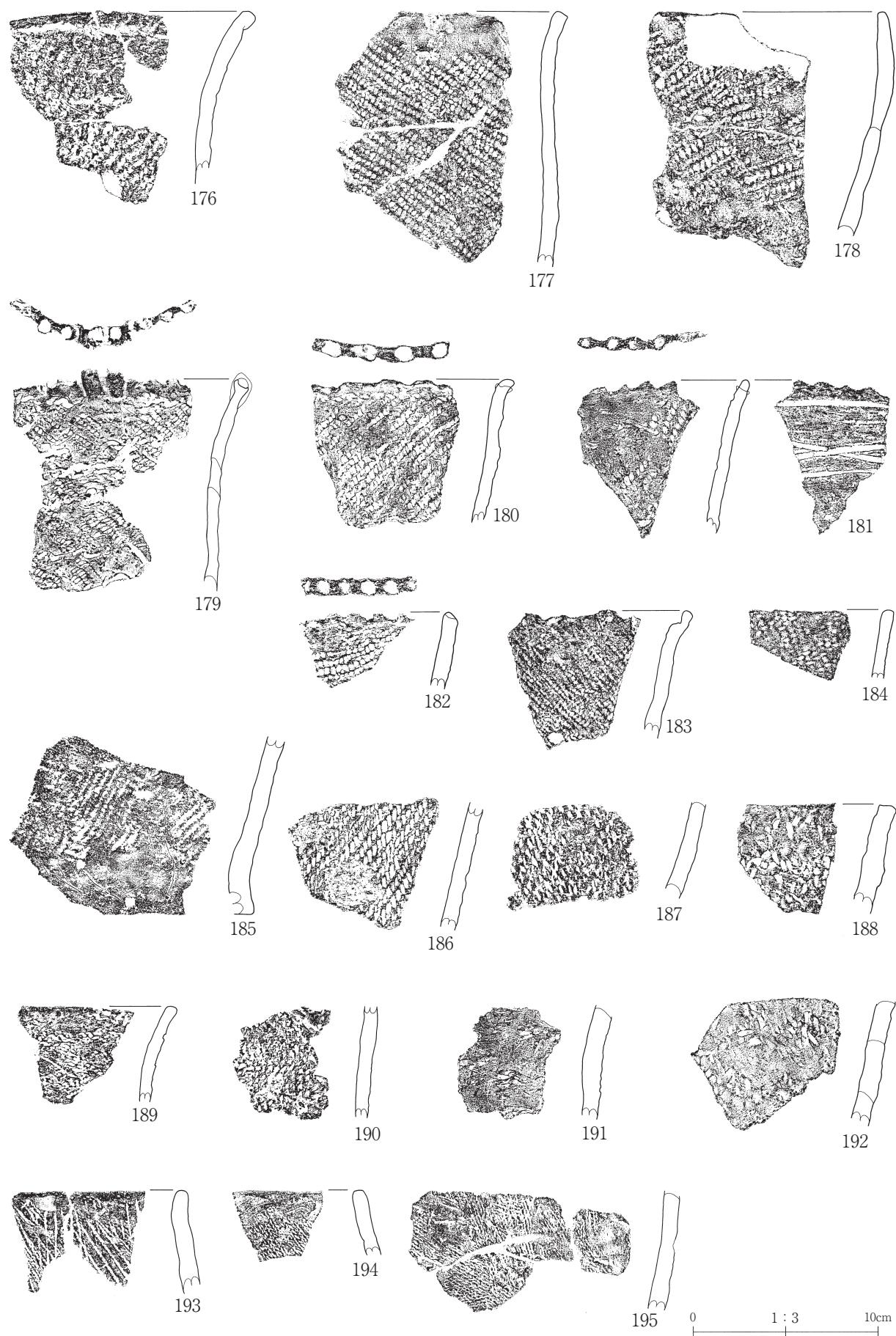
1 繩文時代



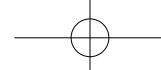
第38図 遺構外出土遺物（縄文時代）1



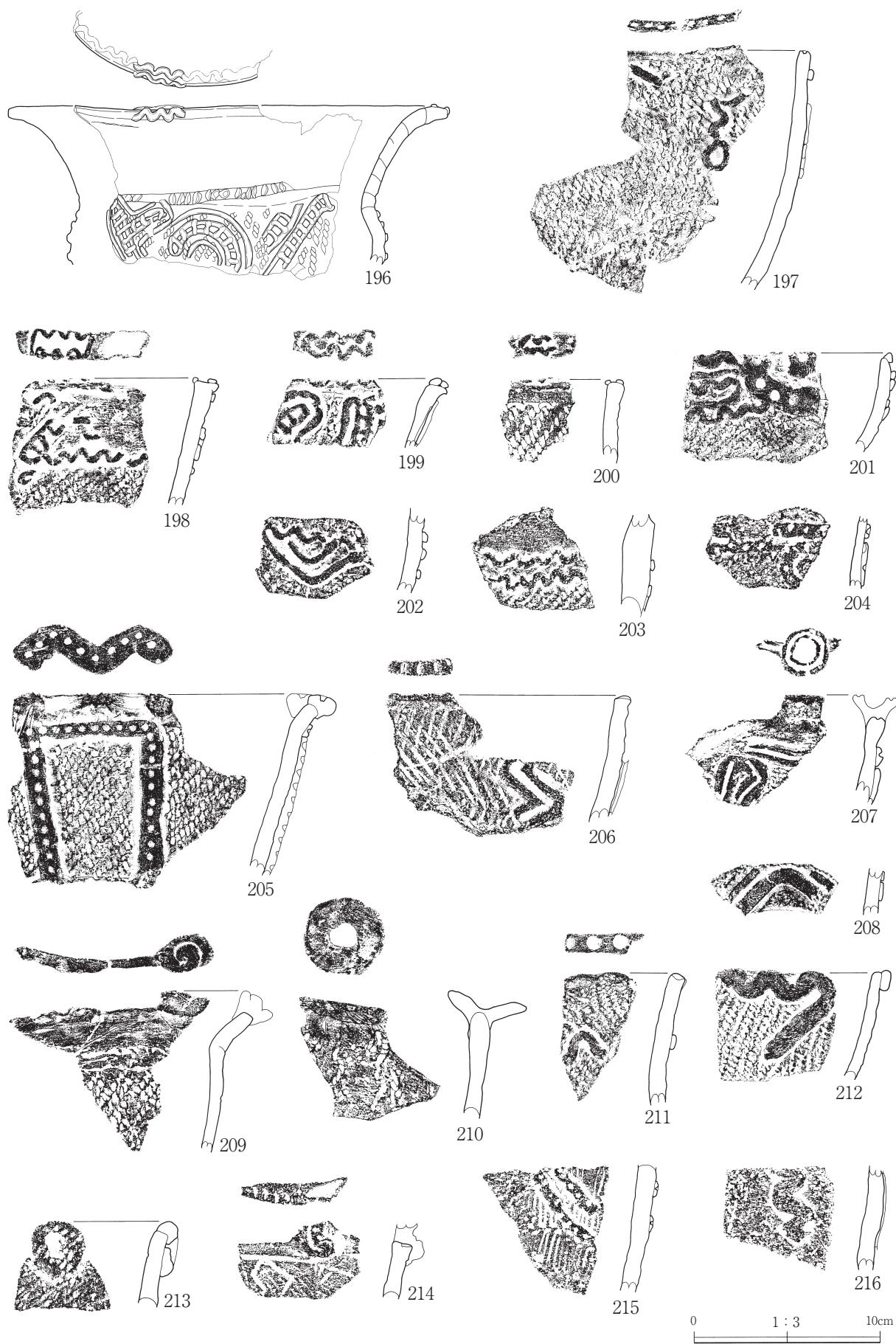
VI 検出遺構・出土遺物



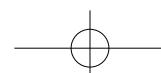
第39図 遺構外出土遺物（縄文時代）2

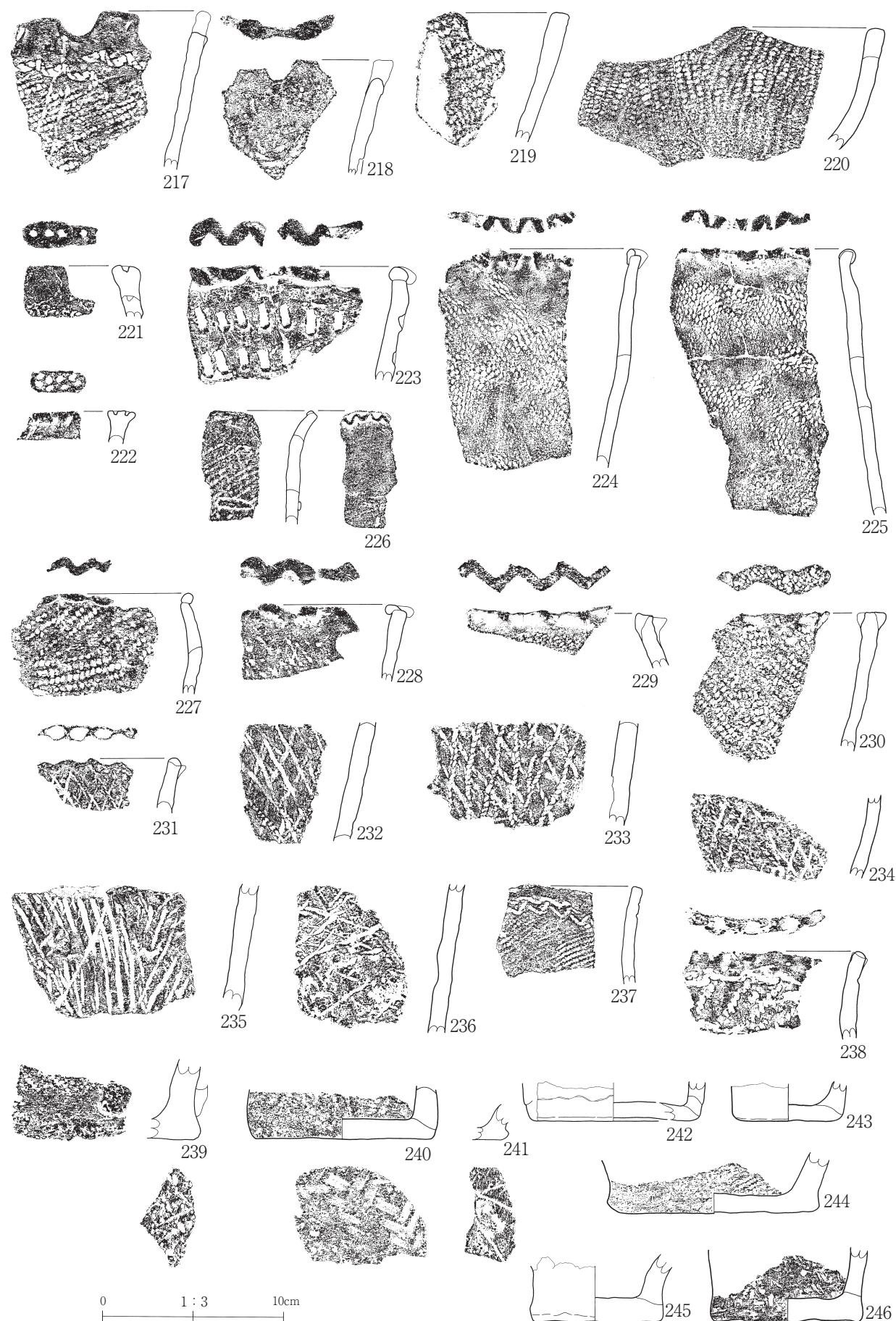


1 繩文時代

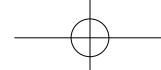


第40図 遺構外出土遺物（縄文時代）3

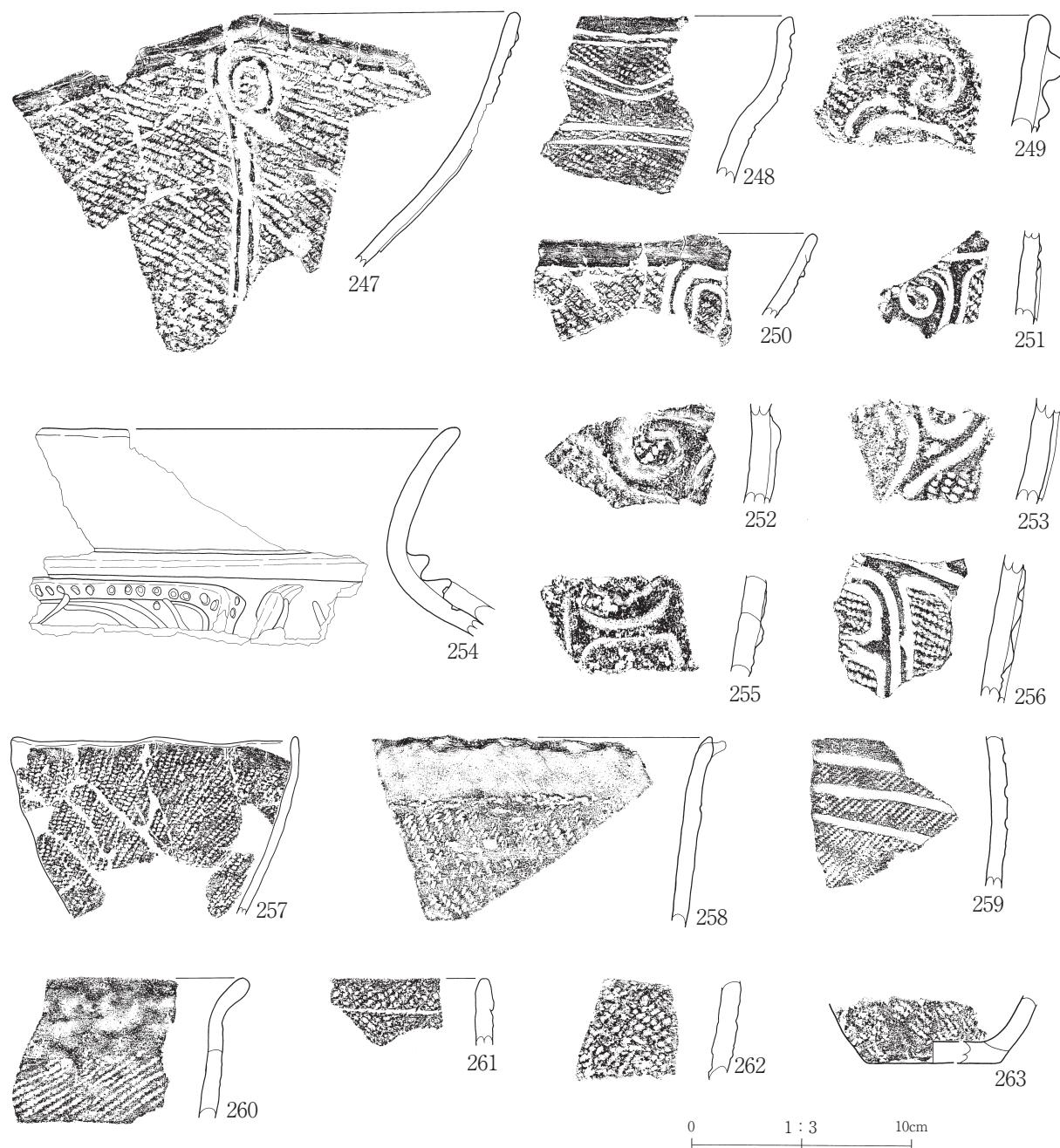




第41図 遺構外出土遺物（縄文時代）4

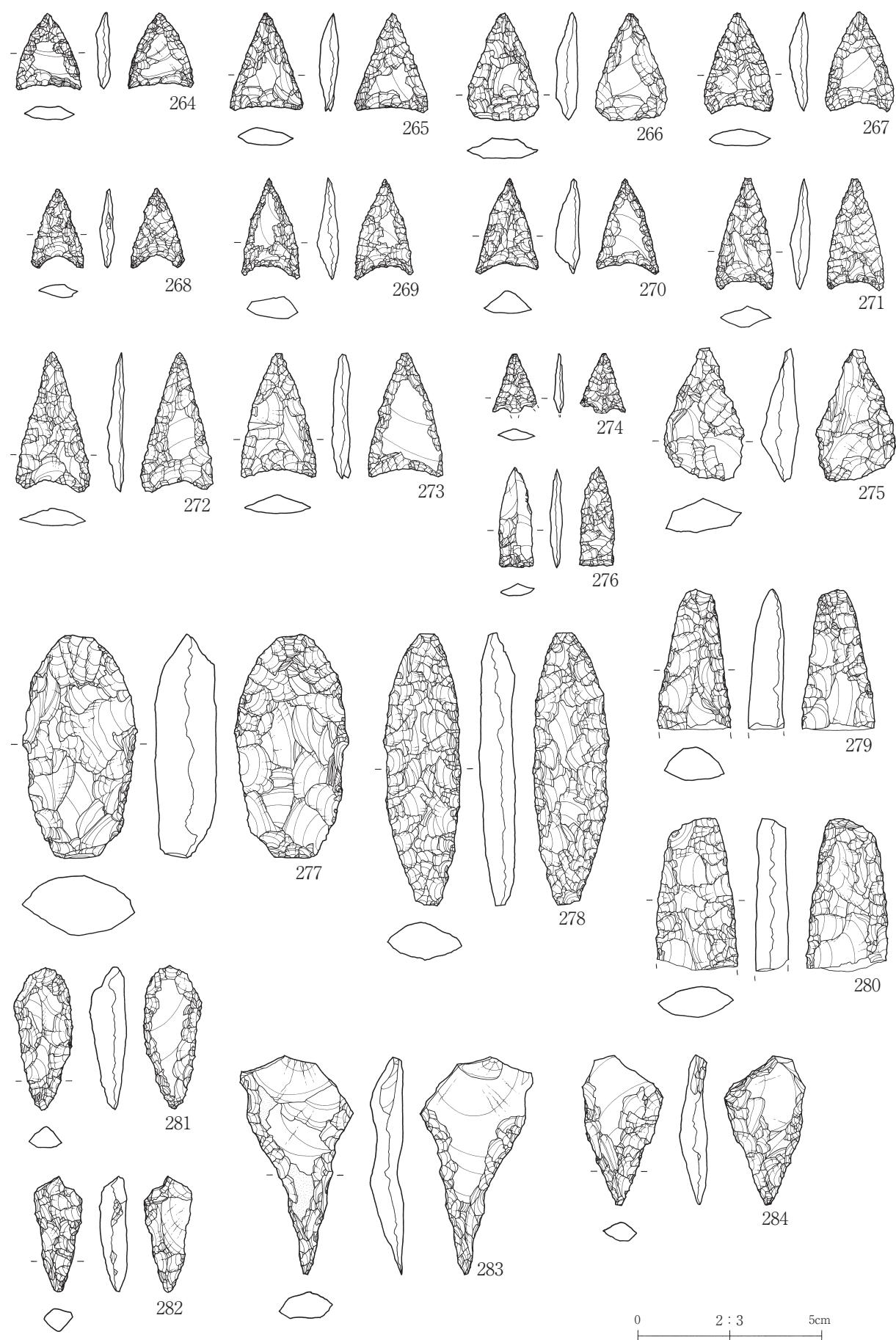
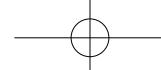


1 繩文時代

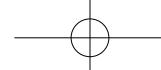


第42図 遺構外出土遺物（縄文時代）5

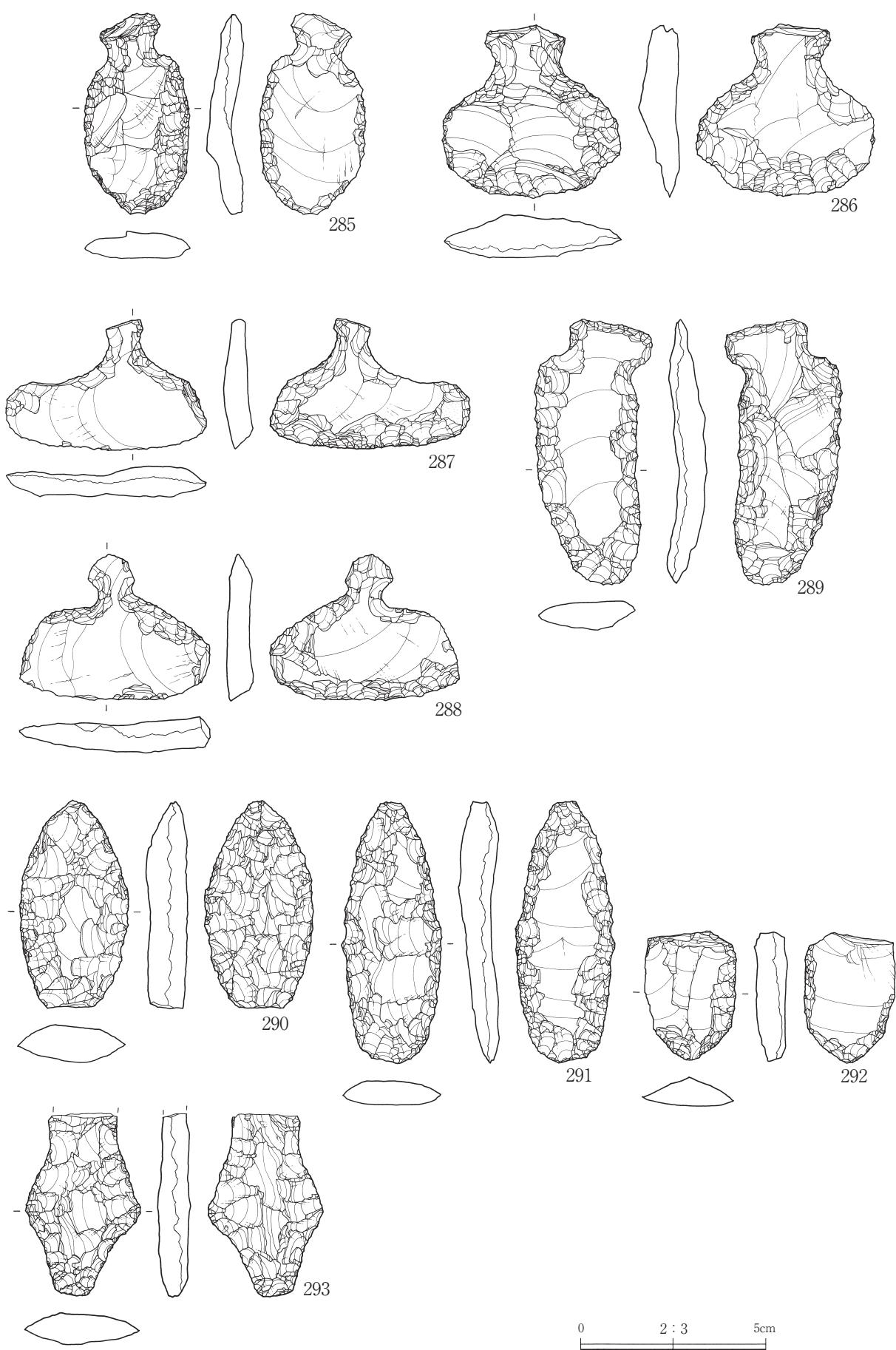
一端を鋭利に作出するが、281・282のように錐としては幅広のままのものも見受けられる。283も錐部の形態がやや歪である。285～288は石匙である。285・286は縦型、287・288は横型で、289は斜型で刃部は縦に長い。290～295は不定形石器である。290・291・293は縁辺部全周を両面から二次加工を施しており、形態も左右対称に整えられている。293はあまり見ない形態である。292・294・295は素材となるフレイクの縁辺部の一部にのみ二次加工を施し、刃部を作出している。296～302はUフレイクと判断した。いずれもフレイクの縁辺の一部に微細剥離が連続している。303～307はリタッチドフレイクとした。フレイクの最終剥離面に不連続あるいは不規則な二次加工が施されるものである。304や305の二次加工は刃部を作出しているようにも見受けられるが、不定形石器と比較すると、刃部とは言い切れない。308～310はフレイクである。311～317は敲磨器類である。磨痕・



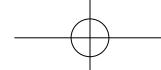
第43図 遺構外出土遺物（縄文時代）6



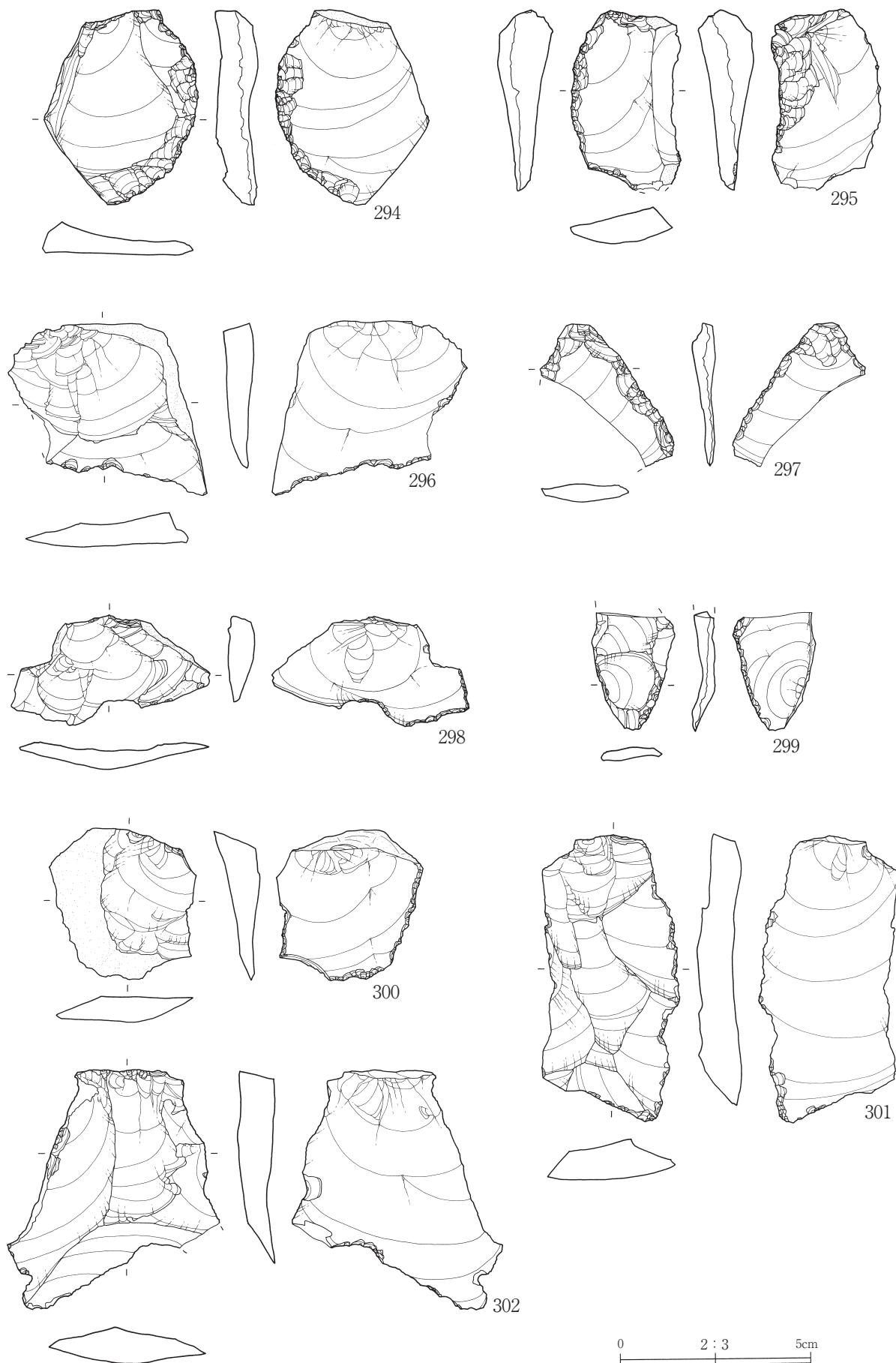
1 繩文時代



第44図 遺構外出土遺物（縄文時代）7

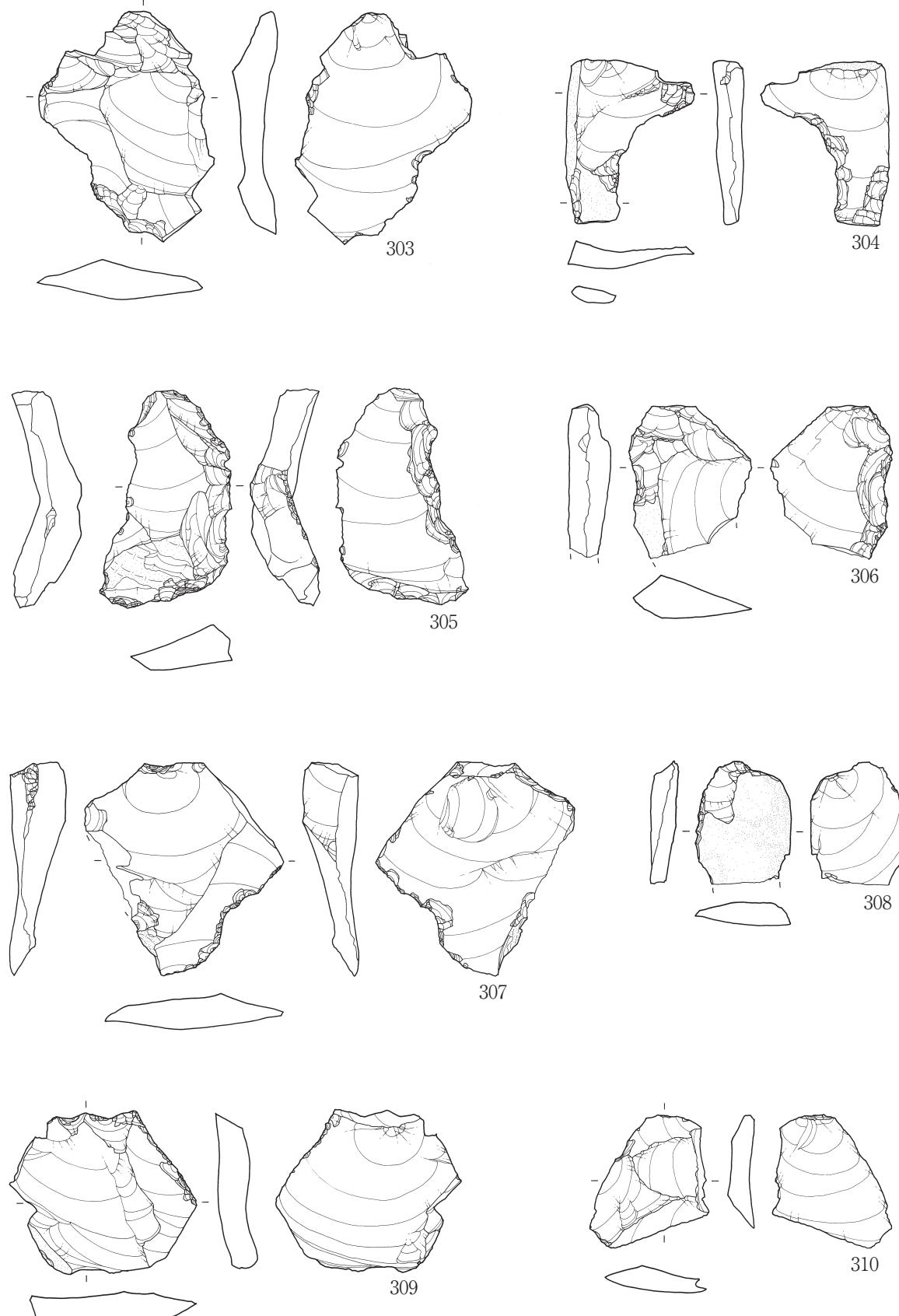


VI 検出遺構・出土遺物



第45図 遺構外出土遺物（縄文時代）8

1 繩文時代

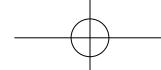


0 2 : 3 5cm

第46図 遺構外出土遺物（縄文時代）9



第47図 遺構外出土遺物（縄文時代）10



1 縄文時代



第48図 遺構外出土遺物（縄文時代）11

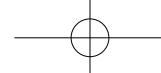
敲打痕が認められるものが多い。318は石皿である。大型の礫の一面のみを使用し、その裏面は自然面のままである。そのため、石皿にしては形態が歪である。

319・320は玦状耳飾りである。出土位置からみて1号住居跡からの流れ込みの可能性が高い。320は製作途中の玦状耳飾りで、穿孔はされているが、溝は途中である。321は石製円盤である。

第5表 遺物観察表（縄文時代）  
縄文土器

掲載番号	図版番号	写真番号	出土地点・層位	器種	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面色調 内面色調	焼成	胎土混入物	土器型式	煤コグ	備考
1	10	31	1号住居 床直	深鉢	口～胴上1/2	唇:3個の台状突起 円形刺突文 口:無文 額:隆帯(+円形刺突文) 胴:横位の結節回転繩文(RL)→隆帯(+円形刺突文)による渦巻文	口:隆帯(+円形刺突文)による波状文 口～胴:ナデ	浅黄橙 橙	不良	砂(多)	大木5a	無し	
2	10	31	1号住居 埋土下位	深鉢	口縁部片	口:無文	ナデ	灰黄褐 明黄褐	やや不良	白・長	大木4～5a	無し	
3	10	31	1号住居 埋土下位	深鉢	胴部片	胴:縦位の結節回転繩文(RL)→円形刺突文+貼付隆帯(横位直線・円文)	ナデ	にぶい褐色 にぶい赤褐色	やや不良	砂・白	大木5a	無し	
4	10	31	1号住居 埋土下位	深鉢	口縁部片	唇:貼付隆帯(波状文・S字状文) 口:無文	ケズリ→ナデ	灰黄褐 にぶい黄橙	不良	白(微)・長	大木4～5a	無し	
5	10	31	1号住居 埋土中	深鉢	胴部片	胴:繩文(LR縦)→貼付隆帯による波状文	ナデ?	黒褐 黒褐	不良	砂・長	大木5a?	無し	
6	10	31	1号住居 埋土下位	深鉢	口～胴上	唇:台状突起(欠損) 口～胴:繩文(LR縦)一貼付隆帯による梯子状文	ナデ	灰黄褐 にぶい褐色	不良	白・長 (微)	大木4～5a	内外面 胴部	
7	10	32	1号住居 埋土下位	深鉢	口～胴部片	唇:竹管状工具による刺突文 口～胴:繩文(LR縦)横擬似的に網目状に見せている?	ナデ	褐色 褐色	不良	砂・長 (微)	大木5a	無し	
9	11	31	1号住居 埋土下位	深鉢	口～胴下2/3	唇:工具による押圧で山形を形成・上面波状の突起(沈継伴う) 口～胴:斜位の單軸絡条体1類(R軸は縄?)	ナデ	橙 灰黄褐	やや不良	砂・雲 (微)	大木5a	内外面 胴部	
10	11	31	1号住居 埋土下位	深鉢	口～胴下2/3	唇:工具による押圧で山形を形成 口～胴:繩文(LR縦)結節部残存	ナデ	橙 黑褐	不良	白・長 (微)	大木5a?	内外面 胴部	
11	11	31	1号住居 埋土下位	深鉢	胴～底部1/3	胴:無文 底:指頭による整形痕	ナデ	明赤褐 明赤褐	不良	砂(多)・長	前期後葉	無し	
12	12	32	1号住居 埋土下位	深鉢	口～胴部1/4	唇:外外面から押圧 口～胴:繩文(LR横 口縁部に結節部残存)	ケズリ→ナデ	黒褐 にぶい褐色	不良	砂(多)・長 (多)	前期後葉	外面白 ～胴 内 外面	
13	12	32	1号住居 埋土上位	深鉢	口～胴部片	唇:棒状工具による押圧 口～胴:繩文(RL横 結節部残存)	指頭による整形→ナデ	にぶい黃褐 明黄褐	やや不良	砂・雲 (微)	前期後葉	無し	
14	12	32	1号住居 埋土下位	深鉢	口縁部片	口～胴:繩文(LR横)	ナデ	赤褐 明赤褐	良好	砂(多)・白 (微)	前期後葉	無し	
15	12	32	1号住居 埋土下位	深鉢	口縁部片	口:縦位にケズリ→繩文(LR横・斜)	ナデ	にぶい褐色 にぶい橙	やや不良	砂	前期後葉	無し	
16	12	32	1号住居 埋土上位	深鉢	口縁部片	唇:口縁部を肥厚させ、波状の突起 口～胴:O段多条(RL横・結節部残存)	ナデ	黒褐 黒褐	不良	砂・長 (微)	前期後葉	外面白 縁	
17	12	32	1号住居 埋土中	深鉢	胴部片	胴:繩文(LR縦・斜)	ナデ	明赤褐 明赤褐	不良	砂(多)・雲 (微)	中期?	無し	
18	12	32	1号住居 埋土下位	深鉢	口縁部片	口:横位の結節回転繩文(LR)	ナデ	にぶい黃褐 にぶい黄橙	良好	砂(多)・雲 (微)	前期後葉	無し	
19	12	32	1号住居 埋土下位	深鉢	口～胴部片	口～胴:横位の結節回転繩文(LR)	指頭による整形→ナデ	にぶい褐色 橙	良好	砂(多)・雲 (多)	前期後葉	無し	
20	12	32	1号住居 埋土下位	深鉢	口～胴部片	口～胴:多軸絡条体	ナデ	赤褐 赤褐	不良	砂(多)・大木 白(微) 5a?	21と同一個 体	無し	
21	12	32	1号住居 埋土下位	深鉢	口～胴部片	口～胴:多軸絡条体	ナデ	赤褐 赤褐	不良	砂(多)・大木 白(微) 5a?	20と同一個 体	無し	
22	12	32	1号住居 埋土下位	深鉢	口縁部片	口～胴:横位の結節回転繩文(LR)	指頭による整形→ナデ	黒褐 にぶい黄橙	不良	砂(微)・雲 (多)	前期後葉	無し	
23	12	32	1号住居 埋土下位	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(L)	ナデ	橙 明赤褐	良好	白(微)・雲 (微)	前期後葉	無し	
24	13	33	1号住居 埋土下位	深鉢	口～胴1/3	口:隆帶による区画文・円文 胴:繩文(RLR)→隆帶による渦巻文・区画文	ナデ	橙 橙	良好	砂	大木8b ～大木9	無し	
25	13	33	1号住居 埋土上位	深鉢	口～胴部1/2	口:無文 胴上:隆帯+刺突文 胴下:繩文(RL斜)→隆帶による渦巻文	ナデ	黒褐 黒褐	不良	砂	大木8b(新)	無し	
26	13	33	1号住居 埋土中	深鉢	胴部片	胴:繩文(RL斜)→沈線文(渦巻文)	ナデ	にぶい黃褐 にぶい黄橙	不良	白(微)	大木8b(新)	内外面 胴部	
27	13	33	1号住居 埋土中	深鉢	胴部片	繩文(RL縦)→沈線文(渦巻文)	ナデ	にぶい黃褐 にぶい黄褐	不良	白(微)	大木8b(新)	無し	
28	13	33	1号住居 埋土下位	深鉢	胴部片	胴:繩文(RL縦)→沈線文(渦巻文)	ナデ	にぶい褐色 灰褐	良好	砂	大木8b(新)	無し	
29	13	33	1号住居 埋土中	深鉢	胴部上半1/3	胴:繩文(RL縦)→隆帶による渦巻文	ナデ	黒褐 黒褐	不良	砂(微)	大木8b(新)	内外面 胴部	
30	13	33	1号住居 埋土中	深鉢	胴部片	胴:繩文(RL縦)→隆帶	ナデ	明赤褐 橙	良好	砂	大木8b(新)	無し	
31	13	33	1号住居 埋土中	深鉢	胴部片	胴:沈線文	ナデ	橙 橙	やや良好	砂(多)・長 (微)	中期?	無し	
32	13	33	1号住居 埋土上位	深鉢	胴部片	胴:繩文(RL横)→沈線文(渦巻文)	ナデ	褐 黒褐	不良	砂・長 (微)	大木8b(新)	内外面 胴部	
33	13	33	1号住居 埋土下位	深鉢	胴下片	胴:繩文(RL縦)→沈線文	ナデ	橙 にぶい黃褐	不良	白(微)・雲 (微)	中期?	無し	
78	19	33	2号住居 埋土上位	深鉢	口～胴部片	唇:鋸歯状の貼付隆帯(+沈線) 口:横位に沈線、波状沈線(3条) 胴:綻位に波状沈線(器面全体)	ナデ	にぶい黃褐 明黄褐	やや良好	砂	大木5a	無し	
79	19	33	2号住居 床面上	深鉢	口～胴部片	口:横位に波状沈線(2条) 口～胴:綻位に波状沈線(器面全体)	ナデ	橙 橙	不良	砂・長	大木5a	無し	
80	19	33	2号住居 床面上	深鉢	口～胴部片	口:横位に波状沈線(2条?) 口～胴:綻位に波状沈線(器面全体)	ナデ	灰黃褐 橙	やや不良	砂・長	大木5a	無し	
81	19	33	2号住居 床面上	深鉢	口縁部片(断片)	口:突起・鋸歯状の貼付隆帯(+沈線)	ナデ	黒褐 にぶい褐色	やや良好	砂・雲	大木5a	無し	
82	19	33	2号住居 床面上	深鉢	口縁部片(断片)	口:綻位に鋸歯状の貼付隆帯(+沈線)	ナデ	黒褐 にぶい褐色	良好	砂・雲	大木5a	無し	
83	19	33	2号住居 埋土下位	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体1A類(RL・RL斜)	ナデ	明赤褐 明赤褐	やや良好	砂(多)・雲	前期(大 木5?)	無し	
84	19	33	2号住居 埋土上位	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体1類(r)	ナデ	橙 橙	良好	砂(多)・長	前期(大 木5?)	無し	
85	19	33	2号住居 埋土下位	深鉢	口～胴部片	口:横S字状隆帯+横位に隆帯1条、横位に沈線(3条) 胴:繩文(RL縦)→沈線	ナデ	にぶい褐色 にぶい赤褐色	不良	砂(多)・雲	大木8a (新)	無し	
86	19	33	2号住居 埋土上位	深鉢	口縁部片	口:隆帶による区画、繩文?(磨滅。LRか)→隆帶 胴:繩文(LR縦)	ナデ	明赤褐 にぶい黃褐	やや不良	砂(多)・雲	大木8a (新)	無し	
87	19	33	2号住居 埋土下位	深鉢	底部片	底部:無文	ナデ?	明赤褐 にぶい黃褐	不良	白・長	前期	底部内 面	
91	21	34	3号住居 埋土下位	深鉢	口～胴下	唇:内外に押しし上面觀波状 口～胴:單軸絡条体1類(L)	ナデ	黃橙 にぶい黃橙	不良	砂・雲 (微)	大木 5a?	無し	

※胎土 砂:砂粒・白:白色粒子・雲:雲母・長:長石

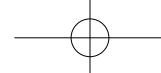


## 1 繩文時代

掲載番号	図版番号	写真番号	出土地点・層位	器種	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面色調内面色調	焼成	胎土混入物	工具式	煤コゲ	備考
92	21	34	3号住居床面上	深鉢	口縁部片	唇:鋸齒状の隆帯(突起) 口～胴:繩文(LR斜・縦)→貼付隆帯による連続山形文(2条单位で横位・縦位)	ナデ	明黄褐 にぶい黄褐	やや不良	白・長	大木5a	無し	
93	21	34	3号住居埋土下位	深鉢	口縁部片	唇:波状の貼付隆帯 口:貼付隆帯	ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄褐	やや不良	白・長	大木5a	無し	
94	21	34	3号住居埋土下位	深鉢	口縁部片	口:無文、胴部との境に押圧文を施した横位の隆帯 胴:単軸絡条体1類(R縦)	ナデ	橙 橙	良好	砂・雲	大木5a	無し	
95	21	34	3号住居埋土下位	深鉢	胴部片	胴:羽状繩文(LR・RL横)	ナデ?(全面コケ付着)	にぶい黄褐 黒褐	不良	白・長	前期?	内外面	
103	24	34	4号住居埋土中	深鉢	口縁部片	口:波状の隆帯(+沈線) 胴:繩文(LR横)	ナデ	黄 橙	やや不良	砂・雲	大木4	無し	
104	24	34	4号住居1層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体1類(R)→隆帯による渦巻文	ナデ	黒褐 褐	不良	砂・雲	大木4	無し	
105	24	34	4号住居埋土中	深鉢	口縁部片	口～胴:繩文(RL横)	ナデ	にぶい黄褐 橙	不良	砂・長	大木5a?	内面	
106	24	34	4号住居埋土中	深鉢	口縁部片	口～胴:単軸絡条体1A類(R)	ナデ?(内面激しい剥落)	橙 橙	良好	砂	大木4	無し	
107	24	34	4号住居埋土中	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体3類(I)	ナデ	にぶい褐 橙	やや良好	白・長	大木5a?	無し	
108	24	34	4号住居1層	深鉢	胴部片	胴:縦位の単軸絡条体1類(L)	ナデ	黄 明黄褐	不良	砂(多) 雲	大木5a?	無し	
109	24	34	4号住居1層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(RL縦)	ナデ	にぶい黄褐 にぶい褐	やや良好	白・長	大木5a?	外外面	
110	24	34	4号住居埋土中	深鉢	胴部片	胴:組紐(RL?)	ナデ	赤褐 赤褐	不良	砂	大木5a?	無し	
111	24	34	4号住居埋土中	深鉢	胴部片	胴:組紐	ナデ?	赤褐 明赤褐	不良	砂・白	大木5a?		
121	27	34	5号住居床面下	深鉢	口縁部片	口:隆帯による楕円形区画文→繩文原体押圧文(LR) 胴:繩文(LR縦)→隆帯	ナデ	にぶい褐 明赤褐	やや不良	白・雲	大木8a(古)	無し	
122	27	34	5号住居埋土中	深鉢	口縁部片	口:隆帯 口～胴:繩文(LR斜)→隆帯による渦巻文	ナデ	明褐 にぶい黄褐	やや不良	砂	大木8b(新)	無し	
123	27	34	5号住居床面下	深鉢	胴部片	胴:繩文(RL横)→隆帯(渦巻文?)	ナデ?(内面激しい剥落)	にぶい黄褐 橙	良好	砂・白	大木8b(新)	無し	
124	27	34	5号住居埋土中	深鉢	胴部片	胴:繩文(RL?)→隆帯による渦巻文	ナデ	にぶい黄褐 にぶい褐	不良	砂・白	大木8b(新)	無し	
125	27	34	5号住居埋土中	深鉢	口縁部片(口唇部欠損)	胴:繩文(RL横)→隆帯による区画・渦巻文	ナデ	明赤褐 橙	良好	白・雲	大木8a~8b-1	無し	
126	27	34	5号住居埋土中	深鉢	胴部片	胴:繩文(RL斜)→隆帯による渦巻文	ナデ	明赤褐 灰黄褐	不良	砂	大木8b~9	無し	
130	29	34	6号住居埋土中	深鉢	胴部片	胴:隆帯による渦巻文	ナデ	橙 褐灰	不良	白(微)	大木8b(新)	外外面	
131	29	34	6号住居埋土中	深鉢	胴部片	胴:隆帯による渦巻文	ナデ	明黄褐 褐灰	不良	白(微)・ 長(微)	大木8b(新)	無し	
132	29	34	6号住居埋土中	深鉢	底部片	胴:隆帯	ナデ	橙 にぶい黄褐	やや不良	白(微)	大木8b(新)	無し	
133	30	34	7号住居埋土中	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(L)	指頭による整形→ナデ	橙 にぶい橙	不良	砂(多) 長	大木5a	外外面	胴部
135	35	35	4号土坑埋土中	深鉢	口～胴下	口:沈線による区画、繩文(LR横?)→沈線によるクラシク文 胴:繩文(LR縦)	ナデ	明褐 褐	不良	砂(多) 白(微)	大木8a(新)	無し	
136	35	34	4号土坑埋土中	深鉢	口縁部片	口:隆帯による区画、隆帯による横位の波状文	ナデ	褐 褐	やや不良	砂・雲	大木8a(新)	外外面	
139	35	35	13号土坑埋土下位	深鉢	胴部片	胴:繩文(LR横、結節部分残存)	ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良	砂・長(微)	大木4	無し	
140	35	34	13号土坑埋土下位	深鉢	口縁部片	唇:貼付隆帯による波状文 口～胴:繩文(LR縦)→貼付隆帯(剥落激しく意匠不明)	ナデ	にぶい橙 橙	不良	白(微)・ 長(微)	大木4	内面胴部	
141	35	34	13号土坑埋土下位	深鉢	口縁部片	口:繩文(RLR横)	ナデ	にぶい橙 橙	不良	白・長	前期後葉?	無し	
142	35	35	13号土坑埋土下位	深鉢	口～胴部片	口:無文 胴上:沈線による鋸齒状文 胴:繩文(LR縦)	ナデ	明黄褐 にぶい黄褐	不良	砂・白	大木5a	無し	
146	36	35	14号土坑埋土中	深鉢	胴部片	胴:繩文(LR縦)	ナデ	にぶい褐 褐	不良	砂・白	中期(大木8a?)	無し	
147	36	35	15号土坑埋土中	深鉢	口縁部片	唇:台状突起(刻み) 口～胴:単軸絡条体5類(L)→口縁に沈線伴う隆帯	ナデ	黒褐 にぶい黄褐	不良	砂(多)	大木5a	無し	
148	36	35	15号土坑埋土中	深鉢	胴部片	胴:繩文(LR横)	ナデ	橙 黒褐	不良	砂・白・織 維(多)	前期前葉?	無し	
149	36	35	15号土坑埋土中	深鉢	胴部片	胴:繩文(LR斜)→2条の隆帯	ナデ	橙 明黄褐	良好	砂・長	中期(大木8a?)	無し	
150	38	35	II B2i III層	深鉢	口縁部片	唇:押圧 口～胴:繩文(LR横)	ナデ	浅黄橙 浅黄橙	不良	白(微)・ 織維(多)	大木2a	無し	
151	38	35	II B2i III層	深鉢	口縁部片	唇:平縁 口:横位の結節回転繩文(LR)	ナデ	灰白 にぶい黄褐	やや良好	砂・織維 (微)	大木2a	無し	
152	38	35	II B2h III層	深鉢	胴部片	胴:非結束羽状繩文(LR・RL)	ナデ	浅黄橙 にぶい黄褐	不良	白・長・織 維(多)	大木2a	無し	
153	38	35	II B2h III層	深鉢	胴部片	胴:繩文(0段多条RL縦・斜)	ナデ	橙 灰褐	不良	白・長・織 維(微)	大木2a	無し	
154	38	35	II B1h III層	深鉢	口縁部片	口～胴:繩文(0段多条RL)	ケズリ→ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良	白・雲・織 維(多)	大木2a	無し	
155	38	35	II B2j III層	深鉢	口縁部片	口:組紐	ナデ	暗赤褐 暗赤褐	不良	砂・雲	前期		
156	38	35	II B6g V層上面	深鉢	口縁部片	口:繩文(RL斜)?	ナデ	明赤褐 明赤褐	不良	砂・白・織 維(微)	前期		
157	38	35	II B2i III層	深鉢	口縁部片	口:繩文(I横)	ナデ、指頭整形	明赤褐 明赤褐	やや不良	砂	前期		
158	38	35	II B1h III層	深鉢	口縁部片	口～胴:横位の結節回転繩文・非結束羽状繩文(RL・LR)	ナデ	にぶい赤褐 にぶい黄褐	良好	砂・雲	大木2b?	無し	
159	38	36	II B2i III層	深鉢	口縁部片	口～胴:繩文(LR斜、結節部分残存)	ナデ	橙 にぶい黄褐	良好	砂(多) 雲(微)	前期前葉?	無し	
160	38	36	II A3i III層	深鉢	口～胴下1/3	口:無文 胴:横位の結節回転繩文(RL)	ナデ	にぶい橙 橙	良好	砂・白	大木2a~2b	無し	
161	38	35	II B2i III層	深鉢	口縁部片	口:横位の結節回転繩文(LR)	ナデ	灰黄褐 にぶい黄褐	やや良好	砂・長・雲	大木2a		
162	38	36	II B2i III層	深鉢	口縁部片	口:刻み・横位の結節回転繩文(RL)	ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良	白・雲	大木2a		
163	38	36	II B3h III層	深鉢	口縁部片	口:横位の結節回転繩文(RL)	ナデ	橙 明褐	不良	砂・雲	大木2a	無し	
164	38	36	II B2h III層	深鉢	口縁部片	口:横位の結節回転繩文(RL)	ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良	白(微)・ 雲(微)	大木2a	無し	

## VI 検出遺構・出土遺物

掲載番号	図版番号	写図番号	出土地点・層位	器種	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面色調 内面色調	焼成	胎土混入物	工具式 ツク	煤コグ	備考
165	38	36	I A4f V層上面	深鉢	口縁部片	口:横位の結節回転繩文(LR)	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや良好	白(微)・雲(微)	大木2a	無し	
166	38	36	II B4j III層	深鉢	口縁部片	口:横位の結節回転繩文(LR)	指頭による整形痕→ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	白(微)・雲(微)	大木2a	無し	
167	38	36	II B2j	深鉢	胴部片	胴:横位の結節回転繩文(LR)	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	白(多)・雲	大木2a ~2b	無し	
168	38	36	II B6g II ~ III層	深鉢	胴部片	胴:繩文(RL綴 結節部残存)	ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良	砂・長	大木2a ~2b	無し	
169	38	36	II B2h III層	深鉢	胴部片	胴:繩文(LR横、結節部分残存)	指頭による整形痕→ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	砂・白	大木2a ~2b	無し	
170	38	36	II B2i III層	深鉢	底部片	胴:横位の結節回転繩文(LR)	ナデ	橙 明黄褐	やや不良	砂・白	大木2a ~2b		
171	38	36	II B7b V層上面	深鉢	胴部片	胴:縦位の結節回転繩文(RL)	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	砂・白	大木2a ~2b	無し	
172	38	36	II B2h III層	深鉢	口縁部片	口～胴:繩文(LR横)	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	砂・雲(微)	大木2a ~2b	無し	
173	38	36	II B3h III層	深鉢	口縁部片	口:繩文(RL斜)	ナデ	にぶい褐 明黄褐	良好	白・雲(微)	大木2a ~2b	無し	
174	38	36	II B6f V層上面	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体1A(R)	ナデ	黒褐 黒褐	不良	白・長(多量)	大木2a ~2b		
175	38	36	II A2d V層上面	深鉢	胴部片	胴:繩文(RL斜)	ナデ	橙 にぶい黄褐	不良	白(微)・長(微)	前期後葉	無し	
176	39	36	II B2j III層	深鉢	口縁部片	口:繩文(LR横)	ケズリ・ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	砂・雲(多量)	前期		
177	39	36	II B2j III層	深鉢	口～胴部片	唇:平縁 口:無文 口～胴:繩文(RL横)	ナデ	にぶい褐 にぶい褐	やや不良	白・雲・長	前期	無し	
178	39	36	II B2j III層	深鉢	口～胴部片	唇:平縁 口～胴:繩文(LR斜)	ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄橙	不良	白(微)・雲(微)	前期	無し	
179	39	36	II B2j III層	深鉢	口～胴部片	唇:平縁 2単位の短い隆帯(突起)→円形の刺突文 口～胴:横位の結節回転繩文(LR)	ミガキ	灰黄褐 にぶい黄褐	不良	砂(多)	大木5a?	無し	
180	39	36	II B2j III層	深鉢	口縁部片	唇:緩い波状口縁(棒状工具による押圧文が巡る) 口～胴:繩文(LR横・口縁に結節部が残る)	ケズリ・ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	砂・雲(微)	前期	無し	
181	39	36	II B3j III層	深鉢	口縁部片	唇:緩い波状口縁(棒状工具による押圧文巡る) 口～胴:繩文(LR横)	ケズリ(太い擦痕あり)	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	砂(多)・雲(微)	大木4~5	無し	
182	39	36	II B2i III層	深鉢	口縁部片	唇:緩い波状口縁(棒状工具による押圧文巡る) 口:繩文(LR縦)	ナデ	灰黄褐 橙	不良	砂(多)	前期	無し	
183	39	36	II B1h III層	深鉢	口縁部片	唇:前後にひねり波状文形成 口～胴:繩文(RL横)	ナデ	明黄褐 明黄褐	不良	砂・長	前期後葉	無し	
184	39	36	II B1h III層	深鉢	口縁部片	口:組紐	ナデ	明黄褐 明黄褐	不良	白(微)	前期	無し	
185	39	37	II B2j III層	深鉢	胴～底片	胴:繩文(RL綴)	指頭による整形痕→ナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	不良	白・雲	前期後葉	無し	
186	39	37	II B3h III層	深鉢	胴部片	胴:繩文(LR横)	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや不良	白・長	前期	無し	
187	39	37	II B4g V層上面	深鉢	胴部片	胴:組紐?	ナデ	橙 黒褐	不良	白・長	前期		
188	39	37	II B3j III層	深鉢	口縁部片	唇:平縁 口:組紐?	指頭による整形→ナデ	明赤褐 明赤褐	やや不良	砂(多)・白	大木2a ~2b	無し	
189	39	37	II B4g V層上面	深鉢	口縁部片	口:結節回転繩文(RL)	ナデ	橙 にぶい黄橙	良好	白・雲	前期		
190	39	37	II B4g V層上面	深鉢	胴部片	胴:結束羽状繩文(l-r?)	ケズリ→ナデ	にぶい黄橙 浅黄	やや不良	砂・雲(微)	前期?	無し	
191	39	37	II B3j III層	深鉢	胴部片	胴:結節回転繩文(?)結節部のみ)	ナデ	にぶい黄褐 灰黄褐	不良	白・雲(微)・纖維(微)	大木2a ~2b	無し	
192	39	37	II B3h III層	深鉢	胴部片	胴:組紐?	ケズリ→ナデ	にぶい赤褐 明赤褐	不良	砂・白	前期	無し	
193	39	37	II B1h III層	深鉢	口縁部片	口～胴:縦位の単軸絡条体1類(R)	指頭による整形→ナデ	橙 明黄褐	不良	砂・雲	大木5a	無し	
194	39	37	II B3j III層	深鉢	口縁部片	唇:平縁 口:単軸絡条体1A類(R+L斜)	ナデ	明赤褐 赤褐	やや良好	白(微)・雲(微)	前期?	無し	
195	39	37	II B3j III層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体1A(L+R)	指頭による整形→ナデ	赤褐 にぶい赤褐	良好	砂・雲	粗製(前期)		
196	40	37	II B2i III層	深鉢	口～胴部1/3	唇:平縁 内面に向け貼付隆帯による波状文(2条)口:無文 胴:繩文(LR横)→貼付隆帯による梯子状文	ナデ→口縁に浅いミガキ	黒褐 黒褐	不良	白・長(多)	大木4		
197	40	37	I B6g II ~ III層	深鉢	口～胴部片	唇:刺突 口～胴:単軸絡条体?一貼付隆帯による波状文・円文	ケズリ→ナデ	黒褐 にぶい褐	不良	砂・長	大木4	無し	
198	40	37	II B5g V層上面	深鉢	口縁部片	唇:波状の貼付隆帯 口:繩文(LR)→波状・梯子状の貼付隆帯	ナデ	暗褐 明黄褐	不良	砂・長	大木4		
199	40	37	II B5g V層上面	深鉢	口縁部片	唇:波状の貼付隆帯2条 口:繩文(LR)→波状・梯子状の貼付隆帯	ナデ	明黄褐 橙	不良	砂・雲	大木4		
200	40	37	II B2j III層	深鉢	口縁部片	唇:鋸齒状の貼付隆帯2条 口:繩文(LR横)	ナデ	黒褐 にぶい黄橙	やや不良	砂・長	大木4		
201	40	37	II B4j III層	深鉢	胴部片	胴:繩文(LR横)一貼付隆帯による波状文・刺突伴う隆帯による円文	ナデ	灰黄褐 黒褐	不良	白・雲	大木4	外側隆帯	
202	40	37	I A4g V層上面	深鉢	胴部片	胴:縦位の単軸絡条体?一貼付隆帯による連続山形文・波状文	ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄橙	不良	白・長(多)	大木4	無し	
203	40	37	II B2h III層	深鉢	胴部片	胴:繩文(LR横)一貼付隆帯による波状文(2条)	ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄橙	不良	白・長	大木4	無し	
204	40	37	I B8g III層	深鉢	胴部片	胴:繩文(LR横)一隆帯(+刺突)による区画・渦巻文	ナデ	にぶい橙 橙	やや良好	砂・長(多)	大木5a	無し	
205	40	37	II B2j III層	深鉢	口縁部片	唇:鋸齒状突起(刺突文) 口:繩文(LR横)一隆帯(刺突)	ナデ	黒褐 にぶい黄橙	不良	砂・長・雲	大木5a		
206	40	37	II B1h III層	深鉢	口～胴部片	唇:刻み 口～胴:単軸絡条体1類(R)一沈線を伴う隆帯による鋸齒状文(渦巻文)	ナデ	明黄褐 橙	やや良好	砂・長	大木5a	無し	
207	40	37	II B2j III層	深鉢	口縁部片	唇:円形突起 口:繩文→隆帯(+沈線)	ナデ	明赤褐 明赤褐	やや良好	砂(多)	大木4		
208	40	37	I B6g II ~ III層	深鉢	胴部片	胴:貼付隆帯(波状?)	ナデ	黒褐 灰褐	不良	白・長	大木5a	無し	
209	40	37	II B6g V層上面	深鉢	口縁部片	唇:突起(上向の渦巻文) 口:無文 胴:繩文(LR横)	ケズリ→ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや不良	白(微)・長(微)	大木4	内面胴部	



## 1 繩文時代

掲載番号	図版番号	写真番号	出土地点・層位	器種	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面色調 内面色調	焼成	胎土混入物	土器型式	媒コゲ	備考
210	40	37	II B2i III層	深鉢	口縁部片	唇:上面円形の突起 口:繩文(RL綫、結節部分残存)	ナデ	明赤褐 明黄褐	やや良好	砂・雲	大木5a		
211	40	37	II A3i III層	深鉢	口縁部片	口:繩文(RL)→波状の貼付隆帯	ナデ	橙 明黄褐	やや不良	砂	大木4		
212	40	37	II B6e V層上面	深鉢	口縁部片	口:単軸絡条体1類?(R)→波状の隆帯	ナデ	にぶい黄橙 浅黄	不良	白・長	大木4		
213	40	37	II B2j III層	深鉢	口縁部片	口:円形隆帯+繩文・繩文(LR横)	ナデ	黄橙 明黄褐	不良	砂・雲	大木5a		
214	40	38	II B2j III層	深鉢	口縁部片	唇:突起(沈線伴う)、刻み 口:沈線による鋸歯状文(綫)	ナデ	橙 橙	良好	砂・運	大木5a	無し	
215	40	38	I B9f III層	深鉢	胴部片	単軸絡条体4類(I)→刺突文+隆帯	ナデ?	明褐	不良	砂・雲	大木5a		内面にコゲ
216	40	38	I B8g III層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体1類(R斜)→貼付隆帯による波状文	ナデ	にぶい橙 橙	やや良好	砂・雲	大木5a	無し	
217	41	38	II B2i III層	深鉢	口縁部片	唇:隅丸方形の突起 口:横位の結節回転繩文(RL)	ナデ	にぶい黄褐 橙	不良	砂・雲	大木4	無し	
218	41	38	II B2j III層	深鉢	口縁部片	唇:二叉の突起 口:無文	ナデ	灰黄褐 にぶい橙	やや不良	砂・雲・白	大木5a?		
219	41	38	II B2h III層	深鉢	口縁部片	唇:口縁部肥厚させ台状突起 口~胴:繩文(RL綫)	ナデ	にぶい褐 橙	不良	砂・雲	大木5a?	無し	
220	41	38	II B2h III層	深鉢	口縁部片	唇:波状口縁 口~胴:繩文(RL斜)	ナデ	明黄褐 黒褐	不良	砂・長(多)	前期	無し	
221	41	38	II B2j III層	深鉢	口縁部片	唇:突起(刺突文) 口:繩文(LR横)?	ナデ?	黒褐 にぶい黄橙	やや良好	砂・長	大木5a?		
222	41	38	II B1h III層	深鉢	口縁部突起破片	唇:上面稍円形突起に刺突文充填	ナデ?	にぶい赤褐 にぶい赤褐	良好	白・雲	大木5a	無し	
223	41	38	29号土坑 埋土中	深鉢	口縁部片	唇:貼付隆帯による波状文 口:角張った工具による刺突文	ナデ	黒褐 黒褐	やや不良	砂・長	大木4	無し	
224	41	38	II B2i III層	深鉢	口縁部片	唇:隆帯 口:繩文(LR斜)	ナデ	にぶい黄褐 明黄褐	やや良好	白・雲	大木4		
225	41	38	II B2i III層	深鉢	口~胴部片	唇:波状の貼付隆帯 口~胴:単軸絡条体?	ナデ	にぶい黄褐 橙	やや不良	白・雲(多)	大木4	無し	
226	41	38	II B2h III層	深鉢	口縁部片	口~胴:繩文(LR横 端部に結節部残る) 胴:貼付隆帯による波状文 口~胴:ナデ		にぶい黄橙 黒褐	不良	白(微)・ 雲(微)	大木4	無し	
227	41	38	II B2i III層	深鉢	口縁部片	唇:隆帯による波状文 口:繩文(LR横・斜)	ナデ	橙 にぶい黄橙	不良	砂・雲	大木5a		
228	41	38	II B2j III層	深鉢	口縁部片	唇:隆帯による波状文 口:繩文(LR横)	ナデ	橙 橙	やや不良	砂・雲	大木5a		
229	41	38	I B8g III層	深鉢	口縁部片	唇:隆帯による鋸歯状文 口:繩文(LR綫?)	ナデ	橙 橙	良好	砂・白	大木5a	無し	
230	41	38	II B3h III層	深鉢	口縁部片	唇:繩文(LR)を施した隆帯(上面波状) 口:繩文(LR綫) 胴:繩文(LR横)	指頭による整形痕→ナデ	橙 黒褐	不良	砂・長	大木5a	無し	
231	41	38	II B1h III層	深鉢	口縁部片	唇:押圧 口~胴:単軸絡条体5類(R)	ナデ	褐灰 赤褐	不良	白・長	大木5a	無し	
232	41	38	II B3h III層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(R)	ナデ	橙 黒褐	やや不良	砂・雲	大木5a	無し	
233	41	38	II B2j III層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(L)	ナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	不良	白・長(微)	大木5a	無し	
234	41	38	31号土坑 埋土中	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(R)	ナデ	橙 橙	不良	砂	大木5a	無し	
235	41	38	I A4f V層上面	深鉢	胴部片	胴:綫位の単軸絡条体1類(R)	ナデ?	橙 浅黄橙	良好	砂(微)・ 雲(微)	大木5a	無し	
236	41	38	32号土坑 埋土中	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(L)	ナデ	橙 にぶい橙	良好	砂(多)・ 長	大木5a	無し	
237	41	38	II B2j III層	深鉢	口縁部片	唇:平縁 口:横位の結節回転繩文(RL)	ナデ	にぶい橙 橙	良好	砂・白・織 維(微)	前期	無し	
238	41	38	II B2i III層	深鉢	口縁部片	唇:押圧 口:繩文(LR横・結節部分残存)	ケズリ→ナデ	橙 にぶい黄橙	良好	砂(多)	前期	無し	
239	41	38	I B8g III層	深鉢	底部片	胴下:隆帯 底:網代痕	ナデ	橙 橙	良好	砂・雲	前期?	無し	
240	41	38	II B2h III層	深鉢	底部片	胴下:繩文(RL横) 底:網代痕	ケズリ	明赤褐 明黄褐	やや不良	砂・雲	前期	無し	
241	41	38	19・20号土坑	深鉢	底部片	底:木葉痕	不明	褐灰 にぶい黄橙	やや不良	砂(微)・ 長(微)	前期?	無し	
242	41	38	II B2i III層	深鉢	底部片	胴:無文(輪積痕?)	ナデ	明赤褐 明黄褐	やや良好	砂(多)	前期?	無し	
243	41	38	II B3h III層	深鉢	底部片	胴:無文	指頭による整形痕→ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	砂・長(微)	前期	無し	
244	41	38	II B2j III層	深鉢	底部	胴:繩文(LR綫)底:網代痕	ナデ	明黄褐 にぶい黄橙	やや良好	砂・長	中期?	無し	
245	41	38	I B3b V層上面	深鉢	胴~底部1/3	胴:無文 底:網代? (磨滅激しい)	ナデ	明黄褐 明黄褐	不良	砂・長(微)	前期	無し	
246	41	38	II B2h III層	深鉢	胴~底部片	胴:繩文(?) 底:ナデ痕	ナデ	明褐 黒褐	やや良好	砂・雲(微)	前期	無し	
247	42	39	II B6g II ~ III層	深鉢	口縁~胴上1/3	口~胴:ビッチャリ繩文(L)→隆帯による渦巻き文	ケズリ→ナデ	明赤褐 黒褐	やや不良	砂・白	大木8b ~9	無し	補修孔2箇所
248	42	39	II B3j III層	深鉢	口縁部片	口:2条の沈線による区画 繩文(LR横)→半裁竹管状工具による2条の沈線で横位の波状文	ナデ	にぶい橙 橙	不良	白(微)・ 雲(微)	大木8a (新)	無し	
249	42	39	I A10j V層上面	深鉢	口縁部片	口:繩文(RL横)→隆帯による渦巻文	ナデ	明赤褐 赤褐	やや良好	砂(多)	大木8b(新)	無し	
250	42	39	II B6g II ~ III層	深鉢	口縁部片	口~胴:ビッチャリ繩文(L)→隆帯による渦巻き文	ケズリ→ナデ	明赤褐 明褐	やや不良	砂・白	大木8b(新)	無し	
251	42	39	II B2j III層	深鉢	胴部片	胴:繩文(LR綫)→隆帯による渦巻文	ナデ	橙 にぶい黄橙	不良	砂・雲(微)	大木8b(新)	無し	
252	42	39	I B3g II ~ III層	深鉢	胴部片	胴:繩文(LR綫)→隆帯による渦巻文	ナデ	灰褐 明赤褐	不良	砂・白	大木8b(新)	無し	
253	42	39	9号住居 埋土中	深鉢	胴部片	胴:隆帯(渦巻き文?)	ナデ	橙 橙	やや不良	砂(多)・ 白(微)	大木8b(新)	無し	
254	42	39	II B5g II ~ III層	深鉢	口~胴上1/4	口:無文 頂:横位の隆帯2条(下部に円形刺突文) 胴:隆帯による区画文	ナデ	黄橙 明黄褐	良好	砂	大木10 (新)	無し	
255	42	39	31号土坑 埋土中	深鉢	胴部片	胴:繩文(LR綫)→隆帯(渦巻き文?・区画文?)	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄褐	不良	砂	大木8b(新)	無し	
256	42	39	II B2h III層	深鉢	胴部片	胴:繩文(LR綫)→隆帯による渦巻き文	ナデ(ミガキに近い)	橙 にぶい黄褐	やや不良	砂・白	大木8b(新)	無し	

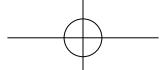
掲載番号	図版番号	写図番号	出土地点・層位	器種	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面色調 内面色調	焼成	胎土混入物	土器型式	媒コゲ	備考
257	42	39	II B6g II ~ III層	深鉢	口～胴上2/3	口～胴:縄文(RL横)	ナデ	黒褐 黒褐	不良	砂	中期	無し	
258	42	39	II B2i III層	深鉢	口縁部片	唇:内外面から押圧(上面観波状) 口:無文 胴:縄文(RL横 結節部残存)	ナデ	橙 橙	やや 良好	白・雲	前期後葉	無し	
259	42	39	II A9i V層上面	深鉢	胴部片	縄文(LR横)→沈線	ナデ	明黄褐 にぶい黄橙	やや 良好	砂・雲	後期?	無し	
260	42	39	II B2i III層	深鉢	口縁部片	口:無文 胴:縄文(LR斜)	ナデ	橙 橙	やや 良好	白・長	中期	無し	
261	42	39	II B3j III層	深鉢	口縁部片	唇:平縁 口:折り返し口縁→縄文(LR横)	ナデ	黒褐 黒褐	不良	白・長	中期?	無し	
262	42	39	31号土坑 埋土中	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR綫)	ナデ	にぶい黄褐 にぶい褐	不良	砂・長 (微)	中期?	無し	
263	42	39	II B6i II ~ III層	深鉢	底部片	胴～底:縄文(LR綫)	ナデ	明赤褐 褐	やや 不良	砂・白 (微)	中期	無し	

## 土製品

掲載番号	図版番号	写図番号	出土地点層位	器種	残存状況	文様	時期	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色調	備考
8	10	31	1号住居 床面上	円盤形土製品	完形	貼付隆帯による波状文・格子状文	大木5a	11.7	1.1	199.3	にぶい黄褐	深鉢胴部片の転用

## 石器

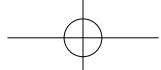
掲載番号	図版番号	写図番号	出土地点・層位	種別	分類	残存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質(産地)	備考
34	14	40	1号住居 埋土下位	石鏸	凹基無茎	完形	1.55	1.15	0.40	0.45	頁岩 (北上山地)	
35	14	40	1号住居 埋土下位	石鏸	平基無茎	完形	2.25	1.60	0.65	1.44	頁岩 (北上山地)	
36	14	40	1号住居 柱穴(26)内	石鏸	平基無茎	完形	2.70	1.40	0.35	1.16	頁岩 (北上山地)	
37	14	40	1号住居 埋土下位	石鏸	平基無茎	完形	2.30	1.95	0.55	1.75	頁岩 (北上山地)	
38	14	40	1号住居 埋土下位	石鏸	平基無茎	完形	2.75	1.80	0.40	1.27	頁岩 (北上山地)	
39	14	40	1号住居 埋土上位	石鏸	平基無茎	完形	2.70	1.60	0.35	1.18	頁岩 (北上山地)	
40	14	40	1号住居 埋土下位	石鏸	平基無茎	完形	3.15	2.00	0.70	2.71	頁岩 (北上山地)	
41	14	40	1号住居 埋土下位	石鏸	平基無茎	完形	3.50	1.65	0.40	2.10	頁岩 (北上山地)	
42	14	40	1号住居 床直	石鏸	平基無茎	完形	3.55	1.95	0.60	2.87	頁岩 (北上山地)	
43	14	40	1号住居 埋土下位	石鏸	凹基無茎	基部欠損	(3.75)	1.50	0.50	2.18	頁岩 (北上山地)	
44	14	40	1号住居 埋土下位	石鏸	尖基	完形	2.90	1.80	0.75	2.55	頁岩 (北上山地)	
45	14	40	1号住居 埋土下位	石鏸	失敗品	一	(4.10)	1.80	0.85	5.44	頁岩 (北上山地)	
46	14	40	1号住居 壁溝内	石鏸	失敗品	一	3.65	2.70	0.95	7.03	頁岩 (北上山地)	
47	14	40	1号住居 柱穴(34)内	尖頭器	一	先端部 1/3残	(4.15)	(1.55)	(0.85)	5.78	頁岩 (北上山地)	
48	14	40	1号住居 埋土下位	石匙	縦型	完形	6.92	1.39	1.00	5.70	頁岩 (北上山地)	
49	14	40	1号住居 埋土下位	石匙	縦型	完形	7.39	1.90	0.75	8.98	頁岩 (北上山地)	
50	14	40	1号住居 埋土上位	石匙	縦型	完形	7.40	3.40	0.95	17.25	頁岩 (北上山地)	
51	14	40	1号住居 埋土上位	石匙	横型	完形	3.49	4.46	0.75	6.47	頁岩 (北上山地)	
52	14	40	1号住居 埋土下位	不定形	II	4/5残	5.50	(2.65)	0.95	13.54	頁岩 (北上山地)	
53	15	40	1号住居 検出面上	不定形	I	完形	4.95	3.20	1.25	12.22	頁岩 (北上山地)	
54	15	40	1号住居 埋土下位	不定形	I	完形	4.90	3.25	1.10	15.82	頁岩 (北上山地)	
55	15	40	1号住居 埋土上位	不定形	I	2/3残	(5.65)	(2.95)	1.15	16.88	頁岩 (北上山地)	
56	15	40	1号住居 埋土上位	不定形	I	完形	5.75	4.75	1.45	28.17	頁岩 (北上山地)	
57	15	40	1号住居 埋土上位	不定形	I	完形	4.40	4.00	1.30	17.67	頁岩 (北上山地)	
58	15	41	1号住居 埋土上位	Rフレイク	II b	一	5.30	3.75	1.10	19.59	頁岩 (北上山地)	



1 繩文時代

掲載番号	図版番号	写図番号	出土地点・層位	種別	分類	残存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質(産地)	備考
59	15	41	1号住居埋土上位	Uフレイク	IIIb	—	5.45	3.45	0.90	11.38	頁岩 (北上山地)	
60	15	41	1号住居埋土上位	Rフレイク	IIc	—	(3.60)	3.10	1.50	12.51	頁岩 (北上山地)	
61	15	41	1号住居it43内	フレイク	IIIc	—	4.30	4.10	1.10	17.52	頁岩 (北上山地)	
62	16	41	1号住居埋土上位	Rフレイク	Ib	—	3.50	3.10	1.05	8.16	頁岩 (北上山地)	
63	16	41	1号住居Pit26内	フレイク	IIc	—	3.70	3.50	1.05	6.92	頁岩 (北上山地)	
64	16	41	1号住居埋土下位	フレイク	Ib	—	(3.15)	2.30	0.80	4.26	頁岩 (北上山地)	
65	16	41	1号住居埋土下位	敲磨器類	I	完形	126.98	72.45	46.53	645.99	花崗岩 (北上山地)	
66	16	41	1号住居埋土下位	敲磨器類	I+III	完形	106.75	95.65	73.32	973.95	花崗岩 (北上山地)	
67	16	41	1号住居埋土下位	敲磨器類	I+III	完形	183.80	84.27	51.72	1240.94	閃綠岩 (北上山地)	
68	17	41	1号住居最上層	磨製石斧	—	刃部欠損	12.30	4.80	2.85	274.51	細粒花崗閃綠岩 (北上山地)	
69	17	41	1号住居柱穴(14)内	磨製石斧	—	刃部欠損	11.30	5.30	2.80	255.51	ひん岩 (北上山地)	
70	17	41	1号住居埋土上位	磨製石斧	—	完形	8.45	3.90	2.00	114.83	頁岩 (北上山地)	
71	17	42	1号住居床直	石皿	—	完形	303.00	225.50	71.74	5420.00	花崗岩 (北上山地)	
88	19	42	2号住居床直	不定形	III	完形	7.00	4.55	1.50	36.21	頁岩 (北上山地)	
89	19	42	2号住居埋土下位	Rフレイク	Ib	—	(4.30)	3.35	1.00	9.98	頁岩 (北上山地)	
90	19	42	2号住居埋土下位	敲磨器類	I	完形	100.27	71.12	42.34	461.35	花崗岩 (北上山地)	
96	21	42	3号住居柱穴(9)内	石鏸	III	完形	2.23	1.60	0.60	1.57	頁岩 (北上山地)	
97	21	42	3号住居南壁溝内	石鏸	III	完形	3.15	1.50	0.70	3.12	頁岩 (北上山地)	表面磨滅?
98	21	42	3号住居検出面上	尖頭器	—	先端～体部	6.45	2.85	1.60	30.53	頁岩 (北上山地)	
99	21	42	3号住居検出面上	尖頭器	—	完形	4.20	1.60	0.90	6.42	頁岩 (北上山地)	
100	22	42	3号住居南壁溝内	石匙	横型	刃部欠損	5.00	7.41	1.70	31.35	頁岩 (北上山地)	
101	22	42	3号住居壁溝(西端)	石匙	斜型	完形	2.79	3.70	0.50	3.38	頁岩 (北上山地)	
102	22	42	3号住居埋土下位	敲磨器類	I	完形	100.52	76.04	42.40	457.13	花崗岩 (北上山地)	
112	24	42	4号住居1層	石鏸	平基無茎	完形	2.90	1.75	0.50	1.64	頁岩 (北上山地)	
113	24	42	4号住居1層	石鏸	平基無茎	完形	2.50	1.55	0.50	1.54	頁岩 (北上山地)	
114	24	42	4号住居埋土下位	石鏸	平基無茎	完形	2.15	1.90	0.60	1.69	頁岩 (北上山地)	
115	24	42	4号住居1層	石鏸	失敗品	—	(2.15)	(1.85)	0.25	0.77	頁岩 (北上山地)	
116	24	42	4号住居埋土中	フレイク	IIa	—	5.50	5.40	0.90	19.56	頁岩 (北上山地)	
117	24	42	4号住居埋土中	フレイク	IIIb	—	5.10	(3.50)	1.40	17.83	頁岩 (北上山地)	
118	24	42	4号住居埋土下位	磨製石斧	—	刃部～体部	(9.20)	4.30	3.15	211.63	凝灰岩 (北上山地)	
119	25	43	4号住居埋土上位	敲磨器類	III	完形	145.71	75.27	46.86	741.02	花崗閃綠岩 (北上山地)	
120	25	43	4号住居埋土中	敲磨器類	I+III	完形	95.92	52.06	9.18	72.17	凝灰岩 (北上山地)	
127	27	43	5号住居埋土中	石鏸	円脚無茎	体部残存	1.90	(1.10)	0.20	0.28	珪質頁岩 (北上山地)	
128	27	43	5号住居埋土中	石鏸	凹基無茎	先端欠損	3.15	1.90	0.55	1.84	頁岩 (北上山地)	アスファルト付着
129	27	43	5号住居床面上	炉石	—	—	121.40	113.81	44.11	780.80	花崗斑岩 (北上山地)	
134	30	43	7号住居埋土中	フレイク	IIb	—	(4.55)	3.60	1.10	9.79	頁岩 (北上山地)	
137	35	43	4号土坑埋土上位	フレイク	IIa	—	(4.15)	3.10	0.80	7.60	頁岩 (北上山地)	

掲載番号	図版番号	写図番号	出土地点・層位	種別	分類	残存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質(产地)	備考
138	35	43	4号土坑埋土上位	フレイク	IIIb	一	3.65	3.55	1.00	10.18	珪質頁岩(北上山地)	
143	35	43	13号土坑底面上	石鏃	凹基無茎	完形	2.35	1.80	0.50	0.89	頁岩(北上山地)	
144	36	43	7号土坑埋土中	石鏃	平基無茎	完形	2.90	1.45	0.45	1.31	頁岩(北上山地)	
145	36	43	7号土坑埋土中	不定形	I	完形	6.90	(5.00)	1.55	39.51	頁岩(北上山地)	
264	43	43	II B2j II～III層	石鏃	平基無茎	完形	2.10	1.75	0.40	1.24	頁岩(北上山地)	
265	43	43	II B3h II～III層	石鏃	平基無茎	完形	2.70	2.00	0.55	1.86	頁岩(北上山地)	
266	43	43	II B2h II～III層	石鏃	平基無茎	完形	2.95	1.95	0.55	2.96	頁岩(北上山地)	
267	43	43	I B9h II～III層	石鏃	凹基無茎	完形	2.70	1.90	0.50	1.98	頁岩(北上山地)	
268	43	43	31号土坑埋土上位	石鏃	凹基無茎	完形	2.15	1.45	0.40	0.72	頁岩(北上山地)	
269	43	43	I A8a V層上面	石鏃	凹基無茎	完形	2.75	1.55	0.60	1.71	頁岩(北上山地)	
270	43	43	I A8e V層上面	石鏃	凹基無茎	完形	2.60	1.70	0.70	1.70	頁岩(北上山地)	
271	43	43	II B2i II～III層	石鏃	凹基無茎	完形	3.00	1.55	0.55	1.73	頁岩(北上山地)	
272	43	43	II B2h II～III層	石鏃	凹基無茎	完形	3.80	2.00	0.57	2.98	頁岩(北上山地)	
273	43	43	I B9h IV層	石鏃	凹基無茎	完形	3.40	2.00	0.50	2.52	頁岩(北上山地)	
274	43	43	I B8f II～III層	石鏃	平基有茎	茎部欠損	(1.60)	(1.20)	0.30	0.35	頁岩(北上山地)	
275	43	43	II B2i II～III層	石鏃	失敗品	-	3.60	2.15	1.05	6.60	頁岩(北上山地)	
276	43	43	II B2i II～III層	石鏃	平基無茎	完形	2.70	0.90	0.30	0.71	頁岩(北上山地)	
277	43	43	II B3h II～III層	尖頭器	-	完形	6.10	3.10	1.65	35.22	頁岩(北上山地)	
278	43	43	I B7g II～III層	尖頭器	-	完形	7.40	2.10	1.00	16.27	頁岩(北上山地)	
279	43	43	II B2j II～III層	尖頭器	-	1/2欠損	(3.80)	(2.00)	7.27	7.27	頁岩(北上山地)	
280	43	43	II A2g V層上面	尖頭器	-	1/2欠損	(4.15)	2.20	0.90	9.95	頁岩(北上山地)	
281	43	44	II B2j II～III層	石錐	-	完形	3.85	1.60	1.00	5.32	頁岩(北上山地)	
282	43	44	II A5f V層上面	石錐	-	完形	3.10	1.30	0.75	2.45	頁岩(北上山地)	
283	43	44	II B2i IV層	石錐	-	完形	5.95	3.05	0.90	10.14	頁岩(北上山地)	
284	43	44	1号性格不明埋土上位	石錐	-	完形	4.06	2.20	0.75	5.84	頁岩(北上山地)	
285	44	44	II A3i II～III層	石匙	縦型	完形	5.40	2.34	1.00	11.26	頁岩(北上山地)	
286	44	44	II A3i II～III層	石匙	縦型	完形	4.60	4.80	1.15	16.77	頁岩(北上山地)	
287	44	44	II B2i IV層	石匙	横型	完形	3.50	5.38	0.81	11.89	頁岩(北上山地)	
288	44	44	II B2i II～III層	石匙	横型	完形	3.90	5.10	0.95	14.85	頁岩(北上山地)	
289	44	44	II B2i II～III層	石匙	斜型	完形	7.11	3.15	1.02	18.42	頁岩(北上山地)	
290	44	44	II B2i II～III層	不定形	I	-	4.95	3.20	1.25	20.51	頁岩(北上山地)	
291	44	44	II B2j II～III層	不定形	I	-	7.10	2.70	1.05	17.67	頁岩(北上山地)	
292	44	44	II B3h II～III層	不定形	I	-	3.50	2.45	0.90	7.78	頁岩(北上山地)	
293	44	44	I B10a V層上面	不定形	I	-	(4.95)	3.10	0.90	13.26	頁岩(北上山地)	
294	45	44	II B2j II～III層	不定形	I	-	5.20	4.10	1.10	19.99	頁岩(北上山地)	
295	45	44	II A3d IV層	不定形	I	-	(4.80)	2.90	1.45	13.52	頁岩(北上山地)	
296	45	44	II B2i II～III層	Uフレイク	I b	-	5.20	4.60	1.20	19.37	頁岩(北上山地)	

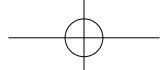


## 1 繩文時代

掲載番号	図版番号	写図番号	出土地点・層位	種別	分類	残存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質(産地)	備考
297	45	44	30号土坑埋土中	Uフレイク	IIIc	-	(3.80)	(3.50)	(0.60)	3.26	頁岩(北上山地)	
298	45	44	II B3h II～III層	Uフレイク	IIIb	-	5.25	2.95	0.90	7.58	頁岩(北上山地)	
299	45	44	19・20号土坑埋土上位	Uフレイク	IVd	-	(3.10)	(2.20)	(0.60)	3.02	頁岩(北上山地)	
300	45	45	II B2j II～III層	Uフレイク	I c	-	4.00	3.90	1.30	12.55	頁岩(北上山地)	
301	45	45	II B2j II～III層	Uフレイク	II c	-	7.60	3.65	1.30	32.96	頁岩(北上山地)	
302	45	45	I B9g II～III層	Rフレイク	II c	-	6.40	(5.60)	1.10	22.22	頁岩(北上山地)	
303	46	45	II B2j II～III層	Rフレイク	IIIc	-	5.90	4.50	1.40	18.79	頁岩(北上山地)	
304	46	45	I A9h V層上面	Rフレイク	I c	-	4.20	3.30	0.80	6.76	頁岩(北上山地)	
305	46	45	II B5g II～III層	Rフレイク	II c	-	5.60	3.40	1.75	19.33	頁岩(北上山地)	
306	46	45	II B3h II～III層	Rフレイク	II c	-	(3.90)	3.15	1.10	10.72	頁岩(北上山地)	
307	46	45	II B8g II～III層	Rフレイク	II c	-	5.50	5.10	1.40	22.01	頁岩(北上山地)	
308	46	45	II A2j V層上面	フレイク	II b	-	(3.15)	2.40	0.70	5.71	頁岩(北上山地)	
309	46	45	II B2i II～III層	フレイク	II c	-	4.80	4.20	1.30	18.60	頁岩(北上山地)	
310	46	45	II B8g II～III層	フレイク	II c	-	3.40	3.05	0.80	5.20	頁岩(北上山地)	
311	47	45	I B8f II～III層	敲磨器類	I	完形	75.79	68.24	27.20	233.91	閃緑岩(北上山地)	
312	47	45	I B8f II～III層	敲磨器類	I + III	完形	95.98	75.79	45.36	501.99	花崗岩(北上山地)	
313	47	45	II B3h II～III層	敲磨器類	I	完形	150.32	71.71	40.75	738.82	閃緑岩(北上山地)	
314	47	46	出土地点不明	敲磨器類	I	完形	164.00	75.77	59.26	1054.19	閃緑岩(北上山地)	
315	47	46	II A7e IV層	敲磨器類	I + III	完形	106.80	100.92	46.78	746.94	花崗岩(北上山地)	
316	47	46	I A6j IV層	敲磨器類	I + III	完形	132.31	74.20	37.52	601.22	細粒花崗閃綠岩(北上山地)	
317	48	46	III B1a I～II層	敲磨器類	I + II + III	2/3残存	103.41	92.24	75.14	1000.61	花崗岩(北上山地)	
318	48	46	II A5h IV層	石皿	-	完形	22.00	13.40	7.40	3100.00	花崗岩(北上山地)	

## 石製品

掲載番号	図版番号	写図番号	出土地点・層位	器種	残存状況	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	色調	石質(産地)	備考
72	17	41	1号住居床面上	玦状耳飾り	完形	41.87	41.62	5.10	16.85	黄灰	滑石(早池峰山周辺)	
73	17	41	1号住居埋土下位	玦状耳飾り	完形	34.43	30.84	6.58	10.18	暗灰	滑石(早池峰山周辺)	割れた状態で出土。接合した。
74	17	41	1号住居柱(63)内	玦状耳飾り	1/2残存	40.32	(19.76)	5.68	(5.82)	黄褐	滑石(早池峰山周辺)	体部に穿孔1箇所。
75	17	41	1号住居埋土下位	玦状耳飾り	1/2残存	26.27	(8.24)	(5.28)	(1.81)	オリーブ灰(半透明)	滑石(早池峰山周辺)	全体に研磨痕残る。
76	17	41	1号住居床面上	玦状耳飾り	1/2残存	(25.24)	(8.96)	(6.00)	(2.02)	灰	滑石(早池峰山周辺)	体部に穿孔1箇所。
77	17	41	1号住居床面上	玦状耳飾り	1/3残存	(25.44)	(15.33)	(5.36)	(2.98)	灰白	滑石(早池峰山周辺)	わずかに研磨痕残る。
319	48	46	II B6g II～III層	玦状耳飾り	1/2残存	(32.34)	(18.61)	(3.18)	(2.57)	灰オリーブ	滑石(早池峰山周辺)	全体に研磨痕残る。
320	48	46	I B8g II～III層	玦状耳飾り(未成品)	完形	29.89	23.36	5.44	5.34	灰	砂岩(北上山地)	穿孔あり。切れ目の作成が途中。
321	48	46	I B4f II～III層	石製円盤	完形	40.56	40.54	11.76	26.15	明褐	花崗岩(北上山地)	



## 2 平 安 時 代

### (1) 壁 穴 住 居 跡

#### 9号住居跡（第49～52図、写真図版15・47・51）

[位置・検出] 調査区東側の尾根中央部、II A 8h・8i、II A 9h・9iグリッドに跨り位置している。V層上面で検出されている。北壁は後世に削平され消失しているが、貼り床されていたため平面形を把握できた。

[その他遺構との重複] 18号土坑、19・20号土坑に切られており、本遺構が新しい。

[平面形] 方形を呈する。 [規模] 長軸614cm・短軸578cm・深さ16cm

[床面] 床面は大小の凹凸があるが、全体的にはほぼ平坦である。中央部から北側半分を中心に、黒褐色シルト混じりの暗褐色シルト・褐色シルトで貼り床が施されている。

[壁] 残存する南壁から、壁は外傾している。

[埋土] 15層からなる。主に炭化物、褐色シルトのブロックを含む黒褐色シルトで占められている。東壁際と西壁際の一部に焼土を伴う炭化材が検出されている。堆積状況から人為的に投げ込まれたものと考えられる。埋土の大半は自然堆積の様相を呈している。

[カマド] カマドは東壁中央部、南寄りに設けられている。カマドの構成礫であったと推定されるものが12個検出されているが、そのうち原位置を保っている礫は5個である。カマドは床を径80×90cm、深さ4～10cmの規模で掘って、扁平な礫をカマドの袖石にして構築されている。カマドは東壁から20cm程度離してつくられている。カマドは底面に礫をやや前に開く「コ」の字形に配置し袖部の礫を幾分内傾させて埋置している。構成礫の大きさは長径29～35cm・短径15～26cm・厚さ9～12cmである。燃焼部壁寄りに支脚が3個東西と南北に並んで検出されている。支脚は円柱状のものである。燃焼部の焼土は平面形がやや不整な橢円形で、規模が径38×51cm・厚さ5cmである。カマド本体の規模は幅80cm・長さ115cmである。長い煙道は検出されていないが、燃焼部から続く壁際が緩やかな立ち上がりを示していることから、煙道の一部であったと推定される。

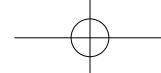
[付属施設] 中央部周辺に炉が2基検出されている。炉1は中央部にあり東側が削平を受けている。焼土は形状が不整な橢円形、規模が径92×98cm・厚さ6cmである。炉2は炉1の1m西側にあり一部攪乱を受けている。焼土は形状が不整形、規模が径52×56cm・厚さ3cmである。鍛造剥片等は検出されていない。

柱穴状ピットが10個検出されている。規模は径17～30cm、深さ6～44cmである。位置、規模から主柱穴を構成していたと考えられるものは、南壁中央部西寄りの柱穴（径22cm、深さ44cm）、北壁中央部西寄りの柱穴（径25cm、深さ30cm）と北東隅の柱穴（径30cm、深さ36cm）である。

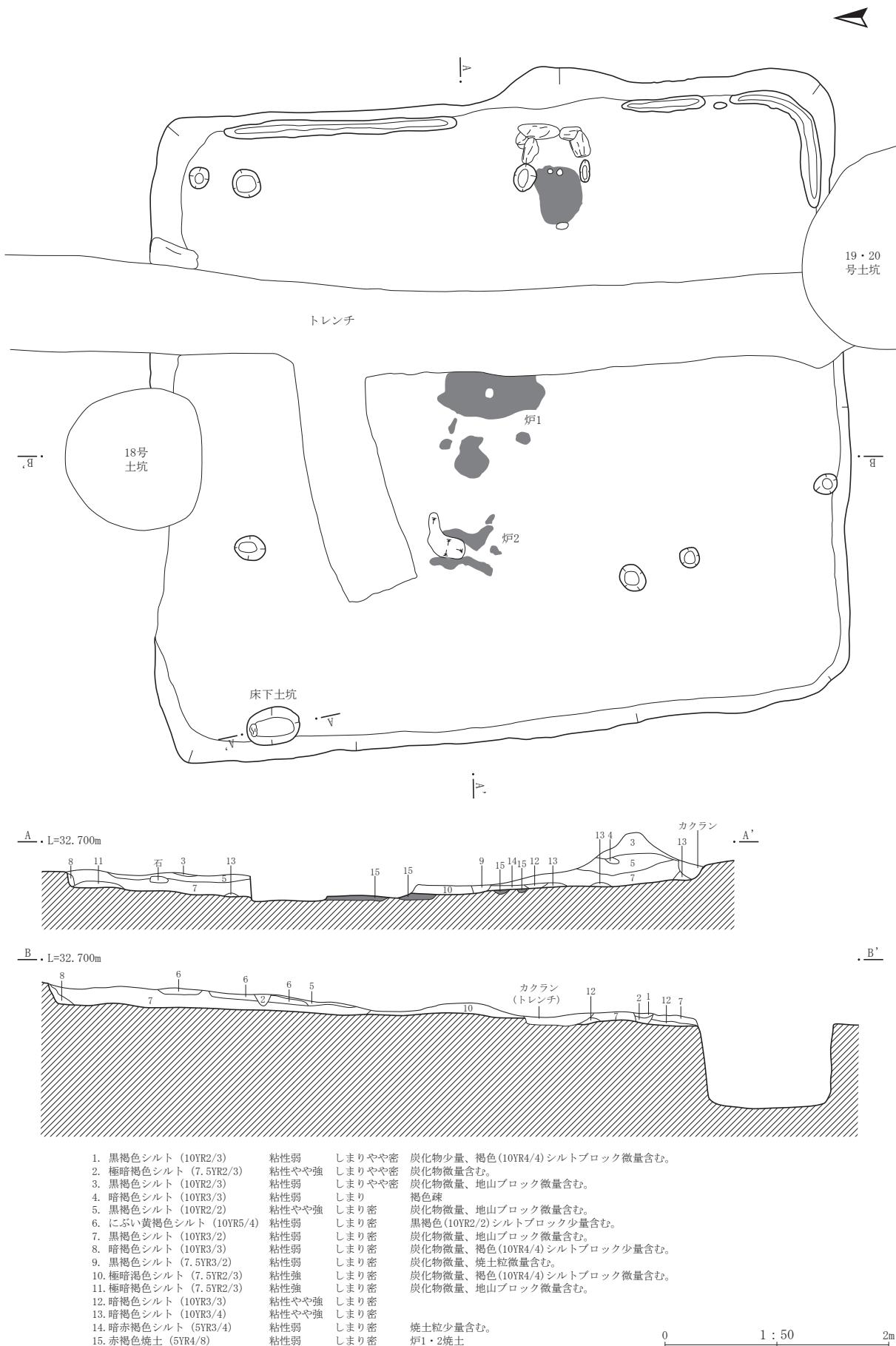
東壁際にカマドを挟んで両端に壁溝が検出されている。北側のものは、長さ210cm・幅10～12cm・深さ5cm、南側のものは南東隅まで延びていて、長さ245cm・幅8～11cm・深さ7cmの規模である。

北西隅近くの東壁際に、橢円形状の土坑が検出されている。規模は径56×34cm・深さ46cmである。底部は擂鉢状を呈している。埋土は炭化物、焼土粒を含む黒褐色～暗褐色シルトで占められている。貯蔵穴のような機能をしていたと考えられる。鉄製品が2点出土している。

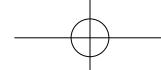
[出土遺物] 出土遺物は土器1,979.9g、支脚等の土製品1,098.5g、鉄製品2点、鉄滓190.1gである。



2 平安時代

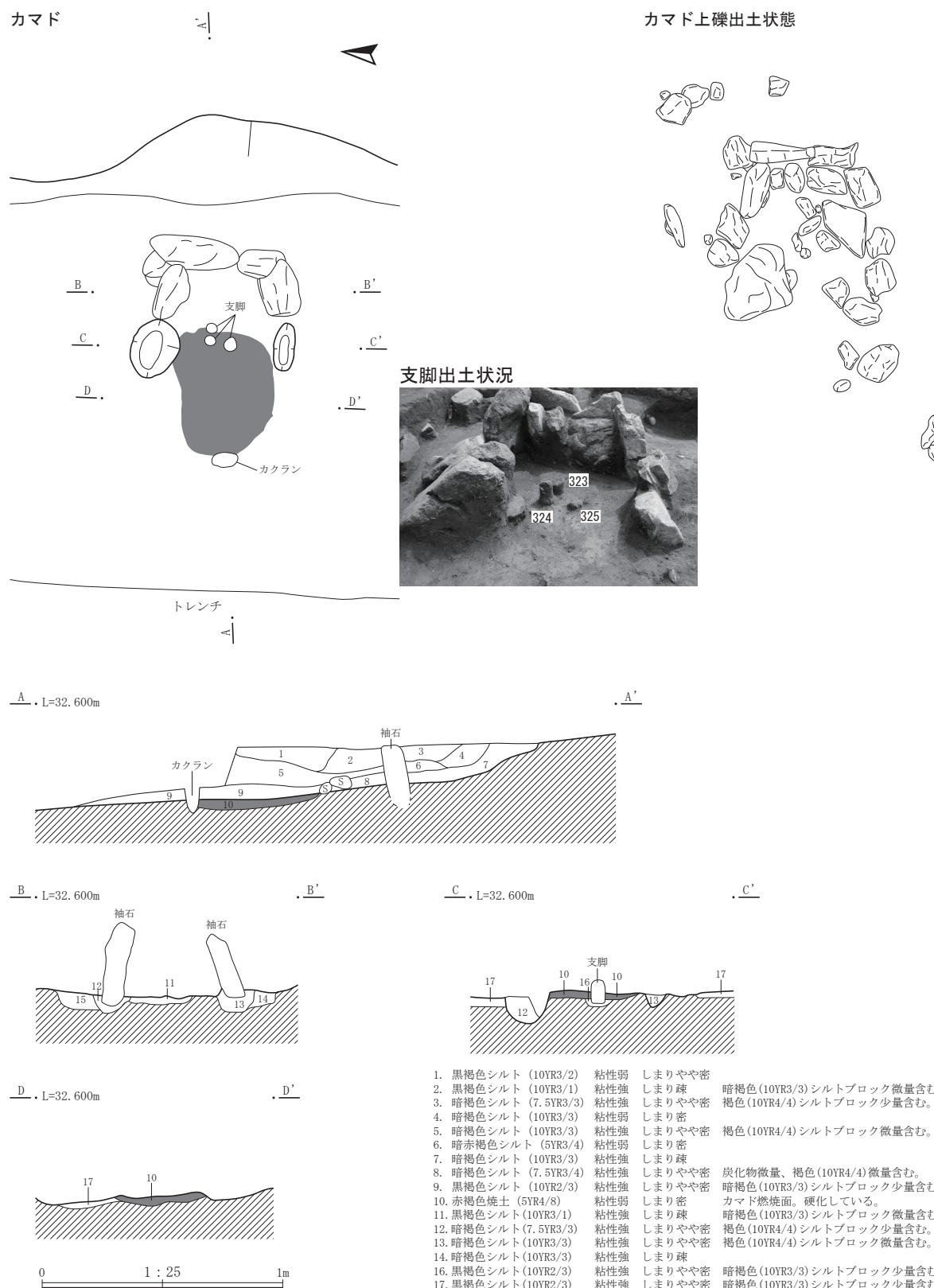


第49図 9号住居跡1

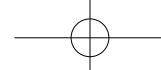


## VI 検出遺構・出土遺物

322は土師器甕形土器の底部片である。胴部内外面はヘラナデで調整されている。底部外面には木葉圧痕がみられる。図版に載せていないが小破片で土師器甕形土器の胴部片・底部片が出土している。胴部片は灰白色の色調で内外面がナデで調整されているものともう一つ橙色の色調で器壁0.6cmとやや厚く、内外面に輪積み痕が残るナデで調整されたものがある。また底部破片で木葉痕を有するが、



第50図 9号住居跡2

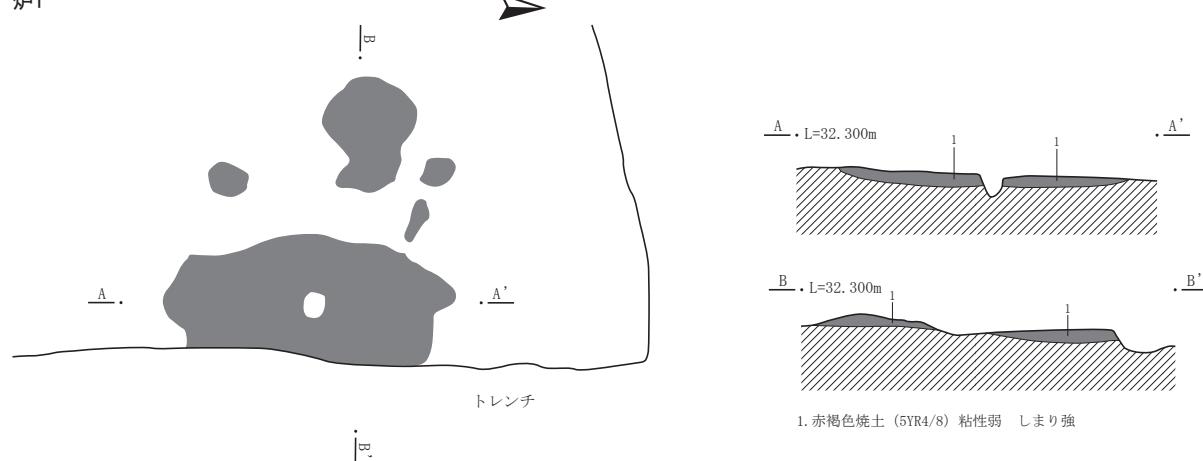


## 2 平安時代

底の端部が外に開く逆台形のものも出土している。

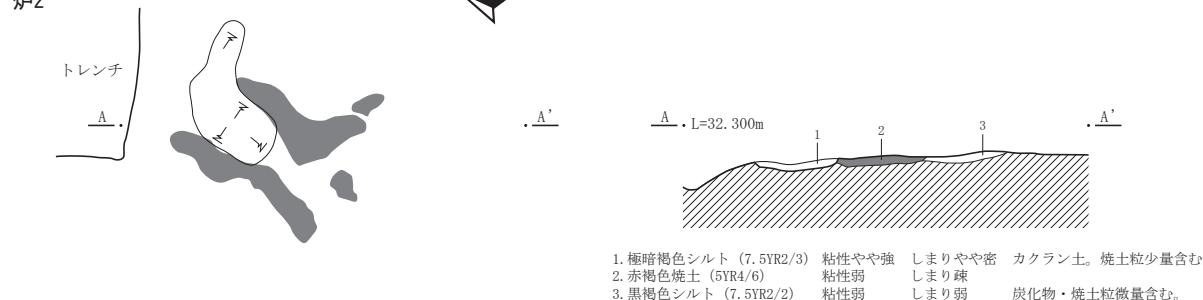
323～325はカマドの土製支脚の一部である。3点とも、円柱状で端部がやや開き、中央に径0.6～0.9cmの孔が貫通されているものである。指頭で整形されナデで調整されている。323・324はカマド燃焼部奥に東西に直線的に並んで据えられていたもので、上半部が欠損している。323は手前にあるもので、ほぼ燃焼部直上に置かれていた。324は4～5cm程埋められていた。胴部の太さを比較す

炉1



1. 赤褐色焼土 (5YR4/8) 粘性弱 しまり強

炉2

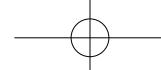


1. 極暗褐色シルト (7.5YR2/3) 粘性やや強 しまりやや密 カクラン土。焼土粒少量含む。  
2. 赤褐色焼土 (5YR4/6) 粘性弱 しまり疎  
3. 黒褐色シルト (7.5YR2/2) 粘性弱 しまり弱 岩化物・焼土粒微量含む。

床下土坑



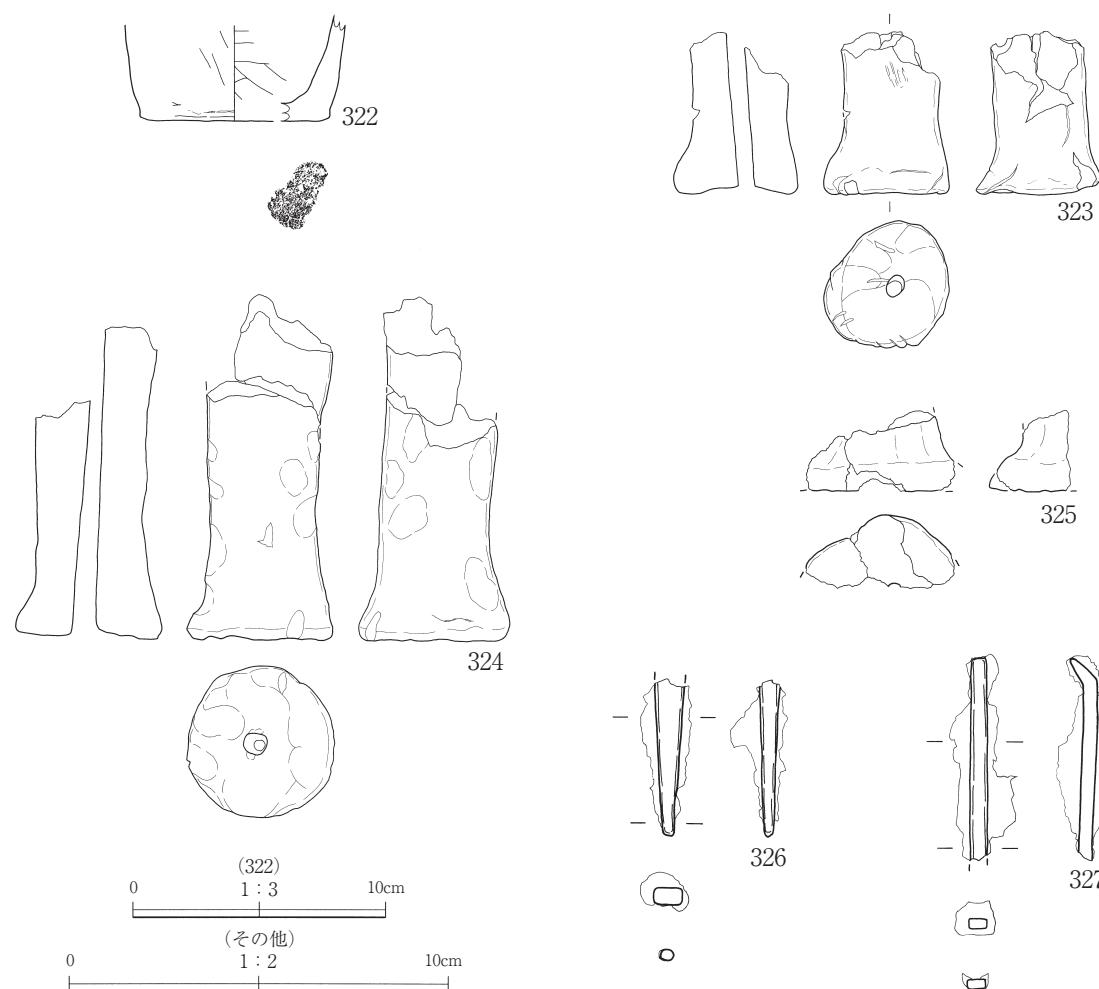
第51図 9号住居跡3



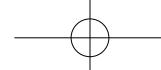
VI 検出遺構・出土遺物

ると324が径4.4cm、323が3.8cmと323より一回り大きいタイプのものである。325はカマド埋土から出土した端部のものである。324は21号土坑出土の破片と接合している。326は刀子の柄の部分、327は板状鉄製品である。埋土下位から出土している鉄滓の分析から、鉄滓は鍛冶滓が鍛練鍛冶滓、鉄塊系遺物が鍛打作業前の鍛冶原料であったこと（附編－2）が判明している。

〔時期〕出土遺物から平安時代中期、10世紀後半と考えられる。放射性炭素年代測定では $1,120 \pm 20$ yrBPである。曆年較正用年代（ $1\sigma$ ）では1,056～1,021calBP（894～929calAD）（34.2%）、1,011～982calBP（939～978calAD）（34.0%）（附編－1）である。  
（光井）



第52図 9号住居跡出土遺物



2 平安時代

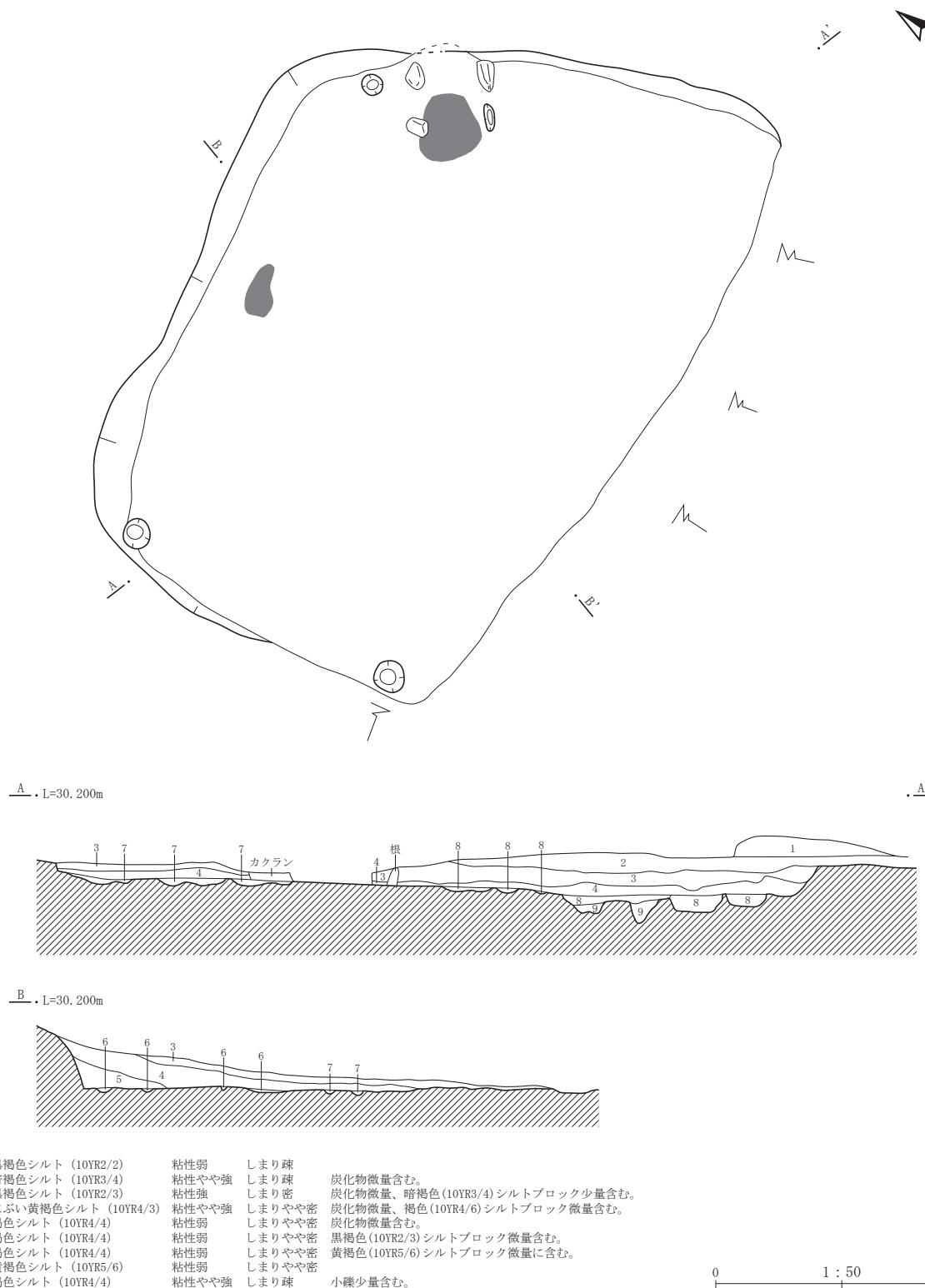
10号住居跡（第53～55図、写真図版16・47・51・52）

[位置・検出] 調査区東側尾根の南斜面上位、ⅢB 1c・1d、ⅢB 2c・2eグリッドに跨り位置している。検出面はV層上面である。斜面下方の南側半分は崩壊し消失している。

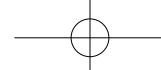
[その他の遺構との重複] なし

[平面形] 不整な方形を呈する。 [規模] 長軸442cm・短軸390cm・深さ46cm

[床面] 床面は一部礫が突出している部分もあるがほぼ平坦である。本遺構は小礫混じりの褐色シル



第53図 10号住居跡1



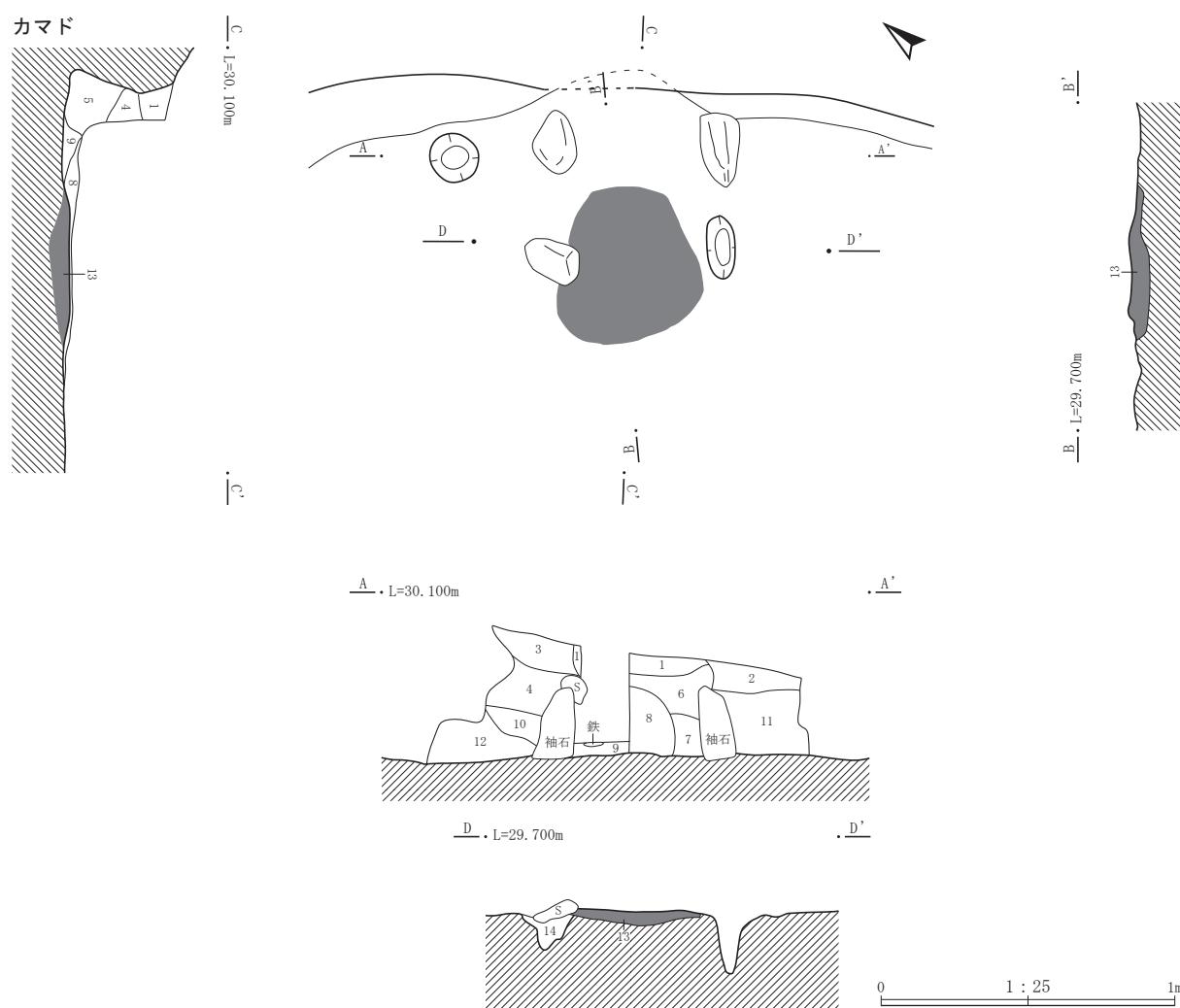
## VI 検出遺構・出土遺物

ト層を掘り込んでつくられている。床面は褐色～黄褐色シルトで貼り床がほぼ全体に施されている。

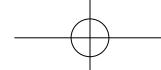
[壁] 床面より外傾しながら立ち上がり外反している。

[埋土] 埋土は5層からなる。主に上半部が炭化物や褐色シルトのブロックを含む黒褐色～暗褐色シルト、下半部が炭化物、褐色シルトのブロックを含むにぶい黄褐色シルトで占められている。埋土は断面の形狀が三角状になる堆積の仕方をしており、自然堆積の様相を呈している。

[カマド] カマドは北東壁中央部北寄りに設けられ、扁平な礫を袖石として構築されている。左袖に2個、右袖に1個残存している。壁際の左右の袖石2個が原位置を保っている。また、右袖には袖石の抜きとり痕が検出されている。袖石を3～9cm程埋め込んでやや内傾させて埋置している。袖石の大きさは径33～36cm、幅15～23cm、厚さ8～15cmである。燃焼部の直上にも細長い扁平な礫を検出されている。天井石または作業用の石として使用されたと推定される。大きさは長径62cm、短径40cm、厚さ10cmである。燃焼部の焼土は不整な橢円形を呈し、径48×51cm、厚さ5.5cmの



第54図 10号住居跡2



2 平安時代

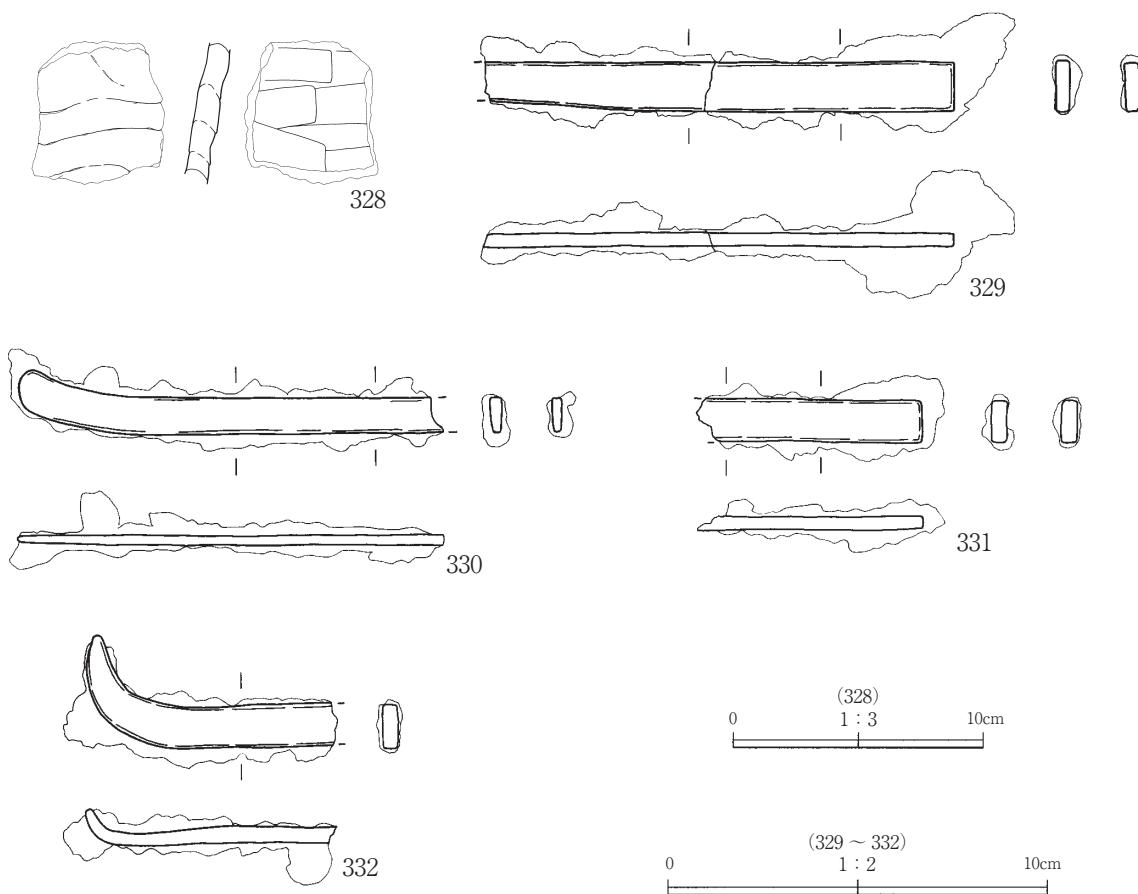
規模である。煙道は床面からオーバーハングしながら立ち上がっている。煙道は検出されてなく、屋外にどのような形で煙を排出していたかはわからない。カマド本体の規模は長径 90cm、幅 72cm である。

[付属施設] 北西壁中央部際に現地性焼土が検出されている。形状は不整な楕円形、規模は径 22 × 43cm、厚さ 2 cm である。表面はガリガリに堅く硬化し、被熱により明赤褐色に変色している。鍛造剥片等は検出されていない。柱穴が 3 個検出されている。カマド脇の柱穴は規模が径 20cm、深さ 22cm である。西隅にある柱穴の規模が径 41 × 46cm、深さ 43cm である。南西壁際にある柱穴は規模が径 26cm、深さ 30cm である。3 個は位置・規模から主柱穴を構成していた一部と考えられる。

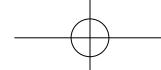
[出土遺物] 土器 288.8 g、土製品類 217.3 g、鉄製品 3 点、鉄滓 1,522.5 g が出土している。328 は土師器甕形土器の胴部片である。内外面をヘラナデで調整されている。外面に輪積み痕が顕著にみられるものである。胴部の小破片で図示されていないが、橙色の色調で器壁がやや厚く、内外面がナデ調整で、両面に顕著な輪積み痕が残るものが出土している。329～331 はカマド埋土から出土している板状の鉄製品で一部欠損している。330・332 は端部が「J」状に曲がっている。用途については不明である。これら使用して鉄製品を製作していたとも考えられる。鉄滓の分析から、埋土下位から出土している鍛冶炉の小破片が鍛打加工に用いられたもの、椀形鉄滓が精錬鍛冶滓であること（附編－2）が判明した。

[時期] 出土遺物から平安時代で 10 世紀代に属すると考えられる。放射性炭素年代測定は  $1,130 \pm 20$  yrBP である。曆年較正用年代 ( $1\sigma$ ) は 1,035～983 calBP (915～967 calAD) (53.2%) (附編－2) である。

(光井)



第 55 図 10 号住居跡出土遺物



## VI 検出遺構・出土遺物

### 11号住居跡（第56～60図、写真図版17・47・48・50・51）

[位置・検出] 調査区西区、南斜面下位、IB7d・7e・8d・8eグリットに跨り位置している。検出面はV層上面である。斜面下方にあたる南壁側は崩壊して消失している。

[その他の遺構との重複関係] 本遺構は1号住居跡を切り、31号土坑に切られていることから、1号住居跡より新しく、32号土坑より古い。

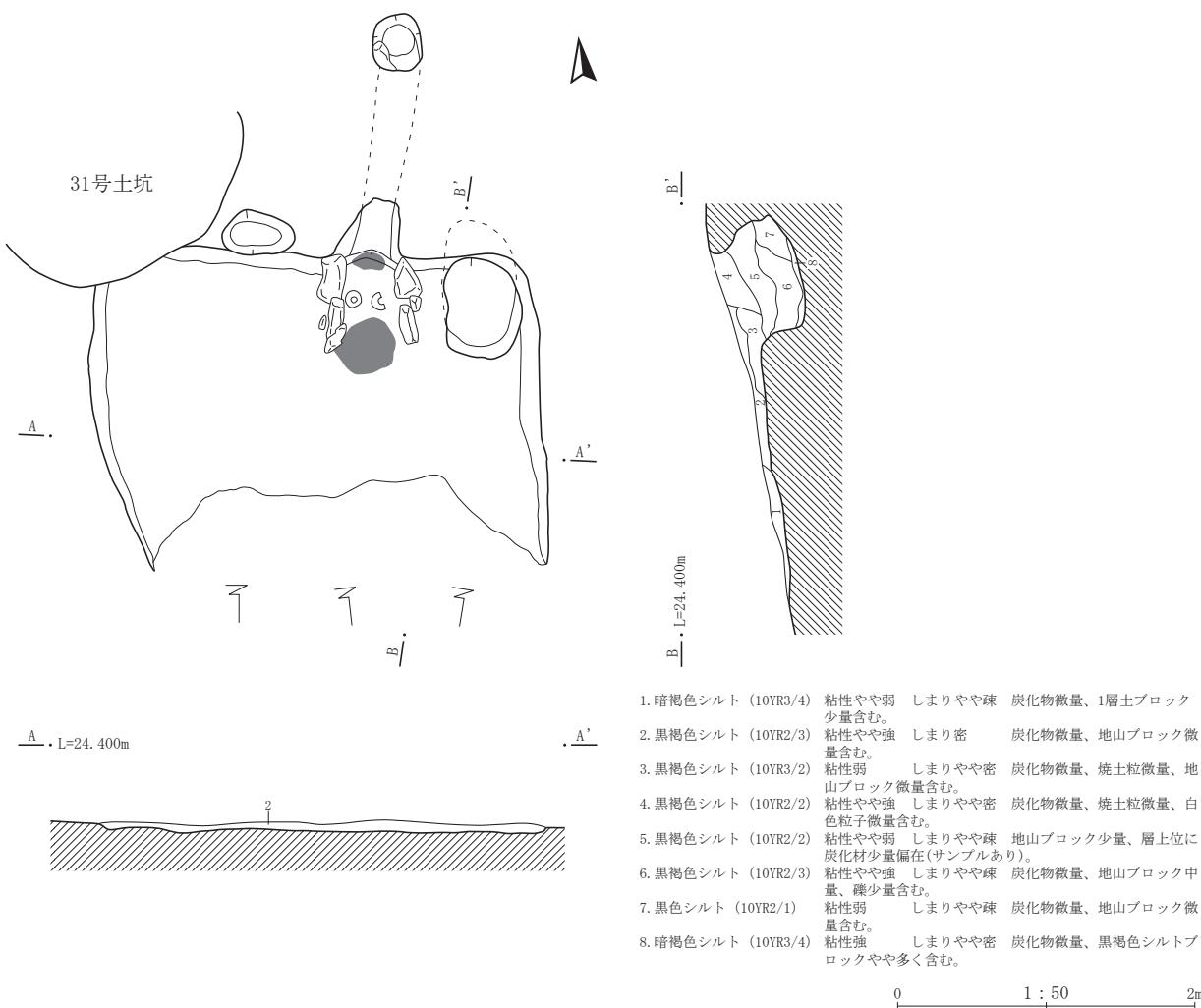
[平面形] 方形を呈する。 [規模] 305 × (220) cm

[床面] 床面は北壁側に一部凹凸があるが全体としては平らでしまっている。斜面下方側にやや傾斜している。

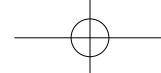
[壁] 残存する北壁から、壁は床面から丸味をもって立ち上がり外反している。最大壁高は北壁で38cmである。

[埋土] 壁際にある貯蔵穴を含めた埋土は7層からなる。主に炭化物、地山ブロックを含む黒褐色シルトで占められている。埋土は断面が三角状になる堆積をしており、自然堆積の様相を呈している。

[カマド] カマドは北壁中央部東寄りに設けられている。袖石と推定される礫が6個検出されているが、原位置を保っているのは袖部の4個で、残存状態は良好とはいえない。カマドは長径24～31cm、幅11～18cm、厚さ8～10cmの大きさの扁平な亜角礫を内傾させて埋置し、地山の黄褐色シルトのブロックを多く含む暗褐色シルトで礫間を充填させて構築していたと考えられる。カマド燃焼部の奥近

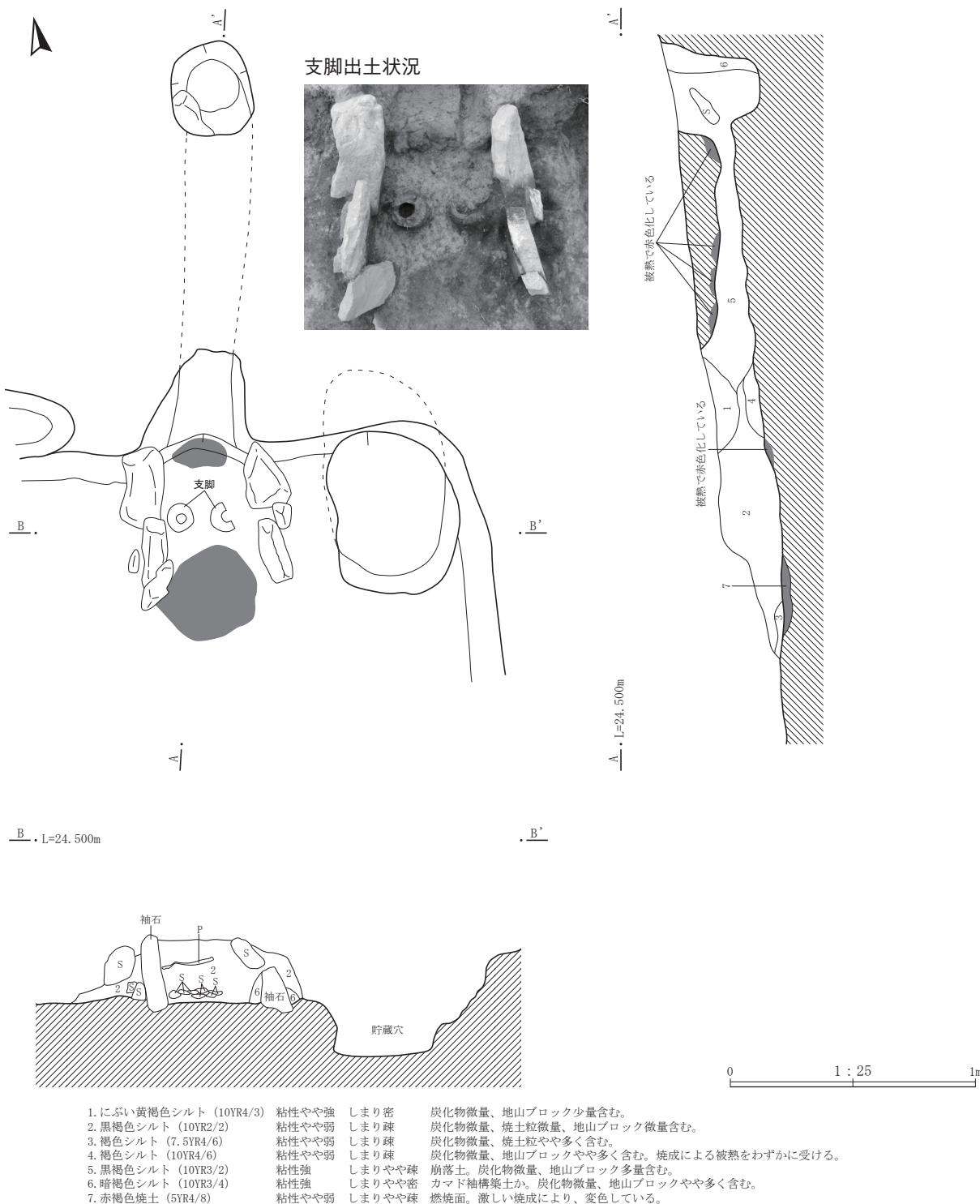


第56図 11号住居跡1

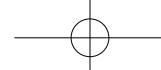


## 2 平安時代

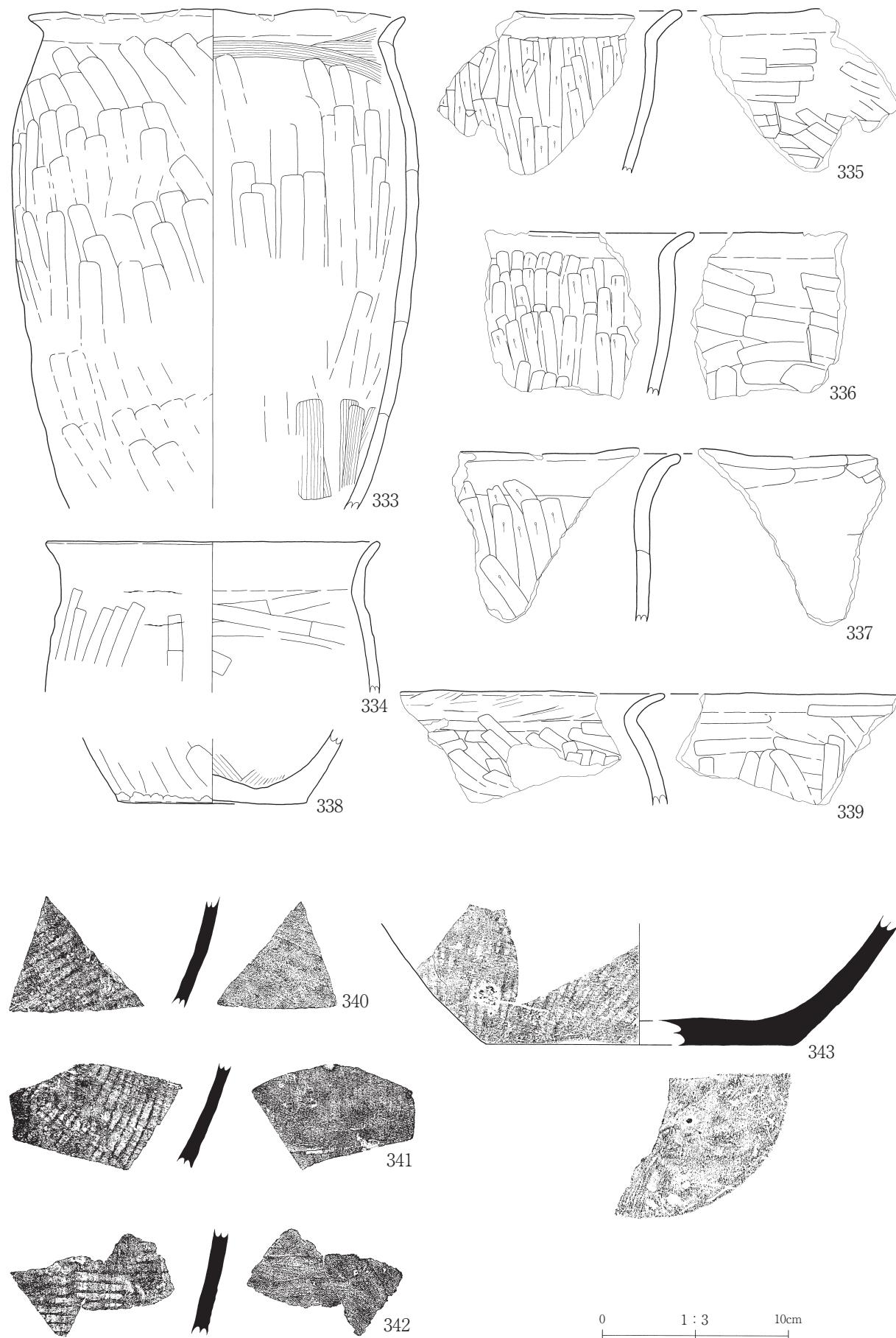
くに東西に並んで支脚が2個検出されている。燃焼部の焼土は円形状を呈し、径38×36cm、厚さ4cmの規模である。カマド本体の規模は幅75cm、長さ80cmである。煙道は割り貫き式で、壁際で立ち上がった後、やや下降してから、緩い傾きで上昇し、煙出し口に繋がる。煙出し口は大きさが、径32×38cm、深さ80cmである。長径15～20cmの礫が煙出し口から3個検出されており、一部は煙出し口の上部施設を構成していたものであると推定される。煙道部の規模は幅28cm、長さ162cmである。



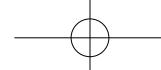
第57図 11号住居跡2



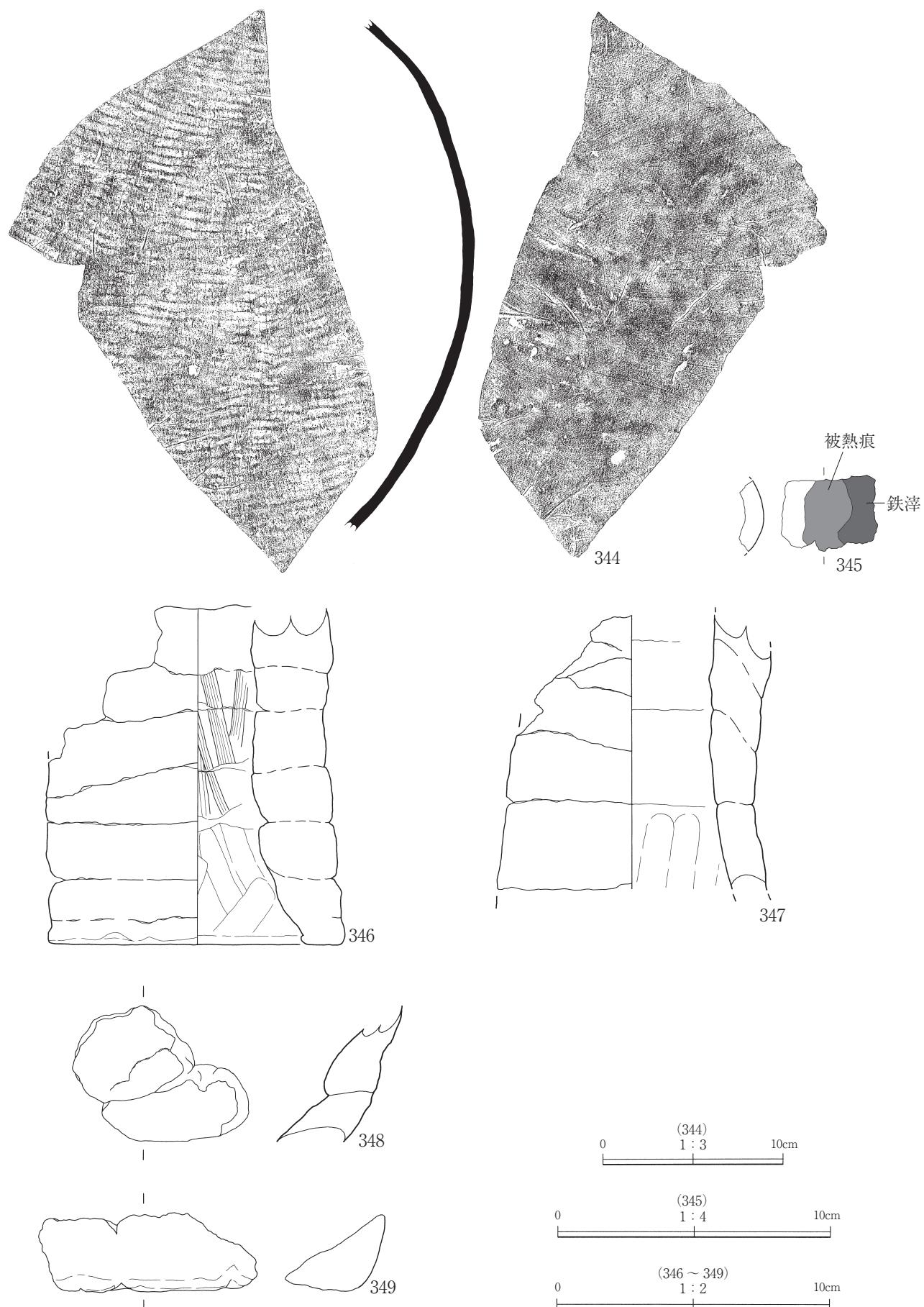
VI 検出遺構・出土遺物



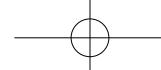
第 58 図 11 号住居跡出土遺物 1



2 平安時代

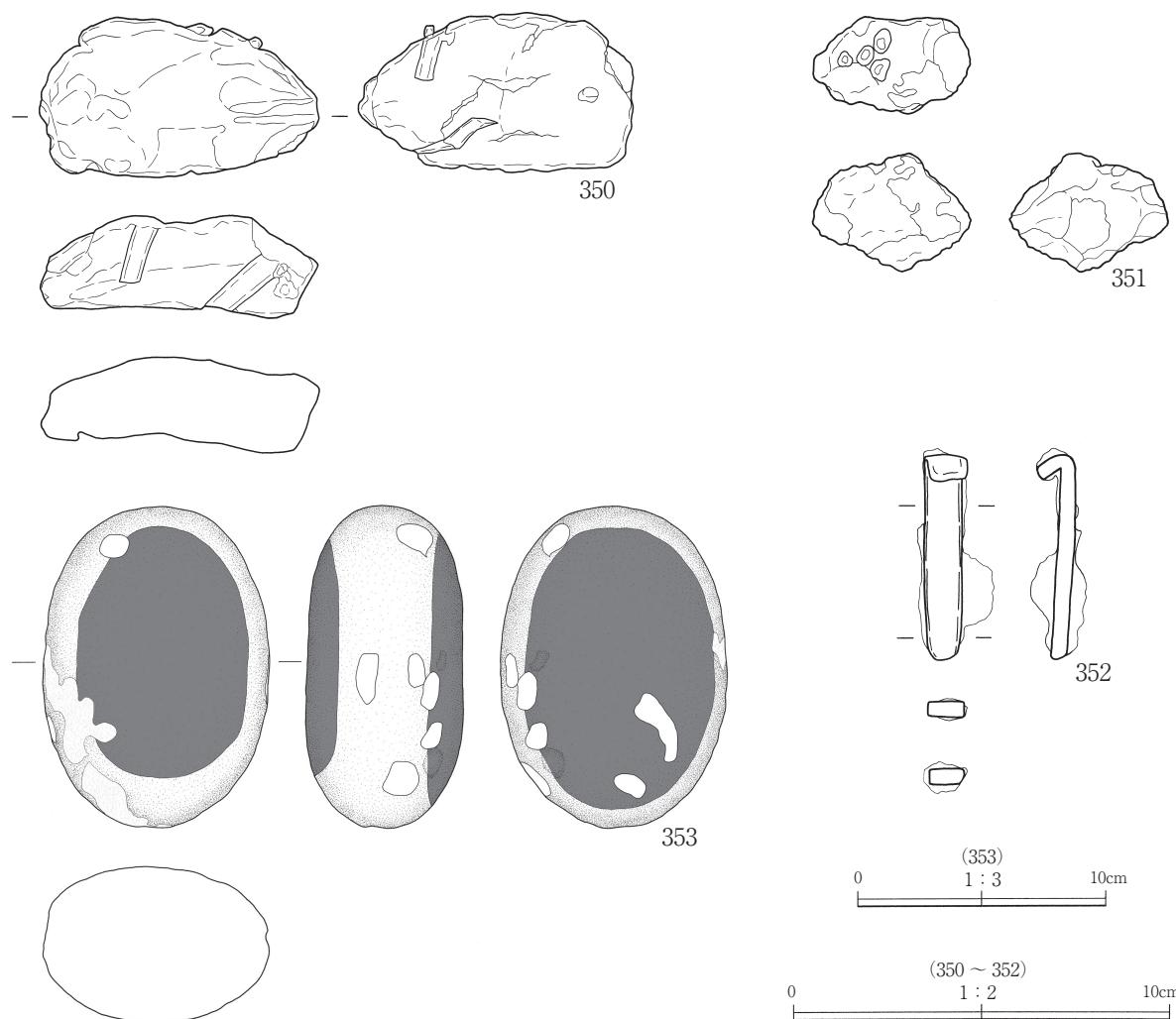


第59図 11号住居跡出土遺物2

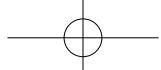


[付属施設] カマド右脇の北東隅から土坑が検出されている。土坑は形状が橢円形を呈し、底部が上げ底気味で、壁は北側がオーバーハングし、南側が外反しているものである。規模は径 68 × 50cm、深さ 60cm である。住居と土坑の埋土の断面と位置から土坑は住居に伴うもので貯蔵穴的機能を果たしていたものと考えられる。柱穴は検出されていない。

[出土遺物] 土器 3,470 g、支脚等の土製品 1,770 g、鉄製品 1 点、石製品 1 点が出土した。333 は埋土中位から出土した土師器甕形土器で胴部下半が欠損している。口縁部は短く強く外反し口唇部が歪んで小波状をなしている。口縁部、胴部上半の内面に多くの炭化物が付着している。内外面に輪積み痕がみられる。調整は口縁部がヨコナデ、胴部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。335～337 はカマド内の埋土から出土した土師器甕形土器口縁部片である。337 は口縁部が極端に短く緩く外反し口唇部に薄い陵をもつ。335・336 は口縁部が極端に短く外傾し口縁部と胴部が明瞭に分かれている。3 点とも調整は口縁部がヨコナデ、胴部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。338 は煙出し口の埋土から出土した土師器甕形土器底部片である。外面は胴部がヘラケズリ、底部がヘラケズリ、ヘラナデで調整されている。内面はヘラナデで調整され、中央部が膨らんで凸状になっている。339、344 はカマド右脇の土坑（貯蔵穴）から出土した土師器甕形土器の口縁部片である。339 は口縁部が極端に強く外反している。外面に輪積み痕がある。口唇部が歪んで一部小波状をなす。344 は口



第 60 図 11 号住居跡出土遺物 3



## 2 平安時代

縁部が短く緩く外反している。胴部外面に焦げ状の炭化物が付着している。2点とも口縁部がヨコナデ、胴部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデで調整されている。

343は須恵器甕形土器の底部片でカマド埋土下位から出土している。底径は20cm前後のものである。胴部外面をタタキ調整後、下端をヘラケズリ調整、内面をヘラナデ調整が施されている。底部は外面がヘラナデ、内面がヘラナデで調整されている。底部内面に指頭圧痕もみられる。344は須恵器甕形土器の胴部でも肩部当たりのもので、カマド埋土下位から出土している。外面にはタタキ目痕があり、内面はヘラナデで調整されている。340～342は須恵器甕形土器の胴部破片でカマド煙出し口の埋土から出土している。外面には、平行タタキ目痕がみられ、内面はヘラナデで調整されている。346、347はカマドに据えられていた土製支脚で、上半部が欠損している。形態は円筒状で端部が幾分開くものである。内壁も端部が4～5cm外に開き、器壁が下の方にいくにつれて薄くなっている。2点とも輪積み痕が顕著である。内外面はナデで調整せれているが、内面に指頭での整形痕が残る。外径は最大で346が10.8cm、347が9.8cmである。345は埋土下位から出土した羽口の先端部片である。摩耗が激しく内面の器壁が薄くなっている。348・349も土製支脚破片の一部である。350・351は焼成された粘土塊で工具による刺突や刻線を有するものである。用途は不明である。352は板状の鉄製品である。端部が折り曲がっていることから釘の可能性もある。353は磨石で縁辺部に磨痕が多く残っているものである。

[時期] 出土遺物から、平安時代中期、10世紀後半から11世紀前半以降に属すると考えられる。放射性炭素年代測定では、 $980 \pm 20$ yrBPである。歴年較正年代( $1\sigma$ )は932～905calBP(1018～1045calAD)(40.5%)である。

(光井)

## (2) 鍛冶工房跡

### 1号鍛冶工房跡 (第61～64図、写真図版18・19・48・50)

[位置・検出] 調査区東部尾根南端、ⅡB 6a～8a・7bグリッドに跨り位置する。検出面はIV層上面である。斜面下方の南側は崩壊して消失している。

[その他遺構との重複] なし。

[平面形] 方形を呈する。 [規模] 長軸556cm・短軸(236)cm

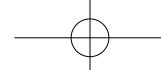
[床面] 床面は緩い凹凸があるが全体がしまっている。

[壁] 北壁のみが全部残存し、壁は幾分外反しながら立ち上がる。壁高は21cmである。

[埋土] 埋土は6層からなる。主に上半部が炭化物、褐色シルトのブロックを含む暗褐色シルト、下半部が炭化物、焼土粒を含む褐色～暗褐色シルトで占められている。炭化材が、北壁際からまとまって16点、北東隅近くで2点検出された。樹種鑑定の結果は、ケヤキ7点、クリ5点、ナラ4点、ホウノキ2点である。北東隅からの2点はホウノキである。それ以外のケヤキ、クリ、ナラは木炭として使われる材種であるとのことから、木炭として利用されていた可能性もある。

[付属施設] 炉が5基検出されている。

炉1は中央部にあり、炉2の南側の一部を切ってつくられている。炉1は外形が楕円形で、径74×55cm、内形が達磨形で擂鉢状のものを2つ合わせた「8」の字形を呈し、径40×22cm、深さ8～10cmの規模である。底部の2つの窪みには、楕形溝がびっしり残存していた。2つは同時に使われていたというより多少時間差があり南側が新しいと推定される。炉の断面から、炉は上部が堅く硬化している黒褐色、下部が赤褐色に被熱により変化している。厚さは上部が4cm、下部が6cmである。



## VI 検出遺構・出土遺物

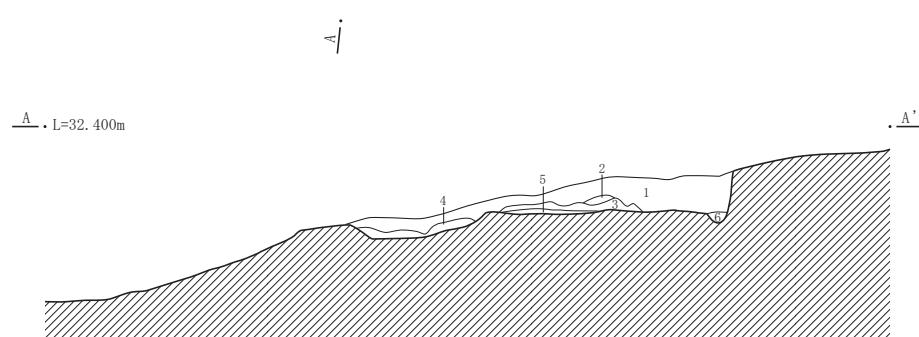
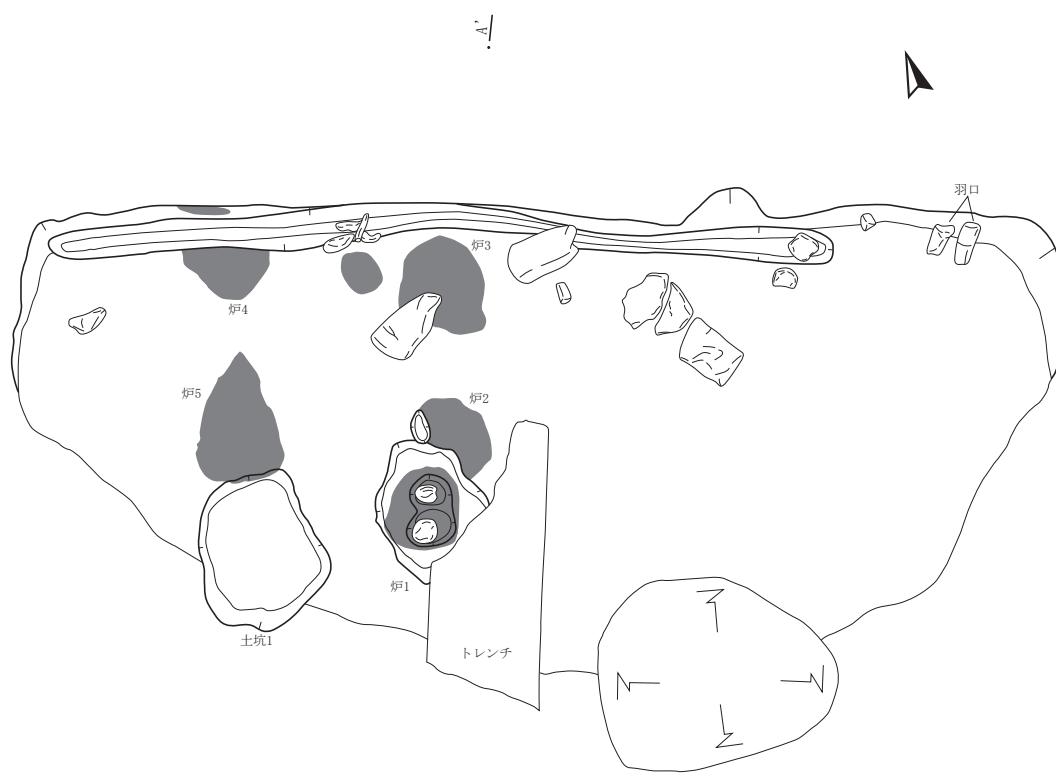
炉の掘り方ではない。北側の炉底と南側の炉底から合わせて椀形溝 398.1 g が出土された。

炉 2 は南側の一部が削られているが大部分が残っている。炉 1 をつくる際に壊されたものと考えられる。残存する焼土から、炉 2 は平面形が円形で、規模が径 50cm 程度であったと推定される。焼土は表面がガリガリに堅く、厚さが 8 cm である。

炉 3 は北壁中央部のやや西寄りの壁際にある。炉の焼土は表面がガリガリに堅く、平面形がほぼ橢円形で、規模が径 48 × 36cm・厚さ 10cm である。

炉 4 は炉 3 の西側 1 m の北壁際にある。炉の焼土は平面形が不整な円形で、規模が径 42 × 37cm・厚さ 10cm である。

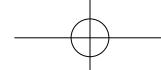
炉 5 は中央部西寄りにある。炉の焼土は表面がガリガリに堅く、平面形が南北に長い橢円形で、規



- |                     |       |        |                                     |
|---------------------|-------|--------|-------------------------------------|
| 1. 暗褐色シルト (10YR3/4) | 粘性やや強 | しまり密   | 炭化物微量、黄褐色(10YR5/6)シルトブロック微量含む。      |
| 2. 暗褐色シルト (10YR4/6) | 粘性強   | しまり密   |                                     |
| 3. 暗褐色シルト (10YR3/3) | 粘性やや強 | しまり密   | 炭化物微量、焼土粒微量含む。                      |
| 4. 暗褐色シルト (10YR3/3) | 粘性弱   | しまりやや密 | 炭化物微量、焼土粒微量、褐色(10YR3/3)シルトブロック少量含む。 |
| 5. 暗褐色シルト (10YR4/6) | 粘性弱   | しまり密   |                                     |
| 6. 黄褐色シルト (10YR5/6) | 粘性やや強 | しまり密   | 炭化物微量含む。                            |

0 1 : 40 1m

第 61 図 1 号鍛冶工房跡 1



## 2 平安時代

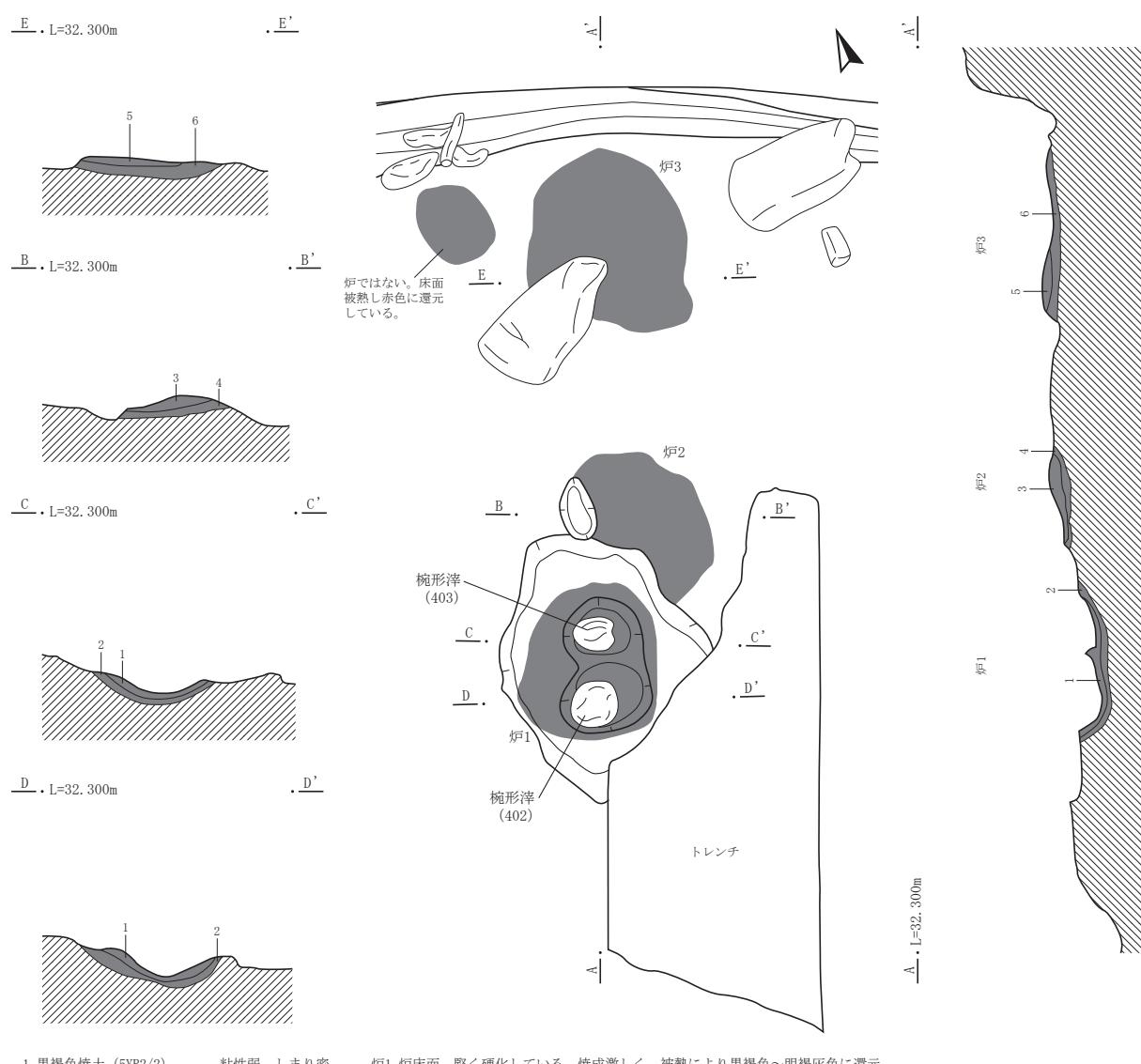
模が径  $62 \times 38\text{cm}$ ・厚さ  $12\text{cm}$  である。土坑 1 の埋土の上につくられている。このことから、炉 5 は土坑 1 より新しい。

土坑 1 は、平面形が橢円形で規模が径  $90 \times 72\text{cm}$ ・深さ  $22\text{cm}$  である。底面は壁際が浅くなる浅皿状を呈している。埋土は炭化物、焼土粒を含む褐色シルトで占められている。規模、位置などから炉 1 のような炉を取り除いた後、作業用にして使われたとも考えられる。

北壁際に壁溝が検出されている。規模は長さ  $412\text{cm}$ ・幅  $16 \sim 25\text{cm}$ ・深さ  $9 \sim 17\text{cm}$  である。埋土は炭化物を含む黄褐色シルトである。柱穴は検出されていない。

主に炉 1・2 の周囲から、鍛造剥片が多量に、また粒状剥片が少量検出されている。床面直上から鉄床石が出土し、また、北西隅から並んだ状態で羽口が 2 個、南西隅から羽口が 1 個検出している。これらのことから大鍛冶（製錬）と小鍛冶の両作業が行われていた鍛冶工房跡であると考えられる。

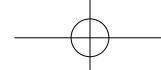
[出土遺物] 土器  $101.4\text{ g}$ 、羽口等の土製品  $1,770\text{ g}$ 、鉄滓  $1,630.8\text{ g}$ 、石製品 2 点、鉄床石 4 点が出土した。



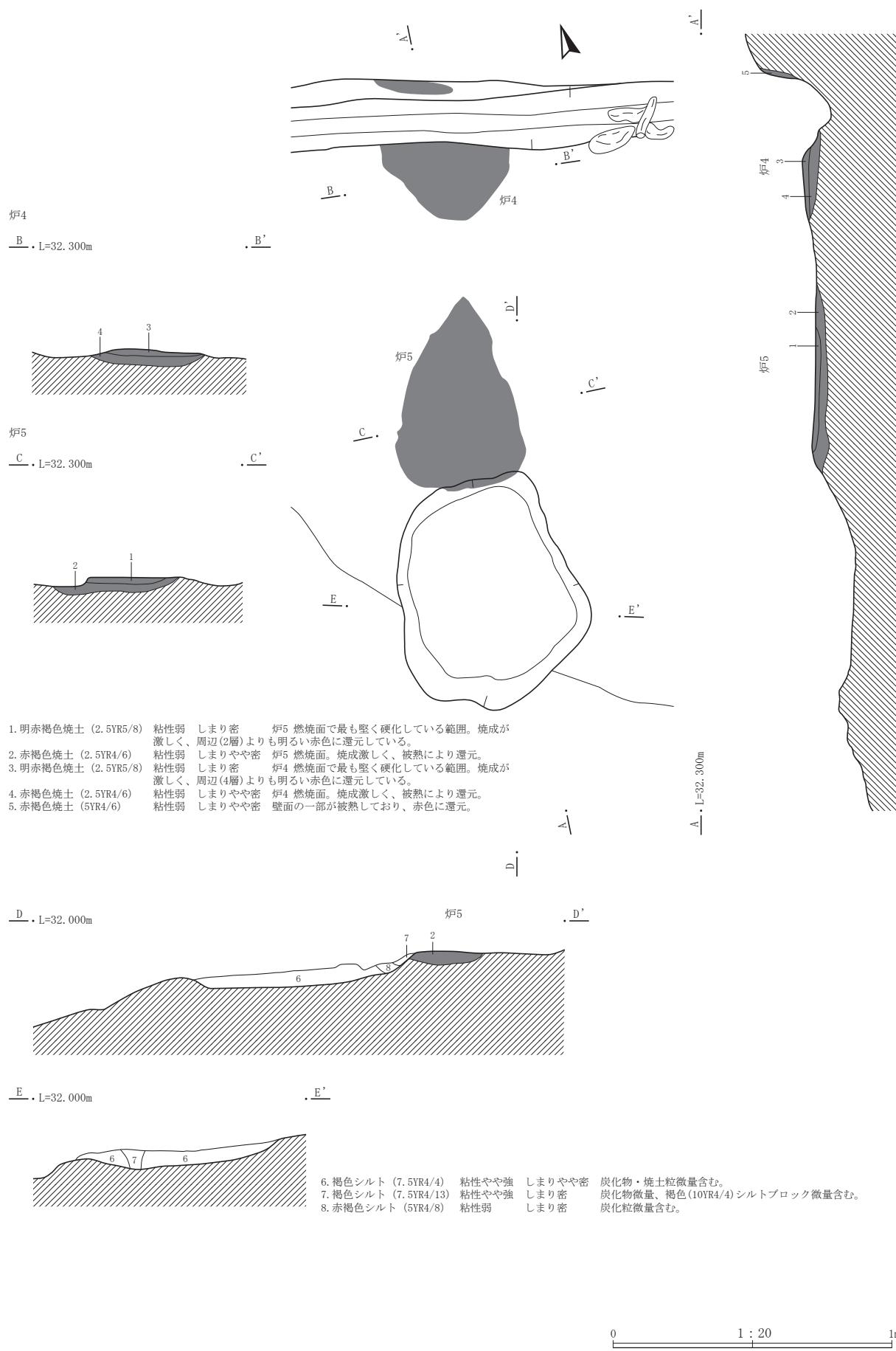
- |                      |     |        |   |
|----------------------|-----|--------|---|
| 1. 黒褐色焼土 (5YR2/2)    | 粘性弱 | しまりや密  | 炉1 炉床面。堅く硬化している。焼成激しく、被熱により黒褐色～明褐色に還元。              |
| 2. 赤褐色焼土 (5YR4/8)    | 粘性弱 | しまりやや密 | 炉床周辺が、被熱により赤色に還元。                                   |
| 3. 赤褐色焼土 (5YR4/6)    | 粘性弱 | しまり密   | 炉2 燃焼面で最も堅く硬化している範囲。焼成が激しく、周辺 (4層) よりも明るい赤色に還元している。 |
| 4. にぶい赤褐色焼土 (5YR4/4) | 粘性弱 | しまりやや密 | 炉2 燃焼面。焼成激しく、被熱により還元。                               |
| 5. 赤褐色焼土 (5YR4/6)    | 粘性弱 | しまり密   | 炉3 燃焼面で最も堅く硬化している範囲。焼成が激しく、周辺 (6層) よりも明るい赤色に還元している。 |
| 6. にぶい赤褐色焼土 (5YR4/4) | 粘性弱 | しまりやや密 | 炉3 燃焼面。焼成激しく、被熱により還元。                               |

0 1 : 20 1m

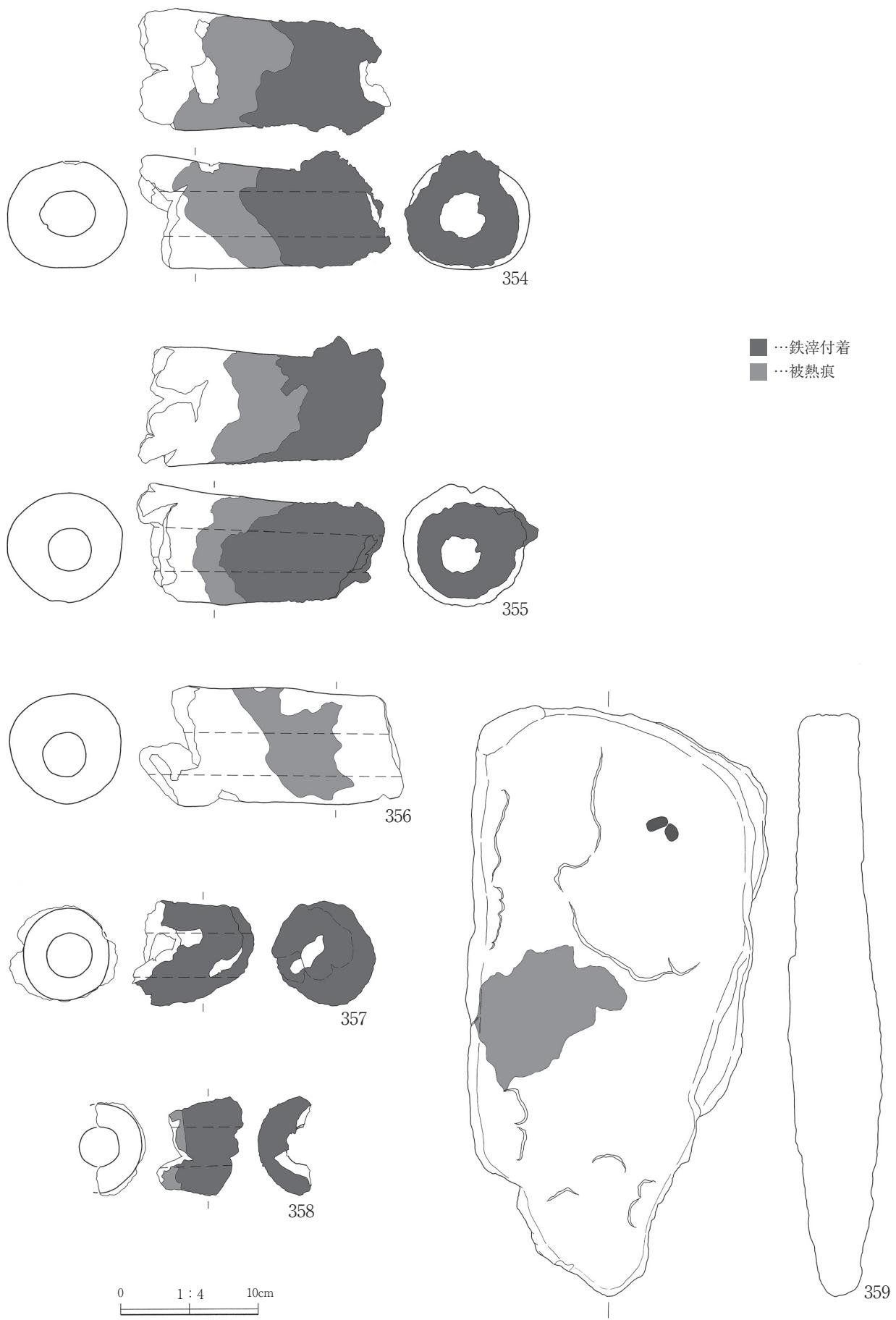
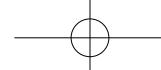
第 62 図 1 号鍛冶工房跡 2



## VI 検出遺構・出土遺物



第63図 1号鍛冶工房跡3



第 64 図 1 号鍛冶工房跡出土遺物

図版に載せていないが土師器甕形土器の胴部や底部の小破片が出土している。胴部片は内外面ナデ調整で灰白色のものと、輪積み痕がみられる橙色のものである。底部小破片は木葉圧痕をもつ。羽口が5点出土している。354、355は北東隅の床面から先端部を北に向けて2つ並んだ状態で出土している。意識的に置かれていたものと考えられる。両方とも端部は欠損している。356は南西隅の床面から出土した胴部片である。358は埋土最下部から出土した先端部破片である。

357は炉1の埋土から出土したもので4号鍛冶工房跡から出土した羽口と接合している。354～356は残存長が18.1～19.3cm、外径が8.3～8.9cm、内径3.2～4.0cmのものである。359は床面から出土したもので表面に鉄滓痕や叩打痕がみられる鉄床石である。径42×21cm、厚さ6cmの扁平な礫である。鉄滓の分析から、床面から出土した鉄滓は椀形鍛治滓、鍛治滓は鍛練鍛治滓である（附編-2）という結果が出ている。

[時期] 出土遺物から平安時代で10世紀代に属すると考えられる。放射性炭素年代測定では $1,080 \pm 20$ yrBPである。暦年較正用年代（1σ）は988～952calBP（962～998calAD）（45.0%）（附編-1）である。

（光井）

## 2号鍛冶工房跡（第65図、写真図版20）

[位置・検出] 調査区東端、南斜面上部、ⅡB 9c・10b・10cグリッドに位置する。V層上面で検出されている。斜面下方の南側は崩壊して消失している。

[その他遺構との重複] なし

[平面形] 隅丸方形を呈している。 [規模] 長軸388cm・短軸（190cm）・深さ24cm

[床面] 床面は緩い凹凸があるがしまっており、全体としてはほぼ平坦である。

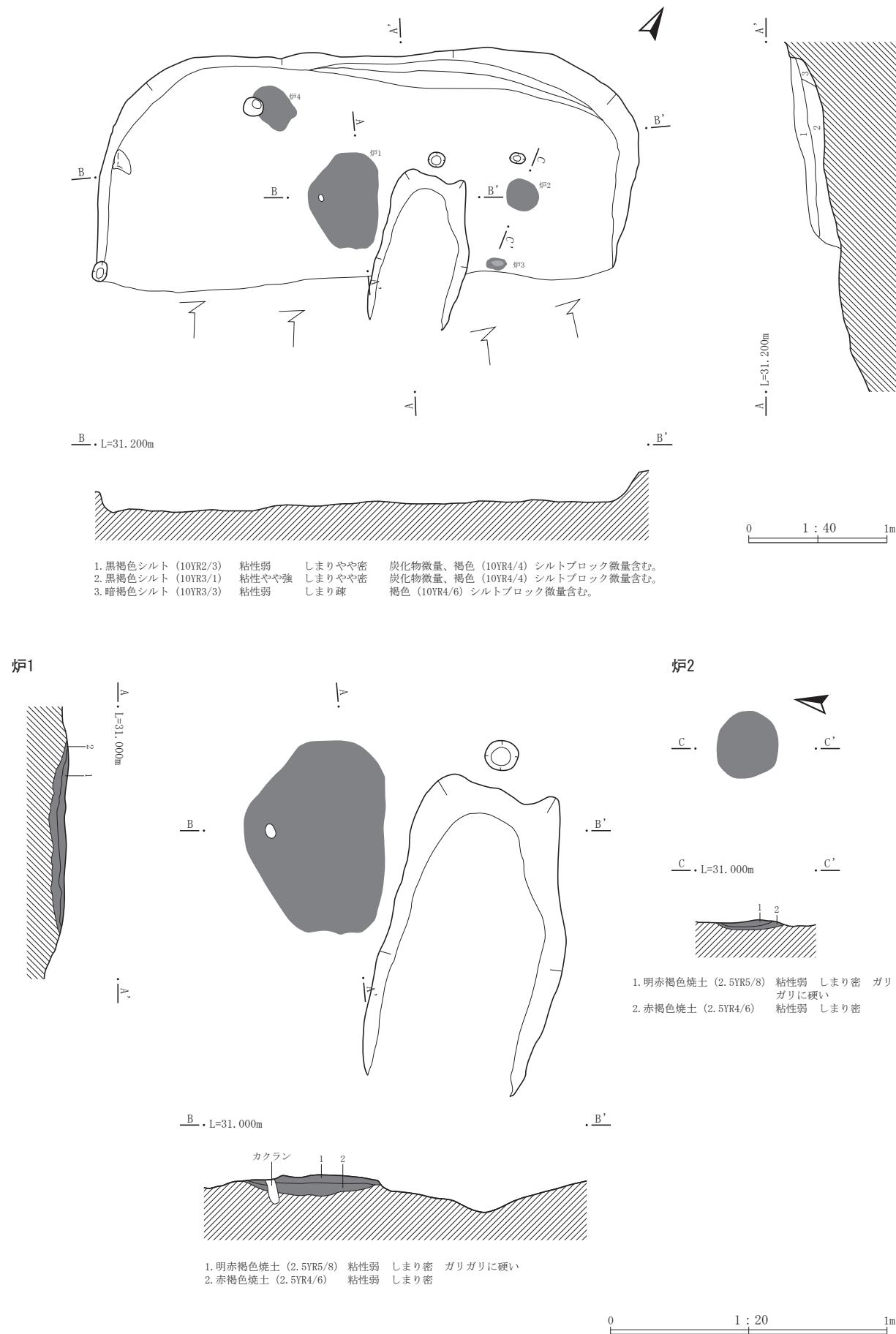
[壁] 壁は内湾しながら立ち上がりつつある。北壁際の南側からは、長さ180cm・幅14cm・高さ6cm規模の階段状の段が検出されている。地山を残してつくられている。作業用や出入口に関するものなのか、作り替えした残存部なのかは不明である。

[埋土] 埋土は3層からなる。主に炭化物や褐色シルトのブロックを含む黒褐色シルトで占められている。堆積状況から自然堆積と判断した。

[付属施設] 炉は4基検出されている。炉1は中央部にあり、表面がガリガリに硬化している。炉の焼土は形状が南北に長い楕円形で、規模が径74×54cm・厚さ6cmである。炉2は炉1の東1mにあり、表面が炉1と同じようにガリガリに硬い。炉の焼土は形状がほぼ円形で、規模が径32×28cm・厚さ4cmである。炉3は炉2の南側50cmにあり、斜面下方側にあるため大半が崩壊し消失している。残存する焼土は形状が不整楕円形で、規模が径13×8cm・厚さ3cmである。炉4は北西隅にある。表面はガリガリまでに硬くなっている。炉の焼土は形状が楕円形で、規模が径32×22cm・厚さ2cmである。4つの炉周辺から鍛造剥片等は検出されていない。しかし、特に炉1や炉2のように表面がガリガリに厚く硬くなっていることや遺跡内の1号鍛冶工房等の類例から、小鍛冶の機能をしていたと考えられる。

また、炉1と炉2の間に幅広い溝状の窪みが検出されている。規模は幅66cm・長さ110cm・深さ22cmである。埋土は炭化物、焼土粒が少量含む暗褐色シルトで占められている。位置、形態から作業に関係した遺構でないかとも考えられる。柱穴は4個検出されている。規模は炉2近くのものが（径14cm・深さ7cm）、炉1の北東のものが（径13cm・深さ19cm）、炉4と重なるものが（径12cm・深さ25cm）、南東壁のものが（径11cm・深さ19cm）である。柱穴配置は不明である。

[出土遺物] 土器82.4g、鉄滓64.6gが出土している。図版に載せていないが、土師器甕形土器で口



第65図 2号鍛冶工房跡

縁部が極端に短く外反する小破片が床面から出土している。ヨコナデ後、外面をヘラケズリ、内面ヘラナデ調整されている。鉄滓の分析から、埋土下位から出土している椀形鍛冶滓は鍛練鍛冶滓であること（附編－2）が判明している。

[時期] 出土土器から平安時代中期の10世紀後半に属すると考えられる。放射性炭素年代測定では、 $1,120 \pm 20\text{BP}$ である。曆年較正用年代（ $1\sigma$ ）は 1,056 ~ 1021calBP (894 ~ 929calAD) (36%)、1,011 ~ 981calBP (939 ~ 969calAD) (32.2%)（附編－1）である。（光井）

### 3号鍛冶工房跡（第 66 ~ 69 図、写真図版 21・22・48・50）

[位置・検出状況] 調査区中央の緩斜面上、I A8 ~ 10j・I B9 ~ 10a グリッドに位置する。V層上面で検出した。斜面下方にあたる本遺構の南西～南側は、斜面の土砂崩れ、ないし近世以降に植林のための削平により消失している。

[他の遺構との重複関係] 5号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。

[平面形] 隅丸長方形を呈する。

[規模] 長軸 (324) cm、短軸 762cm、深さ 55cm

[埋土] 24層からなる。1～10層は斜面の土砂崩れによる流れ込みの層と考えられ、黒褐色シルトを主体として粒状の炭化物・焼土のほか地山シルトブロックが混入する。11～24層が本遺構に伴い、その内22層は煙道堆積層、23層はカマド燃焼面、24層は炉3燃焼面に細分される。堆積土は暗褐色シルトを主体とし、粒状の炭化物・焼土のほか地山ブロックが混入する。堆積状況から自然堆積とみられる。

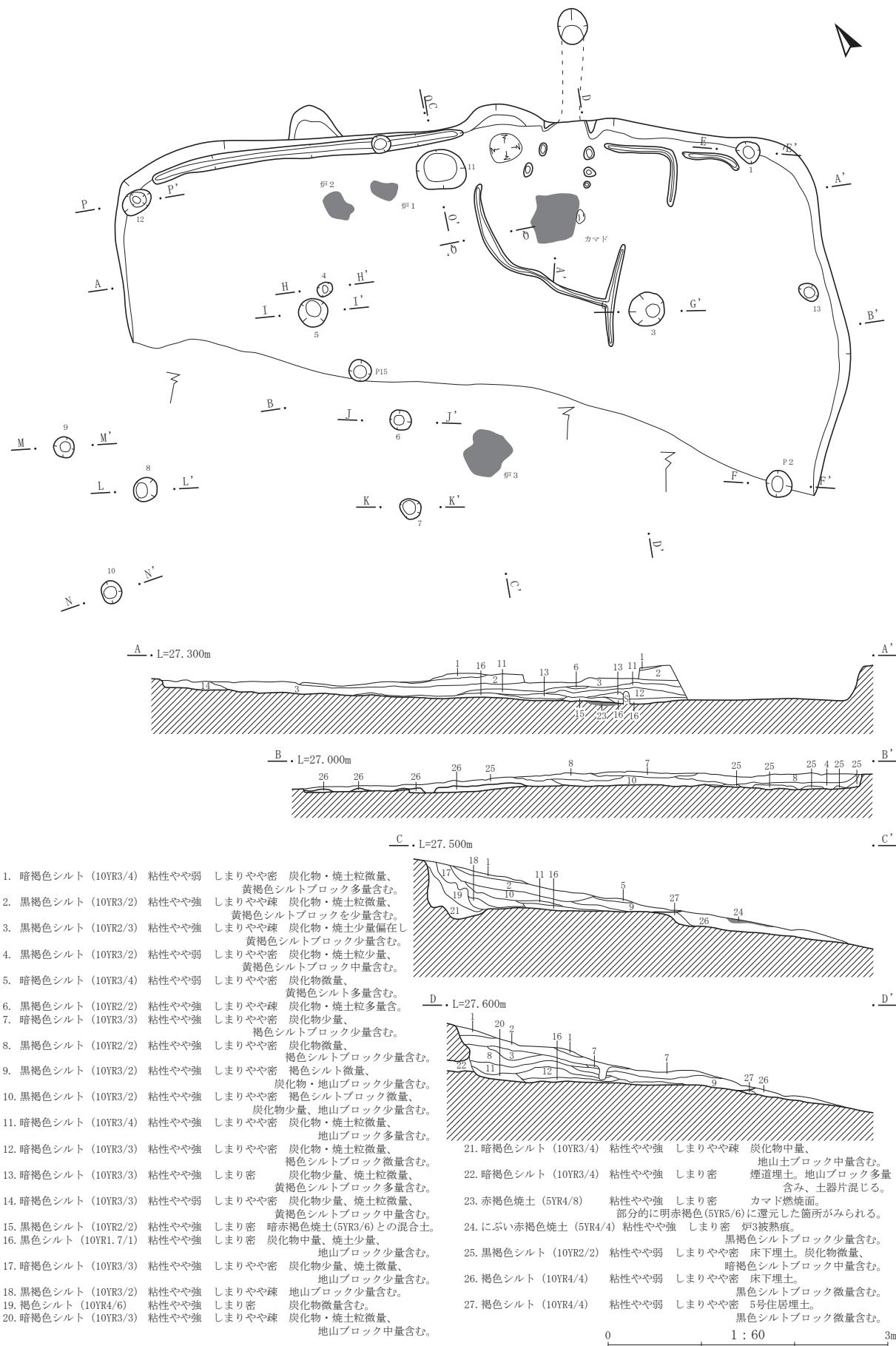
[床面] カマドを検出した面を床面とする。加えて、斜面下方の南側半分は5号住居跡と重複し、この埋土を一部削平するように本工房跡床面の概ね平坦な面が構築されている。

[壁] 斜面上方の北壁と、東壁、西壁の北半部の立ち上がりを検出した。若干外へと広がるが、概ね直立気味に立ち上がる。南壁と西壁の南半部の立ち上がりは消失している。

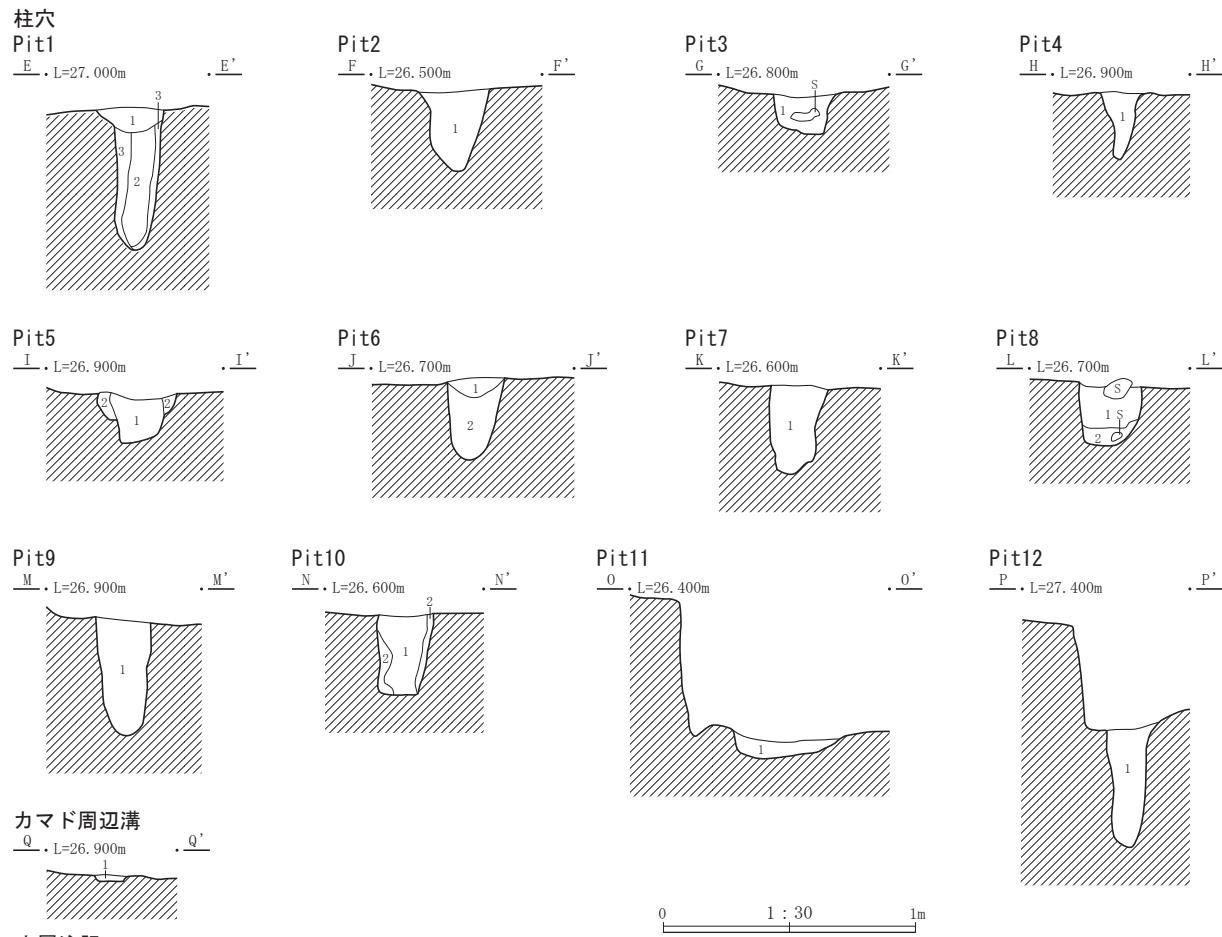
[カマド] 北壁に設置され、壁中央からやや東寄りに位置する。燃焼面・両袖の一部・煙道・芯材を設置した痕跡が残存する。燃焼面は  $50 \times 48\text{cm}$  を測り、被熱は強く、4cmほど赤褐色に還元し表面の硬化は著しい。燃焼面中央から壁面煙道口までは 100cm ほど離れている。袖は一部地山の削り出しで、東側は長さ 20cm、西側は長さ 10cm 分残存している。またこの両袖の延長線上に、燃焼面にかけて軸を同じくして東側で3基、西側で2基の窪みが検出されている。これらは袖を構築する芯材を設置した痕跡と考えられ、燃焼面の縁辺部に残る芯材には礫が用いられている。煙道は割り貫き式で天井部が残存し、北壁から斜面上方側へまっすぐ貫いて 100cm を測る。そこからほぼ垂直に立ち上がり、上方へ 60cm ほどを測り開口する。

[付属施設] カマドとは別にして、3箇所の燃焼面を炉跡として床面上で確認した。炉1・2は近接しており、北壁付近の西側に位置している。炉1は  $30 \times 20\text{cm}$  の楕円形を呈し、被熱は 2cm ほど赤褐色に還元している。炉2は  $33 \times 22\text{cm}$  の楕円形を呈し、被熱は 3cm ほど赤色化しており、両箇所とも被熱は弱い。炉3は斜面下方である南側のほぼ中央に位置し、床面の残存範囲外にある。床面の高さからは 5cm 程下がり、斜面の土砂崩れの影響から現地性が失われている可能性も考えられるが、位置関係から本遺構に付属するものと推察される。炉3は  $49 \times 44\text{cm}$  の楕円形を呈し、被熱はやや弱く、3cmほど赤褐色に還元している。

カマド燃焼面の周辺には、これを取り囲むように細い溝状の窪みが検出されている。東西走向 190cm、南北走向 110cm、幅 10 ~ 12cm、深さ 3cm を測る。



第66図 3号鍛冶工房跡1

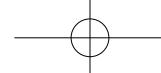


付属施設名	層	土質・色調	粘性	しまり	埋土様相・混入物
Pit1	1	暗褐色シルト (10YR3/3)	やや弱	やや密	柱抜取痕。炭化物微量、黄褐色シルトブロック微量
	2	黒褐色シルト (10YR3/2)	やや弱	やや密	柱痕跡。炭化物微量、黄褐色シルトブロック微量
	3	褐色シルト (10YR4/4)	やや強	やや密	掘方埋土。暗褐色シルト多量
Pit3	1	暗褐色シルト (10YR3/3)	弱	密	炭化物微量、黄褐色シルトブロック多量
Pit4	1	黒褐色シルト (10YR3/2)	弱	密	炭化物中量、焼土粒微量、黄褐色シルトブロック少量
Pit5	1	黒褐色シルト (10YR2/3)	やや強	密	炭化物少量、黄褐色シルトブロック少量
Pit6	1	暗褐色シルト (10YR3/3)	やや弱	密	柱抜取痕か。炭化物少量、焼土粒微量、黄褐色シルトブロック少量
	2	にぶい黄褐色シルト (10YR4/3)	やや弱	密	掘方埋土。炭化物微量、暗褐色シルトブロック多量
Pit7	1	暗褐色シルト (10YR3/3)	弱	密	炭化物焼土粒微量、灰黄褐色シルトブロック微量
	2	黒褐色シルト (10YR3/2)	やや強	やや密	炭化物、焼土粒微量、黄褐色シルトブロック少量
Pit8	1	黒褐色シルト (10YR2/2)	やや弱	やや密	炭化物・焼土粒微量、黄褐色シルトブロック微量
Pit9	1	暗褐色シルト (10YR3/3)	弱	やや密	黄褐色シルトブロック少量
	2	暗褐色シルト (10YR3/3)	やや強	やや密	黄褐色シルト多量
Pit10	1	黒褐色シルト (10YR2/2)	やや強	やや密	黄褐色シルトブロック少量
Pit11	1	黒褐色シルト (10YR3/2)	やや強	やや密	柱抜取痕。黄褐色シルトブロック少量
	2	黒褐色シルト (10YR2/2)	やや強	やや密	掘方埋土。黄褐色シルトブロック多量
Pit12	1	褐色シルト (10YR4/4)	やや密	やや密	炭化物微量
	2	褐色シルト (10YR4/4) 1層より明るめ	やや密	やや密	黄褐色シルト中量
Pit13	1	暗褐色シルト (10YR3/3)	やや弱	やや密	炭化物中量、焼土粒微量、黄褐色シルトブロック少量、黒褐色シルトブロック中量
カマド周辺溝	1	暗褐色シルト (10YR3/3)	やや弱	密	炭化物中量、黄褐色シルトブロック少量

第67図 3号鍛冶工房跡2

柱穴は13個確認した。壁沿いに位置するもの(P 1・2・12・13)と、床面中央に位置するもの(P 3・5)が主体と考えられる。規模は壁沿いのものが径26~29cm・深さ32~52cm、床面中央のものが径24~30cm・深さ16cmである。  
(澤目)

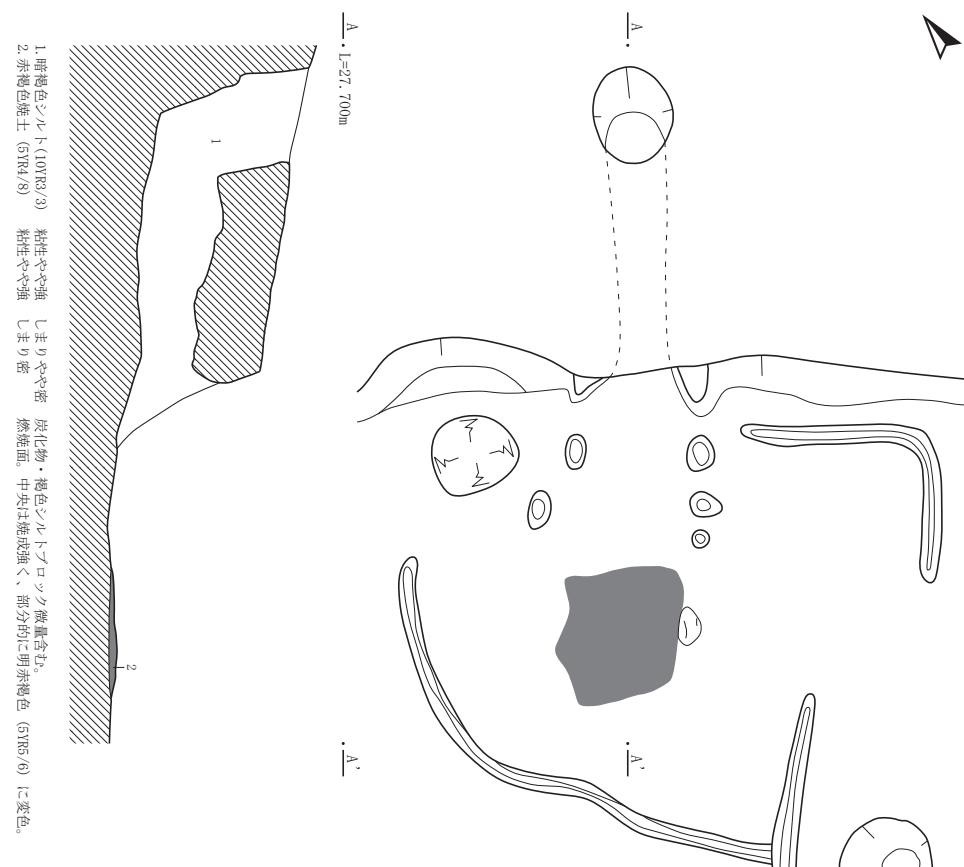
[出土遺物] 土器2,392.2g、支脚等の土製品227.3g、石製品2点、鉄滓501.0gが出土している。360は土師器高台壺の底部片で埋土下位から出土している。口クロで整形され、内面にミガキ調整が



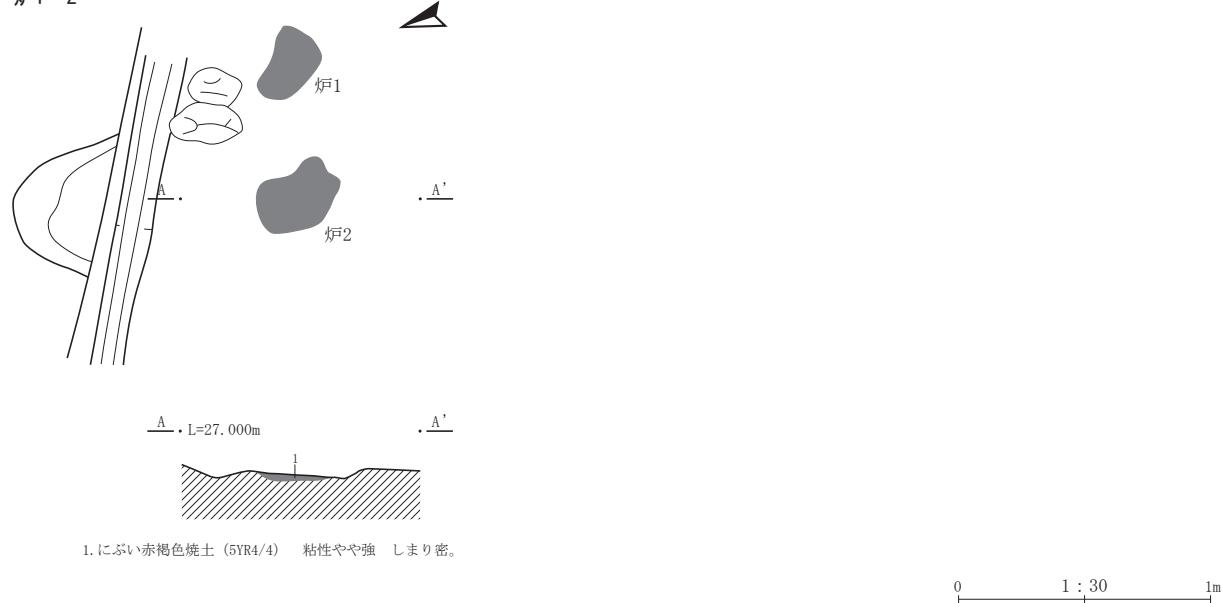
## 2 平安時代

施されている。内面の黒色は二次的な被熱で飛んでしまったと考えられる。その他、図版に載せていないが、土師器甕形土器の口縁部でほぼ真直ぐに立ち上がる小破片が埋土から出土している。362はカマドの土製支脚で床面直上から出土している。上半部が欠損している。形態は円柱状で端部がやや開き、径0.6cmの孔が貫通されているものである。孔は端部では中心より1.5cmほどずれている。胴部は径3.5cmと同じタイプでは細い。摩耗が激しく一部しか原表面は残存しないが、外面はナデ調整されている。361は中央カマドの埋土最下層（焼土層）から出土した羽口の胴部片である。363は床

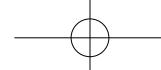
カマド



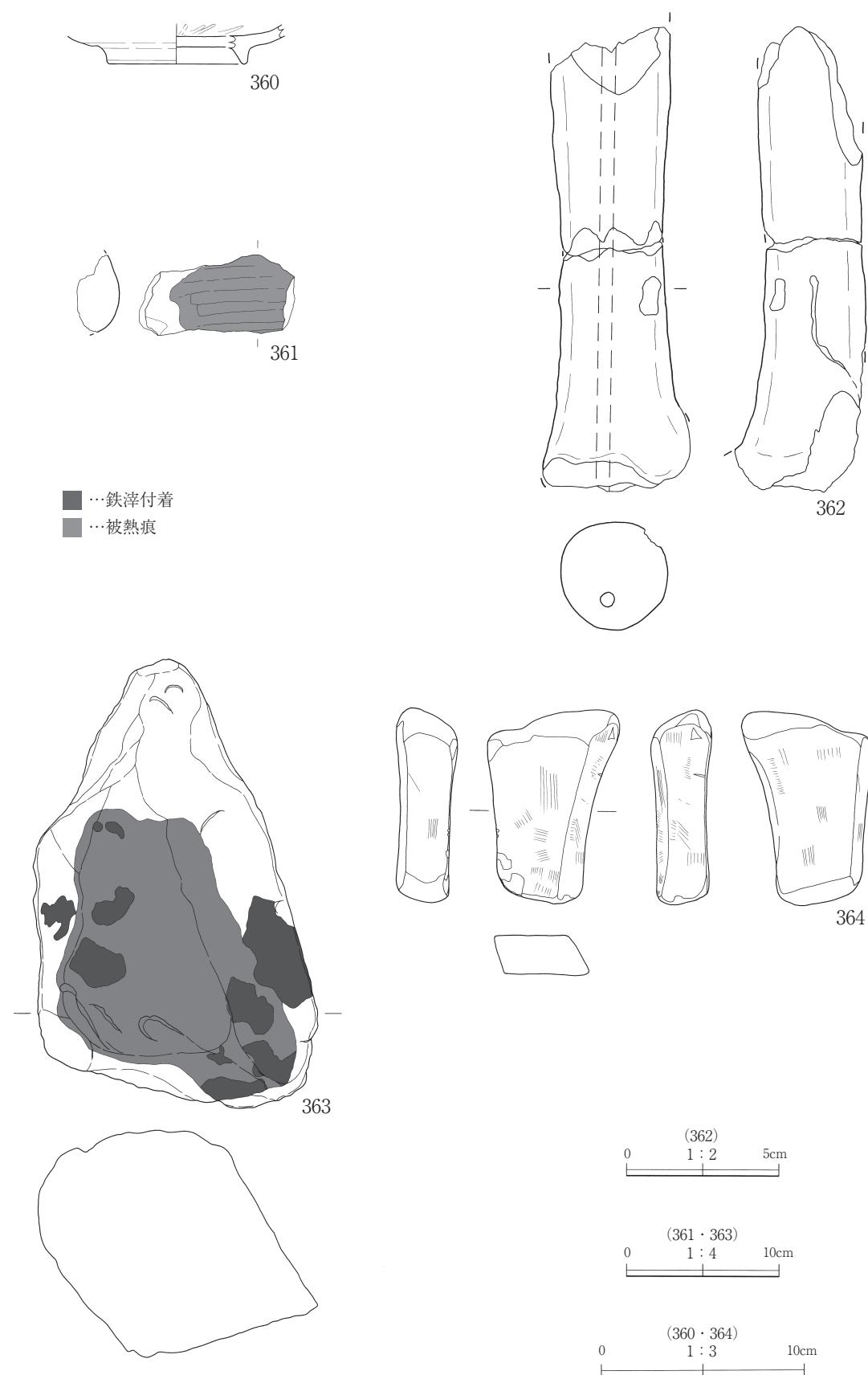
炉1・2



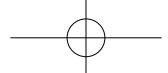
第68図 3号鍛冶工房跡3



VI 検出遺構・出土遺物



第 69 図 3号鍛冶工房跡出土遺物



## 2 平安時代

面から出土した鉄滓痕、叩打痕をもつ鉄床石である。径 30 × 18cm、厚さ 15cm の底面が傾斜しているので一部埋めて使用していたと考えられる。364 はカマド近くの焼土上面から出土した砥石である。側面 4 面が使用され擦り減って凹面をなしている。鉄滓の分析から、カマド付近の埋土最下位から出土した椀形鍛冶滓は鍛練鍛冶滓である（附編－2）ことが判明した。

[時期] 出土遺物から平安時代中期で、10世紀後半に属すると考えられる。

(光井)

### 4号鍛冶工房跡（第 70～73 図、写真図版 23・24・48・49・51・52）

[位置・検出状況] 調査区中央の緩斜面上、II A1i・II A1～2j・II B1～3a グリッドに位置する。V 層上面で検出した。全体的に残存状況は悪く、斜面下方にあたる遺構の西～南側は、斜面の土砂崩れ、ないし近世以降に植林のための削平を受けて消失している。

[他の遺構との重複関係] 27 号土坑と重複し、本遺構の方が旧い。

[平面形] 隅丸長方形を呈する。

[規模] 長軸 (368) cm・短軸 (928) cm・深さ 27cm

[埋土] 8 層からなる。1～3 層は斜面の土砂崩れによる流れ込みの層と考えられ、褐色シルトを主体とし、全体的に地山シルトブロックの混入が目立つ。4～8 層が本遺構に伴い、その内 7・8 層は壁溝堆積層に分けられる。暗～黒褐色シルトを主体とし、堆積状況から自然堆積とみられる。

[床面] 燃焼面を確認した面を床面とする。風化した岩盤層が現れ出しているためこの面の凹凸は顕著だが、全体として概ね平坦である。

[壁] 斜面上方の北壁と、東壁の立ち上がりを検出した。やや外へと広がるが、概ね直立気味に立ち上がる。西壁と南壁は消失している。

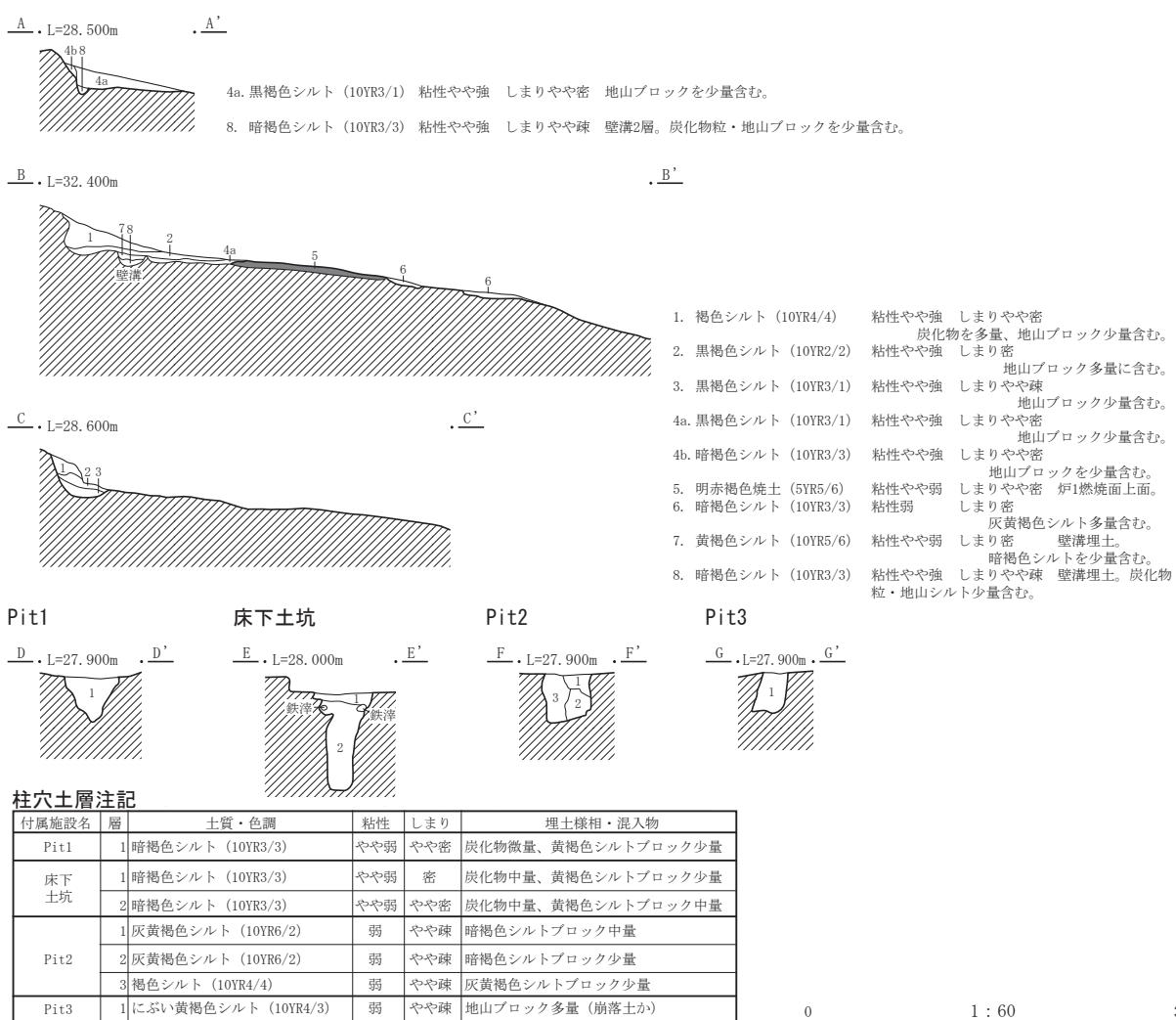
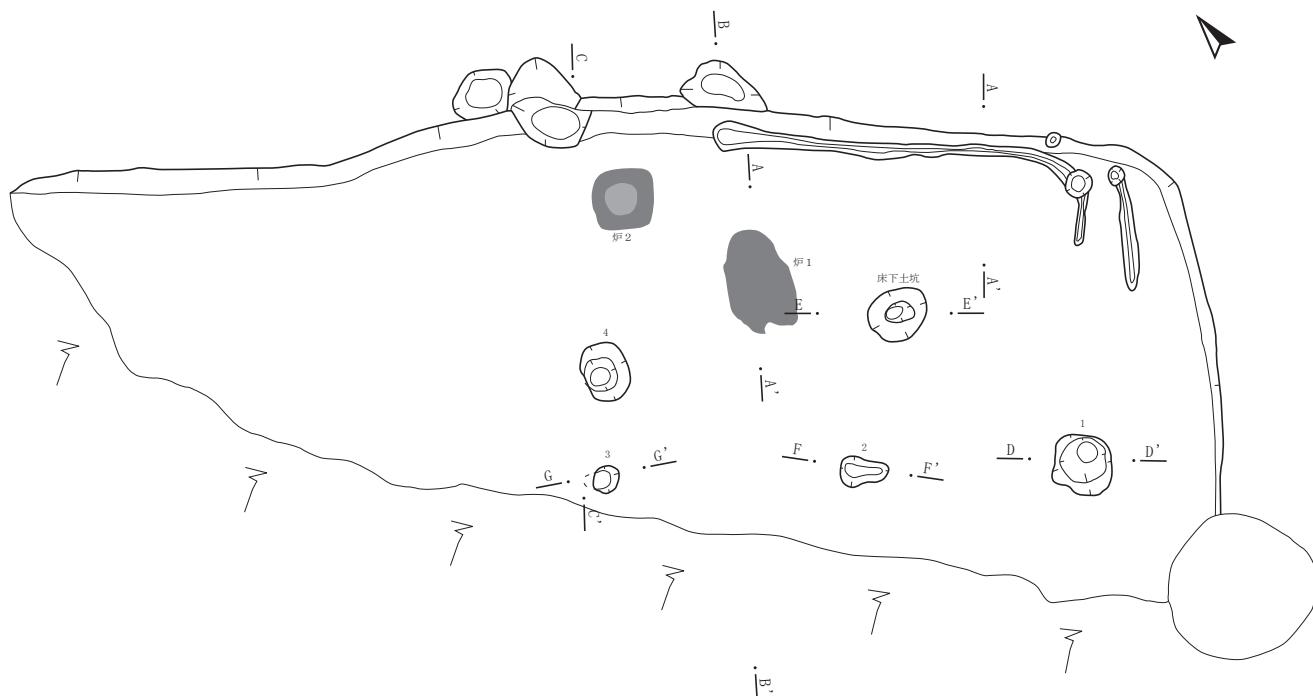
[付属施設] 焼土範囲を 2 箇所確認した。炉 1・2 共に被熱は強く、表面の硬化は顕著である。炉 1 は 82 × 53cm の橈円形を呈し、被熱は 8 cm ほど赤褐色に還元している。炉 2 は 51 × 49cm の隅丸方形を呈し、被熱は中央に 4 cm ほど特に強く受け明赤褐色に還元した部分があり、これを含めて全体で 9 cm ほど赤褐色に還元している。

炉 1・2 の周辺で 2 基の坑を確認した。50 × 40cm の橈円形を呈し、深さ 80cm を測る床下土坑が炉 1 の東側 60cm 離れた場所に位置する。また、47 × 36cm の橈円形を呈し、深さ 10cm を測る Pit 4 が炉 2 の南側 90cm 離れた斜面下方に位置する。これらは柱穴とも考えられたが、掘方がややいびつである上、埋土内から鉄滓・羽口が集中して見つかっており、柱穴とは用途の異なる坑とみられる。

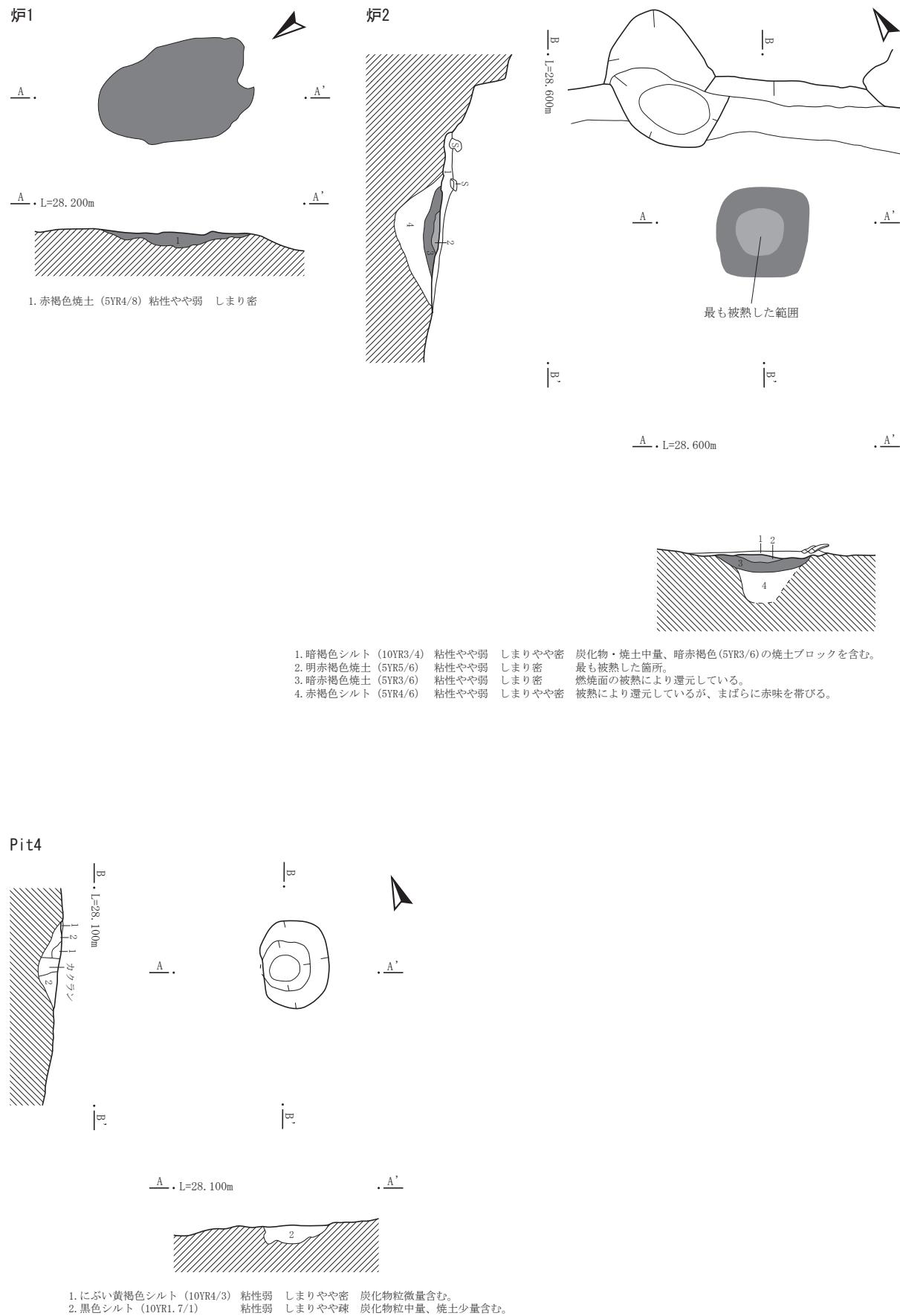
柱穴を 3 個確認した。これらは主柱穴と考えられ、径の規模は不規則ではあるが深さが 34～36cm である。

(澤目)

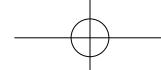
[出土遺物] 土器 385.3 g、羽口等の土製品 3648.8 g、鉄製品 3 点、鉄滓 3227.1 g が出土している。365 は床面から出土した土師器甕形土器で短く外反する口縁部片である。ヨコナデ後外面をヘラケズリ、内面をヘラナデで調整されている。図版に載せていないが、輪積み痕が顕著な胴部片や端部が外に開く底部小破片が埋土下部から出土している。羽口が 9 点出土している。366、371、372 は床面から、369 は炉 2 直上から出土している。366 は先端部、369 は端部、371、372 は胴部片である。367、370、373、374 は埋土から出土している。367 は先端部～胴部、370 は端部～胴部、373・374 は胴部破片である。368 は先端部破片で、炉 3 の埋土下位から出土したものである。378 は焼成された粘土塊である。用途は不明である。375 は床面直上から出土した袋状の鉄斧でほぼ完形である。長さが 17.8cm、幅が 7.3cm、厚さ 4.8cm と大きいものである。受け部は断面が C 字状に折り曲げられている。376 は釘と推定されるものである。377 は刀子の柄の部分と推定される鉄製品である。398 は焼成された粘土塊で



第70図 4号鍛冶工房跡1



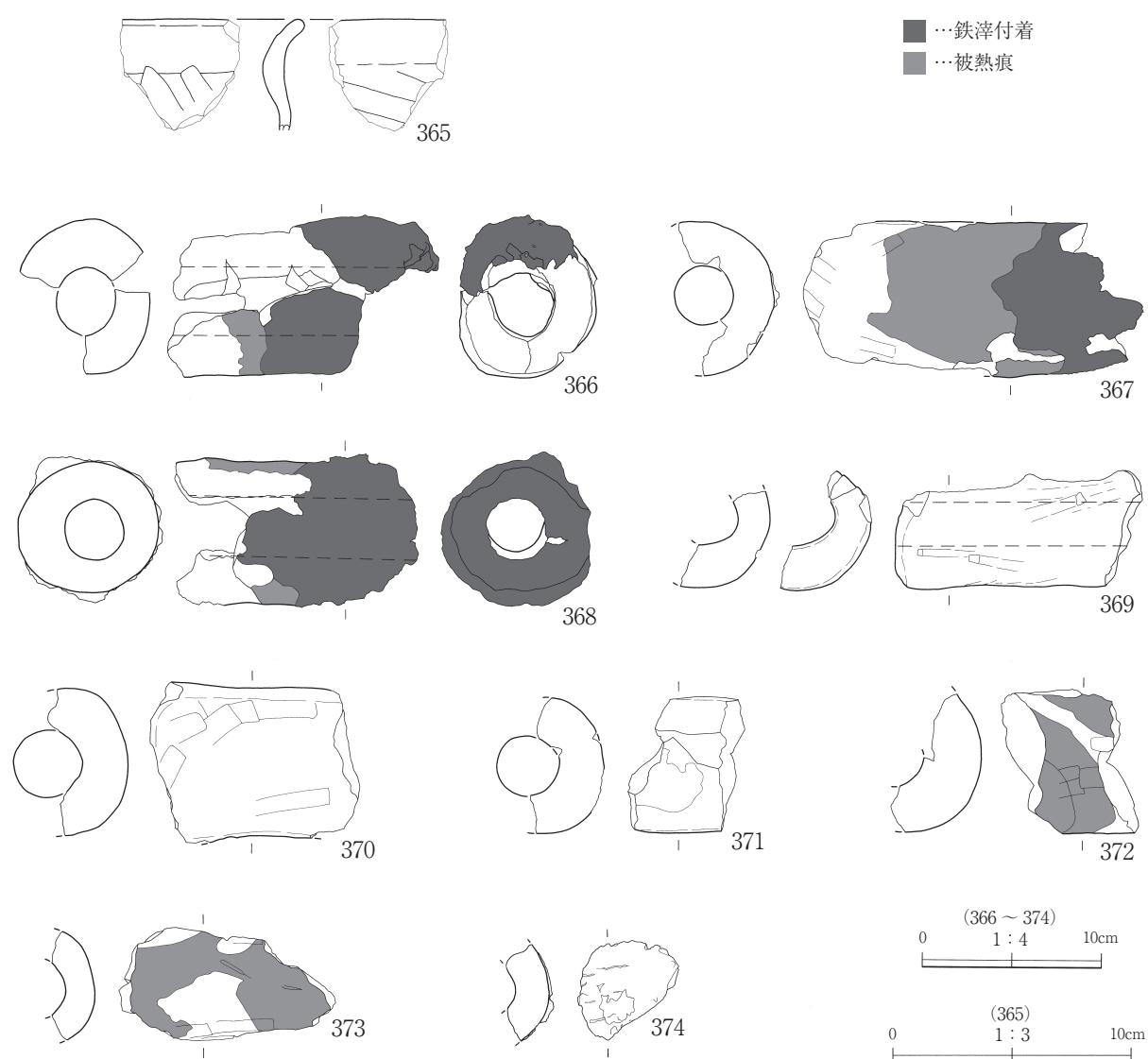
第71図 4号鍛冶工房跡2



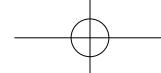
VI 検出遺構・出土遺物

工具による刺突を有するものである。鉄滓の分析から、床面・埋土下位・炉内から出土している椀形滓鍛冶滓3点はすべて鍛錬鍛冶滓である。羽口の分析から、耐火度1,480°Cで耐火性の高い性状で高温作業に適していたこと（附編－2）が判明している。

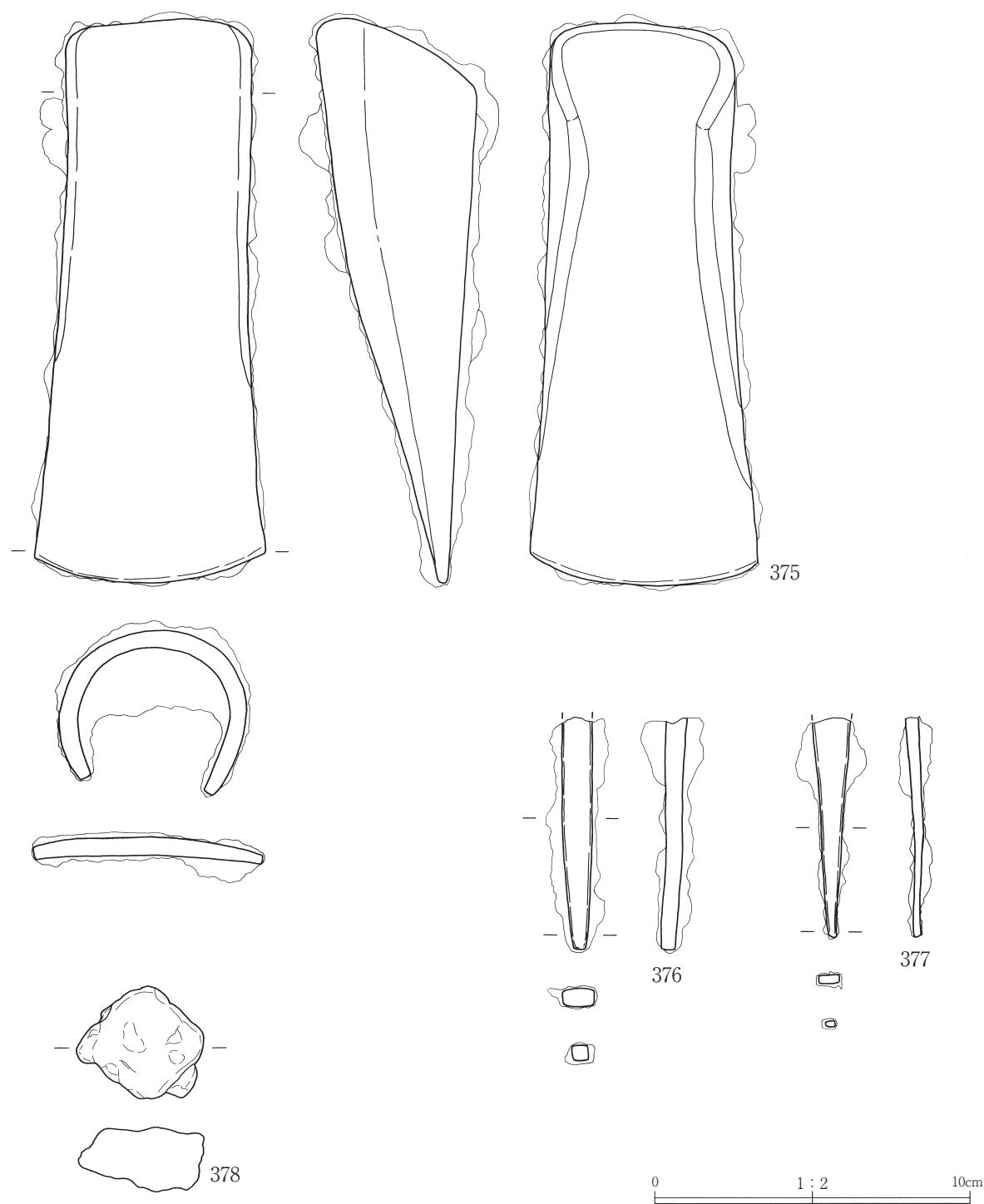
[時期] 出土遺物等から、平安時代前期～中期、9世紀後葉から10世紀前葉と考えられる。放射性炭素年代測定では、 $1,170 \pm 20$ yrBP, 历年較正用年代( $1\sigma$ )  $1,090 \sim 1,056$ calBP(860～894calAD)(27.8%)、 $1,146 \sim 1,108$ calBP(804～842calAD)(23.1%)（附編－1）である。（光井）



第72図 4号鍛冶工房跡出土遺物1



2 平安時代



第73図 4号鍛冶工房跡出土遺物2

## 5号鍛冶工房跡（第74～76図、写真図版25・49）

[位置・検出状況] 調査区南西側、IB3～6c・IB3～6dグリッドにまたがり位置する。V層上面で検出した。残存状況は比較的悪く、遺構の南側は、斜面の崩落により消失している。

[他の遺構との重複関係] なし。

[平面形] 長楕円形を呈する。

[規模] 長軸(495)cm・短軸980cm・深さ25cm

[埋土] 6層からなる（1～6層）。暗褐色シルト（1層）を主体とし、炭化物・焼土粒が混じる。北壁際では地山ブロックの混入が目立つ。（2～4層）ので、自然堆積で埋没したと推定する。

[床面] 炉を検出した面を床面とした。V層上面に層とし、掘り方は認められない。平坦であるが、細かい凹凸が目立つ。

[壁] 北壁と東西壁の一部のみ残存する。北壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。東西両壁は床からの立ち上がり付近のみしか残存せず、大きく広がりながら立ち上がるものと推測する。

[付属施設] 炉3箇所、床下土坑1箇所、柱穴13個を確認した。

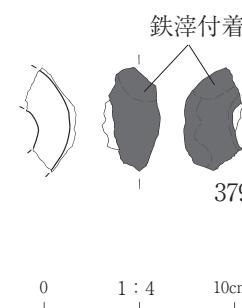
炉は東壁際に1箇所（炉1）、と北壁際に2箇所（炉2・3）である。炉1は66×35cmの瓢箪形を呈し、わずかに壁溝に壊されている。強い被熱により、約2cm、赤褐色に還元する。また炉1は本遺構が埋没途中（壁溝が埋まりきった段階後）に、さらに焼成を受け、橙色に還元し、非常に強く硬化している。位置などの情報から、その用途については推測できない。炉2は歪な楕円形で50×32cmを測り、強い被熱により、床下約2cmが赤褐色に還元している。炉3は北壁際の壁溝によりわずかに壊されている。70×10cmの歪な長楕円形で、焼成は強く、床下約2cmまで赤褐色に還元する。どちらも用途は不明である。さらにもう一つ床面の中央よりやや東側で30×10cmの焼土範囲を確認したが、現地性ではなく、炉とは考えられない。

床下土坑は東壁際に位置する。開口部105×95cm、底面120×105cmのフラスコ状を呈し、深さは床面から55cmを測る。屋内用の貯蔵施設と推測する。

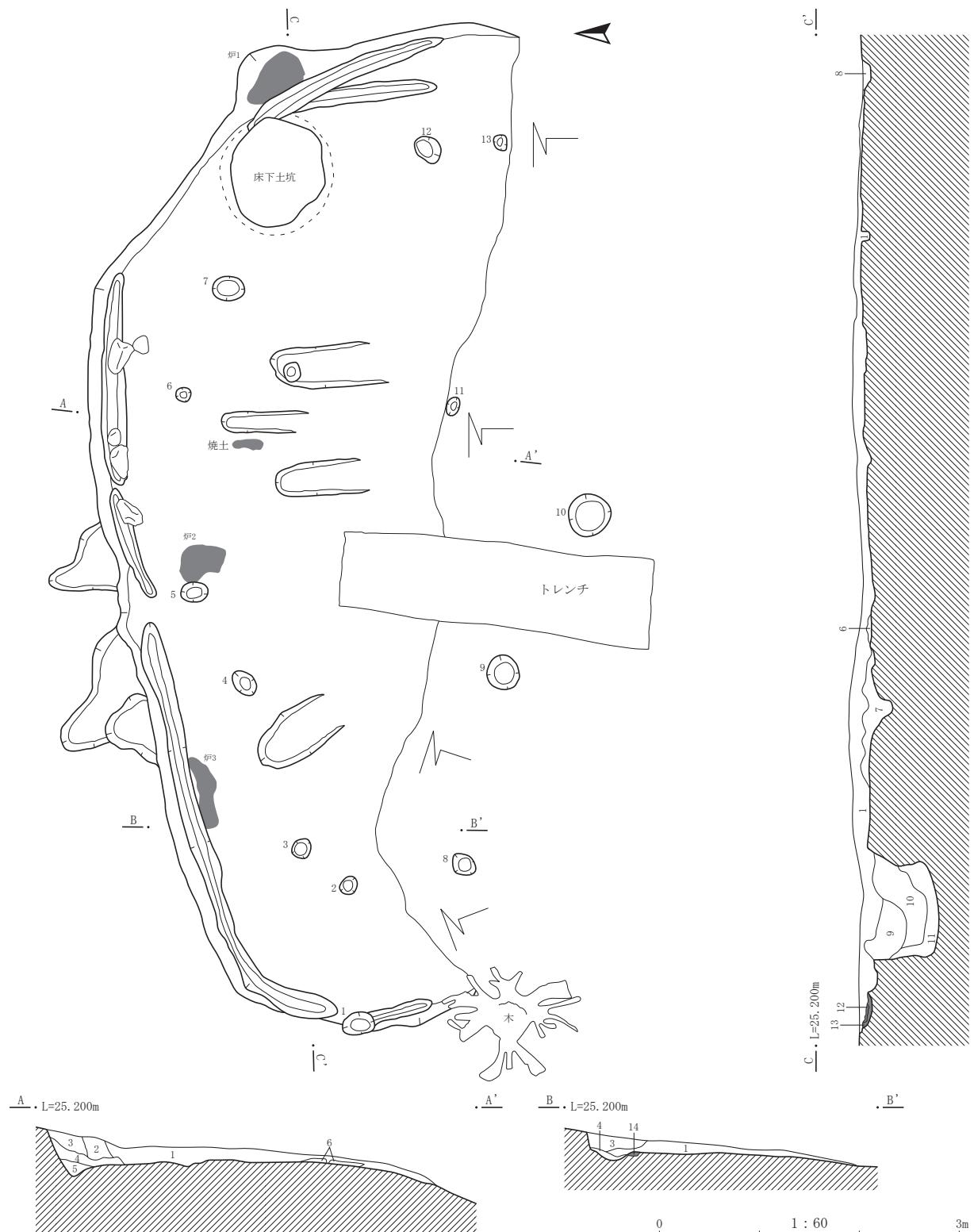
柱穴は残存する床面に10個（Pit 1～7、11～13）、床面が消失した南側に3個（Pit 8～10）である。Pit 2～7は北壁際に沿っており、主柱穴の可能性もあるが、いずれも規模が小さい。（須原）

[出土遺物] 土器291.1g、羽口等の土製品38.9g、鉄滓431.6gが出土している。図版に載せていないが、埋土下部から土師器鉢形土器の口縁部でほぼ直ぐに立ち上がる小破片が出土している。底部小破片で端部が外に開くものと開かないものの両方が埋土下部から出土している。379は埋土下部から出土した羽口先端部の小破片である。鉄滓の分析から、床下土坑から出土した椀形滓は鍛錬鍛冶滓であること（附編-2）が判明した。

[時期] 平安時代中期、10世紀後半から11世紀代に属すると考えられる。放射性炭素年代測定では、 $980 \pm 20$ yrBPである。曆年較正年代（1σ）は932～906calBP（1018～1044AD）（43.7%）である。（光井）



第74図 5号鍛冶工房跡出土遺物



- |                         |       |        |                                 |
|-------------------------|-------|--------|---------------------------------|
| 1. 暗褐色シルト (10YR3/3)     | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 炭化物微量、焼土粒微量、地山ブロック少量含む。         |
| 2. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3)  | 粘性やや弱 | しまり密   | 炭化物微量、焼土粒微量、地山ブロック中量含む。         |
| 3. 暗褐色シルト (10YR3/3)     | 粘性強   | しまりやや密 | 炭化物微量、焼土粒微量、地山ブロック中量含む（1層土に類似）。 |
| 4. にぶい黄褐色シルト (10YR5/3)  | 粘性強   | しまりやや疎 | 炭化物微量、地山ブロック少量含む。               |
| 5. 黒褐色シルト (10YR3/1)     | 粘性やや弱 | しまりやや疎 | 炭化物微量、焼土粒微量、地山ブロック少量含む（崩落土）。    |
| 6. 明黄褐色シルト (10YR7/6)    | 粘性やや強 | しまりやや密 | 床面が崩れて堆積した。暗褐色シルトブロック中量含む。      |
| 7. 灰黄褐色シルト (10YR4/2)    | 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量、地山ブロック少量含む。               |
| 8. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4)  | 粘性弱   | しまりやや密 | 炭化物微量、地山ブロックやや多く含む。             |
| 9. にぶい黄褐色シルト (10YR5/3)  | 粘性やや強 | しまり密   | 床下土坑埋土。炭化物微量、白色粒子少量含む。          |
| 10. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) | 粘性弱   | しまり密   | 床下土坑埋土。炭化物微量、地山ブロック少量、白色粒子微量含む。 |
| 11. 灰黄褐色シルト (10YR5/2)   | 粘性やや弱 | しまりやや疎 | 床下土坑埋土。炭化物微量、地山ブロック微量、白色粒子微量含む。 |
| 12. 橙色焼土 (7.5YR7/6)     | 粘性弱   | しまり密   | 炉1。壁面が焼成で赤色に還元し、硬化。被熱激しい。       |
| 13. 赤褐色焼土 (5YR4/6)      | 粘性やや弱 | しまり密   | 炉2。壁面が焼成で赤色に還元し、硬化。12層よりは被熱弱い。  |
| 14. 赤褐色焼土 (5YR4/6)      | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 炉3燃焼面。焼成で赤色に還元し、被熱激しい。          |

第75図 5号鍛冶工房跡1